

明和池遺跡 1

吹田操車場遺跡 8

西の庄東遺跡

摂津市

明和池遺跡 1

吹田市

吹田操車場遺跡 8

吹田市

西の庄東遺跡

吹田(信)基盤整備工事(貨物専用道路)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

一〇二一年二月

2012年12月

公益財団法人 大阪府文化財センター

摂津市

明和池遺跡 1

吹田市

吹田操車場遺跡 8

吹田市

西の庄東遺跡

吹田(信)基盤整備工事(貨物専用道路)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1. 明和池遺跡 1区第4面 24・25 土器群出土遺物



2. 西の庄東遺跡 4・9区第1面 21 土坑出土遺物

序 文

明和池遺跡・吹田操車場遺跡・西の庄東遺跡は千里丘陵から緩やかに傾斜してきた、低地部に立地しており、これら遺跡の大半が大正時代に造成が始められ、後に「東洋一の操車場」と称された吹田操車場跡に所在する遺跡群です。

遺跡がある摂津・吹田両市は、山城と難波を結ぶ幹線道「三鷹路」に接し、淀川の水運にも恵まれ、古くから交通の要衝として栄えてきました。同時に吹田市域北側に広がる千里丘陵では、古墳時代から奈良時代に営まれた須恵器窯跡群、難波宮や平安宮に供給する瓦を生産した七尾瓦窯・吉志部瓦窯といった官営瓦窯が操業され、生産面においても重要な役割を担って来ました。我が国の古代窯業を考える上で、看過出来ない地域でもあります。

さて、今回報告いたします明和池・吹田操車場・西の庄東の3遺跡は、吹田信号場基盤整備工事に先立って調査を行なった遺跡です。

明和池遺跡は、昭和初期からその存在が知られておりましたが、遺跡周辺で長い間大規模な開発が行なわれなかったこともあり、遺跡の具体像が詳らかになっておりませんでした。しかし、近年操車場跡地の再開発が実施されるに伴い、当センターが継続的な調査を重ね、重要かつ貴重な成果を積み上げております。今回の調査もその一端を担いました。吹田操車場遺跡は、平成10（1998）年から当センターが調査を進め、これまでに古墳時代から奈良時代にかけての群集土坑や古代の集落跡、古代末から中世の墓の発見、中国越州窯系青磁や七尾瓦窯産軒瓦の出土等で衆目を集め、広範に亘る遺跡の姿を明らかにして参りました。今次の調査では、華々しい出土遺物や遺構はありませんが、従前の調査成果を補強する結果を得ました。西の庄東遺跡は、平成21（2009）年に発見された新たな遺跡で、今回が初めての発掘調査となりました。古代から中世にかけての遺構・遺物が検出され、地域の文化・歴史を復元する上で貴重な新知見を得ることが出来ました。

今回の調査成果やこれまで蓄積されてきた成果が、摂津・吹田両市ののみならず多くの地域で活用され、文化財に対する意識をより高めてくれるものと期待してやみません。

最後になりましたが、発掘調査及び遺物整理事業の実施にあたり、多大な協力を賜りました独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構国鉄清算事業西日本支社、同吹田事務所、大阪府教育委員会、摂津市教育委員会、吹田市教育委員会、吹田市立博物館をはじめ、関係各位に深く謝意を表しますとともに、今後とも当センターの事業により一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成24年12月

公益財団法人 大阪府文化財センター

理事長 田邊 征夫

例　　言

1. 本書は大阪府摂津市千里丘七丁目地内に所在する明和池遺跡 11・2 及び吹田市芝田町、西の庄町地内に所在する吹田操車場遺跡 11・2・西の庄東遺跡 11・1 の発掘調査報告書である。
2. 調査は、吹田（信）基盤整備工事（貨物専用道路）に伴う吹田操車場遺跡発掘調査 12 として、平成 22（2010）年 8 月 2 日～平成 23（2011）年 9 月 30 日、続いて吹田（信）基盤整備工事（貨物専用道路）に伴う西の庄東遺跡発掘調査として、平成 23（2011）年 7 月 1 日～平成 24（2012）年 12 月 28 日まで、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構国鉄清算事業西日本支社の委託を受け、大阪府教育委員会の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。現地における調査は明和池遺跡が平成 23（2011）年 4 月 1 日～平成 23（2011）年 6 月 30 日、吹田操車場遺跡が平成 23（2011）年 7 月 1 日～平成 23（2011）年 9 月 9 日、西の庄東遺跡が平成 23（2011）年 9 月 12 日～平成 24（2012）年 2 月 29 日の間に行なった。遺物整理作業は平成 24（2012）年 3 月 1 日～9 月 28 日の間にに行ない、平成 24（2012）年 12 月 25 日に本書の刊行を以って完了した。
3. 調査及び整理作業は以下の体制で実施した。

〔平成 23（2011）年度〕

調査課長　江浦　洋、調整グループ長　岡本茂史、調査グループ長　岡戸哲紀、中部総括主査　秋山浩三、副主査　奥村茂輝〔平成 23（2011）年 4 月～6 月〕、副主査　島崎久恵〔平成 23（2011）年 6 月〕、技師　新海正博〔平成 23（2011）年 6 月～〕、専門調査員　松本吉弘〔平成 23（2011）年 7 月～9 月〕

〔平成 24（2012）年度〕

調査部長　江浦　洋、調整課長　岡本茂史、調査課長　岡戸哲紀、主査（中部総括）　秋山浩三、技師　新海正博

4. 遺物写真撮影は調査課専門調査員　片山彰一が行なった。木製品の保存処理・樹種鑑定は調査課主査　山口誠治、専門調査員　倉賀野健が行なった。
5. 動物遺体の同定は大阪市立大学医学部　安部みき子氏が行なった。
6. 発掘調査及び整理作業の過程で以下の諸氏ならびに諸機関にご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。

大野　薰・岡本敏行（大阪府教育委員会）、西川麻野（摂津市教育委員会）、賀納章雄・西本安秀・増田真木（吹田市教育委員会）
独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構国鉄清算事業西日本支社吹田事務所
7. 本書の作成は、執筆・編集を新海が担当した。
8. 本書に関する明和池遺跡についての写真・実測図などの記録類・出土遺物は摂津市教育委員会に保管し、同教育委員会において保管している。また、吹田操車場遺跡及び西の庄東遺跡についての写真・実測図などの記録類・出土遺物は当センターで保管しており、広く活用されることを希望する。

凡　例

1. 遺構実測図の基準高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。
2. 座標値は世界測地系（測地成果 2000）による平面直角座標系第VI系に基づき表示し、単位はmである。
3. 全体図及び遺構実測図の方針は座標北を示す。
4. 現地調査及び遺物整理に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠した。
5. 土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006年度版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修を用いた。
6. 遺構名は、明和池遺跡・吹田操車場遺跡では調査区毎に通し番号（連番）の後ろに遺構の種類をつけて表示し、西の庄東遺跡では全調査区を通じて通し番号（連番）の後ろに遺構の種類（例：4溝・22井戸）をつけて表示している。
7. 明和池遺跡の遺構全体図は100分の1、吹田操車場遺跡の遺構全体図は100分の1、西の庄東遺跡の遺構全体図は300分の1、遺構平・断面図は40分の1を原則として使用しているが、一部のものに関してはその限りではない。
8. 遺物実測図の縮尺は4分の1を基本とするが、木製品を2分の1や6分の1、石製品を2分の1で掲載するなど、一部はこの限りではない。写真図版の遺物はスケールを統一していない。
9. 掲載遺物は通し番号を与えて表示し、本文・挿図・写真図版ともに一致する。
10. 土師器・土師質土器以外の陶磁器・土器類については遺物番号の後ろに種類の略称を付与した。
11. 本書を作成するにあたり、以下のものを引用および参照した。

橋本久和 1991 「大阪北部の古代後期・中世土器の様相」『高槻市文化財年報 昭和63年・平成元年度』

高槻市教育委員会

古代の土器研究会編 1992 『古代の土器Ⅰ 都城の土器集成』

古代の土器研究会編 1993 『古代の土器Ⅱ 都城の土器集成Ⅱ』

古代の土器研究会編 1994 『古代の土器Ⅲ 都城の土器集成Ⅲ』

(財)古代学協会・古代学研究所編 1994 「第二章 土器と陶磁器」『平安京提要』 角川書店

小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年的研究—日本律令の土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀—』 真陽社

中世土器研究会編 1998 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社

鈴柄俊夫 1995 「第1章 大阪府南部の瓦質土器生産（1）」「日置莊遺跡」 大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター

全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会編 2005 『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』 発表要旨集・資料集

九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』

山崎信二 2000 『奈良国立文化財研究所学報 第59冊 中世瓦の研究』 奈良国立文化財研究所

(財)大阪府文化財センター 2006 『古式土師器の年代学』

橋本久和 2009 『中世考古学と地域・流通』 真陽社

目 次

第8節 小結	93
第5章 西の庄東遺跡の調査	96
第1節 基本層序と遺構面	96
第2節 1～3区の調査	101
(1) 第1面	
第3節 4・9区の調査	104
(1) 第1面	
第4節 5区の調査	120
(1) 第1面	
第5節 6区の調査	127
(1) 第1面	
第6節 7区の調査	138
(1) 第1面 (2) 第2面	
第7節 8区の調査	140
(1) 第1面 (2) 第2面 (3) 第3面 (4) 第4面	
第8節 包含層出土遺物	147
第9節 小結	149
第6章 総括	151

挿 図 目 次

図 1 調査位置と遺跡分布図	2	図 35 包含層出土遺物	54
図 2 地区剖面	4	図 36 明和池遺跡 2 区 第1面 平面図及び遺構断面図	
図 3 煉瓦（刻印）	11	・遺構出土遺物	57
図 4 明和池遺跡の調査区と既往の調査位置図	13	図 37 明和池遺跡 2 区 第2面 平面図及び	
図 5 吹田操車場遺跡の調査区と既往の調査位置図	14	遺構断面図	59
図 6 西の庄東遺跡の調査区と既往の調査位置図	15	図 38 第2面 7溝・8落込み・9土坑平・断面図及び	
図 7 明和池遺跡 1 区 東壁南側断面図	19	遺構出土遺物	60
図 8 明和池遺跡 1 区 東壁北側断面図	20	図 39 明和池遺跡 3 区 第1面 平面図	62
図 9 明和池遺跡 1 区 西壁南端付近断面図	22	図 40 吹田操車場遺跡 1 区 北壁断面図	65
図 10 明和池遺跡 1 区 南壁西側断面図	23	図 41 吹田操車場遺跡 6 区 北西壁断面図	66
図 11 明和池遺跡 2 区 北壁・西壁断面図	24	図 42 吹田操車場遺跡 2 区 西壁断面図	67
図 12 明和池遺跡 3 区 北壁断面図	25	図 43 吹田操車場遺跡 3 区 北壁断面図	68
図 13 明和池遺跡 1 区 第1面 平面図	27	図 44 吹田操車場遺跡 4 区 東壁断面図	69
図 14 第1面 2井戸平・断面図及び瓦質井戸枠	28	図 45 吹田操車場遺跡 4 区 南壁断面図	70
図 15 第1面 遺構出土遺物（1）	29	図 46 吹田操車場遺跡 1 区 第1面 平面図及び	
図 16 第1面 遺構出土遺物（2）	30	土坑断面図	72
図 17 第1面 遺構出土遺物（3）	32	図 47 吹田操車場遺跡 1 区 第2面 平面図及び	
図 18 第1面 遺構出土遺物（4）	33	土坑断面図	73
図 19 明和池遺跡 1 区 第2面 平面図及び		図 48 第2面 土坑断面図	74
土坑平・断面図	35	図 49 吹田操車場遺跡 1 区 第2面・6 区 第1面	
図 20 第2面 19井戸平・断面図	36	平面図及び遺構出土遺物	75
図 21 第2面 遺構出土遺物	37	図 50 吹田操車場遺跡 2 区 第1面 平面図及び	
図 22 明和池遺跡 1 区 第4面 平面図	38	遺構出土遺物	76
図 23 第4面 24・25土器群平面図	39	図 51 吹田操車場遺跡 3 区 第1面 平面図及び	
図 24 第4面 22流路・24土器群出土遺物	41	土坑・流路断面図	78
図 25 第4面 25土器群出土遺物（1）	42	図 52 第1面 土坑平・断面図	79
図 26 第4面 25土器群出土遺物（2）	43	図 53 3 区 遺構出土遺物	80
図 27 明和池遺跡 1 区 第5面 平面図及び		図 54 吹田操車場遺跡 4 区 第1面 平面図及び	
遺構断面図	44	遺構断面図及び出土遺物	82
図 28 明和池遺跡 1 区 第6面 平面図	46	図 55 吹田操車場遺跡 4 区 第2面 平面図及び	
図 29 第5・6面 40流路断面図	47	土坑断面図	84
図 30 第5・6面 27流路出土遺物	48	図 56 第2面 13溝平・断面図	85
図 31 第5・6面 40流路出土遺物	49	図 57 第2面 13溝・14落込み出土遺物	86
図 32 第6面 33土坑・38井戸平・断・立面図	50	図 58 第2面 遺構断面図（1）	87
図 33 第6面 遺構出土遺物（1）	51	図 59 第2面 遺構断面図（2）	88
図 34 第6面 遺構出土遺物（2）	52	図 60 第2面 5土坑平・断面図及び遺構出土遺物	89

図 61	包含層出土遺物	90	図 82	第1面 道構断面図	126
図 62	吹田操車場遺跡 5区 第1面 平面図	92	図 83	西の庄東遺跡 6区 第1面平面図	128
図 63	西の庄東遺跡 1区 南壁断面図	97	図 84	第1面 道構断面図(1)及び69溝出土遺物	129
図 64	西の庄東遺跡 3区 南壁断面図	98	図 85	第1面 道構断面図(2)及び70土坑出土遺物	131
図 65	西の庄東遺跡 7区 北壁断面図	99	図 86	第1面 67溝・85小穴平面図	133
図 66	西の庄東遺跡 8区 北壁断面図	100	図 87	第1面 67溝・85小穴断面図	134
図 67	西の庄東遺跡 1~3区 第1面 平面図	102	図 88	第1面 67溝・85小穴出土遺物	135
図 68	第1面 道構断面図及び道構出土遺物面図	103	図 89	第1面 68土坑平・断面図及び出土遺物	136
図 69	西の庄東遺跡 4・9区 第1面 平面図	105	図 90	第1面 92ピット平・断面図	137
図 70	第1面 21土坑平面図及び杭列立面図	106	図 91	西の庄東遺跡 7区 第2面 平面図及び 道構出土遺物	139
図 71	第1面 21土坑断面図(1)	108	図 92	西の庄東遺跡 8区 第2面 平面図及び 鉢溝群出土遺物	141
図 72	第1面 21土坑断面図(2)	109	図 93	西の庄東遺跡 8区 第3面 平面図及び 落込み断面図	142
図 73	第1面 21土坑出土遺物(1)	110	図 94	西の庄東遺跡 8区 第4・5面 平面図	144
図 74	第1面 21土坑出土遺物(2)	111	図 95	第4面 道構断面図及び道構出土遺物	145
図 75	第1面 21土坑出土遺物(3)	114	図 96	包含層出土遺物	148
図 76	第1面 22井戸平・断面図及び出土遺物	116			
図 77	第1面 23井戸・小穴群断面図及び 小穴群出土遺物	118			
図 78	西の庄東遺跡 5区 第1面 平面図	121			
図 79	第1面 4溝・5落込み断面図	122			
図 80	第1面 4溝・15・16・18土坑断面図	124			
図 81	第1面 4溝・5落込み・土坑群出土遺物	125			

表 目 次

表1	群集土坑一覧表	95
遺物観察表		155

写 真 目 次

写真1	近代採集資料(1)	9
写真2	近代採集資料(2)[煉瓦(刻印)]	10

卷頭図版目次

1. 明和池遺跡 1区第4面 24・25 土器群出土遺物

2. 西の庄東遺跡 4・9区第1面 21 土坑出土遺物

写真図版目次

- 図版1 明和池遺跡1区
1. 第1面全景（東から）
2. 第1面 2井戸（南から）
3. 第1面 2井戸 断面（南から）
- 図版2 明和池遺跡1区
1. 第2面 全景（北東から）
2. 第2面 16土坑 断面（南から）
3. 第2面 16土坑 完掘状況（南西から）
- 図版3 明和池遺跡1区
1. 第2面 19井戸 全景（南西から）
2. 第2面 19井戸 断面（南西から）
3. 第2面 19井戸 断面（北から）
4. 第2面 19井戸 井戸枠（北東から）
5. 第2面 19井戸 断面（北から）
- 図版4 明和池遺跡1区
1. 第4面 全景（南東から）
2. 第4面 24土器群 遺物出土状況（南から）
3. 第4面 25土器群 遺物出土状況（北西から）
- 図版5 明和池遺跡1区
1. 第5面 全景（南東から）
2. 第4面 25土器群 下層遺物出土状況（南東から）
3. 第6面 全景（南東から）
- 図版6 明和池遺跡1区
1. 第6面 40流路 遺物出土状況（北から）
2. 第5・6面 40流路 断面（南東から）
3. 第5・6面 40流路 断面（南から）
- 図版7 明和池遺跡1区
1. 第6面 全景（南東から）
2. 第6面 38井戸 断面（北西から）
3. 第6面 33土坑 断面（北東から）
- 図版8 明和池遺跡1区
1. 東壁断面南半（西から）
- 図版9 明和池遺跡2区
1. 第1面 全景（北から）
2. 第1面 2溝 断面（南東から）
3. 第1面 4溝 断面（南東から）
4. 第1面 5溝 断面（南東から）
- 図版10 明和池遺跡2区
1. 第2面 全景（北から）
2. 第2面 8落込み 全景（西から）
3. 第2面 8落込み 南北断面（西から）
4. 第2面 8落込み 東西南北断面（南から）
- 図版11 明和池遺跡2区
1. 第2面 9土坑 断面（西から）
2. 第2面 9土坑 遺物出土状況（西から）
3. 第2面 7溝 断面（西から）
4. 西壁断面南半（南東から）
- 図版12 明和池遺跡3区
1. 第1面 全景（南から）
2. 第1面 柱穴 断面（南から）
3. 北壁断面（南から）
- 図版13 明和池遺跡1区 第1面遺構出土遺物
- 図版14 明和池遺跡1区 第6面遺構出土遺物（1）
- 図版15 明和池遺跡1区 第1・6面遺構出土遺物（2）
- 図版16 明和池遺跡1区 第2・4面遺構出土遺物（1）
- 図版17 明和池遺跡1区 第4面遺構出土遺物（2）
- 図版18 明和池遺跡1区 第4面遺構出土遺物（3）
- 図版19 明和池遺跡1区 第4面遺構出土遺物（4）・
5～6面遺構出土遺物（1）
- 図版20 明和池遺跡1区 第5～6面遺構出土遺物（2）
- 図版21 明和池遺跡1区 第5～6面遺構出土遺物（3）・
2区 第2面遺構出土遺物・包含層出土遺物

図版 22	吹田操車場遺跡 1・6 区		図版 29	吹田操車場遺跡 1～4 区 遺構出土遺物
	1. 1 区 第 1 面 北西部分（北から）		図版 30	吹田操車場遺跡 4 区 包含層出土遺物（1）
	2. 1 区 第 2 面 全景（西から）		図版 31	吹田操車場遺跡 4 区 包含層出土遺物（2）
	3. 6 区 第 1 面 南西部分（西から）		図版 32	西の庄東遺跡 1・2 区
図版 23	吹田操車場遺跡 1・6・2 区			1. 1B 区 第 1 面 全景（北東から）
	1. 1 区 第 2 面 12・16 土坑 断面（北から）			2. 1A 区 第 1 面 全景（北東から）
	2. 6 区 第 1 面 1 土坑 断面（南西から）			3. 1A 区 第 1 面 115 溝（北東から）
	3. 2 区 第 1 面 全景（北から）			4. 1B 区 南壁 断面（北東から）
図版 24	吹田操車場遺跡 3 区			5. 1A 区 南壁 断面（北東から）
	1. 第 1 面 全景（西から）			6. 2B 区 第 1 面（南西から）
	2. 第 1 面 2 土坑 断面（南から）			7. 2A 区 第 1 面（南西から）
	3. 第 1 面 5 土坑 断面（南西から）		図版 33	西の庄東遺跡 3・4 区
図版 25	吹田操車場遺跡 4 区			1. 3A 区 第 1 面 全景（南西から）
	1. 第 2 面 南西部分 全景（南から）			2. 3A 区 南壁 断面（北東から）
	2. 第 2 面 全景（東から）			3. 3B 区 第 1 面 全景（北東から）
	3. 第 2 面 13 溝 全景（南東から）			4. 4B 区 第 1 面 北端部分（北西から）
図版 26	吹田操車場遺跡 4 区			5. 4B 区 第 1 面 30 土坑 断面（北西から）
	1. 第 2 面 13 溝 遺物出土状況（南西から）			6. 4B 区 第 1 面 32 小穴 断面（東から）
	2. 第 2 面 13 溝 断面（南東から）			7. 4B 区 第 1 面 35 小穴 断面（東から）
	3. 第 2 面 5 土坑 遺物出土状況（南西から）		図版 34	西の庄東遺跡 4・9 区
図版 27	吹田操車場遺跡 4・5 区			1. 4A 区 第 1 面 全景（北東から）
	1. 4 区 第 2 面 17 土坑 断面（東から）			2. 4A 区 第 1 面 21 土坑ほか 近景（北東から）
	2. 4 区 第 2 面 18 土坑 断面（東から）			3. 9 区 第 1 面 21 土坑 土坑検出状況（東から）
	3. 4 区 第 2 面 20 土坑 断面（北東から）			4. 9 区 第 1 面 21 土坑 完掘状況（東から）
	4. 4 区 第 2 面 22 土坑 断面（北西から）		図版 35	西の庄東遺跡 4・9 区
	5. 4 区 第 2 面 25 土坑 断面（東から）			1. 4A 区 第 1 面 21 土坑 断面（東から）
	6. 4 区 第 2 面 26・28 土坑 断面（南西から）			2. 9 区 第 1 面 21 土坑 断面（東から）
	7. 4 区 第 2 面 29 土坑 断面（東から）			3. 9 区 第 1 面 21 土坑 断面（西から）
	8. 5 区 第 1 面 全景（西から）			4. 9 区 第 1 面 21 土坑 遺物出土状況（東から）
図版 28	吹田操車場遺跡 1～6 区			5. 9 区 第 1 面 21 土坑 遺物出土状況（東から）
	1. 1 区 東壁断面（北西から）			6. 9 区 第 1 面 21 土坑 遺物出土状況（東から）
	2. 6 区 北西壁断面（南西から）		図版 36	西の庄東遺跡 4・9 区
	3. 2 区 西壁断面（南東から）			1. 4A 区 第 1 面 21 土坑 桁列（東から）
	4. 3 区 北壁断面（南西から）			2. 9 区 第 1 面 21 土坑 桁列（東から）
	5. 4 区 南壁東半東端断面（北西から）			3. 4A 区 第 1 面 22 井戸 検出状況（東から）
	6. 4 区 南壁東半西端断面（北から）			4. 4A 区 第 1 面 22 井戸 断面（東から）
	7. 4 区 南壁西半断面（北西から）			5. 4A 区 第 1 面 22 井戸 断面（東から）
	8. 4 区 東壁断面（北西から）			6. 4A 区 第 1 面 22 井戸 遺物出土状況（東から）

7. 4A区 第1面 22 井戸 曲げ物(東から)

8. 4A区 第1面 23 井戸 断面(南西から)

図版37 西の庄東遺跡5区

1. 5A区 第1面 全景(南西から)

2. 5B区 第1面 全景(南西から)

3. 5A区 第1面 道構近景(北東から)

4. 5B区 第1面 7土坑 断面(西から)

5. 5A区 第1面 14土坑 断面(南東から)

6. 5A区 第1面 20小穴 断面(北東から)

図版38 西の庄東遺跡5区

1. 5B区 第1面 4溝 断面(西から)

2. 5A区 第1面 4溝 断面(東から)

3. 5B区 第1面 4溝 完掘状況(西から)

4. 5A区 第1面 4溝 完掘状況(東から)

5. 5B区 第1面 5落込み 断面(西から)

6. 5A区 第1面 15土坑 断面(東から)

図版39 西の庄東遺跡6区

1. 6区 第1面 全景(南西から)

2. 6区 第1面 79土坑 断面(西から)

3. 6区 第1面 75土坑 断面(南東から)

4. 6区 第1面 71井戸 断面(北東から)

5. 6区 第1面 70土坑 断面(西から)

6. 6区 第1面 69溝 近景(北から)

7. 6区 第1面 69溝 断面(南から)

図版40 西の庄東遺跡6区

1. 6区 第1面 南西部 近景(北東から)

2. 6区 第1面 67溝 近景(南から)

3. 6区 第1面 67溝 北断面(南から)

4. 6区 第1面 67溝 中央断面(南から)

5. 6区 第1面 67溝 遺物出土状況(南から)

6. 確認調査(5調査区) 全景(北東から)

7. 確認調査(5調査区) A溝 断面(南西から)

8. 確認調査(5調査区) A溝 断面(北から)

図版41 西の庄東遺跡6・7区

1. 6区 第1面 68土坑 完掘状況(北東から)

2. 6区 第1面 68土坑 断面(南西から)

3. 6区 第1面 92ピット 検出状況(西から)

4. 6区 第1面 92ピット 断面(西から)

5. 6区 第1面 85小穴 断面(東から)

6. 7区 北壁断面(南西から)

7. 7区 第2面 全景(北東から)

図版42 西の庄東遺跡8区

1. 8区 第2面 近景(南西から)

2. 8区 第3面 近景(北東から)

3. 8区 第4面 全景(北東から)

4. 8区 第4面 102土坑 断面(北西から)

5. 8区 第4面 100溝 近景(北西から)

6. 8区 第4面 100溝 断面(南東から)

7. 8区 第4面 100溝 断面(北西から)

図版43 西の庄東遺跡8区

1. 8区 第4面 104溝ほか 近景(北西から)

2. 8区 第4面 103溝 断面(北西から)

3. 8区 第4面 104溝 断面(北西から)

4. 8区 第4面 105溝 近景(北西から)

5. 8区 第4面 105溝 断面(北西から)

6. 8区 第4面 101土坑 検出状況(東から)

7. 8区 第4面 101土坑 断面(西から)

8. 8区 北壁断面(南西から)

図版44 西の庄東遺跡4・9区 21土坑出土遺物(1)

図版45 西の庄東遺跡4・9区 21土坑出土遺物(2)

図版46 西の庄東遺跡4・9区 21土坑出土遺物(3)

図版47 西の庄東遺跡4・9区 22井戸出土遺物

図版48 西の庄東遺跡5区 道構出土遺物

図版49 西の庄東遺跡6区 道構出土遺物

図版50 西の庄東遺跡 包含層出土遺物・石器

第1章 調査に至る経過と方法

第1節 調査に至る経緯と経過

明和池遺跡は摂津市千里丘七丁目地内に、吹田操車場遺跡は吹田市片山町・芝田町と岸部中町地内に、西の庄東遺跡は吹田市西の庄村に所在する。

明和池遺跡と吹田操車場遺跡は、かつて「東洋一の操車場」と称され大正12（1923）年に操業を開始し、昭和59（1984）年にその役割を終えた旧国鉄吹田操車場（現：JR貨物吹田信号場駅）を中心と広がる遺跡で、千里丘陵の南縁部から沖積平野に位置している。西の庄東遺跡はJR吹田駅とアサヒビール吹田工場に挟まれた場所に位置し、旧国鉄吹田操車場の南西側に隣接している。

明和池遺跡は、昭和18（1933）年に庄屋一丁目にあった明和池の底から弥生時代～古墳時代の土器が発見されたことにより周知されるようになった。当遺跡での調査は昭和62（1987）年、大阪府教育委員会によるものが嚆矢となり、古墳時代後期～中世の遺構・遺物が確認された。その後、平成10（1998）年、当時の日本国有鉄道清算事業団近畿支社により、JR梅田貨物駅の機能の一部を吹田操車場跡地へ移管する計画が持ち上がった。同社は、大阪府教育委員会との協議の後、移転用地内全域を対象として確認調査を行なうこととなった。同年度から、調査が（財）大阪府文化財調査研究センター（平成14年より（財）大阪府文化財センター、平成23年より公益財団法人大阪府文化財センター。以下「当センター」と記す）に委託され、遺跡の範囲・遺構の有無・遺構面の面数等を確認するため、61箇所の確認調査を実施した。この際、2箇所のトレンチが明和池遺跡の範囲内に位置し、うち1箇所で弥生時代後期～中世にかけての遺構・遺物を確認することとなった。また、平成19・20（2007・2008）年には摂津市教育委員会による確認調査が実施された。平成21（2009）年には独立行政法人都市再生機構による北部大阪都市計画事業吹田操車場跡地地区画整理事業が本格化したため、大規模な発掘調査が現在まで継続して実施されるようになった。

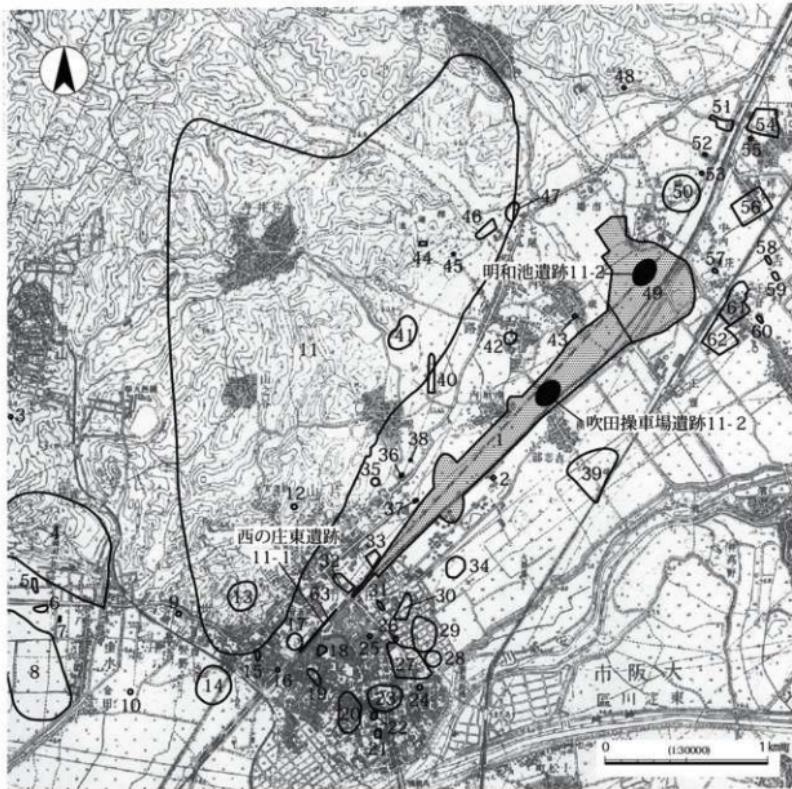
吹田操車場遺跡は、昭和42（1967）年に吹田市教育委員会が行なった操車場内の道路・水路整備に伴う事前調査により、中世の遺物の出土が確認され、認知されるようになった。

平成10（1998）年には先述したように、JR梅田貨物駅の機能の一部を吹田操車場跡地へ移管する計画が持ち上がったため、確認調査が実施された。この結果、操車場造成時に分厚い盛り土が施されていたことにより、ほぼ全域で現地表面下に多様な遺構が残っていることを明らかにした。そして出土遺物や検出した遺構の検討から、旧石器時代から近世に至る広範な複合遺跡であることが判明した。

その後、平成12（2000）年に日本鉄道建設公団国鉄清算事業本部西日本支社は、吹田信号場基盤整備工事による貨物駅舎及び倉庫建設計画に際して、上記の調査結果をふまえ、大阪府教育委員会と協議を行ない、開発予定地の発掘調査を当センターが実施することとなった。

また同年、吹田操車場の南側に位置する貨車区の改良工事を行なうこととなり、確認調査を大阪府教育委員会文化財保護課が実施した。この結果、新たな遺跡の発見となり、吹田操車場B地点として発掘調査を当センターが実施した。

平成18（2006）年から平成20（2008）年にかけて、当センターは吹田信号場基盤整備工事に伴い、調整池10箇所やそれを結ぶ導水管部分、防火水槽4箇所の調査を実施した。



(地理調査所)吹田15-1/25000 大正12年測量図 1929年修正測図に加筆)

- | | | | | |
|---------------|--------------|---------------|------------|-----------------|
| 1. 吹田操車場道路 | 14. 豊船郡条里道路 | 27. 高城B遺跡 | 40. 原東道路 | 52. 千里丘2丁目所在道路 |
| 2. 吹田操車場道路B地点 | 15. 西の庄道路 | 28. 吹田城跡推定地 | 41. 吉志部遺跡 | 53. 千里丘3丁目所在道路 |
| 3. 垂水西原道路 | 16. 西の庄道路B地点 | 29. 高城遺跡 | 42. 岸部中道路 | 54. 千里丘東2丁目道路 |
| 4. 垂水道路 | 17. 吹田城道路 | 30. 高畠道路 | 43. 岸部東道路 | 55. 千里丘東3丁目所在道路 |
| 5. 垂水中道路B地点 | 18. 元町道路 | 31. 堀和田道路B地点 | 44. 吉志部瓦窯跡 | 56. 千里丘東4丁目道路 |
| 6. 垂水中道路 | 19. 洪の堂道路 | 32. 片山道路 | 45. 吉志部古墳 | 57. 庄屋1丁目所在道路 |
| 7. 垂水中道路C地点 | 20. 都呂須道路 | 33. 片山荒瀬道路 | 46. 七毛瓦窯跡 | 58. 庄屋2丁目所在道路 |
| 8. 垂水南道路 | 21. 宮之前道路B地点 | 34. 目佐道路 | 47. 七尾東道路 | 59. 東正衙第1地点 |
| 9. 北泉道路 | 22. 宮之前道路 | 35. 土塚古墳 | 48. 似神寺山道路 | 60. 東正衙第2地点 |
| 10. 金田道路 | 23. 高浜道路 | 36. 片山芝田道路 | 49. 明和池道路 | 61. 東正衙道路 |
| 11. 吹田須恵器窑跡群 | 24. 神鏡町道路 | 37. 天道道路 | 50. 蜂前寺跡 | 62. 正雀1丁目道路 |
| 12. 吹H32号窯跡 | 25. 朝日町道路 | 38. 片山芝田道路B地点 | 51. 千里丘道路 | 63. 西の庄東道路 |
| 13. 片山公園道路 | 26. 昭和町道路 | 39. 中ノ坪道路 | | |

図1 調査位置と遺跡分布図

平成 21（2009）年から平成 23（2011）年にかけては、吹田信号場基盤整備工事に伴う調査に関して JR 第二・三職員通路部の付け替え・南北自由通路部分・連絡地下道改築・保線検修庫部分・モーター検修庫部分・通信ケーブル防護管発信立坑部分・導水路到達立坑部分・岸辺駐車場部分（吹田操車場遺跡 C 地点）を行なった。更に、併行して吹田信号場基盤整備工事（貨物専用道路）に伴う発掘調査も実施した。

この他に、JR 岸辺駅北側周辺では独立行政法人 都市再生機構西日本支社が実施する北部大阪都市計画事業吹田操車場跡地土地区画整理事業に伴う発掘調査を行ない、200 基近い群集土坑群や古代の溝・井戸・土坑、中世の耕作地等を検出している。

西の庄東遺跡は、平成 21（2009）年に吹田城跡隣接地において実施した確認調査により、中世の耕作痕や古代の遺構が確認され、古代～近世に至る遺物も出土したことから、新たに周知された遺跡である。この時の確認調査は吹田信号場基盤整備工事（貨物専用道路新設）に伴うものであり、9箇所の確認トレンチが設定された。

なお、本書は吹田信号場基盤整備工事（貨物専用道路）に伴う発掘調査に関わるものである。明和池遺跡に関しては汚染土壌撤去に伴う調査及び地中障害部撤去に伴う搅乱部分の確認調査、吹田操車場遺跡についても汚染土壌撤去に伴う調査であり、狭小で点的な調査であった。西の庄東遺跡は、吹田操車場遺跡で平成 22（2010）～23（2011）年に調査を実施した貨物専用道路の西側延伸部分に当たる調査である。

第 2 節 調査・整理の方法

発掘調査及び整理作業においては、当センターマニュアル『遺跡調査基本マニュアル』 2010 に則り実施している。

調査区割 遺物の取り上げや遺構の位置確認に関しては、当センターマニュアルに基づき平面直角座標系第VI系を基準とした区画を使用した。これに則り、第 I ～第 IVまでの大小 4段階の区画を設定した。第 I 区画は、大阪府の南西端 $X = -192,000 \text{ m}$ ・ $Y = -88,000 \text{ m}$ を基準とし、南北方向に 6 km・東西方向に 8 kmで区画する。表示は、南西端を基点に北へ A～O、東へ O～8 とする。第 II 区画は、第 I 区画を南北方向に 1.5 km、東西方向に 2.0 kmでそれぞれ 4分割し、計 16 区画を設定する。表示は南西端を 1 とし、東へ 4まで、あとは西端を 5、9、13、北西端を 16 と平行式で表す。第 III 区画は第 II 区画を 100 m 単位で、南北 15、東西 20 に区画する。表示は北東端を基点に、南へ A～O、西へ 1～20 とする。第 IV 区画は、第 III 区画を 10 m 単位で南北方向、東西方向ともに 10 に区画する。表示は北東端を基点に南へ a～j、西へ 1～10 とする。なお、方位は座標北を使用し、水準はすべて東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値を用いた。

調査区の呼称 調査時は事業者との調整を円滑に行なうため、明和池遺跡・吹田操車場遺跡では土壤 8・土壤 13 等といった工事名称を優先して呼称したが、それとは別に調査箇所順に明和池遺跡では 1～4 区・吹田操車場遺跡では 1～7 区として調査区名を付与した。

また、西の庄東遺跡でも事業者との調整を円滑に行なうため工事名称を優先し、調査地西側から順に 1～8 区と呼称した。二分割して調査を実施した 1～5 区に関しては、アサヒビル吹田工場側を A 区・

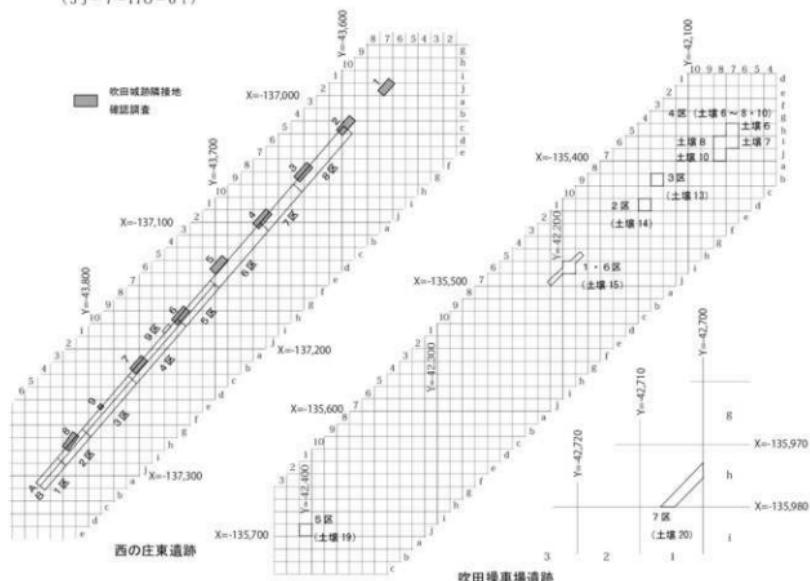
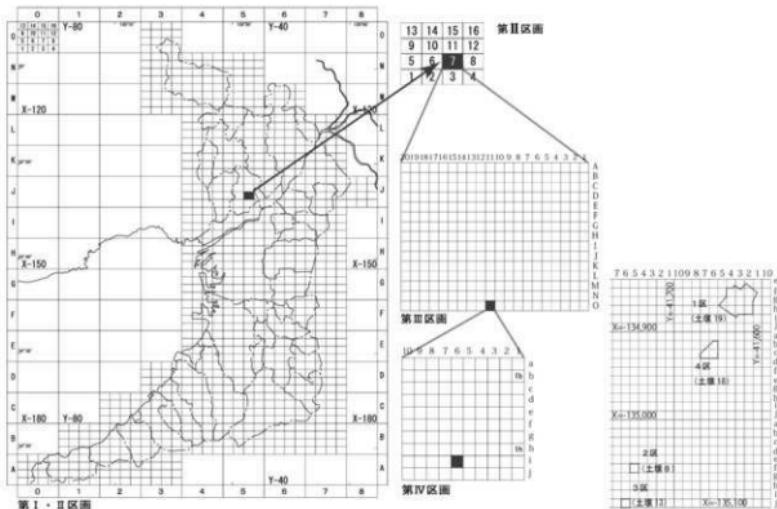


図2 地区割図

線路側をB区とし、1A区・3B区等と称した。さらに、4区の北側に拡張した部分については9区とした。なお、調査は本体工事や工事用進入路の確保に支障が出ない様に調整しながら行なったため、手掛けた調査区は、3B・5B区→3A・5A区→2A・4A区→2B・4B区→7区→6・9区→8区→1B区→1A区の順となった。

整理作業においては、新たに調査区の名称を振りなおすことなく調査時のものを踏襲した。但し、本報告書における調査成果の記述に際しては、明和池遺跡・吹田操車場遺跡・西の庄東遺跡の順に行なう。各遺跡においては、1区から調査区名順に記述を進めている。

遺構名 西の庄東遺跡は調査区をまたがり検出順に1からの通し番号を付与した。明和池遺跡・吹田操車場遺跡では調査区毎に1からの通し番号を付与した。

掘削方法 現代のパラスト層及び操車場造成時の盛土、操車場造成直前の耕作土層を機械掘削し、それ以下を堆積層毎に人力にて掘削を行ない、遺構面・遺構の確認及び遺物の回収に努めた。

遺構面と層 機械掘削で除去した盛土や旧耕作土層を第0層として、上から順に第1層・第2層・・・とした。各遺構面の名称は検出順に上から第1面・第2面・・・とした。

遺構図 最終遺構面に関しては25tラフタークレーンを用いた空中写真測量により、1/50・1/100の平面図を、それ以外の検出した遺構面に関しては手作業によって1/100の平面図を作成した。また、必要に応じて個別遺構の平面図・断面図・立面図を1/10・1/20で適宜作成した。土層観察用の断面に関しては1/20の断面図を作成した。

写真撮影 現場での写真撮影は6×7カメラ、35mmカメラを使用し、それぞれ黑白フィルム、リバーサルフィルムを用いて行なった。また、写真台帳作成用にデジタルカメラを使用して撮影を行なった。なお、最終遺構面の撮影に関しては高所作業車を用いて行なった。

整理作業 主要遺構については現地で作成した実測図を編集し、遺構挿図を作成した。挿図の净書はadobe社製IllustratorCS2を用いてデジタルトレースを行なった。出土遺物は、洗浄・注記・接合を行なった後、実測作業を実施した。また、瓦等の一部の遺物に関しては拓本を採った。実測図は個別にデジタルトレースを行なった後、遺構または出土層位毎に編集し、遺物挿図を作成した。

現地で撮影した遺構面及び個別遺構の写真に関しては、報告書に掲載するものを選別し、現像・焼付け作業を行なった。また、出土遺物については、報告書に掲載するものを選別し実測作業と併行して写真撮影を行ない、現像・焼付け作業に入った。以上の作業と併行して文章を作成し、編集作業を実施した。また、編集作業と併行して出土遺物は報告書掲載遺物と未掲載遺物に分類し、収納作業も行なった。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的・歴史的環境

明和池遺跡は大阪府の北部、摂津市千里丘七丁目地内に、吹田操車場遺跡は吹田市片山町・芝田町と岸部中町に、西の庄東遺跡は吹田市西の庄町に所在する遺跡である。

遺跡の所在する摂津市・吹田市は淀川・安威川・神崎川の右岸に位置し、市域の大半は大阪層群の隆起によって形成された千里丘陵で占められており、市内南部は淀川や安威川によって運ばれた土砂の堆積による沖積地が広がる。両市内には山田川や正雀川などの千里丘陵に源を発し、安威川や神崎川に注ぐ複数の河川が存在するが、いずれも短流で水量が豊富でなかったこともあり、特に吹田市側では古くから水を確保するための溜池が地形に即して築かれている。これまでの吹田操車場遺跡の調査においても、溜池状遺構を確認しておりこれを首肯させる。

両市の立地する場所は水運が利用し易く交通が利便であること等から、どの時代をみても重要な遺跡が形成されている。以下に、3遺跡周辺の主要遺跡を時代順に概観しておく。

(1) 旧石器時代

摂津市域では未確認であるが、吹田市域では千里丘陵末端で低位段丘上に位置する吉志部遺跡や吉志部瓦窯下層遺跡で石器製作址や縄群が確認されている。出土遺物にはサヌカイト製のナイフ形石器・插器・削器・彫器、チャート製ナイフ形石器等がみられる。石材としてサヌカイトが一般的に用いられる近畿地方において、チャート製石器の存在は珍しく、箕面市所在の粟生間谷遺跡の旧石器資料とともに、サヌカイト原産地から遠く離れた遺跡の様相として注目される。また、生活痕跡は確認されていないが、沖積地に位置する目張遺跡や高城遺跡でもナイフ形石器が出土している。

(2) 繩文時代

摂津市では、200点近いサヌカイト製石器・剥片が集積された状態で出土した千里丘遺跡がある。これら石器・剥片には土器が伴っておらず帰属時期が明確になっていないが、周辺での火山灰分析や石器属性分析から縄文時代早期に遡る可能性が指摘されているものである。この他に、鳥飼西地区の淀川河床で縄文時代後期～晩期土器が採集されている。

吹田市域では、中ノ坪遺跡で草創期の所産とみられるチャート製有舌尖頭器が、吉志部遺跡ではサヌカイト製有舌尖頭器が、高浜遺跡で中期前半の船元式土器が、七尾瓦窯下層遺跡で晩期後半の船橋式土器が、目張遺跡では長原式土器が確認されている。

総体的に縄文時代の遺構・遺物の発見例は他の時代に比して少ない。今後の調査に期待したい部分である。なお、先述した吉志部遺跡では有舌尖頭器を含めて8点の尖頭器が集中的に出土しており、全国的にも稀有な例といえる。

(3) 弥生時代

摂津市では調査事例が僅少であることから、明和池遺跡以外に遺構が検出された明確な遺跡は知らない。しかし、鳥飼西地区の淀川河床では弥生時代前期の土器が採集されていることから、摂津市域の淀川流域に弥生前期集落が営まれていた可能性が想定される。

吹田市域では、弥生時代に入ると大幅に遺構・遺物の検出は増加する。五反島遺跡では前期の土器(甕・

壺・鉢・高杯等)が出土している。丘陵上に位置する垂水遺跡では中期～後期の集落跡が確認されている。特に後期に栄えたようで、竪穴建物や掘立柱建物が検出された。出土遺物には、近江や東海、四国、山陰といった外来の土器も多くみられ、他地域との交流が盛んであったことが窺える。また、垂水遺跡直下の低地に位置する垂水南遺跡でも弥生時代の土器が多量に出土していることから、両者の関係が注目される。七尾東遺跡では中期の竪穴建物や掘立柱建物が検出されている。竪穴建物内からは土器のほか、石包丁や石鎌等も出土している。これら以外にも近年、目俵遺跡・中の坪遺跡・櫻坂遺跡でも後期を中心とした資料が出土している。また、西の庄東遺跡が乗る吹田砂堆上に位置する都呂須遺跡や高浜遺跡でも弥生時代の遺物が確認されており、次第に様相が明らかになるものと思われる。

(4) 古墳時代

摂津市域の古墳時代の遺跡には、蜂前寺遺跡や東正雀遺跡が挙げられるが、詳細は不明である。

吹田市域では、古墳時代には垂水南遺跡の微高地上で竪穴建物や掘立柱建物が検出され、その集落周辺では水田や灌漑用水路が確認されている。出土遺物も多岐にわたり、多量の須恵器や土師器のほかに韓式系土器や製塙土器、木製農具、木鐵、勾玉や管玉などがみられる。出土土器の中には、瀬戸内西部から南関東地域のものがあり、広範な地域との交流を窺わせている。さらに、鍛冶関連遺物(羽口・鉄滓・砥石)や遺構も確認されており鉄器生産を行なっていたことが判明している。初期須恵器や韓式系土器は垂水遺跡や五反島遺跡でも出土しており、渡来系の人々の存在が注目される。また垂水遺跡では、溶解途中の彷彿鏡(方格規矩鏡)が出土しており、鋳造関連の施設があったと想定される。この資料は古墳時代の鋳造技術復元に重要な示唆を与えてくれるものである。

吹田市域で知られる古墳は10基ほどで、周辺地域と比べると少ない。これは、各地で古墳が多数築造される時期に、市内にある千里丘陵が大規模な須恵器生産地として利用されていたため、古墳を築造し難い環境にあったことが一因とみられる。また、高度成長期における千里丘陵一帯の大規模開発による破壊も見過ごせない要因であろう。

吉志部神社境内の吉志部1号墳は7世紀初めに築造されたもので、市内唯一の現存する石室である。石室内から、須恵器の蓋杯・長頸壺・ガラス玉・刀子・鐵などが出土している。新芦屋古墳は宅地造成中に発見されたため古墳の外形は既に失していたが、組合式石棺を納めた木室墳であることが明らかになっている。木室内からは須恵器の高杯・杯・器台・土師器・鉄地金銅張りの馬具一式が、石棺内からは人骨とともに玉・耳環・直刀が出土している。なお、本古墳は石棺を納めた木室墳としては全国唯一の存在である。また、片山公園遺跡では大量の埴輪片が見つかっており、操車場を造成する際に削られた丘陵の尾根上に古墳群が形成されていた可能性がある。片山荒池遺跡でも古墳時代中期中葉の円筒埴輪が出土しており、吹田操車場遺跡直近にも古墳が築造されていたと推定される。

千里丘陵一帯では、須恵器窯跡が数多く発見されている。その中で最古のものは吹田32号窯跡(ST32)である。窯内部から鋸歯文や斜格子文などの文様が施された須恵器が出土しており、5世紀前半の初期段階の須恵器窯であることが明らかとなった。その後、須恵器窯は6世紀中頃に最盛期を迎え、8世紀前半には完全に生産を停止している。なお、片山荒池遺跡では6世紀～7世紀代に掘削された粘土採掘用の群集土坑がみられ、千里窯跡群との関係が示唆されている。

(5) 古代・中世

摂津市域における古代の遺跡についての調査例が無いため、不明な点が多い。しかし、文献史料では鳥飼牧の設置や平安時代の離宮である鳥飼院の存在、一津屋と別府付近を繋ぐ運河の開削等が知られて

おり、今後の調査に期待される部分である。中世に入ると 14 ~ 15 世紀の溝が検出された蜂前寺遺跡や 15 世紀前半頃の遺構がみられる千里丘東遺跡が知られる。

吹田市域では、最盛期は過ぎたものの前代に引き続き千里丘陵一帯で窯業が行なわれていた。8 世紀初頭には七尾瓦窯跡が操業され、後期難波宮で葺かれた瓦が焼かれている。また、8 世紀末操業の吉志部瓦窯では平安京へ供給する瓦の生産が行なわれたが、短期間のうちに操業を終え、操業の場は西賀茂瓦窯跡・角社瓦窯跡へと移されている。

文献によると平安時代には、春日領や東寺領の莊園が営まれるようになり、鎌倉時代にかけて一層進展する。垂水南遺跡では、東寺領垂水庄との関係が指摘される「垂庄」や「中庄」と書かれた墨書き土器が出土している。また、藏人遺跡は垂水庄藏人村との関連が指摘されており、掘立柱建物や鍛冶工房、水田や畠などがみつかっている。

吹田砂堆上に位置する高城 B 遺跡や高城遺跡、高畠遺跡等では短期間に営まれた平安時代の集落が確認され、さらに高城 B 遺跡では 14 世紀前半で掘削されたとみられる群集土坑がみつかっている。また、高城町辺りや西の庄町のアサヒビール吹田工場付近は 14 ~ 16 世紀に営まれた吹田城址推定地とされているが、現在のところ城跡と断定出来る資料は確認されていない。

(6) 近世以降

両市ともに近世以降の報告例は少ないが、垂水遺跡で明石焼陶製土鍋、明石焼或いは堺焼擂鉢、土人形などの出土が報告されており、片山荒池遺跡では溜池が検出されている。

明治に入ると明治 7 (1874) 年大阪・神戸間に鉄道が敷設され、明治 22 (1889) 年までに大阪・敦賀間が官営鉄道として順次開通した。その後、関西圏の鉄道網が整備され、貨物輸送も発展していく。その中で、貨物輸送の向上と円滑化を図るために、「東洋一の操車場」と謳われた吹田操車場の造成が大正 12 (1923) 年から開始された。また、吹田市では明治 23 (1890) 年に建築が開始された煉瓦造りの大坂麦酒吹田醸造所（現アサヒビール吹田工場）の存在が近代化への大きな転換となっている。

今回調査を行なった 3 遺跡の地下にはその痕跡が今もなお残されており、吹田操車場遺跡 4 区では旧東海道線の軌道敷盛土や側溝が確認された。特に、西の庄東遺跡では近代化に伴う土地変更の姿が著しく窺えたので簡単に紹介しておきたい。調査区東側（6 ~ 8 区）を中心に、石炭殻が充填された溝や 2 列の枕木を長軸方向に多数打設した溝等がみられた。

石炭殻が充填された溝は N - 43° - E に軸をもち、7 区の Y = - 43,640 付近に位置する北西 - 南東の溝よりも南西側に展開し、幅約 2 m、検出長約 55 m を測る。Y = - 43,640 付近に位置する溝よりも北東側にも溝は延びて行くが、埋土が石炭殻ではなく、厚いシルト～粗砂の堆積へと変わる。堆積層が変化した部分も幅約 2 m、検出長約 55 m を測り、総延長は約 110 m である。

この溝からは、陶磁器、汽車土瓶（蓋や猪口も含む）、牛乳瓶、ビール瓶、木製弁当箱の蓋、ダニエル電池素焼き容器、荷札木筒、煉瓦等の多種多様な近代資料が採取された（写真 1・2）。

汽車土瓶（3）は信楽焼産で、最大径が 11 cm・高さ 8.2 cm を測る手回しロクロ挽きの製品で、白色釉が掛けられている。他には土瓶胴部外面には駅名が書かれるものもみられたが、破片となっているため販売駅を特定出来なかった。

牛乳瓶（2）は、淡い水色の気泡が多く入る高さ 15.5 cm 前後のガラス瓶である。駅名や販売店名、販売金額等は陽銘されていなかった。ビール瓶（1）は高さ 29 cm 前後の茶色のガラス瓶で、瓶外面下端に「DAINIPPON BREWERY Co.LTD.」、底面外面に「14 ☆ 7」と陽銘されたものである。



写真1 近代採集資料（1）

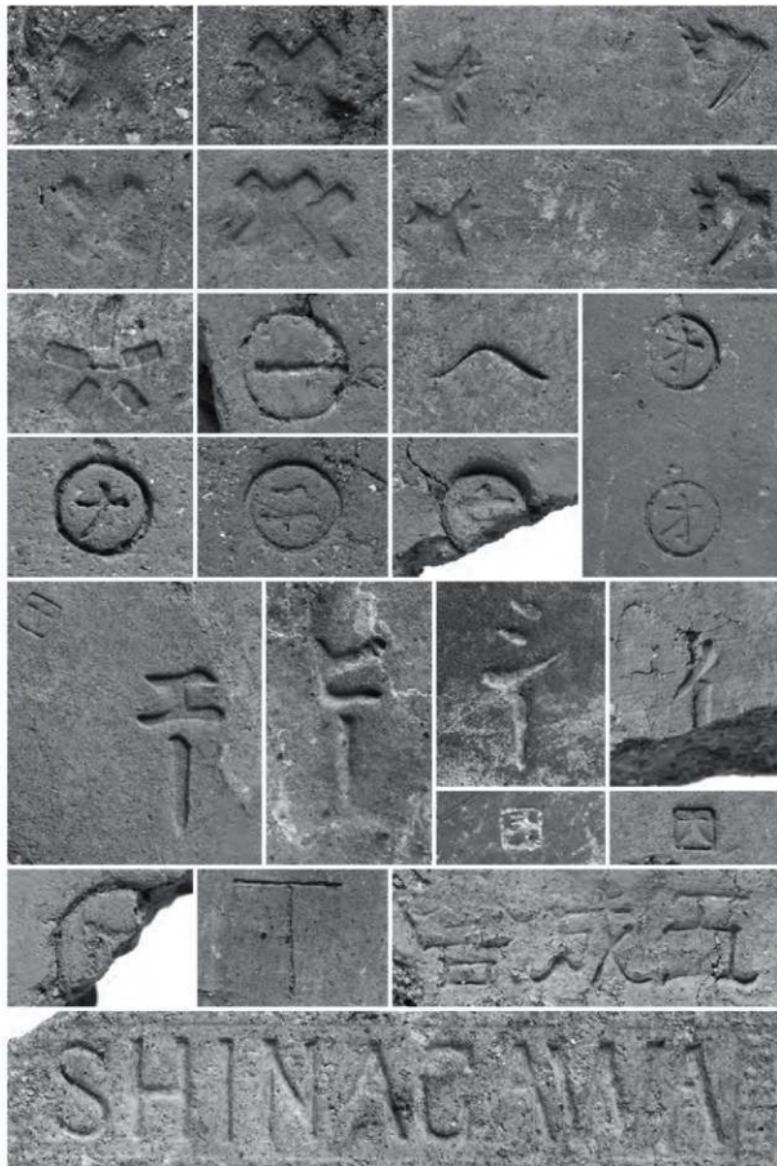


写真2 近代採集資料（2）〔煉瓦（刻印）〕

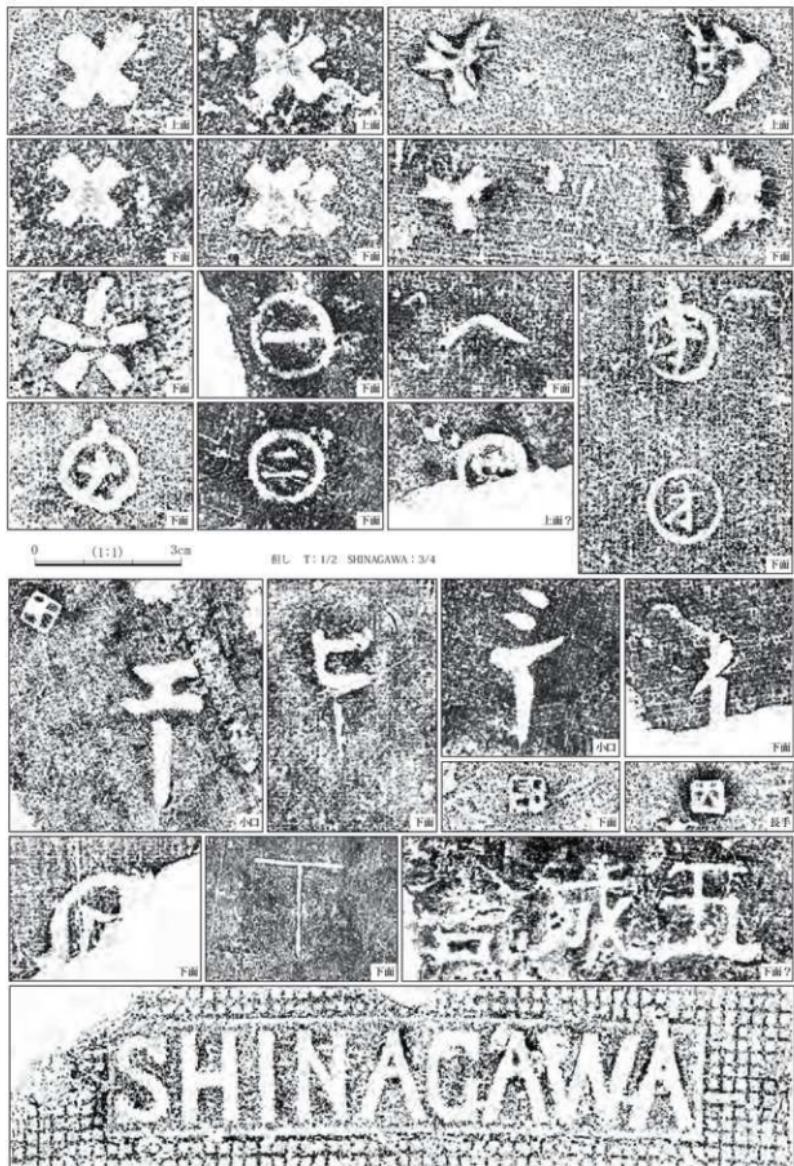


図3 煉瓦(刻印)

木製弁当箱の蓋（8）は一辺 13.6 cm、厚さ 0.3 cm を測り、四隅が切られたものである。表面には二箇所に焼印がみられる。右上には「○○⑨定價廿五銭」とあり、駅弁の価格が明示されている。左下には「松塚 水了軒」とある。水了軒は明治 21（1888）年に大阪で松塚孫三郎氏によって創業された弁当屋であることから、右下の焼印は創業家と商店名を示したものと言える。

ダニエル電池素焼き容器（9～11）は、平面長楕円形を呈する。長軸（外法）9.2 cm・（内法）8.4 cm、短軸 2.7 cm、高さ 10.5 cm を測る。底面外面に「み」の字が刻印されるものがある。内面に縁青の析出が顕著な資料が多くみられる。ダニエル電池とは、磁器製の容器内に素焼き容器を入れて使用するものである。白色磁器容器内には硫酸銅と銅板が、素焼き容器内には亜鉛板と希硫酸が入れられ、約 1.1 V の電圧を発生される簡易な電池である。明治以来、電信用電池として使用され、昭和の前半頃まで使用されたようである。

煉瓦には長辺約 21.5 cm、短辺約 10.8 cm、厚さ 7.5 cm を測る厚くてやや小振りなもの、長辺約 22.3 cm、短辺約 10.7 cm、厚さ 5.5 cm を測る薄くてやや大振りな 2 種がみられた。刻印がみられるものは少數であった。刻印には、「×」を用いた岸和田煉瓦（写真 2・図 6 左及び中列 1・2 段目）、堺煉瓦（写真 2・図 6 左列上から 3 段目）、三ツ矢状記号を用いた日本煉瓦（写真 2・図 6 右列 1・2 段目）といつた社印やアルファベットをカタカナ表記したもの、○・○・④・⑦、團・因等の不明刻印等がみられる。刻印が押される部分は上面または下面が多いものの、木口や長手に押すものも少數ながら確認出来た。また、スタンプによる刻印ではなく、針状工具による「T」字状の線刻もあった。

なお、僅かながら耐火煉瓦も採取している。「五成舎（右から左に表記）」の刻印があるもの（写真 2・図 6 右側下から 2 段目）は、明治 16（1883）年に大阪（大阪市福島区西野田付近）で操業を開始した耐火煉瓦製造所の資料である。明治 24（1891）年に起きた濃尾地震により、工場の煙突が傾き操業が困難になったため、明治 25（1892）年に廃業している。大きさは残存長 21.5 cm、残存幅 9.5 cm、厚さ 7.5 cm を測る。「SHINAGAWA」の刻印があるもの（写真 2・図 6 最下段）は、明治 8（1875）年に操業を開始し、明治 20（1887）年に品川白煉瓦製造所と改名した耐火煉瓦製造所の資料。大きさは長さ 22.2 cm、残存幅 11 cm、残存厚 6 cm を測る。こうした煉瓦・耐火煉瓦が鉄道関連施設または大阪麦酒吹田村醸造所のどちらで使用されたのかは不明であるが、現在各地で脚光を浴びる赤煉瓦建物である近代建築を形作った貴重な近代資料である。

第 2 節 明和池遺跡・吹田操車場遺跡・西の庄東遺跡の既往の調査

明和池遺跡は、昭和 8（1933）年に庄屋一丁目にあった明和池の底から弥生時代～古墳時代の土器が発見されたことにより周知されるようになった。

昭和 62（1987）年、大阪府教育委員会による調査が嚆矢となり、古墳時代後期～中世の遺構・弥生時代～中世の遺物が確認された。その後、平成 10（1998）年、JR 梅田貨物駅の機能の一部を吹田操車場跡地へ移管させるため、移転用地内全域を対象として確認調査を行なうこととなった。61 箇所の確認トレンチを設定し調査を実施したが、このうち 2 箇所が明和池遺跡に位置しており、うち 1 箇所で弥生時代後期～中世にかけての遺構・遺物を確認している。また、平成 19・20（2007・2008）年には摂津市教育委員会によって 33 箇所の確認トレンチが設定され、調査が実施されている。確認調査では、古墳時代～近代の遺構や弥生時代～近世の遺物が確認されている。平成 21（2009）年には独立行政法

人都市再生機構による北部大阪都市計画事業吹田操車場跡地土地区画整理事業が本格化したため、大規模な発掘調査が継続して実施されるようになった。

吹田操車場跡は、昭和 42（1967）年の操車場改良工事に伴う事前調査で中世の遺物が出土したことから周知されるようになった。

先述したように、平成 10（1998）年度に JR 梅田貨物駅の機能の半分を吹田操車場跡地へと移管させ

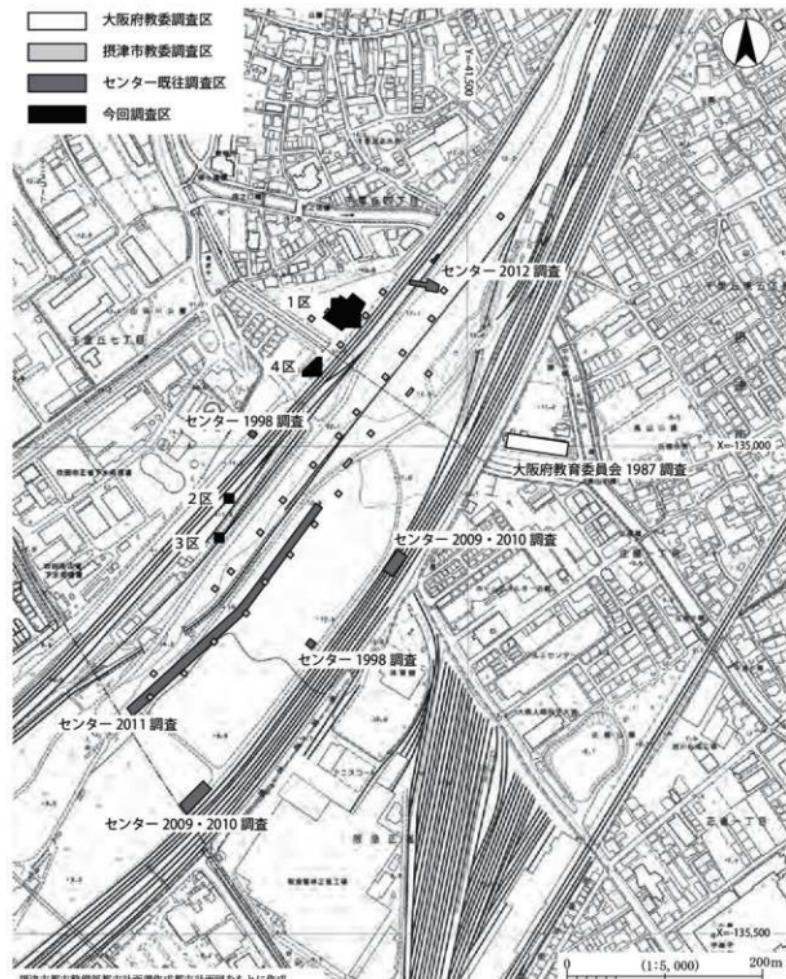


図4 明和池遺跡の調査区と既往の調査位置図

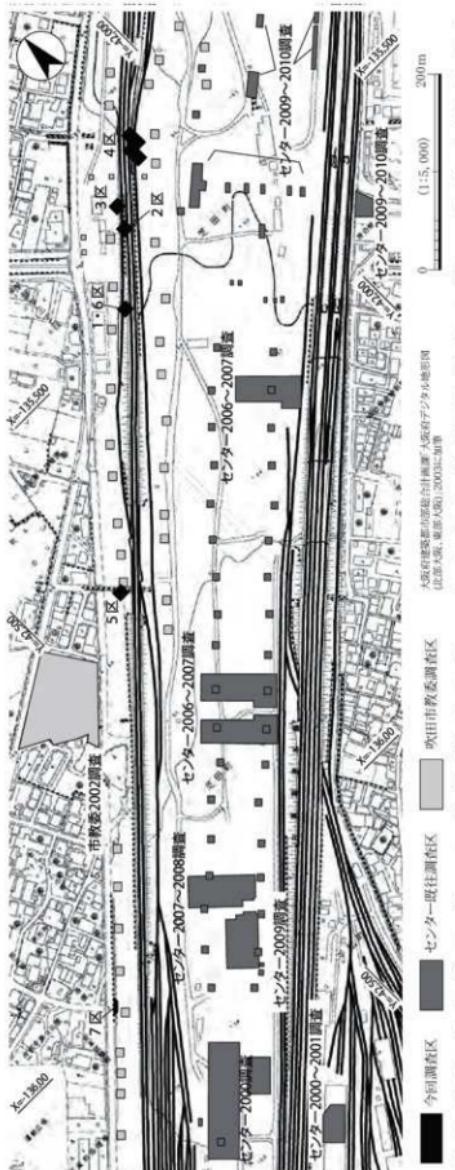


図5 吹田操車場遺跡の調査区と既往の調査位置図

るために、確認トレチを61箇所設定し、公益財団法人大阪府文化財センター〔当時は(財)大阪府文化財調査研究センター:以下、当センターと記す〕が発掘調査を実施した。その結果、操車場造成の盛土の下位に古墳時代から近代に至る遺構面を検出し、旧石器時代以降の遺物が出土した。

平成12(2000)年には貨物駅舎と倉庫建設及び貨車区の改良工事に際して、A・B・C地区の調査を当センターが行なった。A地区では古墳時代前期の大溝、平安時代後期の掘立柱建物や条里制を施工した水田を検出した。B地区は古代末から中世にかけて複数の遺構面を検出し、畦畔等を確認していることから耕作地であったことを明らかにしている。C地区では谷地形を検出し、埋土最下層から鬼界アカホヤ火山灰が検出された。このことから谷地形は7300年前以前に形成されていたことが判明している。

平成13(2001)年には吹田市教育委員会によって、吹田市営岸部中住宅建替工事に伴う事前調査が実施され、8箇所を試掘調査している。平成14(2002)年には拡大調査が行なわれ、流路や谷が検出された。主な出土遺物には中世遺物と弥生土器があり、特に東海系の弥生土器が比較的多く出土していることは注目される。

平成18~19(2006~2007)年には信号場基盤整備工事に伴い、調整池造成箇所(C1・C2地区、C3・C4地区、C5・C6地区)の調査を当センターが実施した。C1・C2地区では古墳時代後期から飛鳥・奈良時代にかけての群集土坑、飛鳥・奈良時代及び平安時代の掘立柱建物を検出している。主な出土遺物に円面鏡や墨書き土器、綠釉・灰釉陶器などがある。C3・C4地区、C5・C6地区では古墳時代の流路や中世~近世の耕作地を検出した。また、近世には溜池状の施設が造られて

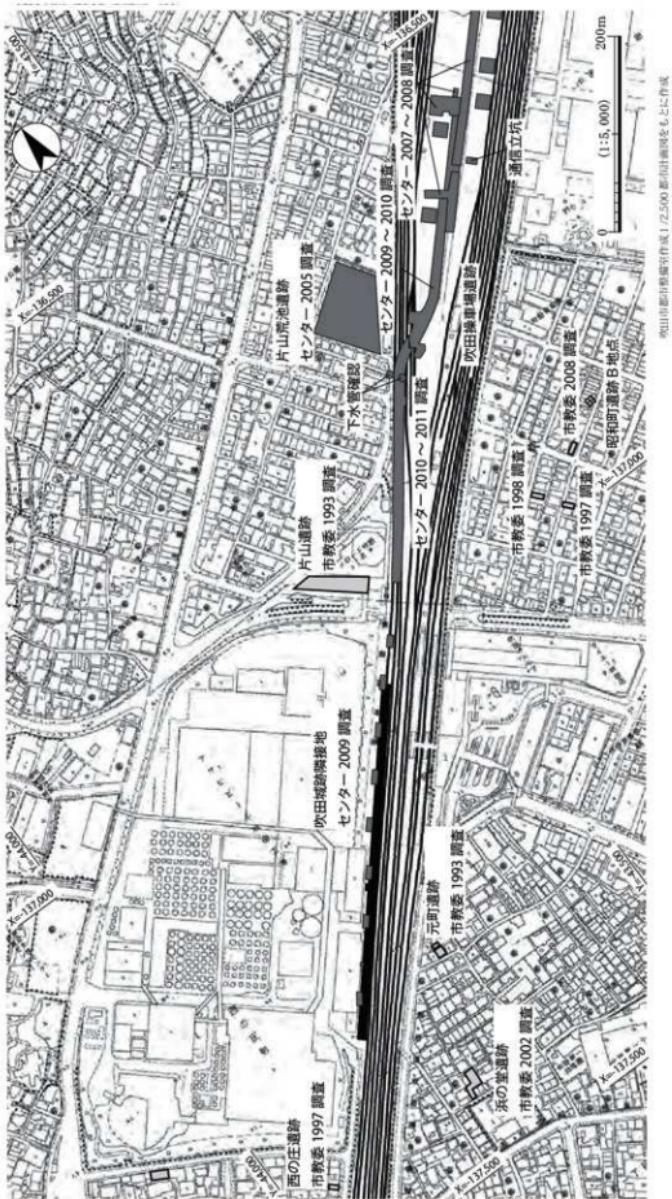


図6 西の庄東遺跡の調査区と既往の調査位置図

いる。なお、古墳時代の流路から山陰系の土師器がまとめて出土しており、交流を考える上で重要な資料として注目される。

平成 19（2007）年には吹田市教育委員会によって、操車場跡地内の街づくり用地の確認調査が実施され、59箇所を試掘調査している。その結果、谷状地形や古墳時代の大型土坑、飛鳥時代の建物跡、平安時代のピットなどが確認されている。

平成 19～20（2007～2008）年には信号場基盤整備工事に伴い、調整池造成箇所 4 箇所（C7～10）・防火水槽 4 箇所（B3～7）・導水路部分を、平成 21～22（2009～2010）年にかけて JR 第二・第三職員通路部付け替えや南北自由通路、岸部駅駐車場部分の調査を当センターが実施した。平成 19～20（2007～2008）年の調査では弥生時代の土坑、古墳時代の溝や井戸、平安時代の集落を確認し、掘立柱建物や溝、井戸などを検出した。また、中世に入ると広範に耕地が広がることが明らかになった。主な出土遺物には七尾瓦窯・吉志部瓦窯産の軒丸瓦、陶棺、越州窯青磁碗・綠釉・灰釉陶器などがある。特に越州窯青磁は、大阪府下でも出土遺跡数・出土点数とともに極めて少ない注目すべき資料である。平成 21～22（2009～2010）年の調査では中世の掘立柱建物や土坑群、中世墓等を検出した。

平成 21（2009）～23（2011）年に遺跡西側地域で実施した貨物専用道路部分では、縄文時代早期の谷状地形や弥生時代中期の土坑、古墳時代の井戸、古代末の木棺墓を検出している。中世以降には広範に耕作地が展開することを明らかにしている。

西の庄東遺跡は、平成 21（2009）年に吹田城跡隣接地において、吹田信号場基盤整備工事（貨物専用道路新設）に伴う確認調査を実施して新たに発見された遺跡である。確認調査では中世の耕作痕や古代の遺構が確認され、古代～近世に至る遺物が出土している。周辺では吹田市教育委員会によって片山遺跡・元町遺跡・浜の堂遺跡等が調査されている。

註 図3の拓本における上面とは煉瓦の最も広い面のうち、長辺端部付近に線上の窪みがみられる面を指し、下面是その逆の面である。長手は側面の細長い面を、小口は最も狭い面を指す。

参考・引用文献

- 大阪府教育委員会 2010 『大阪府埋蔵文化財調査報告 2009－13 千里丘遺跡Ⅱ 都市計画道路千里丘三島線道路改良事業に伴う調査』
- 小野田滋 2004 『景観学研究叢書 鉄道と煉瓦 その歴史とデザイン』 鹿島出版会
- (公財) 大阪府文化財センター 2012 『(公財) 大阪府文化財センター調査報告書 第225集 旧大阪府行倉跡』
- (財) 大阪府文化財調査研究センター 1999 年 『(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第42集 吹田操車場』
- (財) 大阪府文化財調査研究センター 2001 年 『(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第66集 吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点』
- (財) 大阪府文化財センター 2006 『(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第145集 片山荒池遺跡』
- (財) 大阪府文化財センター 2008 『(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第180集 吹田操車場遺跡Ⅲ』
- (財) 大阪府文化財センター 2010 『(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第201集 吹田操車場遺跡Ⅳ』
- (財) 大阪府文化財センター 2011 『(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第216集 吹田操車場遺跡V』
- (財) 大阪府文化財センター 2011 『(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第217集 吹田操車場遺跡VI』
- (財) 大阪府文化財センター 2011 『(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第220集 吹田操車場遺跡VII』
- (財) 建築研究会 1990 『アサヒビル株式会社吹田工場創業時のビール醸造工場建物に関する学術調査報告書』

- 島根県教育委員会 2001 『隱岐空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 第1冊 御崎谷遺跡・大床遺跡』
島根県教育委員会 2002 『隱岐空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 第3冊 御崎谷II遺跡』
(社)工学舎 1925 『明治工業史 化学工業篇』
吹田市教育委員会 1998 『吹田の石器時代』
吹田市教育委員会 1999 『日依遺跡』
吹田市史編さん委員会 1981 『吹田市史』第1巻 吹田市役所
吹田市史編さん委員会 1990 『吹田市史』第8巻 吹田市役所
吹田市立博物館 1996 『平成8年度特別展 鉄道沿線物語—鉄道の発達と吹田—』
吹田市立博物館 2007 『吹田市文化財ニュース』No.27
吹田市立博物館 2008 『平成20年度(2008年度)秋季特別展 ビールが村にやってきた!』
吹田市立博物館 2009 『わかりやすい吹田の歴史 本文編』
吹田市都市整備部・吹田市教育委員会 1993 『高城B遺跡』
吹田市都市整備部・吹田市教育委員会 2004 『吹田操車場遺跡—市営岸部中住宅建替工事に伴う発掘調査報告書一』
独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 吹田市教育委員会 2008 『吹田操車場遺跡確認調査報告書—吹田操車場跡地地区(仮称)の整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査一』
独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 沢津市教育委員会 2009 『明和池遺跡確認調査報告書—吹田操車場跡地地区(仮称)の整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査一』
西川麻野 2011 『明和池遺跡』『大阪府立近づ飛鳥博物館 平成23年度冬季特別展 歴史発掘おおさか2011』
大阪府立近づ飛鳥博物館
畠中英二編 2007 『信楽汽車土瓶』別冊淡海文庫16 サンライズ出版
福田敏一 2008 『鉄道の考古学—汽車土瓶研究覚え書き—』『考古学という可能性—足場としての近現代—』
秀巧堂

第3章 明和池遺跡の調査

第1節 基本層序と遺構面

今回は4箇所の調査区を設けたが、それぞれが少しずつ離れた位置に存在するため、多様な堆積状況や地形を確認することが出来た。現在は操車場を造成したことによって、広大で平坦な地形が開けて見えるものの、調査の結果、以前は起伏に富んだ地形であることが明らかとなった。

明和池遺跡は、大正期から昭和初期にかけて建設された操車場の地下に存在するため、操業時のバラスト層や操車場造成時の盛土を除去しなければ調査対象となる遺構面には到達しない。こうした操車場関連の土砂を除去すると明治期の旧耕作土が広がることは各調査区とも共通する事象であるが、それ以下の層序に関しては堆積環境が異なるため、共通の層序を提示することが困難である。

従って本節においては、地形的に高い場所に当たり調査位置の中でも西側に位置する2・3区と地形的にやや下がる場所に当たり調査地の中でも東側に位置する1区とで基本層序を分けて記述することとする。

2・3区は地形的に高い場所にあるため確認出来た堆積層は少なく大別4層を確認し、遺物包含層を除去して検出した遺構面を第1面～第2面とした。一方、1区は、2・3区に比して地形的に下がる場所にあたり、古くから流路が形成される環境にあったため、最大14枚の堆積層を確認し、遺物包含層・土壤層を除去して検出した遺構面を第1面～第6面とした。なお、部分的に分層が可能な場合は新たな層番号を付与せず、枝番を設定して対応した。

1区の基本層序（図7～10）

第0層は明治期の耕作土（黄灰色シルト混細～中砂）・吹田操車場造成用盛土（にぶい黄褐色シルト～極細砂・粘土等）・近現代のバラスト層で構成され、近代～現代の所産である。

断面観察において、畠の畝や畝溝・耕地境等の残存も非常に良好で、操車場造成直前の耕作地がそのままの状態で埋め立てられたことが明らかになった。

第0層を構成する各層の層厚は、概ね旧耕作土が0.2m、吹田操車場盛土が0.4～0.7m、バラスト層が0.5～0.7mであった。この結果、第0層の層厚は現地表から1.2～1.6mの厚さとなった。

第1層は黄褐色系のシルト混細～粗砂で、近世以降の耕作土である。層厚は0.2～0.3mを測る。第1層を掘削し終えた面（第2層上面）を第1面として調査を行なった。第1面で検出した遺構には井戸、土坑、小穴がある。遺構出土遺物から14～15世紀の居住域が広がっていたと想定される。

第2層はにぶい黄橙色細～中砂である。層厚は0.1～0.3mを測る。出土遺物は比較的多くみられるが、遺物の所属時期が10～15世紀と幅が広い。下位の遺構が営まれた時期からすると、第2層が形成されたのは10～11世紀以降と推察される。

第3層は土壤化した褐灰色中～粗砂混シルトである。層厚は0.1～0.25mである。出土遺物は比較的多くみられるが、遺物の所属時期が5～11世紀と幅が広く、上層からの沈降や下層からの巻上げに伴うものと考えられる。下位の遺構が営まれた時期からすると、第3層が形成されたのは7～8世紀以降と推察される。第2層を掘削し終えた当層上面で遺構検出を行なったが、明確な遺構を捉えることが

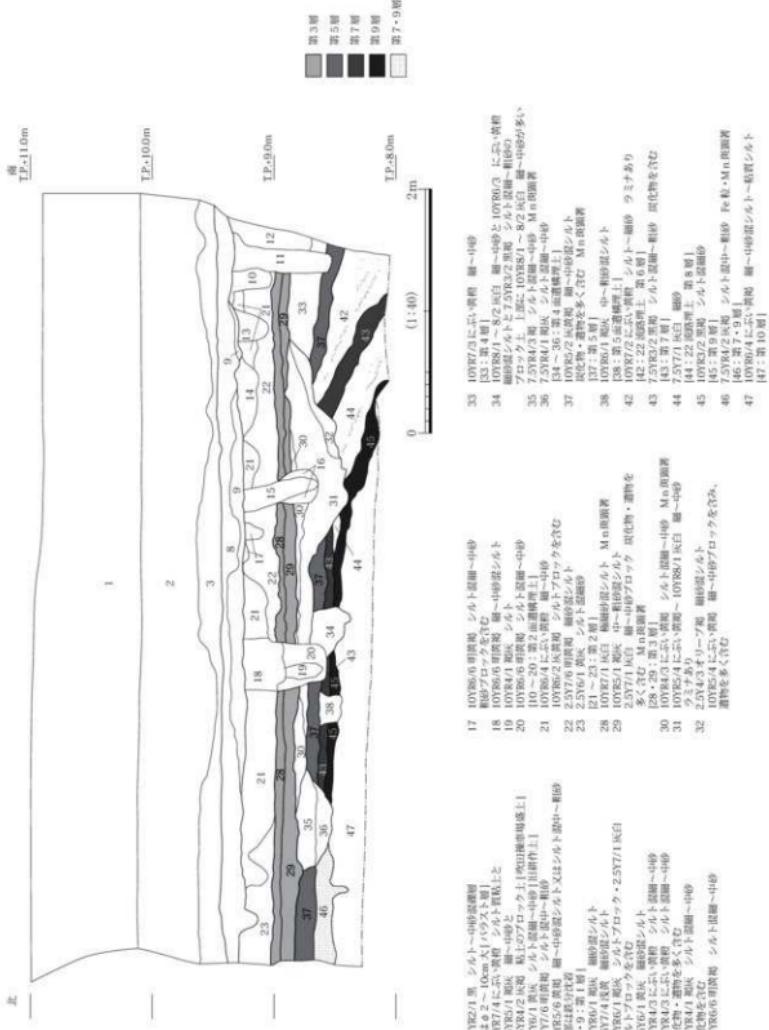


図7 明和池遺跡 1区 東壁南側断面図

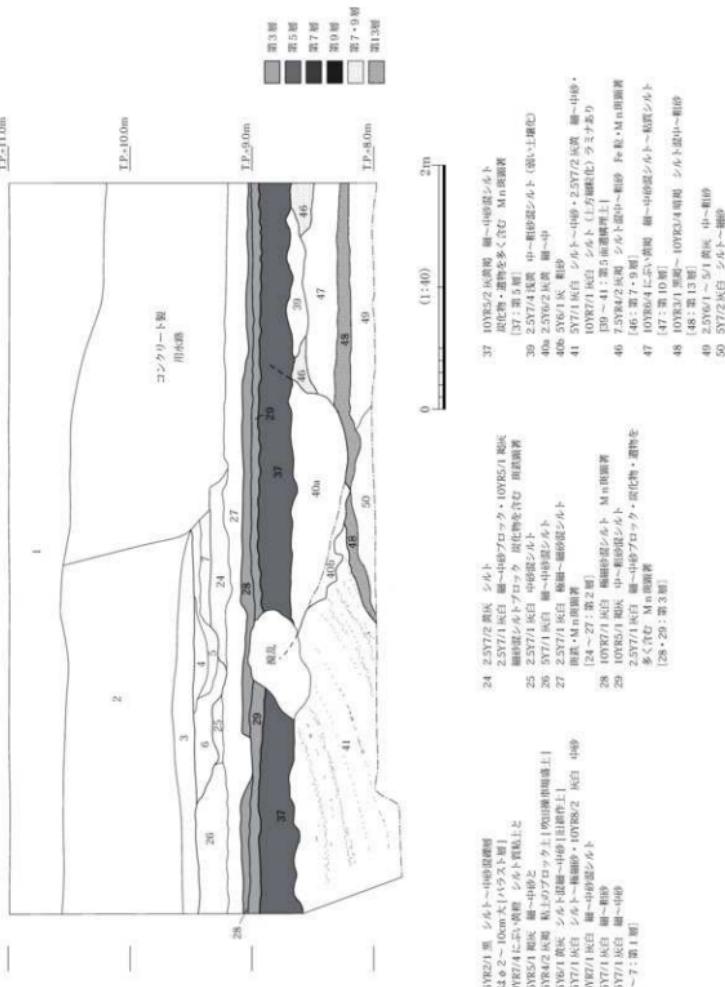


図8 明和池遺跡 1区 東壁北側断面図

出来なかったため、第3層を外した面（第4層上面）を第2面として調査を行なった。第2面では検出した遺構数が減少するものの、上位面と同様、井戸、土坑、小穴を検出した。遺構出土の遺物から7～8世紀代の居住域が広がっていたものと想定される。

第4層はにぶい黄橙・灰黃褐色シルト～細礫である。上位の土壤層である第3層の母材となった自然流路の堆積である。層厚は0.25～1.3m以上である。第4層をもたらした自然流路は図10南壁西側断面で明確に確認出来るが、調査地内に存在した基礎構造物の構築時及びその撤去に伴う工事により、流路上位部分の姿を大きく失しているため、詳細を把握するに至らなかった。第2面（第4層上面）の状況を勘案すれば、古墳時代後期段階には流路は完全に埋没して平坦化したものと思われる。第4層を掘削し終えた面（第5層上面）を第3面として調査を行なった。第3面では溝や不定形土坑を検出した。

第5層は土壤化の進んだ灰黃褐色系細～中砂混シルトである。炭化物や小片となった遺物を多く含むのを特徴とする。層厚は0.1～0.3mを測る。断面観察によれば、調査地の東側よりも西側の方が厚く堆積する傾向が窺える。出土遺物は小片が多いため詳細に出来ないが、弥生時代後期～庄内式土器が多くみられる。

第6層はにぶい黄橙シルト～細砂・灰白色細砂である。上位の土壤層である第5層の母材となった自然流路の堆積である。層厚は0.3～0.5m以上である。第6層をもたらした自然流路（22流路）は北西から南東にはしるもので、弥生時代後期～庄内式土器を出土する。第6層を除去した面（第7層上面）を第4面として調査を行なった。第4面では先述した22流路の東側肩とその肩部付近に置かれた24・25上器群を検出した。なお、22流路西側肩部は図10南壁西側断面で確認出来るものの、調査地内に存在した基礎構造物の構築時及びその撤去に伴う工事により、流路上位部分の姿を大きく失しているため、詳細を把握するに至らなかった。第4面は弥生時代後期～庄内期の所産である。

第7層は土壤化の進んだ黒褐色のシルト混細～粗砂である。炭化物を含む。層厚は0.15～0.3mを測る。断面観察によれば、調査地の東側よりも西側の方が厚く堆積する傾向が窺える。第7層を掘削し終えた面（第8層上面及び第9層上面）を第5面として調査を行なった。第5面では第8層をもたらした27流路の東側肩部や24土器群の下位に位置する40流路、不定形土坑、小穴を検出した。第5面は弥生時代後期～庄内期の所産である。

第8層は灰白色細砂である。上位の土壤層である第7層の母材となった自然流路（27流路）の堆積である。層厚は0.25m以上である。流路が厚い砂の堆積で埋まること、下位からの湧水が著しいこと、検出位置が調査地の南辺の狭小な範囲であること等の諸条件を検討し、完全に掘削すると調査地の壁面が崩落する危険が想定されたため、途中で掘削を停止している。第8層を一定程度掘削し終えて検出した面（第9層上面）を第6面として調査を行なった。なお、第6面では第9層上面以外に、調査地北側及び西側部分に広がる過去の工事によって大きくダメージを受けていた箇所に關しても精査を行ない、井戸や土坑、自然流路（27・40流路の北側部分）や流路内に打ち込まれた杭痕等を検出している。

第9層は土壤化の進んだ黒褐色のシルト混細砂である。調査地の南側では比較的明瞭に判別出来る土壤層であるが、北側に行くに従い上層に収斂する傾向がみられ分層が困難になる。本調査地では当層以下が無遺物層であった。

第10層はにぶい黄褐色細～中砂混シルト・粘質シルト、明黄褐色シルト混細砂等である。上位の土壤層である第9層の母材となった自然流路の堆積である。層厚は0.3m以上を測る。調査地東側南辺を中心とし、厚い堆積が確認出来るが、第8層と同様な理由で完全に掘削を行なっていない。

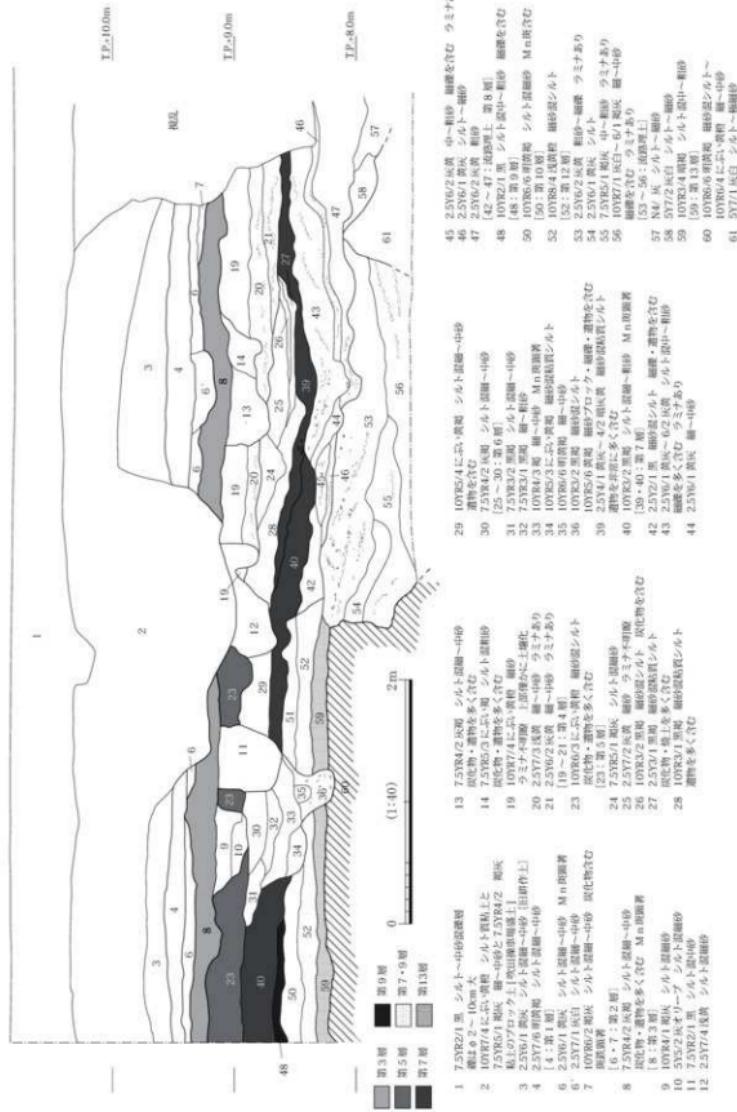


図9 明和池遺跡 1区 西壁南端付近断面図

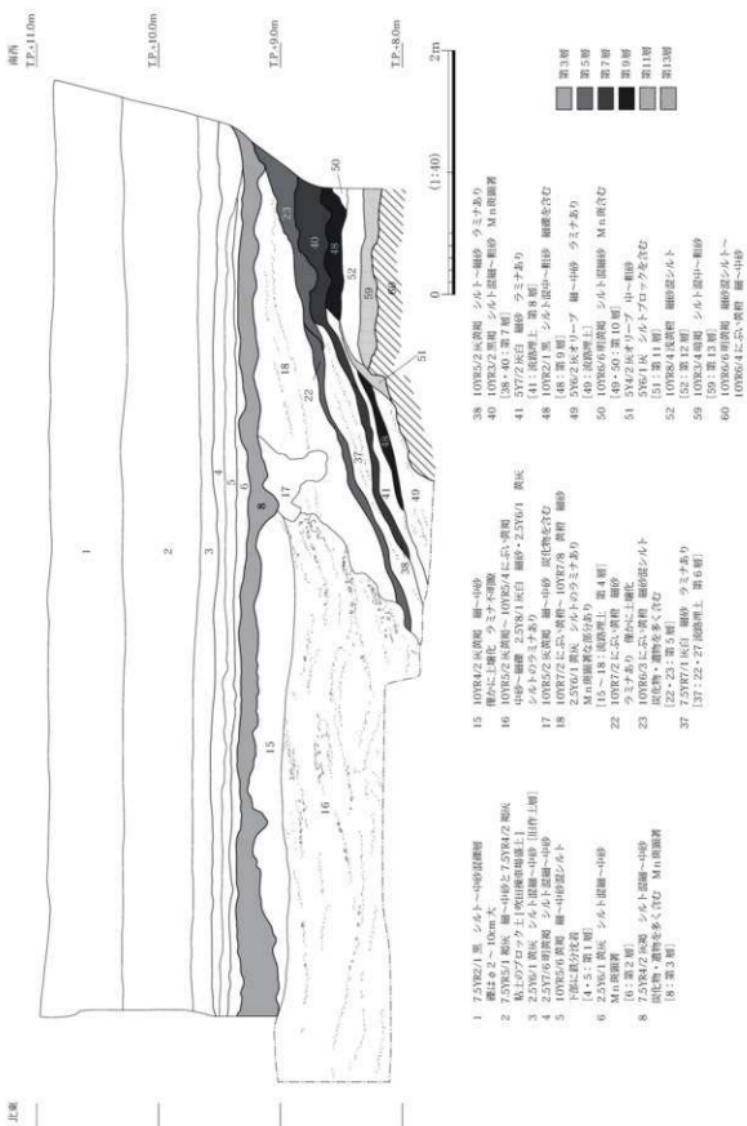


図10 明和池遺跡 1区 南壁西側断面図

第11層は土壤化の進んだ黒褐色細～粗砂・灰オリーブ色中～粗砂である。調査地全体に存在するものでなく、調査地南西隅や調査地東側中央付近の一部で確認出来るものである。層厚は0.1mを測る。

第12層は浅黄橙色細砂混シルトである。上位の土壤層である第11層の母材となった自然流路の堆積と考えられるが詳細は不明である。層厚は0.2mを測る。

第13層は土壤化の進んだ黒褐色～暗褐色シルト混中～粗砂で、非常に硬く締まった層である。調査地全体に存在するものでなく、調査地南西隅や調査地東側中央付近の一部で確認出来るものである。層

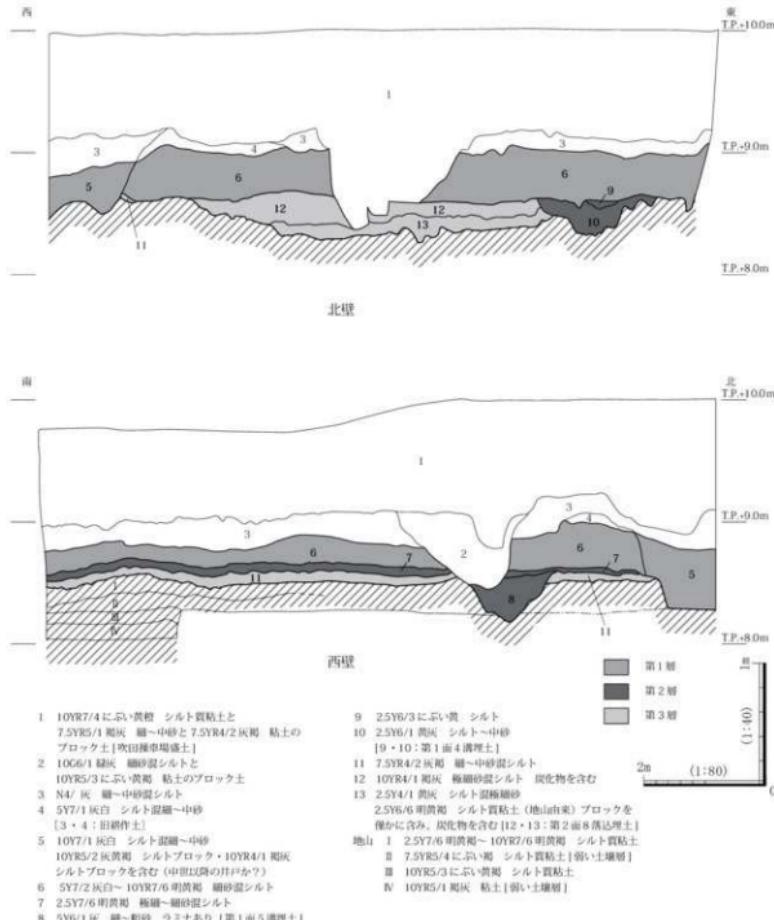


図11 明和池遺跡 2区 北・西壁断面図

厚は0.1～0.2mを測る。

第14層は明黄褐色細砂混シルト～にぶい黄橙色細～中砂である。上位の土壌層である第13層の母材となったものである。比較的硬く締まっており、後に述べる2・3区の基盤層に近い層質を持ち、所謂地山と称している層準に対応すると考えられる。層厚は0.2m以上である。

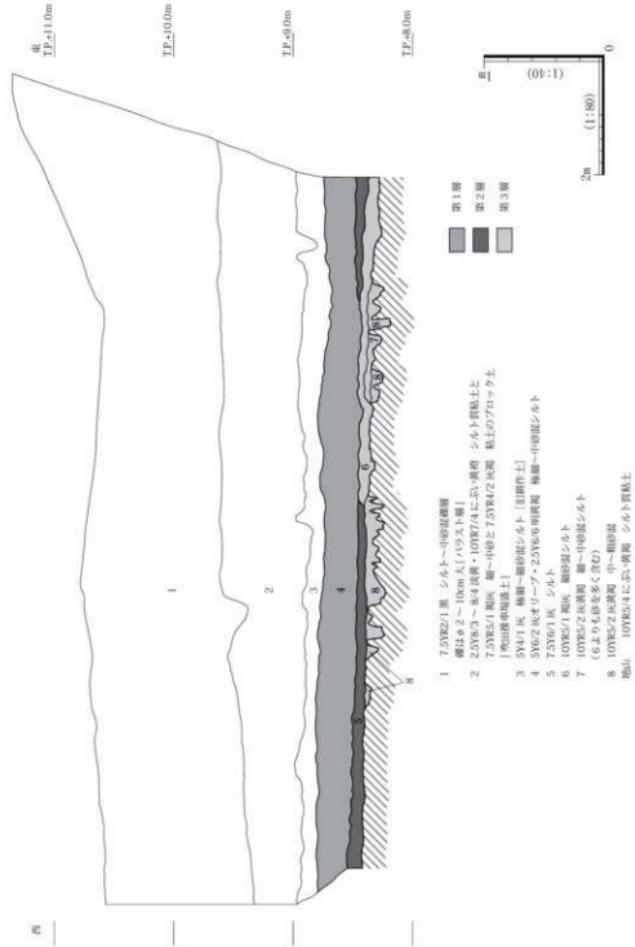


図12 明和池遺跡 3区 北壁断面図

2・3区の基本層序（図11・12）

第0層は明治期の耕作土（灰～灰白色シルト混細～中砂）・吹田操車場造成用盛土（にぶい黄褐色シルト質粘土～褐灰色極細砂・粘土等）・近現代のバラスト層で構成され、近代～現代の所産である。

断面観察において、畠の歴や畝溝・耕地境等の残存も非常に良好で、操車場造成直前の耕作地がそのままの状態で埋立てられたことが明らかになった。

第0層を構成する各層の層厚は、概ね旧耕作土が0.2m、吹田操車場盛土が0.7～0.9m、バラスト層（3区のみ）が1.2～1.5mであった。この結果、第0層の層厚は現地表から0.9～2.5mの厚さとなった。

第1層は灰白～明黄褐色系の細砂混シルトで、近世以降の耕作土である。層厚は0.25～0.4mを測る。この層中に3面程度の耕作痕が確認出来る。

第2層は明黄褐色極細～細砂混シルトまたは灰色シルトである。層厚は0.1mを測る。遺物はほとんど含まれていない。第2層を掘削し終えた面（第3層上面）を第1面として調査を行なった。第1面で検出した遺構には溝、鋤溝、土坑があり、耕作地が広がっていたものと考えられる。遺構からの遺物の出土がほとんどみられず、時期を決し難いが概ね古代～中世段階の所産と推定される。但し、3区では遺構が確認出来なかつたため、面としての認定を行なわなかった。

第3層は土壤化した灰褐色系細～中砂混シルトである。層厚は0.1～0.15mを測る。遺物はほとんど含まれていない。第3層を掘削し終えた面（地山上面）を2区では第2面として、3区では第1面として調査を行なつた。2区の第2面では隅丸方形状の落込みや溝、3区の第1面では溝や柱穴列を確認した。なお、3区第1面は地震の揺れのためか、灰色シルト質粘土と明黄褐色シルト質粘土が混ざったマーブル模様状を呈している。

第4層（地山）は明黄褐色～にぶい黄褐色シルト質粘土である。これは隣接する吹田操車場遺跡において普遍的に確認されている地山と同質のものである。

第2節 1区の調査

1区は今次調査においては東側に位置し、山田川の東側、X = -134,850～880・Y = -41,600～650に当たる。調査区内の北側及び西側（X = -134,870～850・Y = -41,620～650）には、元々大型の基礎構造物が構築されており、その撤去と併せて、上記の箇所は大きく堆積層及び遺構面を失する状態であった〔地中障害部（基礎撤去部分）〕。しかし、調査地南東隅には堆積層や遺構面が良好な状況で遺存していることや、大きく搅乱を被った部分に関しても一部に自然流路や井戸等の下部部分が残っていることが想定されたため、調査を実施することになった。遺構面が残存している箇所及び搅乱を被った範囲を丁寧に精査した結果、調査範囲は不整な多角形を呈し、調査面積は約1010m²に及んだ。

（1）第1面（図13～18・図版1）

調査区の南東隅部分に遺存した第1層である黄褐色系のシルト混細～粗砂を掘削して検出したにぶい黄橙色細～中砂の上面を第1面とした。第1面は南西側が標高T.P.+9.2m前後、北東・北西側が標高T.P.+9.0m前後、南東側が標高T.P.+8.9m前後となっており、西から東へ緩やかに下がる地形となっている。検出した遺構には井戸や土坑、小穴がある。また、当面では調査範囲の中央部から南東に開く隅丸方形状の浅い段がみられた。

3 土坑（図 15-3～9・図版 13）

調査区のほぼ中央で検出した平面長楕円形を呈する土坑。長軸 0.85 m、短軸 0.6 m、深さ 0.5 m を測る。断面形は皿状を呈し、埋土はにぶい黄橙色細～中砂である。

出土遺物には瓦器椀、青磁碗、瓦質土器甕・羽釜、平瓦等がある。図 15-3 は和泉型瓦器椀である。外面にユビオサエの痕跡を明瞭に残す。和泉型 IV-2・3 期（13世紀後半から 14世紀初頭）の所産。4・5 は青磁碗。5 の内面見込みは蛇の目釉剥ぎとなっている。高台は削り出し高台で、露胎である。6 は瓦質土器甕である。短く折れ曲がる口縁部をもつ。15世紀中頃～後半の所産であろう。7・8 は瓦質土器羽釜。口縁外面には浅い凹線が数条廻る。口縁端面は四線状に浅く窪む。15世紀中頃～後半の所産であろう。9 はやや肌理の粗い砥石である。3 面に擦痕がみられる。中砥であろうか。出土遺物には古い時期の資料もみられるが、概ね 15世紀中頃～後半階にまとまる。

3 土坑周辺には似たような規模や形状を示す土坑が複数みられた。これらの土坑からの出土遺物は少なく時期を決し難いが、埋土等の状況から 3 土坑と同時期に掘削されたものと考えられる。

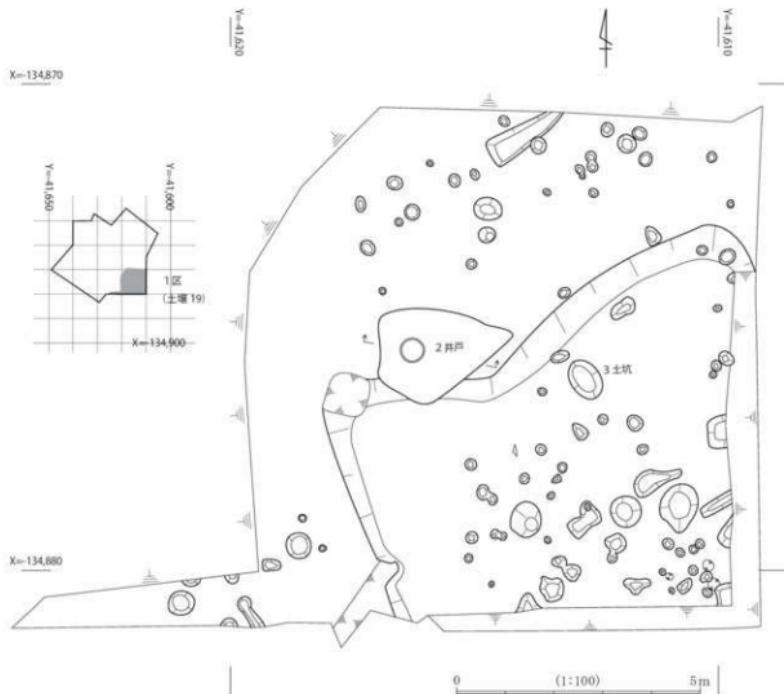


図 13 明和池遺跡 1 区 第 1 面 平面図

これらの土坑群の性格は詳らかに出来なかったが、図7に示した東壁南側の断面で第2層上面（第2面）から切り込む柱穴状の遺構が多数みられることから、土坑群も柱穴であった可能性が高いと想定される。

2井戸(図14・14-1・2・15-10~22・16-23~29・17-30~35・18-36・37・図版1・13・15)

調査区のほぼ中央で検出した平面不整三角形の掘方をもつ井戸。長軸2.6m、短軸2.1m、検出面から

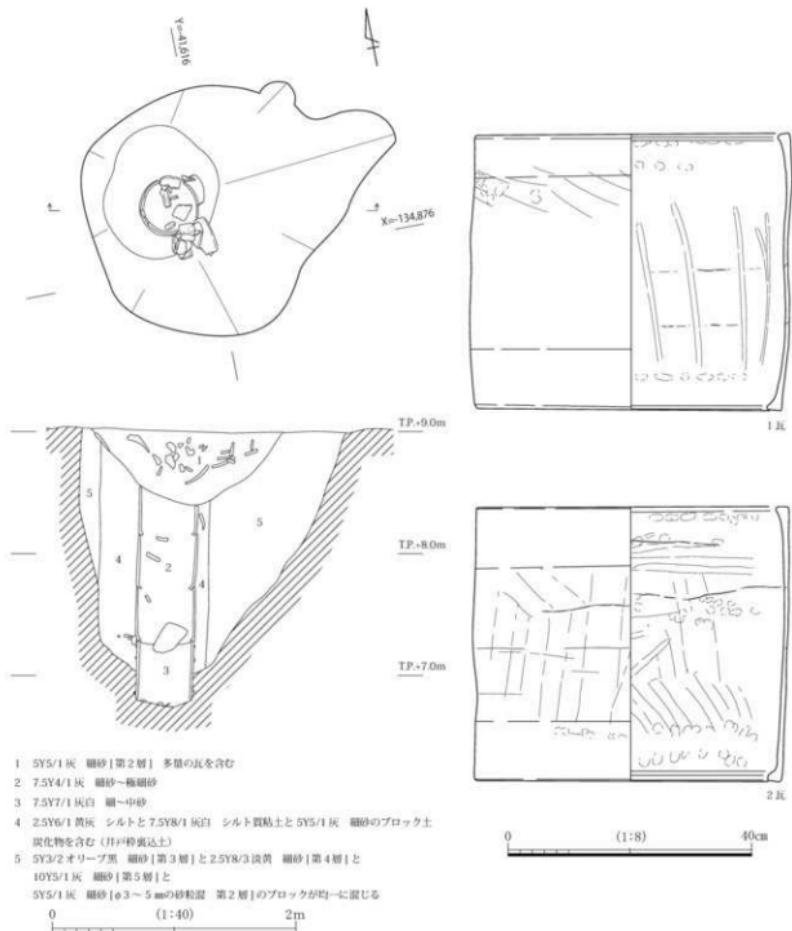


図14 第1面 2井戸平・断面図及び瓦質井戸枠

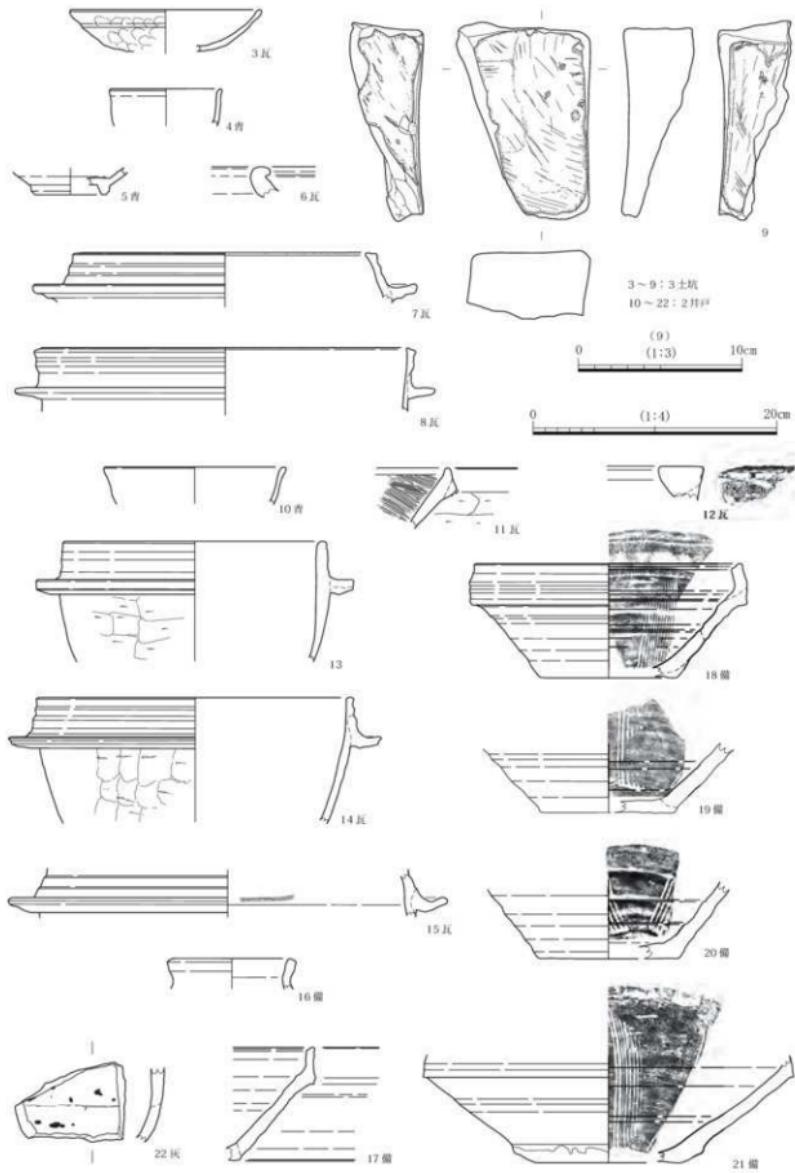


図 15 第1面 遺構出土遺物 (1)

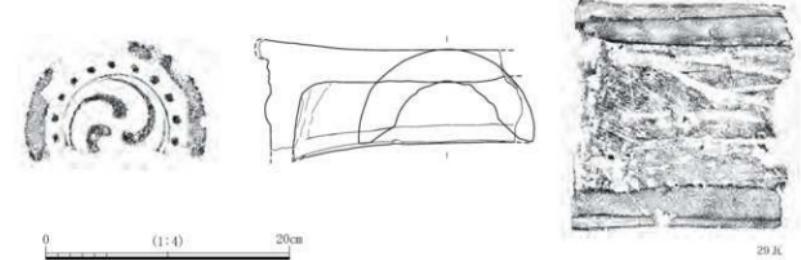
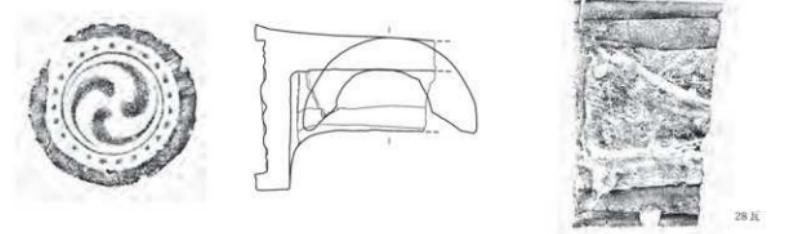
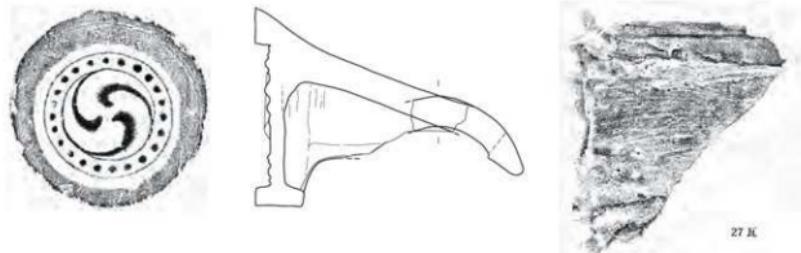
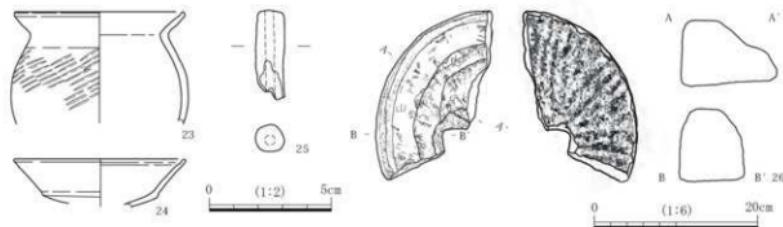


図16 第1面 遺構出土遺物（2）

の深さ 2.3 m を測り、断面形は U 字形を呈する。掘方中央部よりも西側に寄った位置に瓦質井戸枠（図 14-1・2）が設置される。井戸は旧流路（40 流路）上に掘削されたものである。

井戸枠内埋土は大きく 2 枚に分かれ、上層が灰色極細砂・細砂、下層が灰白色細～中砂である。ともに瓦を多く包含する。掘方裏込め土は大きく 2 種のブロック土を使用している。井戸枠周囲にはシルトやシルト質粘土を基調としたブロック土を、その外側には砂を基調としたもので埋めている。

瓦質井戸枠は調査時において 3 段が残存していた。井戸検出時に多量の瓦とともに瓦質井戸枠片も出土していることから、少なくとも 4 段の瓦質井戸枠を重ねて使用していたと推察される。なお、この井戸枠の下位には水溜めとしてスギ板材を用いた直径 0.5 m、高さ 0.5 m の底を抜いた桶を据えていた。また、底には一辺が 3～5 cm 程度の礫が敷かれていた。

井戸枠内からの出土遺物には多量の瓦（コンテナ 16 箱分）や陶磁器があり、掘方裏込め土からは弥生土器～庄内式土器なども出土している。

図 14-1・2 は瓦質井戸枠。ともに口縁部径が約 51 cm、底部径が約 49 cm、高さが約 45 cm を測り、やや尻すぼみの形状を呈する。重ねて使用することを前提に作成されているためか、口縁部・底部とともに内側に肥厚させている。内外面とも強いナデ調整を施しており、粘土組接合部を中心にユビオサエの痕跡が顕著にみられる。瓦質井戸枠は松原市所在の大和川今池遺跡や高石市所在の伽羅橋遺跡などの大阪府南部地域で検出される例が多く、北摂地域での使用例は極めて珍しい。

図 15-10 は青磁碗。11 は瓦質土器捏鉢。口縁部は上方に拡張し、断面形は鈍い三角形状を呈する。口縁端部は丸くおさめる。内面は細かなハケメを、外面はヘラケズリを施す。15 世紀前半頃の所産か。12 は瓦質土器火鉢。平面方形もしくは長方形を呈する。口縁部内面を肥厚させる。外面にはスタンプ文が押印される。13 は土師器羽釜。口縁部は直線的に立ち上がり、外面には浅い四線が廻る。短い鈎が水平に延びる。鈎以下の体部外面には煤が付着する。14・15 は瓦質土器羽釜である。14 は口縁部がやや内湾しながら立ち上がり、端部は丸くおさめる。口縁部外面には四線が廻る。鈎以下の体部外面及び口縁部内面に煤が付着する。15 世紀中頃～後半の所産。

16～21 は備前焼である。16 は壺。口縁部は短く外反し、端部は平坦で外傾する。口縁部内外面に自然釉が付着する。17～21 は擂鉢。17・18 は口縁部を上方に拡張する。口縁端面は凹線状に窪む。口縁部外面にはあまり明瞭ではないものの四線が廻る。どちらも内面には櫛描きの摺目が放射状に施される。概ね 16 世紀前半頃（乗岡編年中世 6 期 a 段階）の資料であろう。22 は灰釉陶器壺か。外面は全面に施釉され、内面には点在的にみられる。

図 16-23・24 は庄内式土器。23 は甕である。口縁端部はやや上方に摘み上げる。体部外面は右上がりのタタキが施される。口縁部外面以下に煤が付着する。24 は有稜高杯の杯部。2 井戸の下位には第 4 面で 24・25 土器群が存在することから、23・24 はこれらを構成していた土器であった可能性が高い。25 は管状土錘。残存長 3.7 cm、径 1.2 cm を測る。孔径は 0.4 cm、重量は 5.1 g である。26 は花崗岩製石臼。8 分画挽き臼の上臼である。

27 は巴文雁振瓦である。巴は右巻きで、巴頭は接する位に近い。珠文は 23 珠みられる。丸瓦部凹面は布目をナデ消し、コビキ A の痕跡がみられる。凸面は幅約 1.2 cm の長軸方向のナデを施し、面取り状になる。28 は巴文軒丸瓦。巴は左巻きで、巴頭は接する位に近い。珠文は 23 珠みられる。丸瓦部凹面には布目が残り、コビキ A の痕跡がみられる。凸面は幅約 0.8 cm の長軸方向のナデを施し、面取り状になる。29 は巴文軒丸瓦。巴は左巻きで、巴頭は離れ気味である。丸瓦部凹面には布目が残り、コ



図17 第1面 遺構出土遺物（3）

ビキ A の痕跡がみられる。凸面は幅 1 ~ 1.3 cm の長軸方向のナデを施し、面取り状になる。

図 17 ~ 30 ~ 33 は軒平瓦、34・35 は丸瓦である。30 は唐草文軒平瓦。31 は水波文軒平瓦。32・33 は宝珠唐草文軒平瓦。概ね、30・31 は 13 ~ 14 世紀代、32・33 は 15 世紀代の所産であろうか。

34 は凸面を幅 1.5 cm 程度の長軸方向のナデを施し、面取り状になる。四面は布目が残りコビキ A の痕跡がみられる。また、凹面玉縁際に緩やかなループ状の吊り紐痕（B タイプ）がみられる。35 は玉縁がないタイプ。凸面を幅 1.5 cm 程度の長軸方向のナデを施し、面取り状になる。四面は布目が残り、コビキ A の痕跡がみられる。凹面の狭端寄りにややループのきつい吊り紐痕（E-1 タイプか）がみられる。

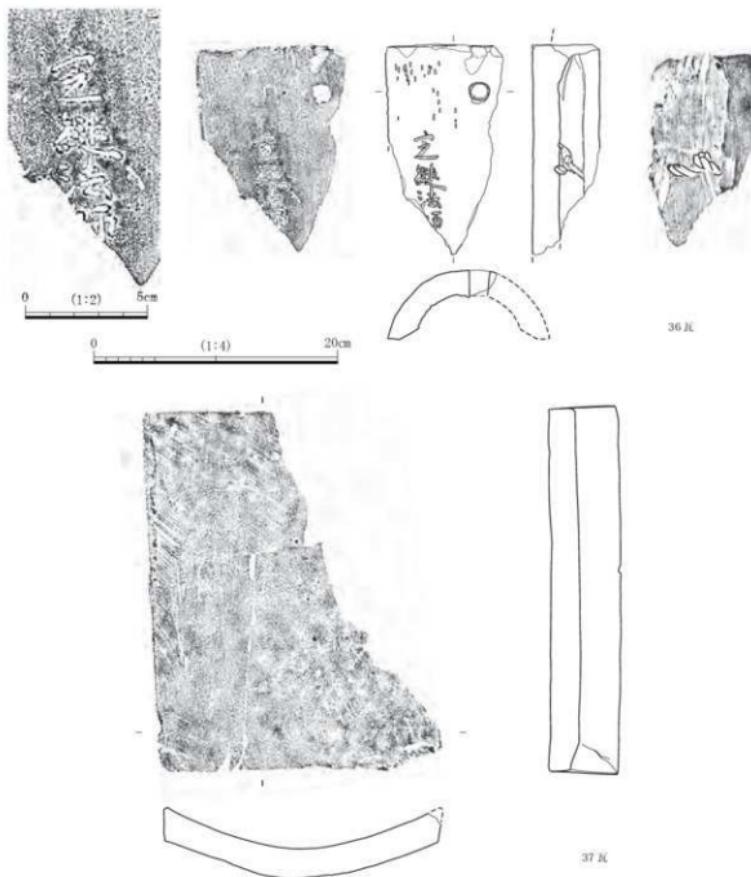


図 18 第 1 面 遺構出土遺物 (4)

図 18 - 36 は丸瓦である。玉縁は欠損。凸面に縄目タタキの痕跡を部分的に残す。凸面側から穿孔した直径 1.6 cm の釘穴をもつ。また、長軸ラインよりもやや左外側に「芝縫（定縫）法□（師）」と釘状の工具で丁寧に線刻された銘がある。記銘瓦はこれ 1 点であるため詳細は明らかに出来ないが、法師とあることから寺院との関連が想起される。瓦を寄贈した人物であろうか。37 は平瓦である謎。凸面は縄目タタキのちナデを施す。両面に離れ砂がみられる。

瓦類にやや古い資料がみられるが、出土遺物からみれば 2 井戸は、概ね 15 世紀～16 世紀に使用されていたものと思われる。

(3) 第 2 面 (図 19～21・図版 2)

調査区の南東隅部分に遺存した第 2 層であるにぶい黄橙色細～中砂及び第 3 層の褐灰色中～粗砂混シルトを掘削して検出したにぶい黄橙・灰黄褐色シルト～細礫の上面を第 2 面とした。第 2 面は南西側が標高 T.P. + 9.1 m 前後、北東・北西・南東側が T.P. + 標高 8.8 m 前後となっており、西から東へ緩やかに下がる地形となっている。検出した遺構には井戸や土坑、小穴、鋤溝がある。

鋤溝

調査区の南端で集中して検出した。N - 20° - E に軸をとるものと、それにほぼ直交する N - 60° - W に軸をもつものである。いずれも幅 0.3 m 前後で、断面形は浅い皿状を呈する。出土遺物には小片となった土師器や須恵器甕がある。

4 土坑 (図 19・21-46)

調査区の南西隅で検出した平面不定形の土坑。長軸 1.4 m、短軸 1.3 m、深さ 0.3 m を測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は 1 枚で灰色細砂が堆積する。出土遺物には須恵器甕や土師器等がある。いずれも小片のため時期を決し難い。図 21-46 は縁辺部や稜線上に顕著な細かなツブレが認められ、剥離面の風化が進んでいないことから、古代のサヌカイト製火打ち石と思われる。重量は 15.1 g である。

14 土坑 (図 19・21-40)

調査区中央よりやや北東側で検出した平面不定形の土坑。長軸 1.2 m、短軸 0.9 m、深さ 0.4 m を測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は 2 枚に分かれる。上層は暗灰黄色細砂とシルトのブロック上、下層は黄灰色細砂である。出土遺物には土師器、須恵器杯蓋等がある。図 21-40 は天井部がやや厚めで、稜が退化傾向にある。口縁部内面にみられる段も退化気味である。5 世紀末～6 世紀初頭 (TK47 型式) か。

16 土坑 (図 19・21-45・図版 2・16)

調査区東側中央で検出した平面椭円形の土坑。長軸 0.6 m、短軸 0.35 m、深さ 0.2 m を測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は 1 枚で黄灰色細砂である。図 21-45 の土師器杯 A が土坑内の南よりの位置で立てられるように埋められていた。8 世紀前半～中頃 (平城 II ～ III 期) の所産であろう。

19 井戸 (図 20・21-38・39・41～44・図版 3・16)

調査区の北西隅で検出した大型の井戸。井戸の北西側半分は擾乱によって削平されているが、概ね平

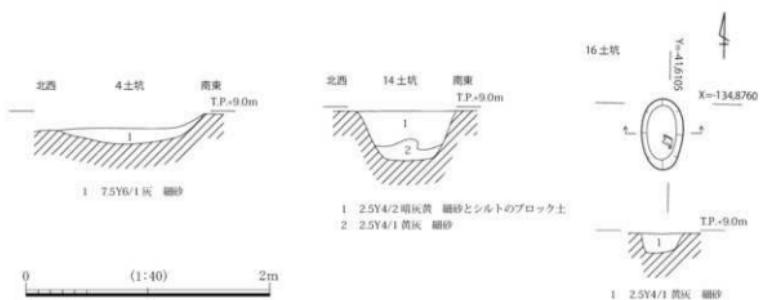
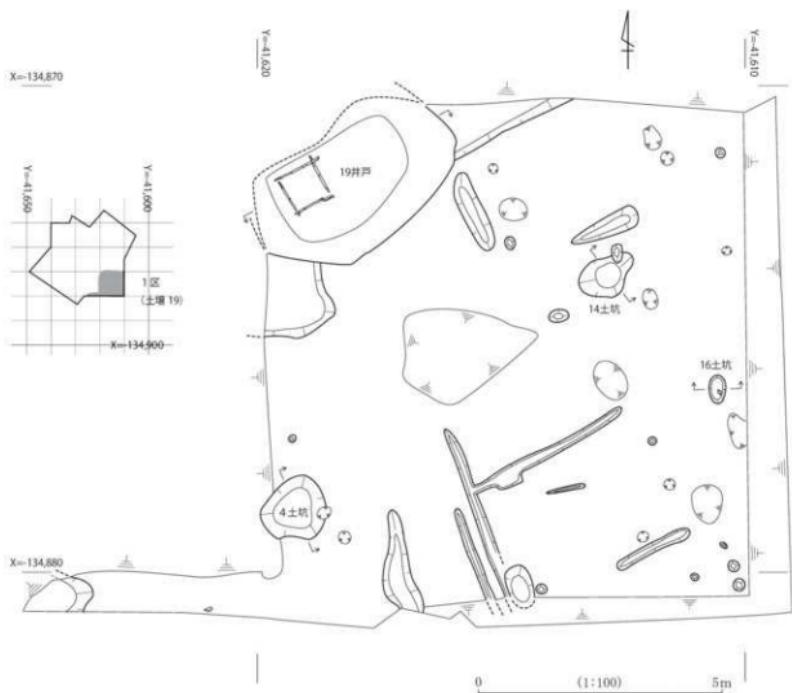


図 19 明和池遺跡 1区 第2面 平面図及び土坑平・断面図

面積円形を呈する掘方をもち、掘方の北西隅にほぼ接するように井戸枠を設置している。旧流路（40流路）上に掘削されたものである。

掘方は長軸が3.9 m、短軸が残存長で2.6 mを測り、深さは検出面から1.2 mを測る。掘方は北東側で二段掘りとなっている。井戸枠は長さ1.2 mのブナ科の板材を組み合わせて構築している。下2段分

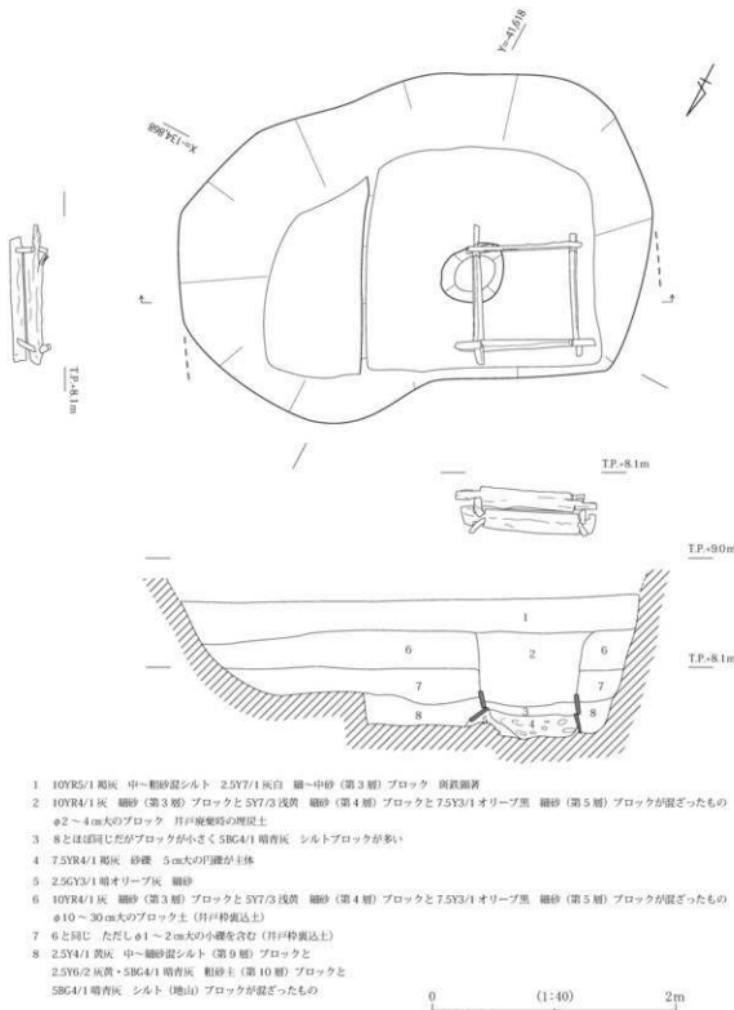


図20 第2面 19 井戸平・断面図

が遺存していた。断面の観察から井戸枠の上部は井戸廃棄段階で抜き取られたようで、抜き取ったあとにブロック土が充填されている。井戸枠内最下層には、直径5cmの大の礫を主体とした砂礫が堆積している。井戸枠裏込め土には第4～10層由来のブロック土を充填している。

出土遺物には土師器や須恵器杯身・杯蓋・甕・高杯等、弥生後期土器～庄内式土器がみられる。弥生後期土器～庄内式土器は下層にはしる40流路に伴う土器であった可能性が高い。図21～38は土師器皿または杯、39は土師器杯Aである。8世紀中頃～後半(平城IV～VI期)の所産であろうか。41は須恵器杯蓋。稜や段は比較的鋭さを残している。6世紀前半(MT15～TK10型式)か。42・43は須恵器杯身。短い受け部が水平に延び、口縁部が内湾しながら立ち上がる。6世紀後半～7世紀前半(TK43型式)の所産である。44は須恵器高杯脚部。三角形の透かし孔が2箇所に残る。5世紀末～6世紀初頭(TK47型式)か。図化出来た出土遺物は総体的に古い時期のものが多いが、39の存在から井戸が使用された時期は8世紀中頃～後半であったと想定される。

(3) 第3面

調査区の南東隅部分に遺存した第4層であるにぶい黄橙・灰黄褐色シルト～細礫を掘削して検出した灰黄褐色系細～中砂混シルトの上面を第3面とした。第3面は標高T.P.+8.7m前後でほぼ平坦な地形となっている。あまり明瞭な遺構が確認出来なかつたが、溝や不定形な土坑を検出した。不定形土坑からは小片となった須恵器が少量出土しているものの、時期を決し難い。

(4) 第4面(図22～26・図版4)

調査区の南東隅部分に遺存した第5層である灰黄褐色系細～中砂混シルト及び第6層のにぶい黄橙シルト～細砂・灰白色細砂を掘削して検出した黒褐色シルト混細～粗砂の上面を第4面とした。第4面の南西側は第6層をもたらした自然流路(22流路)が北西から南東にはしる。こうした地形を反映して調査区の北東側がやや高く標高T.P.+8.6m前後を測り、南西へ緩やかに下がる地形となっている。検出した遺構には自然流路や土器群がある。

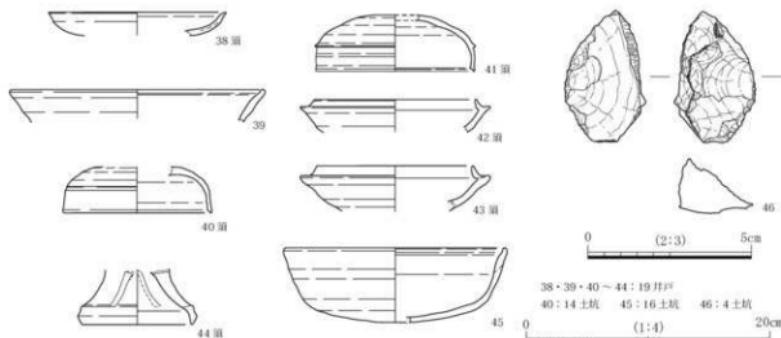


図21 第2面 遺構出土遺物

22 流路（図 24 - 47 ~ 58・図版 20）

調査区の南西側で検出した北西から南東にはしる自然流路である。流路西肩は大規模な搅乱によって削平を被っており、平面では確認することが出来なかったが、流路東肩を検出することが出来た。失われた西肩は、図10で示した南壁西側の断面観察によってその位置をおおよそ把握することが可能であった。その結果、幅約18mの流路を復元することが出来る。22流路は第5面で検出した27流路とほぼ同じ位置を流れている。流路内にはにぶい黄橙シルト～細砂・灰白色細砂が堆積している。流路内からは弥生後期土器～庄内式土器の出土がみられた。

図24-47~51は甕である。47は庄内形甕。口縁端部を上方に摘み上げる。48・49は受け口状口縁部をもつ甕である。48は口縁部を大きく外反させる。49は直立した口縁部で、口縁端面には浅い沈線が廻る。ともに近江系の甕であろう。50は球状の胴部で最大径は体部上方に位置する。口縁部は大きく外反し、端部は尖り氣味におさめる。体部外面は細かなハケメを施す。庄内形甕。51は平底の甕底部。52是有孔鉢。孔は外側から穿孔されたもの。外面には右上がりのタタキが施される。内面は

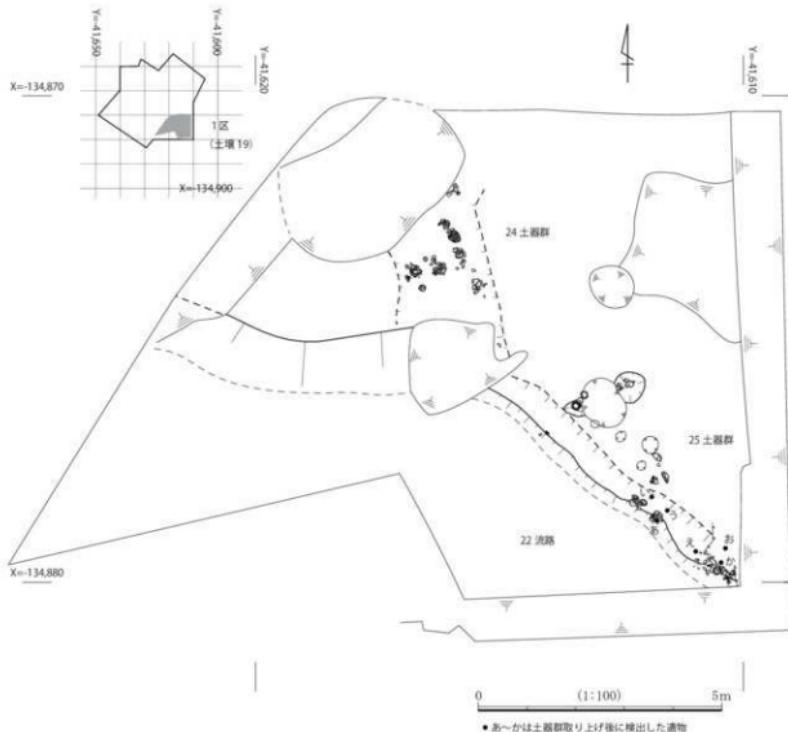


図22 明和池遺跡 1区 第4面 平面図

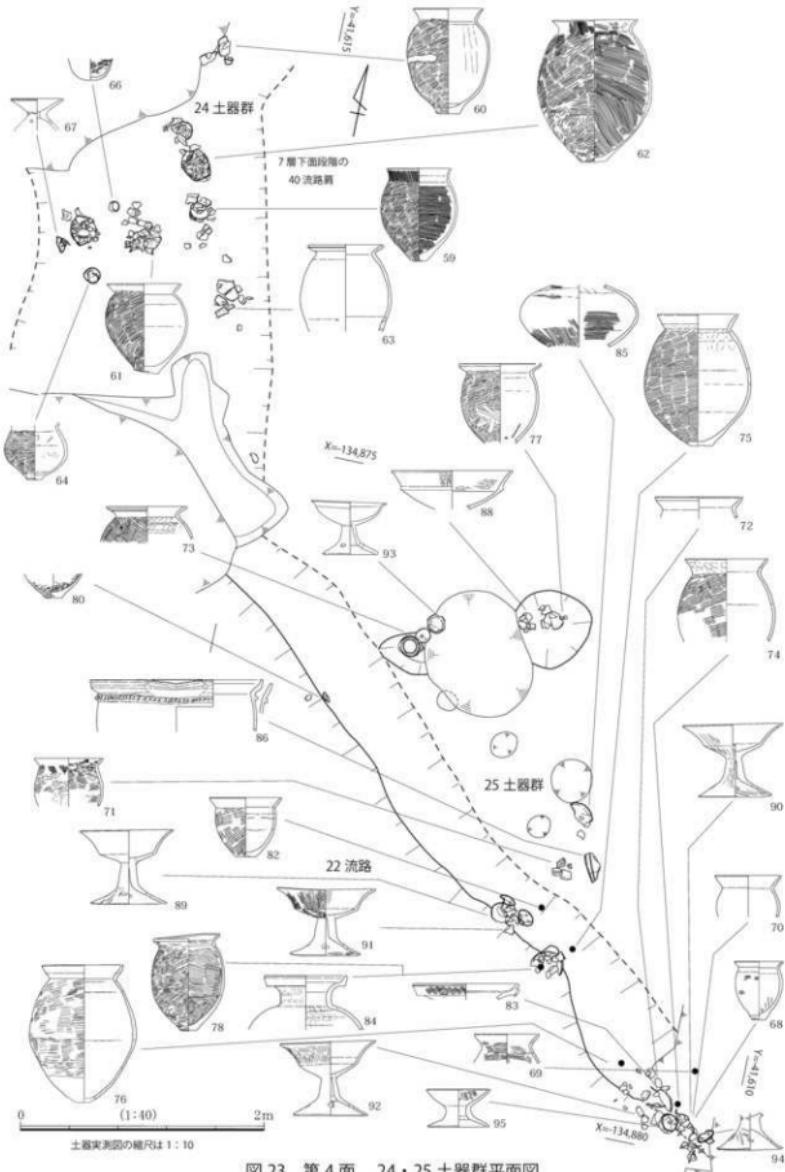


図 23 第4面 24・25 土器群平面図

ハケメで、底部付近にはクモの巣状ハケメがみられる。53～56は高杯である。53は有稜系高杯の杯部。内外面とも丁寧な細かなヘラミガキを施す。54は中空の高杯脚部。脚裾部にはタテ方向のヘラミガキが施される。55・56は中実の高杯脚部である。57は小型鉢。平底で、内面には口縁部端部からやや下がった位置に段をもつ。内外面とも磨滅著しく、調整不明。58はミニチュアの長頸壺か。扁球形の体部から斜め上方に延びる頸部をもつ。

24 土器群（図 23・24－59～67・巻頭図版・図版 4・16・17）

調査区のほぼ中央、22 流路の東肩付近で検出した。24 土器群は下位面に存在する 40 流路の埋没後に流路直上に置かれたものである。東西約 2 m・南北約 2.5 m の範囲で庄内式土器の甕を主体に約 9 個体の土器を確認した。24 土器群の北側及び南側は上位面で掘削された 2 井戸や 19 井戸によって搅乱を受けているため、詳らかではないが井戸の部分にも土器が置かれていた可能性が高い。

図 24－59～65 は V 様式系の甕である。59～62 は最大径を胴部ほぼ中位に有する。外面には右上がりのタタキが施される。63 は口縁部外面を肥厚させる。また体部下半には外面から穿孔された直径 0.5 cm の孔が 1 箇所みられる。64 は扁球形の胴部をもつ。65 は甕底部。外面には右上がりのタタキが施される。66 は鉢である。内面は細かなハケメがみられる。67 は小型器台。皿状の受け部をもち、筒部は非常に短い。脚部の上位には円形の透かし孔が穿たれる。

25 土器群（図 23・25－68～85・26－86～92・巻頭図版・図版 4・5・17～20）

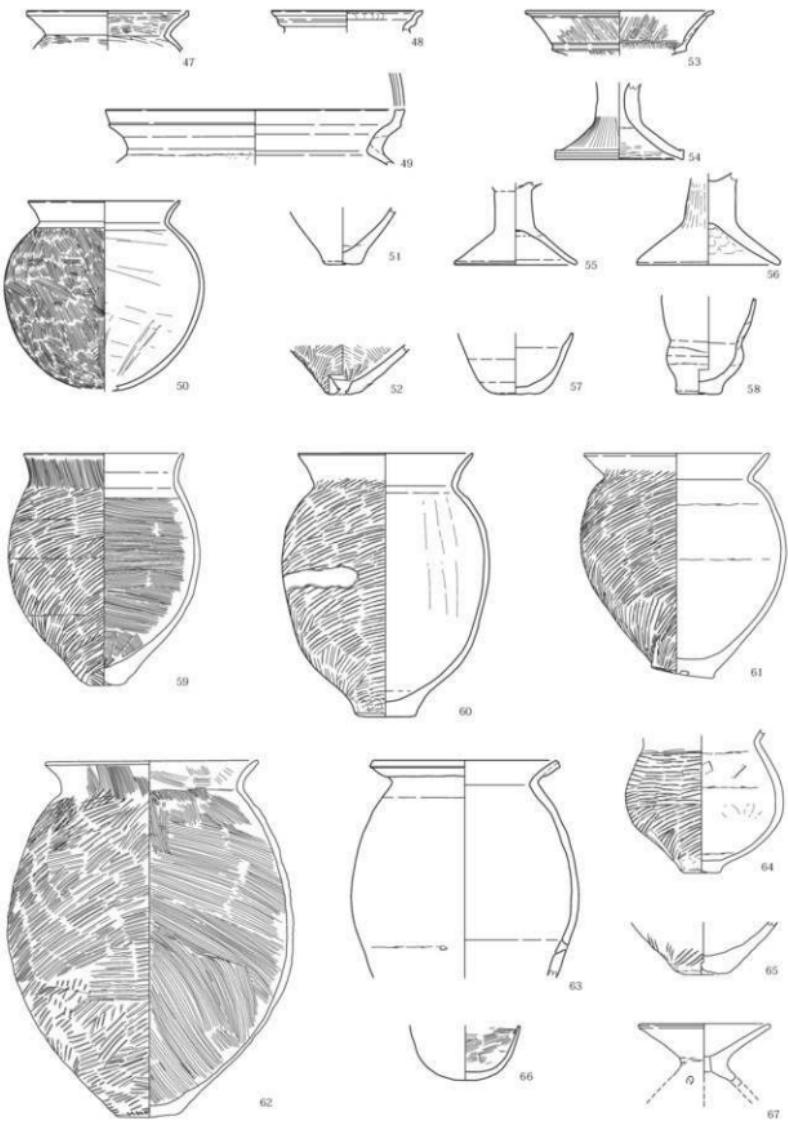
調査区の南東側、22 流路東肩沿いで検出した。南側は調査区外へと延びる。25 土器群は一見すると 22 流路東肩に沿って置かれたもののようにみえるが、25 土器群の下位にも 24 土器群の下位に存在した 40 流路の続きとみられる流路の東肩が確認されたことから、24 土器群と同様に下位の流路埋没後に置かれた土器群と看做すことが妥当であろう。

25 土器群には庄内式土器の甕を中心に約 30 点の土器があった。22 流路に削られている可能性が高く、本来はもう少し多くの土器が存在していたのかも知れない。甕が多くみられるのは 24 土器群と同様であるが、25 土器群には高杯が多く置かれているのが特徴的である。

図 25－68～76 は V 様式系の甕である。68 は小型の甕。磨滅が著しく調整が不明瞭であるが、外面にはタタキを、内面にはナデを施しているようである。69～71 は中型の甕。総じて磨滅が著しいが、外面には右上がりのタタキが、内面には粗いハケメが施されるようである。72～76 は大型の甕である。概ね最大径を胴部ほぼ中位にもつ。体部外面は右上がりのタタキを施す。但し、73 のみ、左上がりのタタキとなっている。77・78 は中型の甕。口縁端部を上方に摘み上げるように仕上げる。体部外面は右上がりのタタキを施す。79～81 は甕底部。79 は磨滅が著しく調整が不明であるが、他は体部外面に右上がりのタタキがみられる。82 は V 様式系の甕である。他の甕よりも体部が大きく開く割に、器高がそれ程高くないため寸詰まりの器形となる。

83 は二重口縁壺。口縁部外面には櫛状工具による 7 条の波状文が廻る。また口縁部外面下半には直径 1.6 cm の円形浮文が貼り付けられる。84 は広口壺。口縁部は上方に拡張し、下方へは僅かに垂下している。頸部外面には不明瞭ながら縦方向のヘラミガキがみえる。肩部内面には粘土紐接合痕が明瞭にみられ、接合痕を中心ユビオサエの痕跡が残る。85 は直口壺の体部か。内外面ともハケメを施す。

図 26－86 は片口鉢である。口縁部は直立し、受け口状になる。口縁部外面には凹線が 2 条廻る。



47～58：22 流路　59～67：24 土器群

0 (1:4) 20cm

図24 第4面 22流路・24土器群 出土遺物

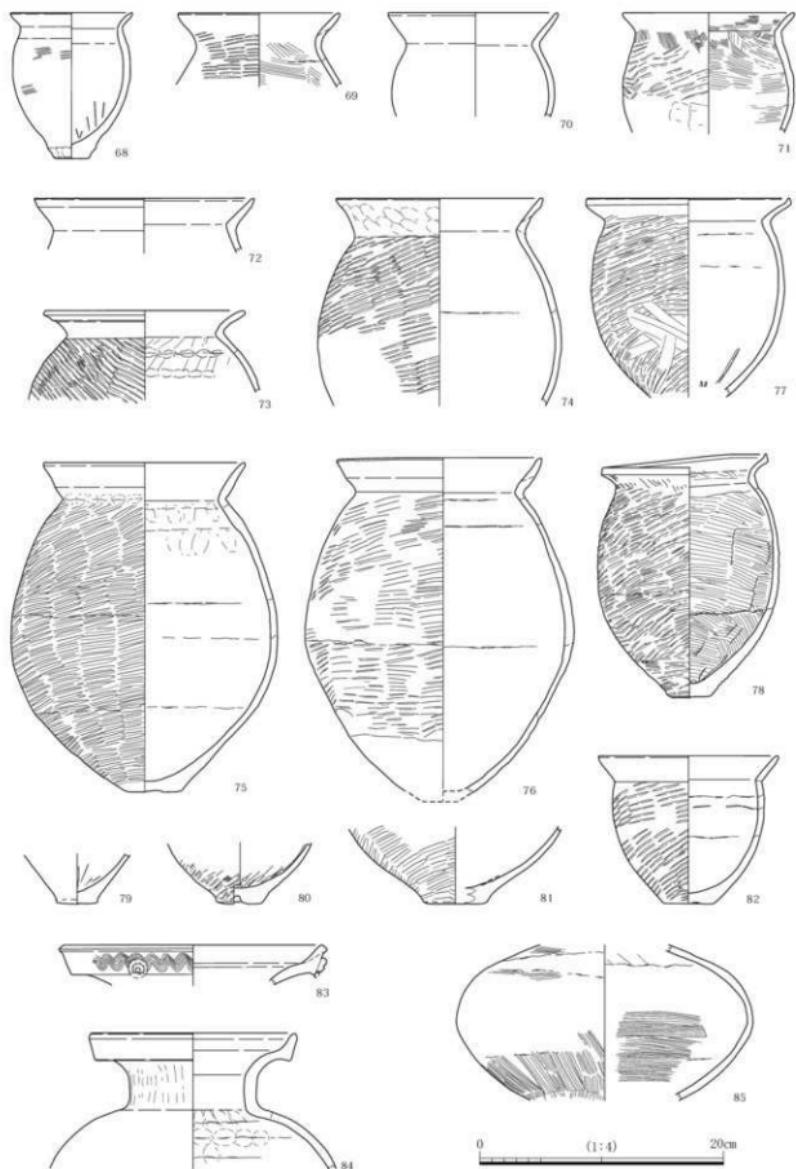


図25 第4面 25土器群出土遺物(1)

口縁端面には刻み目を入れる。頸部外面には断面三角形を呈する突帯が1条廻る。突带上には刻み目を施す。87は小型の鉢であろうか。器壁が厚い。体部外面中程に段がみられることを考えると有段高杯の脚裾部の可能性も想定される。88～94は高杯である。88～92は有稜系高杯。全体的に磨滅が進み、調整は不明瞭であるが、杯部外面や脚部外面には縱方向のヘラミガキが施されているようである。88は杯部が深く、外面中程に段状となった稜がみられる。89～91は杯部が低平化し、口縁部が大きく開き発達する。脚裾部には円形の透かし孔が4方向にみられる。92は88～91に比してやや杯部が深い。口縁部は大きく開き発達している。脚裾部には円形の透かし孔が4方向にみられる。93は楕円高杯である。口縁端部は大きく外反する。脚裾部には円形の透かし孔が3方向にみられる。磨滅が著しく調整は不明。94は中実の高杯脚部。脚裾部には円形の透かし孔が4方向にみられる。弥生後期後半か。95は小型器台。皿状の受け部をもつ。



図26 第4面 25土器群出土遺物（2）

(5) 第5面 (図27・図版5)

調査区の南東隅部分に遺存した第7層である黒褐色シルト混細～粗砂及び第8層である灰白色細砂を掘削して検出した黒褐色シルト混細砂の上面を第5面とした。但し、第8層は自然流路（27流路）の堆積層であり、完全に掘り上げると南壁面が崩落する危険が生じたため、一定程度の深さで掘削を停止した。第5面の南西側は第8層をもたらした自然流路（27流路）が北西から南東にはしる。こうした地形を反映して、調査区の北東側がやや高く標高はT.P.+8.55m前後を測り、南西へ緩やかに下がる地形となっている。検出した遺構には自然流路や不定形土坑、小穴がある。

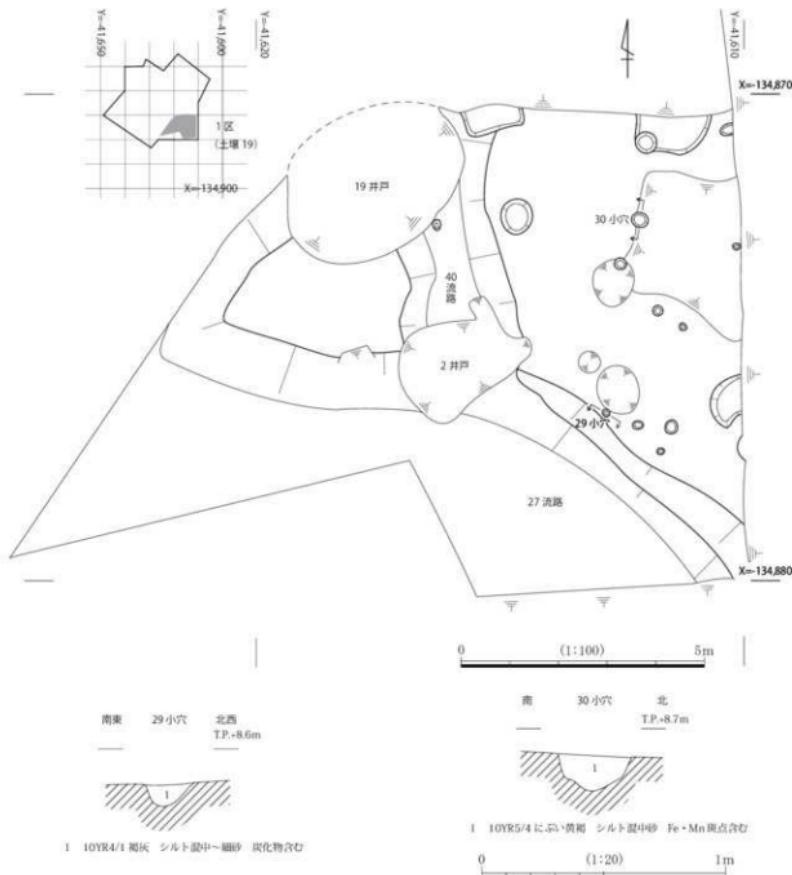


図27 明和池遺跡 1区 第5面 平面図及び遺構断面図

27 流路（図 30－96～111・図版 20・21）

調査区の南西側で検出した北西から南東にはする自然流路。流路西肩は大規模な擾乱によって削平を被っており、平面では確認することが出来なかったが、流路東肩を検出することが出来た。失われた西肩は、図 10 で示した南壁西側の断面観察によってその位置をおおよそ把握することが可能であった。その結果、幅約 18 m の流路を復元することが出来る。流路内には灰白色細～粗砂が堆積している。流路内からは弥生後期土器～庄内式土器の出土がみられた。出土遺物は第 6 面の 27 流路の項で記載する。

40 流路（図 29・31－112～129・図版 19・20）

調査区のはば中央部に位置し、上位面で検出した 24 土器群の直下に存在。検出長約 5 m、幅約 2 m、深さ約 0.3 m を測る。断面は皿状を呈する。埋土は大きく 3 枚に分かれ、上から灰白色中～粗砂、にぶい黄色細砂、灰白色シルトとなっている。上層の灰白色中～粗砂には比較的多くの弥生後期後半の土器が含まれていた。

40 流路の南側は上位面で検出した 2 井戸によって擾乱を受けているため、調査区南西側を流れる 27 流路との関係を当面では明確にし得なかったが、次の第 6 面調査時に複数の確認トレントを設けて断面観察を行なった結果、27 流路によって切られていた可能性が高いことが明らかとなった。

出土遺物に関しては第 6 面で記述する 40 流路の項で記載することとする。

29 小穴（図 27）

調査区中央やや南東寄りの 27 流路東肩で検出した小穴。直径約 0.2 m、深さ約 0.1 m で、断面形は U 字状を呈する。埋土は褐灰色シルト混細～中砂で、炭化物を含んでいる。遺物は出土しなかった。

30 小穴（図 27）

調査区北東側で検出した小穴。直径約 0.3 m、深さ約 0.15 m で断面形は逆凸字を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルト混中砂である。斑鉄やマンガン斑が顕著にみられた。遺物は出土していない。

当面で検出した他の遺構埋土も概ね褐灰色シルト系である。

（6）第 6 面（図 28～34・図版 5～7）

調査区の南東隅部分に遺存した第 9 層である黒褐色シルト混細砂を掘削して検出したにぶい黄褐色細～中砂混シルト・粘質シルト、明黄褐色シルト混細砂の上面を第 6 面とした。また、併せて、調査区北側及び西側に扯がる擾乱箇所〔地中障害部（基礎撤去部分）〕に関しては精査を行ない、自然流路の基底部や井戸、土坑を検出した。井戸は出土遺物から中世後半段階の所産であることが明白であるが、検出面である当面で記述しておく。

なお、遺構面の遺存状態が良かった調査区南東部において標高は T.P. + 8.5 m 前後である。

27 流路（図 30－96～111・図版 20・21）

調査区北側及び西側の擾乱部分を精査して流路基底部付近を検出した。流路はやや蛇行しながら概ね N-50°-W を軸に北西から南東にはする。確認出来た幅は流路北側の基底部付近で 6 m、南東部分で約 19 m である。X = -134,870 ~ 875 ライン付近の流路東側肩部では、不定形な抉りがみられた。

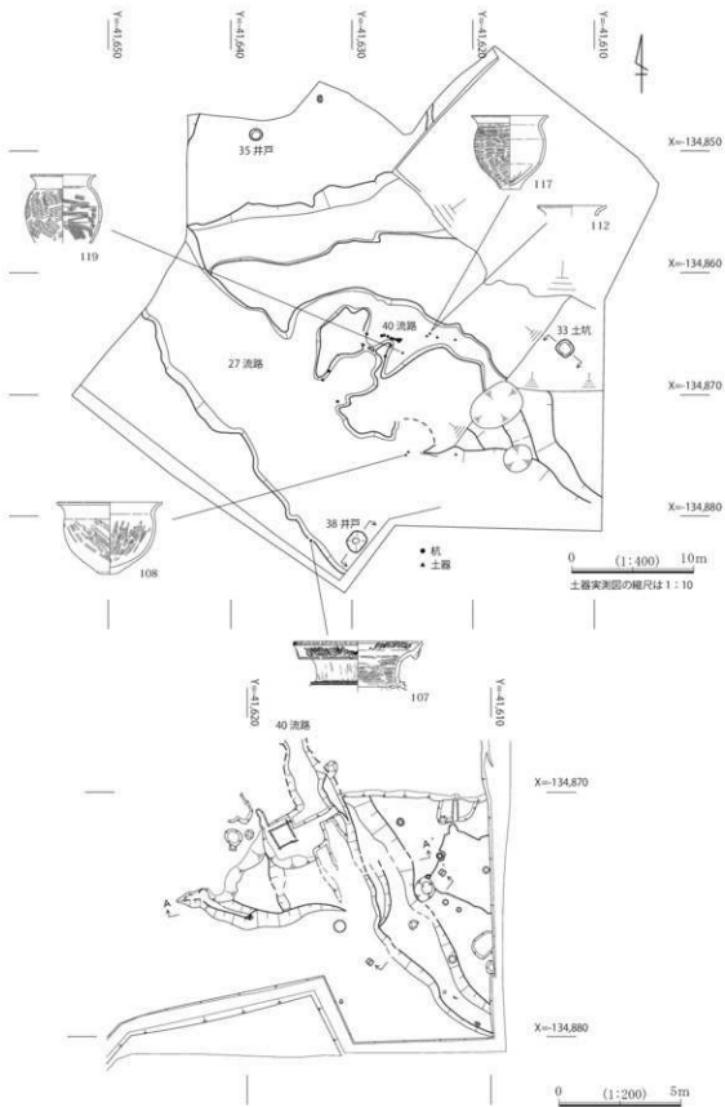
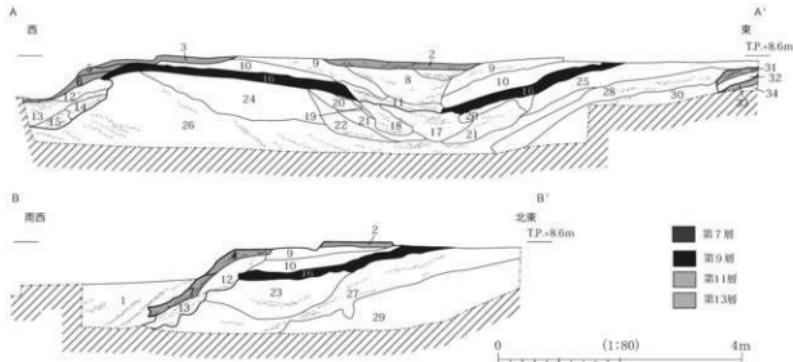


図 28 明和池遺跡 1区 第6面 平面図

破堤の痕跡と思われる。東側肩部付近では流路内に灰白色細～粗砂が堆積している。流路内からは弥生後期土器～庄内式土器が出土している。

図30～96は弥生前期土器壺である。如意形口縁で、口縁端面に刻み目を施す。磨滅が著しく調整の詳細は不明である。97は弥生前期土器壺の底部か。外面は細かな縦位のハケメを施す。98～102は壺。98は庄内形壺。口縁端部を上方に摘み上げるように仕上げる。口縁部内面にはハケメを施す。生駒西麓産の胎土。99～102は壺底部。総じて底部外面付近には右上がりのタタキが認められる。102の底部外面には粗痕がみられる。103～106は広口壺。103は口縁部が斜め上方に立ち上がり、やや受け口状になる。端部は外傾し、四角くおさめる。口縁部外面に2条の擬凹線が廻る。104・105の口縁部は外傾し、端面をもつ。105は口縁端部を上方に摘み上げるように仕上げる。106は口縁部端部を丸くおさめる。肩部内面を中心に幅1.5cm程度の粘土紐の痕跡を明瞭に残す。107は二重口縁壺。口縁部外面上端は外傾する面取り状となっており、竹管文が施されている。その下位には櫛描きによる11条の波状文が廻り、その上に直径1.5cmの円形浮文が貼り付けられる。口縁部内面には櫛描きによる9条



- 1 SY7/2 底白 シルト～中砂 売化物を帯状に多く含む ラミナあり
[22 流路埋土 第6層]
2 2.SY4/2 黄灰 黒 シルト混細～粗砂
3 2.SY3/2 黑褐 シルト混細～粗砂
4 2.SY5/2 黄灰 黒 シルト混細～粗砂
5 2.SY4/1 黄灰 シルト混細～粗砂
6 5SY3/1 黄灰 シルト混細～粗砂
7 5GY3/1 黄灰リープル シルト混シルト 下部に粗砂を多く含む 売化物を含む
[2～7第7層]
8 5Y6/1 底白 中～粗砂 ラミナあり 道物を多く含む
9 2.SY6/4 にら・黄 細砂 ラミナあり
10 2.SY7/1 底白 シルト
11 5Y6/1 底白 7/1 底白 シルト～細砂 ラミナあり
[8～11：40 流路埋土]
12 5Y7/1～7/2 底白 シルト～細砂 ラミナあり
13 5Y7/1～7/2 底白 細～粗砂 ラミナあり
14 5SY4/2 オリーブ 黒 シルト混細砂 ラミナあり
15 5Y6/1 底白 7/1 底白 細砂 ラミナあり
[12～15：第7层流路埋土 第8層]
16 7.SY3/1 オリーブ 黒 細砂
[第9層]
17 7.SYR5/2 底灰～4/1 底灰 シルト 植物遺体多い
18 7.SY4/1 底 細砂～シルト
- 19 5Y7/2 底白 細砂
20 7.SY3/1 オリーブ 黒 シルト～細砂 ラミナあり
21 7.SY4/1 底 細砂～粗砂 ラミナあり
22 2.SY6/6 黄灰～8/1 底白 シルト～細砂
23 10YR4/1 底灰 シルト～中砂 ラミナあり 売化物・植物遺体を含む
24 2.SY7/6 明黄色 細砂混粘質シルト ラミナ不明瞭
25 10YR7/4 にら・黄 細～中砂 ラミナ不明瞭
26 2.SY7/6 明黄色～7/3 浅黄 シルト～粗砂 ラミナあり 植物遺体を含む
27 10YR7/4 にら・黄 細～中砂 ラミナあり
28 2.SY7/2 底灰～7/1 底白 シルト～細砂
29 2.SY7/2 底灰～7/1 底白 シルト～細砂 ラミナ不明瞭
30 2.SY7/2 底灰～7/3 浅黄 シルト～中砂
[17～30：流路埋土]
31 7.SY3/2 黑褐 粗砂混細～中砂 細砂を含む
[第11層]
32 7.SYR5/1 底灰 中～細砂
[第12層]
33 10YR3/4 明黄色 粗砂混細～中砂 非常に固くしまる
[第13層]
34 10YR6/6 明黄色 粗砂混シルト
[第14層]

図29 第5・6面 40 流路断面図

の波状文が廻る。頸部外面には刻み目が施された突帯が1条廻る。108は鉢。内湾しながら立ち上がる球形の胴部をもち、口縁部は外反する。内外面ともヘラミガキが施される。109是有孔鉢。孔は外側から穿孔されたもの。110は有段高杯であろうか。杯部上半部に段がみられ、これを境に口縁部が大きく外反する。口縁端部を上方に摘み上げるように仕上げる。中実の脚部をもつ。111は椀形高杯。口縁端部は丸くおさめる。中実の脚部をもつ。

40 流路 (図 29・31 - 112 ~ 129・図版 19・20)

遺構面の遺存状態が良かった調査区南東部において、幅約 5.5 m の流路が復元出来る。埋土は大きく3枚に分かれる。上層が灰褐色系シルト～オリーブ黒色シルト～細砂で、植物遺体や炭化物を多く含ん



図 30 第 5・6 面 27 流路出土遺物

でいる。中層が灰色～黄灰色シルト～粗砂。下層が明黄褐色系シルト～中砂である。

図29で示した断面観察の結果、40流路は第5面段階で27流路により切られていたことが明らかになった。

調査区北側の搅乱精査部では、南東部検出の流路に繋がる流路の基底部を検出した。この部分では流路は緩やかに弧状を描いており、 $X = -134.865$ ・ $Y = -41.635$ 付近で27流路に切られる。

40流路西肩の $X = -134.865$ ・ $Y = -41.626 \sim 627$ 付近では多量の杭が護岸のために打ち込まれていた。この近辺は27流路で確認した破堤箇所に近接しており、地盤が脆かったものと考えられる。

なお、精査部の40流路内から弥生後期後半の土器が出土している。これらの土器が含まれているのは図29の8に相当する層準と思われる。

図31-112～124は甕。112・113は口縁端部に弱い端面をもつ。114は口縁端部をやや尖り気味におさめる。115・116は口縁端部をやや上方に摘み上げるように仕上げる。116の外面上には煤が付着する。117は中型の甕。やや丸味を帯びた体部で、最大径は体部中程にある。外面には底部付近以外に煤がみられる。118は直立気味の口縁部をもつ甕。119はやや長めの体部をもち、口縁部は弱く外反する。口縁端部は外傾する端面をもつ。120は球形の体部をもつ甕。121～124は甕底部。122～124の底部内面付近にはクモの巣状ハケメがみられる。125は二重口縁壺か。口縁部外面上端部は外傾する面取り状となる。126は小型の壺。下膨れの体部をもつ。内面にみられる粘土紐接合痕を中心的にユビオサエの痕跡を残す。

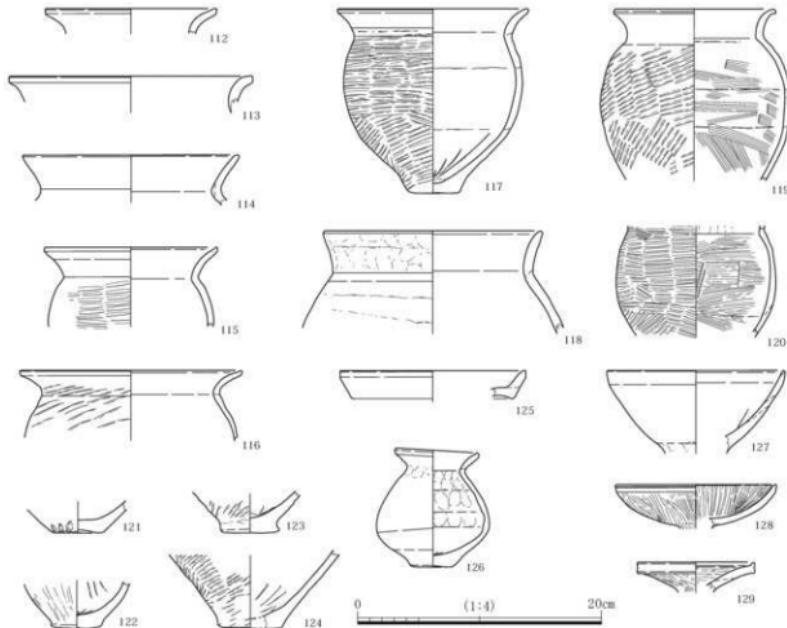


図31 第5・6面 40流路出土遺物

127は鉢と思われるが、楕円高杯の杯部の可能性も考えられる。口縁端部は尖り気味に仕上げる。128は楕円高杯の杯部。浅い杯部で、口縁端部は丸くおさめ、口縁部外面に細い沈線が1条廻る。129は内外面とも丁寧にヘラミガキが施されていることから、器台の受け部と考えた。口縁端部は上方に摘み上げるように仕上げる。

33 土坑 (図32)

調査区北側精査部分の東端で検出した平面正方形を呈する土坑。一边約1.25mを測る。検出面から約1.1mの深さの土坑南西側の壁際に幅約0.2mの段がある。検出面から約2m掘削したが、湧水が著

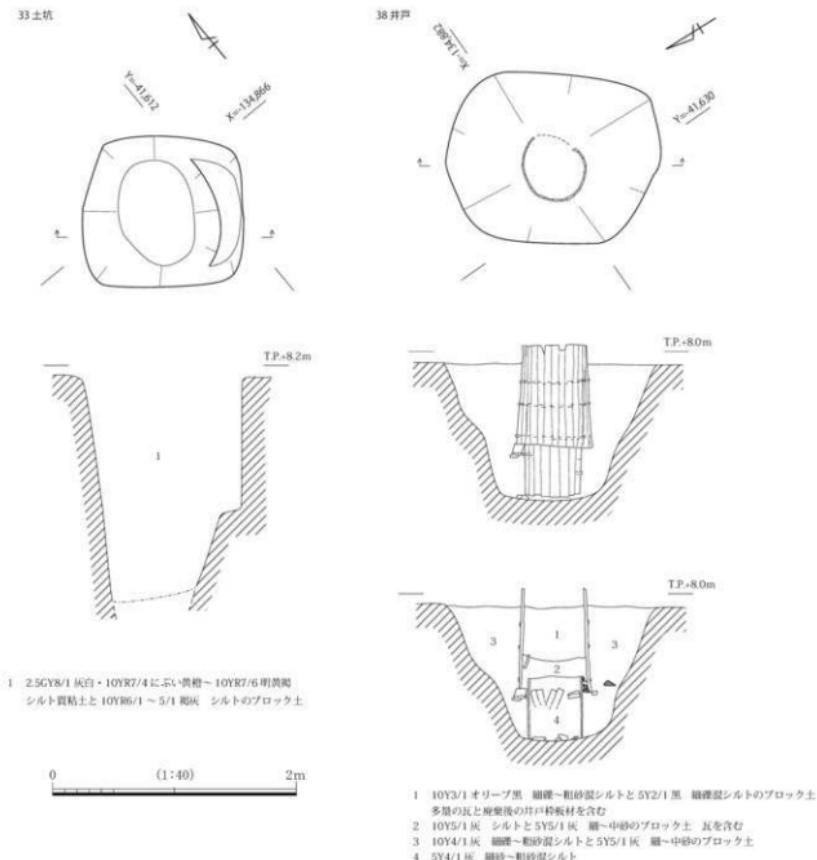


図32 第6面 33 土坑・38 井戸平・断・立面図

しく壁面の崩落が激しくなったため、完掘するには至らなかった。埋土は明黄褐色系シルト質粘土・灰白色シルト質粘土・褐色シルトのブロック土であった。

35 井戸 (図 33 - 130)

調査区北側精査部分の北端で検出した平面円形を呈する井戸。上部は擾乱によってかなり削平されていると考えられる。掘方は直径約 0.8 m で、検出面から約 1.6 m で井戸底に達する。掘方中央よりもやや西側に寄った位置に、直径約 0.55 m、高さ 0.5 m 前後のスギ板材を用いた桶を 2 段重ねて井戸枠とし、最下段には水溜めとして直径約 0.4 m、高さ約 0.5 m の桶を設置していた。

井戸枠内埋土はオリーブ黒色粘質シルトと灰色シルト質粘土のブロックである。井戸枠裏込め土は緑灰色シルトと灰色粘質シルトのブロック土である。出土遺物は僅かに土師器皿がみられた。図 33-130 は土師器皿である。外面にはユビオサエの痕跡を明瞭に残す。内面には油煙が付着。灯明皿として使用したのであろう。京 IX 期中～X 期中段階（15 世紀代）の所産と思われる。これが妥当であれば、第 1 面で検出した 2 井戸とほぼ同時期となり、35 井戸も第 1 面に帰属するものと言える。

38 井戸 (図 32・33 - 131 ~ 139・34 - 140 ~ 143・図版 14・15)

調査区西側精査部分の南端で検出した平面不整六角形を呈する井戸。上部は擾乱によってかなり削平されていると考えられる。旧流路（27 流路）上に掘削されたものである。

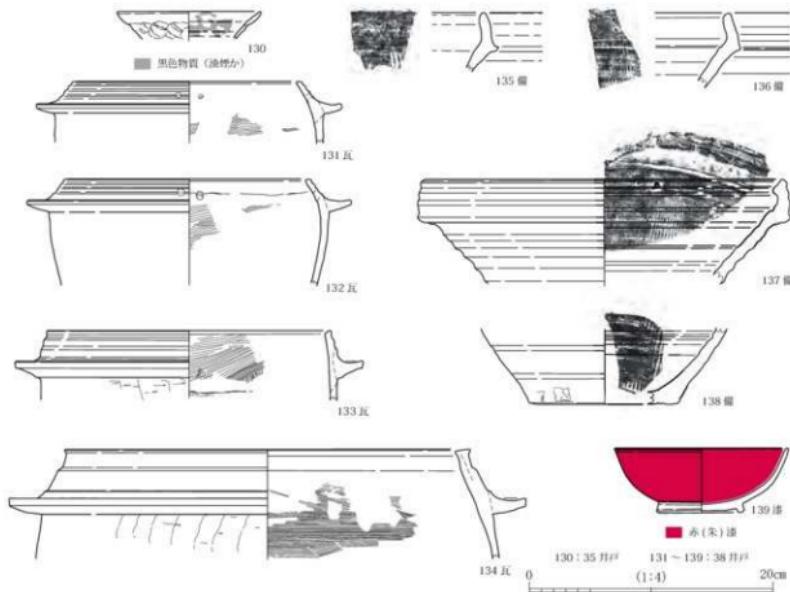


図 33 第 6 面 遺構出土遺物 (1)

掘方は長軸約 1.75 m、短軸約 1.35 m を測る。掘方は二段掘りとなっており、断面形は逆凸字状を呈する。井戸は検出面から約 1.1 m で井戸底に達する。掘方の中央に直径約 0.5 m、高さ 0.8 m 以上の桶を井戸枠として設置しており、現状で 1 段分を確認した。井戸枠の下には直径約 0.4 m、高さ約 0.5 m のスギ材の板を用いた桶を水溜めとして設置していた。

井戸枠・水溜め内埋土は大きく 3 枚に分かれる。上層は黒色系細礫混シルトのブロック土が堆積しており、廃棄後の井戸枠板材や多量の瓦を包含している。中層は灰色系シルトや細～中砂のブロック土で、上層に比して少ないものの瓦を包含している。下層は灰色細～粗砂混シルトで最下層部分には一辺が約 10 cm 程度の砾を入れていた。井戸枠裏込め土は灰色細礫～粗砂混シルトと灰色細～中砂のブロック土で

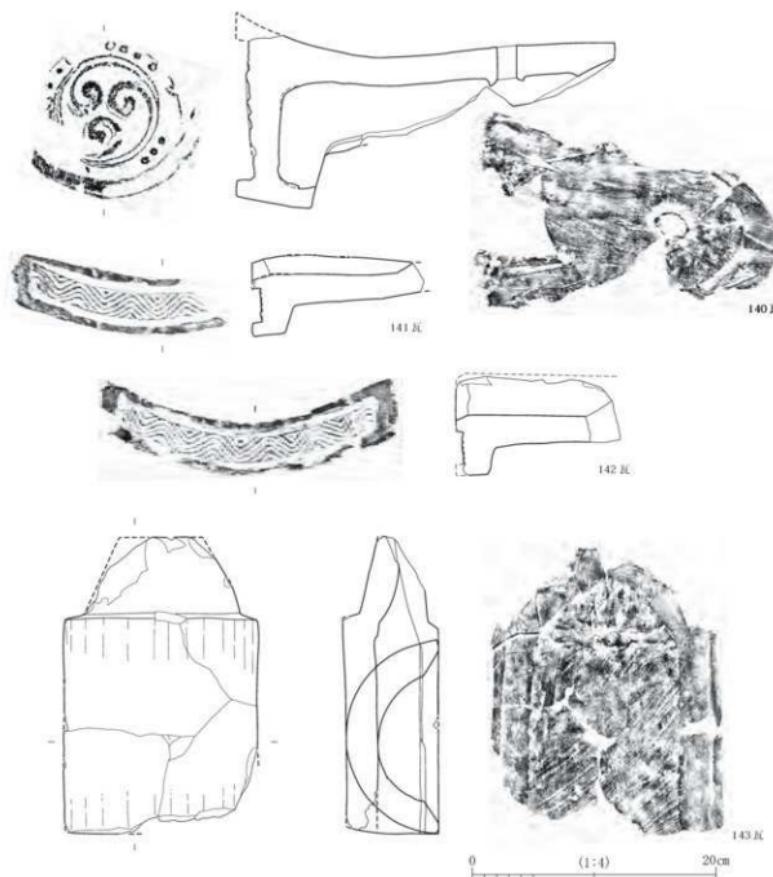


図 34 第 6 面 遺構出土遺物（2）

ある。

先述したように、出土遺物には多量の瓦類（コンテナ5箱分）と陶磁器がみられる。図33-131～134は瓦質土器羽釜である。131・132は口縁部が内湾し、端部は面をなし、水平に仕上げる。口縁部外面は凹線が廻り、円孔が穿たれる。鍔はほぼ水平に延びる。鍔以下の中部外面には煤が付着。14世紀中頃～15世紀中頃の所産であろう。133は直立する口縁部で端面は面をなして内傾する。口縁部外面には凹線が廻る。鍔は短く、やや斜め上方に延びる。15世紀代の所産であろうか。134の口縁部はやや内傾し、端部は面をなしてやや内傾する。口縁部外面に段が廻る。鍔は短く、ほぼ水平に延びる。15世紀後半～16世紀初頭の所産と思われる。

135～138は備前焼鉢である。135は口縁部を上方に拡張する。口縁部は内傾しながら立ち上がり、端部はやや尖り気味におさめる。また、端部は重ね焼きのため、剥離している。内面には櫛描きの摺目がみられる。15世紀後半（乗岡編年中世5期b段階）の所産。136は口縁部を上方に拡張する。口縁端面は内傾し、面取り状に仕上げる。口縁部外面にはあまり明瞭ではないものの凹線が廻る。内面には櫛描きの摺目がみられる。内面や口縁部外面には自然釉が付着する。概ね16世紀前半頃（乗岡編年中世6期a段階）の資料であろう。137は口縁部を上方に拡張。口縁端面は凹線状に窪む。口縁部外面には凹線が廻る。口縁端面の大半は重ね焼きのため剥離しており、口縁部外面下端には重ね焼きの痕跡（下に置かれていた鉢の剥離した口縁端面）が残る。内面には櫛描きの摺目が放射状に施される。16世紀前半頃（乗岡編年中世6期a段階）の所産であろう。

139は漆器椀である。木胎にはミズキを使用。木胎全体に黒漆を塗布し、その後、高台疊付け及び高台内以外に赤（朱）漆を塗布している。

図34-140～143は瓦類である。140は巴文雁振瓦である。巴は右巻きであるが、通常の巴文とは異なり巴頭はかなり巻き込み、頭が揃わない。範が悪いのか珠文がみられない箇所が存在し、現状で11珠が確認出来る。凸面は幅約1.5cmの長軸方向のナデを施し、面取り状になる。凸面側から穿孔された釘穴がみられる。丸瓦部凹面には布目がみられる。141・142は水波文軒平瓦。ともに瓦当及び凹面に離れ砂が残る。上外区には面取りが行なわれる。顎には横位のナデが施される。15世紀代の所産であろうか。143は丸瓦。凸面は幅1.5cm程度の長軸方向のナデを施し、面取り状になる。部分的に縋目タタキの痕跡が残る。凹面は布目が残りコビキAの痕跡がみられる。吊り紐痕は確認出来ない。

出土遺物はやや時期幅がみられるものの、15世紀後半～16世紀前半におさまる資料が主体を占めている。これらの資料は第1面で検出した2井戸とほぼ同時期となり、38井戸も第1面に帰属するものと言える。

なお、図7～10及び図29で示した断面において、当面以下にも黒色化の著しい2枚の土壤層が確認出来る。平面的な調査を実施してはいないが、断面観察から、これらの土壤層は東から西へ、或いは西から東へと下降するように堆積している。この土壤層の母材となった堆積層にはラミナの発達したシルトから砂層がみられることから、より古い流路が存在しているものと想定される。こうした地形条件が、上層の流路を形成する起因となったと解釈出来よう。

（7）包含層出土遺物（図35-144～164・図版21）

遺物は第9層以下の出土はみられなかったが、上層からは比較的多くの多岐に亘る遺物が出土し

ている。出土遺物の大半は小片となっているため、図化出来たものは少なかったが第2～3層出土資料を中心に記載する。なお、第6・8層として取り上げた遺物に関しては、流路出土資料として各流路の項で掲載した。

図35-144～155が第2層、156～162が第3層、163・164が壁面清掃時出土遺物である。

144・145は土師器皿である。144は所謂「へそ」皿。口縁端部はやや尖り気味におさめる。体部外面中程にユビオサエが顯著にみられ、段状になる。橙色系胎土。京X期古～中段階（15世紀中頃～後半）の所産。145の口縁端部は丸くおさめ、体部外面中程にユビオサエが顯著にみられ、段状になる。二次焼成を受けており、全体的に赤味を帯びる。京X期古～新段階（15世紀中頃～後半）の所産であろうか。

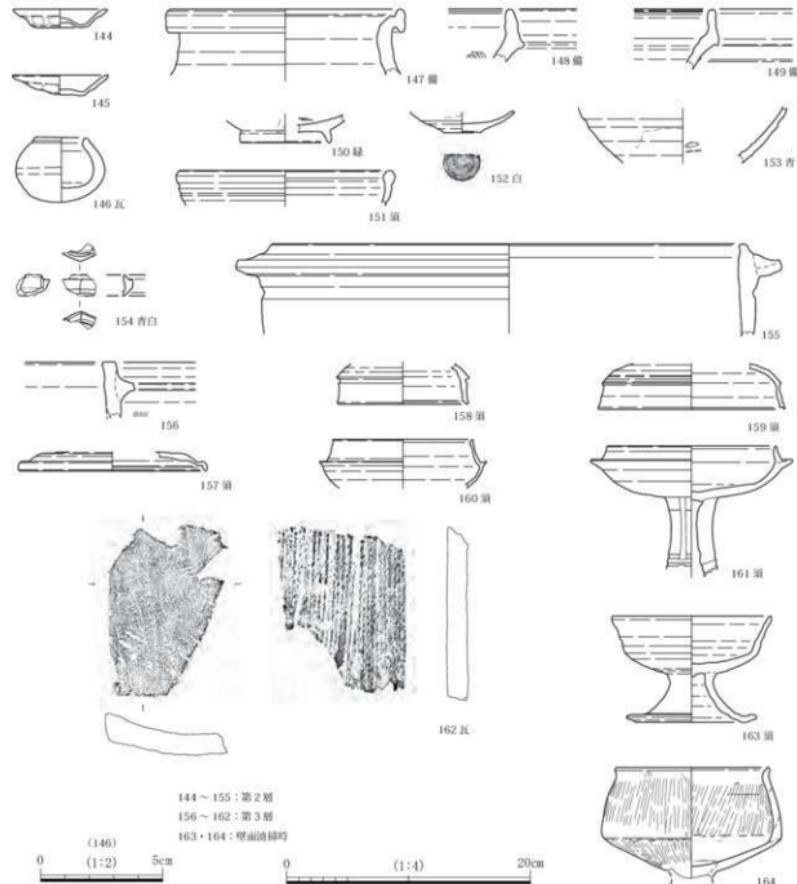


図35 包含層出土遺物

146は瓦質土器ミニチュア釜。扁球形の体部をもち、口縁部は僅かに上方へ立ち上がる。口縁部外面には細い沈線が1条廻る。

147は常滑焼甕もしくは壺。口縁部は断面N字状を呈する。内外面に自然釉が付着。13世紀第3四半期頃（中野編年6a型式）の資料であろう。148・149は備前焼鉢。148は口縁部を上方に拡張する。口縁部は内傾しながら立ち上がり、端部を丸くおさめる。口縁部外面には凹線が廻る。口縁部内面には沈線が1条廻る。内面には櫛描きの摺目がみられる。15世紀第3四半期～末頃（乗岡編年中世5期a段階）の資料であろう。149は口縁部を上方に拡張する。口縁部は内傾しながら立ち上がる。口縁端部はやや内傾し、面をもつように仕上げて沈線を1条廻らせる。口縁部外面には自然釉が付着。頸部外面には重ね焼きの溶着痕がみられる。概ね15世紀第3四半期～16世紀前半（乗岡編年中世5期b段階～6期a段階）の所産であろう。

150は縁釉陶器碗である。非常に緻密で精良な胎土を使用した須恵質の縁釉陶器。器面にはミガキかと思わせるような丁寧なナデを施す。内面には目痕がみられる。11世紀初頭～中頃（平安京IV期古～中段階）の資料か。151は須恵器鉢。玉縁状の口縁部をもつ。篠窯産であろうか。10世紀中頃～11世紀初頭（平安京III期古～新段階）の所産か。152は白磁皿。高台を有さず、底部は緩やかに上げ底状になる。焼成不良のため、釉はガラス化していない。白磁皿VI類1aであろうか。11世紀後半～12世紀前半の資料と思われる。153は越州窯青磁碗か。緻密で精良な胎土を用い、緑色系の釉が掛かる。内面は全面施釉であるが、外面は体部下半が露胎となっている。内面に胎土目が残る。破片のため、径及び傾きは不正確である。154は青白磁合子。小片のため詳細は不明であるが、平面八角形を呈する合子と思われる。内面及び体部外面は施釉されるが、口縁部外面及び底部外面は露胎となっている。底部外面には幅約0.15cm、高さ約0.1cmの高台状の突帶が廻る。

155・156は上師器羽釜である。155はやや内傾する短い口縁部で、口縁部内面は強いヨコナデにより凹線状に窪む。口縁部直下にはやや斜め上方に向いた厚くて短い鈎が廻る。鈎より下位には煤が付着。156はやや内傾する短い口縁部で、口縁部内面は強いヨコナデにより凹線状に窪む。口縁部直下にはほぼ水平に向いた厚くて短い鈎が廻る。体部外面には粗いタテハケを施す。155・156ともに、所謂揖津C型羽釜である。10世紀後半～11世紀初頭の所産であろう。

157～159は須恵器蓋である。157は杯B蓋。口縁部外面は重ね焼きの痕跡であろうか黒色化している。8世紀後半（平城V期）の所産。158・159の口縁端部は尖り気味におさめ、内面に段をもつ。158の天井部外面には自然釉が付着。5世紀末～6世紀前半（TK47～MT15型式）の資料であろう。160は須恵器杯身。内傾する長い口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめ、内面に段をもつ。受け部はやや斜め上方に短く延びる。5世紀末～6世紀初頭（TK47型式）の所産。161は須恵器有蓋高杯である。長脚二段透かしの高杯。透かし孔は3方向にみられる。杯部器面にみられる黒色粒が、ヘラミガキにより墨流し状になっている。6世紀後半～7世紀前半（TK43型式併行）の所産であろう。

162は平瓦。四面には布目を、凸面には粗い繩目タタキを明瞭に残す。凸面には離れ砂が付着。

163は須恵器高杯。杯体部から口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は尖り気味におさめる。脚端部は反り返る。7世紀後半（TK217型式併行）の資料であろう。164は弥生時代後期～庄内式土器の台付鉢か。内湾する体部をもち、口縁部は短く外反する。内外面ともに縱方向の丁寧なヘラミガキが施される。二次焼成を受けているのか、外面には赤変箇所や剥落箇所がみられる。近江系の台付鉢であろう。

第3節 2区の調査

2区は今次調査においては西側に位置し、山田川の西側、 $X = -135,050 \sim 060$ ・ $Y = -41,740 \sim 41,750$ に当たる。汚染土壤を撤去するために設定された調査区で、平面は正方形を呈し調査面積は約100 m²である。地形的に高い位置に当たるため、1区に比して堆積層が少なかった。それに伴い、確認し得た遺構面は2面であった。

(1) 第1面(図36・図版9)

第2層である明黄褐色系極細～細砂混シルトまたは灰色シルトを掘削して検出した灰褐色系細～中砂混シルト上面を第1面とした。第1面は標高T.P.+8.6m前後でほぼ平坦な地形となっている。検出した遺構には北西から南東にはしる溝や鋤溝、土坑がある。

2溝(図36・図版9)

調査区の中央や北東寄りを、北西から南東に緩やかに弧を描くようにはしる溝である。溝北側は調査区外へと延び、南側は平面長方形を呈する土坑に切られる。検出長は約11m、幅約0.6～1.2m、深さ約0.1mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は3枚に分かれ。上層は明褐色細砂混粘質シルトである。上位層の踏み込みの痕跡と思われる。中層は明褐色粘質シルト、下層は灰色中～粗砂。埋土からは須恵器甕や土師器が出土しているが、小片のため時期を決し難い。

4溝(図36・図36-165・図版9)

調査区北東隅で検出した溝である。西肩のみを確認した。 $N - 38^\circ - W$ に軸をとる。検出長は約2.6m、幅1m以上、深さ約0.35mを測る。断面形は逆凸字状を呈し、埋土は4枚に分かれ。灰黄色系の細～中砂及び明褐色系のシルトから構成される。埋土からは土師器皿や弥生土器片が出土しているが、小片のため時期を決し難い。図36-165は弥生土器底である。磨滅が著しく詳細は不明。4溝は第2面にある8落込みを切るように存在していることを勘案すれば、165は本来8落込みに伴った遺物である可能性が高い。

5溝(図36・図版9)

調査区南西側に位置し、北西から南東に緩やかに弧を描くようにはしる溝である。南北両端は調査区外へと延びる。検出長約11.5m、幅約1m、深さ約0.4mを測る。断面形は逆凸字状を呈し、埋土は黄灰色中～粗砂である。下層に粗砂が多くみられる。溝側壁や底には、著しい流水作用による明瞭な凹がみられる。出土遺物は極めて少なく時期を決し難い。

鋤溝群

鋤溝は調査区南西側に $N - 50 \sim 56^\circ - E$ に軸をとる一群があり、一方、調査区中央～北東側では南西側の鋤溝群に直交する $N - 34^\circ - W$ を指向する一群がみられる。鋤溝は概ね幅約0.2～0.3m、深さ約0.05mである。出土遺物はほとんどみられず、時期を決し難い。但し、切りあい関係からみれば先述した2・4・5溝よりは新しいものと思われる。

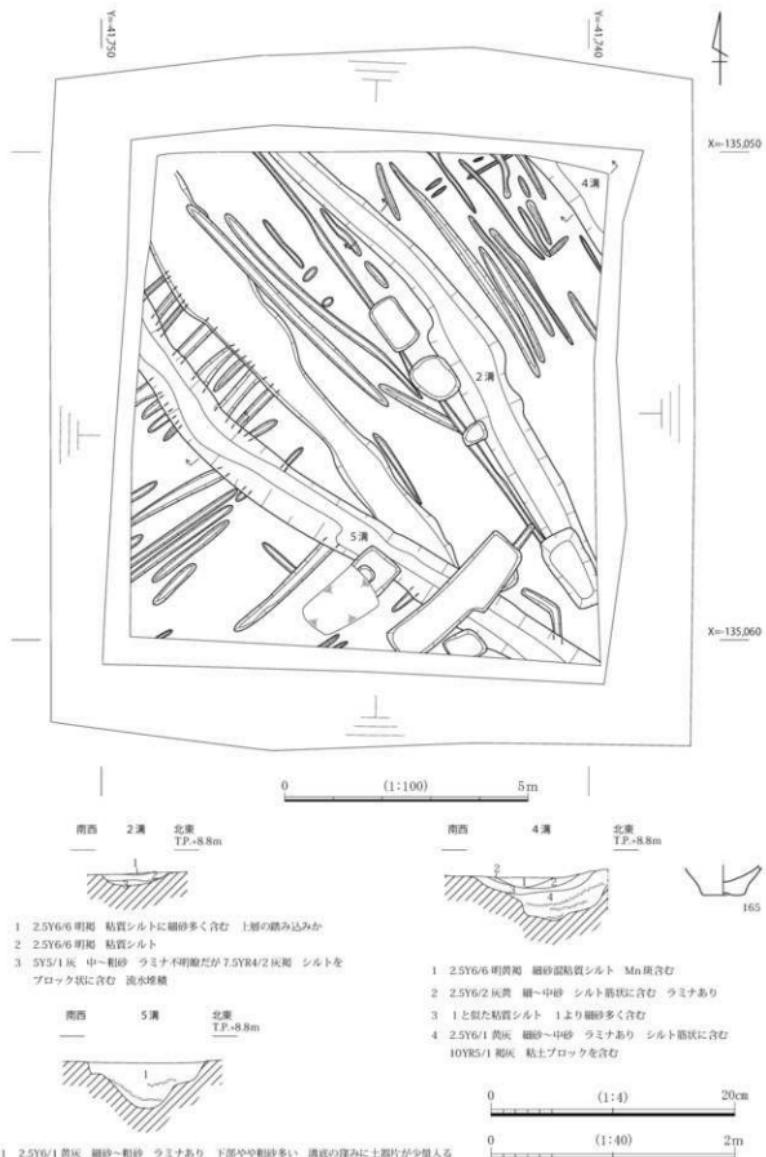


図36 明和池遺跡 2区 第1面 平面図・遺構断面図・遺構出土遺物

土坑群

調査区中央及び南東隅で平面方形～長方形を呈する土坑を7基検出した。規模は最小が 0.4×0.5 mで、最大が 3.2×1 mである。深さは概ね0.3m程度である。但し、後者は切り合った2基の土坑を確認し切れず1基として掘削してしまった可能性が高い。埋土はいずれも暗青灰色の細～中砂と青灰色粘質シルトのブロック土で、炭化物や一辺3cm程度の礫を含んでいる。このような土坑群の在り方は、平成19・20年（2007・2008）度に調査を行なった吹田操車場遺跡の第8地区第3面や平成21・22年（2009・2010）度に調査を行なった吹田操車場遺跡の第5～4地区第2面に類している。吹田操車場例では土坑群の直近に大畦畔や幅広の溝等が構築・掘削されていたことが明らかとなっている。翻つて、当面ではそのような、明瞭な大畦畔の痕跡等は確認し得なかった。しかし、図11で示した南北断面で、第1層が壁面中央から北側にかけての部分が微妙に盛り上がり、台形状を呈していることを上位の大畦畔の痕跡と捉えることが可能であるならば、当面にも既に削平された畦畔状遺構があつたと想定出来よう。その仮定が許されるならば、本土坑群も坪境等の大畦畔近くに掘削された土坑群である可能性を持つものであろう。

なお、土坑群からは遺物が出土しておらず、時期は不明である。

（2）第2面（図37・38・図版10・11）

第3層である灰褐色系色細～中砂混シルトを掘削して検出した明黄褐色～にぶい黄褐色シルト質粘土（地山）上面を第2面とした。第2面は標高がT.P. + 8.5m前後でほぼ平坦な地形となっている。検出した遺構には溝や落込みがある。なお、調査区南東隅では南東方向に向かって緩やかに下がる落ちがみられた。

6溝（図37）

調査区中央やや南寄りで検出した溝である。検出長約3.7m、幅約0.4～0.8m、深さ約0.15mを測る。断面形は逆台形で、埋土は黄灰色極細砂混シルトである。小片となった土師器が1点出土したのみで時期は決し難い。

7溝（図38・図38-166）

調査区北側で検出したL字状に屈曲する溝である。N-45°-Wを軸に北西から南東にはしり、X=-135.055・Y=-41.7425付近でN-54°-Eを指向して屈曲する。北西～南東方向の検出長は約8m、北東～南西方向の検出長は約4m、幅約0.6～1m、深さ約0.15～0.2mを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は3枚みられ、灰黄褐色系シルト～極粗砂が主体となっている。溝側壁・底には著しい流水作用による明瞭な凹凸がみられる。出土遺物には須恵器や土師器がみられるが、小片のため時期を決し難い。図38-166は須恵器杯蓋である。肩部の稜が比較的明瞭に残る。6世紀前半頃の所産か。

8落込み・9土坑（図38・図38-167）

8落込みは調査区北側で検出した平面不整方形を呈する落込みである。長軸で約6.8mを測る。落込みの南西隅は7溝に、北東隅は上層からの4溝によって削平され、北側は調査区外へと広がる。落込みは二段に掘削されており、折れ線皿状の断面形を呈する。埋土は大きく2枚に分かれ、上層は褐灰色シ

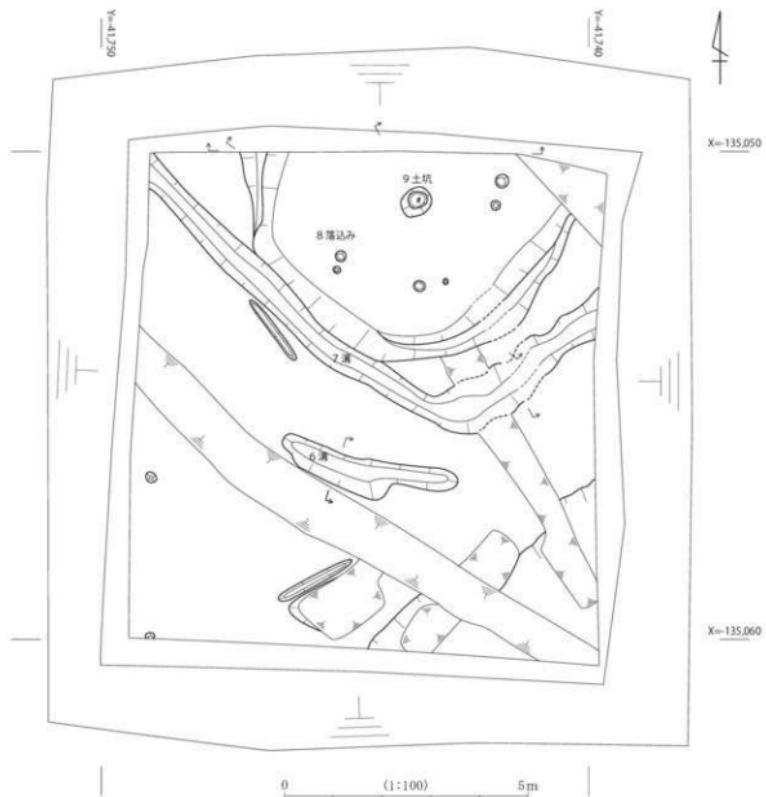


図 37 明和池遺跡 2区 第2面 平面図及び遺構断面図

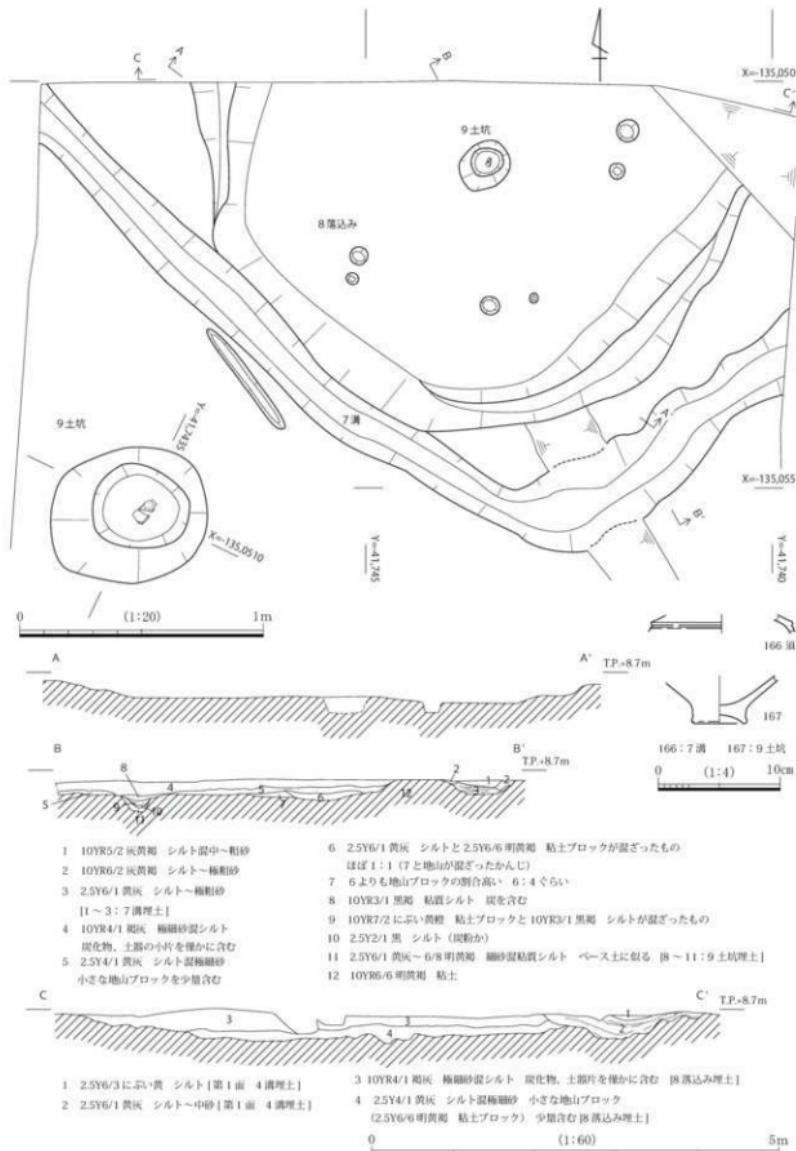


図 38 第2面 7溝・8落込み・9土坑平・断面図及び遺構出土遺物

ルト、下層は黄灰色シルト混極細砂である。上層には細かな炭化物がみられる。出土遺物は極めて少量で、小片となった弥生土器がみられた。

落込み底面の縁辺部には、2穴1対と思わせるような径0.1～0.25mの小穴が3箇所に計6基みられる。小穴は深さ約0.1～0.15mで、断面形は逆台形を呈している。埋土は黄灰色シルト混極細砂である。また、落込み底面中央付近では平面隅丸方形を呈する土坑（9土坑）1基を確認した。9土坑は長軸0.7m、短軸0.6m、深さ約0.2～0.3mを測る。土坑は不明瞭ながら二段に掘り窪められたようである。埋土は4枚に分かれる。最上層は黒褐色粘質シルトで炭化物を含む。上層にはぶい黄橙色粘土と黒褐色シルトのブロック土。中層は黒色のシルトで炭層であったと思われる。下層は黄灰色系粘質シルトである。中層の黒色シルトを除去した段階で図38-167が出土した。167は弥生土器甕底部。磨滅が著しく詳細は不明であるが、弥生後期土器であろう。

落ち込み自体の平面形や、底面に点在する各遺構の状況をみれば竪穴建物とも考えられるが、周壁溝がみられないこと、壁の立ち上がりがなだらかであること、小穴の掘り込みが浅いこと等から積極的に竪穴建物とは評価し得なかった。今後、竪穴建物としての可能性を探りつつ、近傍での類例を待って性格付けを行ないたい。

第4節 3区の調査

3区は今次調査においては西側に位置し、山田川の西側、X=-135,090～100・Y=-41,750～41,760に当たる。先述した2区から南西に30m離れた場所に、汚染土壤を撤去するために設定された調査区である。平面は正方形を呈し調査面積は約100m²である。2区では第2層を掘削し終えた面（第3層上面）を第1面として調査を行なったが、3区では遺構が確認出来なかつたため、面としての認定を行なわなかった。そのため、3区で確認出来た遺構面は1面のみであった。

（1）第1面（図39・図版12）

第3層である灰褐色系細～中砂混シルトを掘削して検出した明黄褐色～にぶい黄褐色シルト質粘土（地山）上面を第1面とした。第1面は北西隅の標高がT.P.+8.35m、南東隅の標高がT.P.+8.25mで、北西から南東に緩やかに下がる地形となっている。検出した遺構には溝や柱穴列がある。なお、当面は地震の揺れのためか、灰色シルト質粘土と明黄褐色シルト質粘土が混ざったマーブル模様状を呈していた。

溝

調査区の北東隅で検出した溝である。N-44°-Wを軸に北西から南東にはしる。溝は検出長約7.5m、幅約0.7～1.4m、深さ0.05～0.15mを測る。南北両端は調査区外へと延びる。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は灰色系細～粗砂である。溝側壁や底には著しい流水作用による明瞭な凹凸とともに、牛足跡がみられた。出土遺物がみられず時期は不明である。

柱穴列（図39）

調査区南側でN-58°-Eに軸をとる柱穴列を確認した。柱穴は直径0.2～0.3mで、深さは0.2

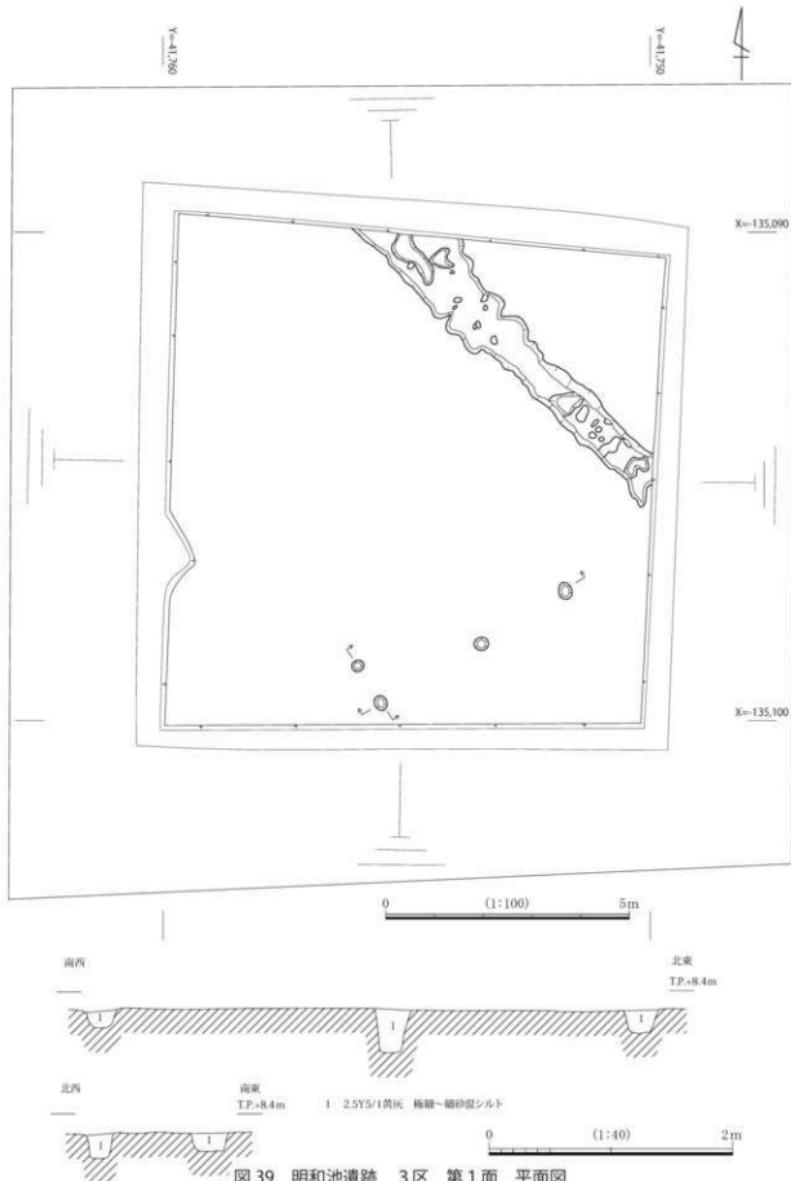


図39 明和池遺跡 3区 第1面 平面図

～0.35 mである。いずれも断面形は逆台形で、埋土は黄灰色極細～細砂混シルトである。柱列は1列しかみられないことから、柵などの施設が設けられていたのであろうか。出土遺物がみられず、時期は不明である。

第5節 4区の調査

4区は今次調査においては東側に位置し、山田川の西側、先述した1区から南西に40 m離れた場所に、汚染土壤を撤去するために設定された調査区である。平面はホームベース形を呈し調査面積は約285 m²である。現地盤直下2.8 mの深さ(T.P. + 7.4 m)まで、重機(バックホー)により汚染土壤の撤去を行なったが、この高さにおいても操車場造成時の盛土中であった。下層の堆積状況の確認のため、一部分で深掘りを実施し、盛土の直下(T.P. + 7.0 m以下)で2区や3区の最下層(無遺物層)に対応する地層を確認した。遺物包含層や遺構が皆無であったため、汚染土壤の撤去作業のみで調査を終了した。

第6節 小結

今次の調査は、汚染土壤撤去や地中障害物撤去に伴う小規模で局所的な調査ではあったが、今後明和池遺跡を検討する上で重要な知見が得られた。以下では概略的に調査内容を総括しておく。

山田川の東側に位置する1区では、厚い堆積層が認められ弥生時代から中世にかけての多岐に亘る遺構・遺物を検出した。

弥生時代後期以前から、当調査区周辺は自然流路の形成が活発であり、微妙に東から西へと位置を変えながら長期に亘って存在していたことを明らかにした。弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構面である第4～6面でも、複数の流路を確認した。流路内からは弥生時代後期から古墳時代初頭の土器以外に少量ながら弥生前期土器も出土した。かなり磨滅していることから、流されて来たものと推察されるが、遺跡北方に弥生時代前期集落の存在が予想される。

第4面では埋没した流路上に多量の土器(24・25土器群)が置かれていたことがわかった。調査区内では集落を構成する建物等を確認出来なかったが、土器群の存在から近傍に集落が営まれていたことは明白である。土器群の西側には流路が広がるため、集落域は自ずと土器群よりも東側或いは搅乱を被った北側に求められる。

流路は調査区の西側を流れる山田川の旧流路に相当すると推定される。山田川は長期に亘り当地を流れ、東から西へと移動しながら、現在の位置に定まったと言える。

古墳時代後期から古代にかけての遺構面である第2面では、古代の井戸や土坑を検出した。この段階には流路は調査区内から外れた位置に流れを変えたようで、調査区内は安定した土地へと変化し、集落域が広がっていたと推定される。

中世後半段階の第1面では井戸・土坑・溝を検出した。地中障害物撤去の関係で、明瞭な遺構面として確認出来たのは調査区南東部の一部であったが、深度のある井戸は搅乱を被った箇所も含め調査区全域に点在していることが明らかになった。井戸には円柱形の瓦質井戸枠(図14-1・2)を用いたものがあった。このような井戸枠は大阪府南部地域ではよくみられる資料であるが、北摂地域では管見に触れず、貴重なものと言える。残念ながら明確な建物を復元するには至らなかったが、多くの土坑・小

穴の存在や多量に出土した瓦類から、瓦葺建物が建てられていたものと推察される。

また、遺構や中世段階の包含層からは多量の瓦とともに、国産陶磁器や輸入陶磁器も出土している。瓦質井戸枠を用いた稀有な井戸や瓦葺建物の存在、多様な出土遺物を勘案すれば、有力者の邸宅または寺院の敷地であった蓋然性が高い。そこで注目すべきは人名が刻まれた丸瓦の出土である。現段階では何も手掛かりを得ることが出来なかったが、「定継（定継）法師」なる人物に近付くことが出来れば土地利用の具体像をより鮮明に描くことが可能になるであろう。

一方、山田川の西側に位置する2・3区は、地形的に高位に位置するため堆積層が薄く、結果的に検出した遺構面も少なかった。

2区では最終面である第2面で落込みや溝を検出した。落込みは平面不整方形を呈し、断面形が浅い皿状を呈するものである。底面には小穴や炭の入った土坑が掘削されていた。出土遺物が僅少であるため、積極的な時期比定には躊躇を覚えるが、底面検出の土坑から弥生後期土器片が出土していることを重視して弥生後期段階の帰属としておきたい。落込み自体の平面形や、底面に点在する各遺構の状況をみれば竪穴建物とも考えられるが、周壁溝がみられないこと、壁の立ち上がりがなだらかであること、小穴の掘り込みが浅いこと等から積極的に竪穴建物として評価を行なわなかった。当遺構の評価は今後の検討課題である。

古代以降の遺構面である第1面で鋤溝や溝を検出し、耕作地が広がっていたことが明らかとなった。鋤溝はN-34°-Wに軸をもつものとそれに直交するN-50°-56°-Eを指向するものが存在する。古代以降の当地周辺は、嶋下郡南部条里の条里地割（N-33°-W）が施行されており、今回確認した鋤溝群もこれに則るものであることが明らかとなった。

3区では最終面で溝や柱穴列を検出した。2区同様、出土遺物が僅少であるため、遺構の帰属時期は不明である。柱列は建物に伴うようなものでなく、柵状施設のような存在であったと想定され、溝底面で牛足跡が多数みられたことから、当区は集落域というよりは耕作地であった可能性が高い。

以上、局所的な状況ではあるが明和池遺跡における地形環境の違いや時期ごとの地形変遷或いは土地利用の動向をある程度明らかに出来た。現在進行している明和池遺跡の調査成果と合わせて総合的に検討を加えれば、より一層鮮やかに明和池遺跡を復元出来よう。今後に期待するところである。

第4章 吹田操車場遺跡の調査

第1節 基本層序と遺構面

今次の調査は汚染土撤去に伴うものであり、調査区はJR岸辺駅の北側に位置する5箇所（1～4・6区）とそれよりも南西側に位置する2箇所（5・7区）に分かれる。現在は操車場を造成したことによって、広大で平坦な地形が開けて見えるものの、調査の結果、以前は起伏に富んだ地形であること

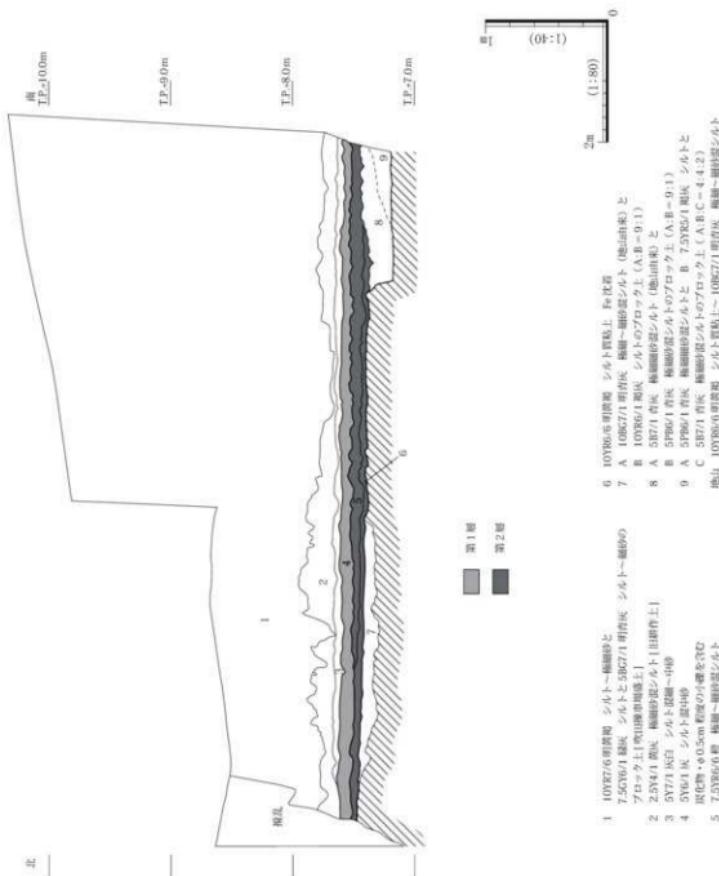


図40 吹田操車場遺跡 1区 北壁断面図

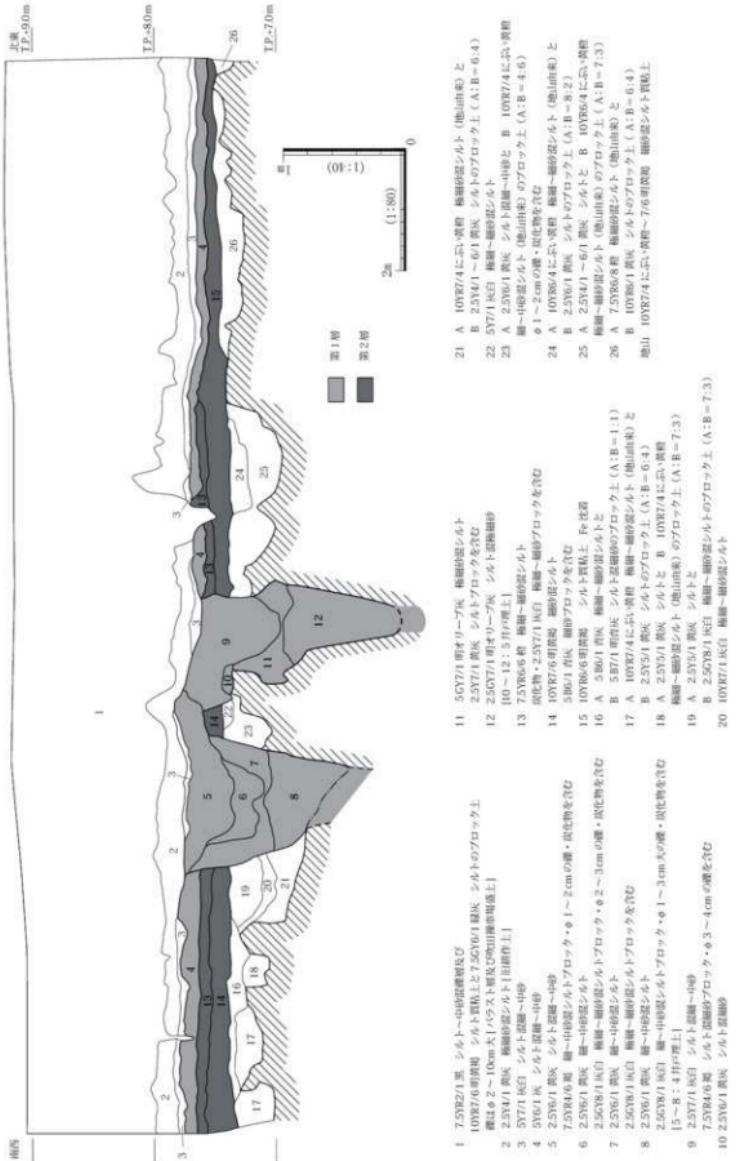


図41 吹田操車場遺跡 6区 北西壁断面図

が明らかとなつた。

吹田操車場遺跡は、大正期から昭和初期にかけて建設された操車場の地下に存在するため、操業時のバラスト層や操車場造成時の盛土を除去しなければ調査対象となる遺構面には到達しない。また、こうした操車場関連の土砂を除去すると明治期の耕作地が広がることも当遺跡における共通事象として認識されている。

さて、1~4・6区では、層序は概ね共通しており、大別3層に分層出来る。一方、離れた位置にある5・7区は近現代の土地改変が著しく、現地表面以下は全て土地改変に伴う埋め戻し土であった。ここでは1~4・6区で確認した層序を基本層序(図40~45)として記載を進めることとする。遺構面の認識については、調査区によって異なるためここでは1区を代表させて記載しておく。



図42 吹田操車場遺跡 2区 西壁断面図

第0層は旧耕作土（灰黒色シルト混細砂）・旧東海道線の軌道盛土（赤褐色砂礫）・吹田操車場造成用盛土（明黄褐色シルト～極細砂・粘土等）・近現代のパラスト層で構成され、近代～現代の所産。

断面観察において、富の歓や歓溝・耕地境等の残存も非常に良好で、操車場造成直前の耕作地がそのままの状態で埋め立てられたことが明らかになった。

第0層を構成する各層の層厚は、概ね旧耕作土が0.2m、旧東海道線軌道盛土が0.7m、吹田操車場盛土が0.1～1.1m、パラスト層が0.8～1.2mであった。この結果、第0層の層厚は調査区によりバラつきがあり、現地表面から1.4～1.9mとなっている。

第1層は淡灰色シルト混細～中砂である。場所によっては操車場造成の際に著しく改変を受け、遺存状態が不良である箇所も認められた。層厚は0.1～0.2mである。当層は遺物の包含が少なく、均質に攪拌されており植物根による斑駁が発達することから、長らく耕土として利用されていたと推定される。出土遺物は僅少であったが、4区を中心に小片となった土師器や瓦質土器、須恵器、国産陶磁器、輸入陶磁器などがみられた。出土遺物から中世後半～近世の所産と思われる。

第1層を掘削し終えた面（第2層上面）を第1面として調査を行なった。第1面では鋤溝等の耕作の痕跡を検出している。鋤溝等からの出土遺物は僅少であったため時期を決し難いが、下層や下位面の状況から中世段階の所産と推定される。



図43 吹田操車場遺跡 3区 北壁断面図

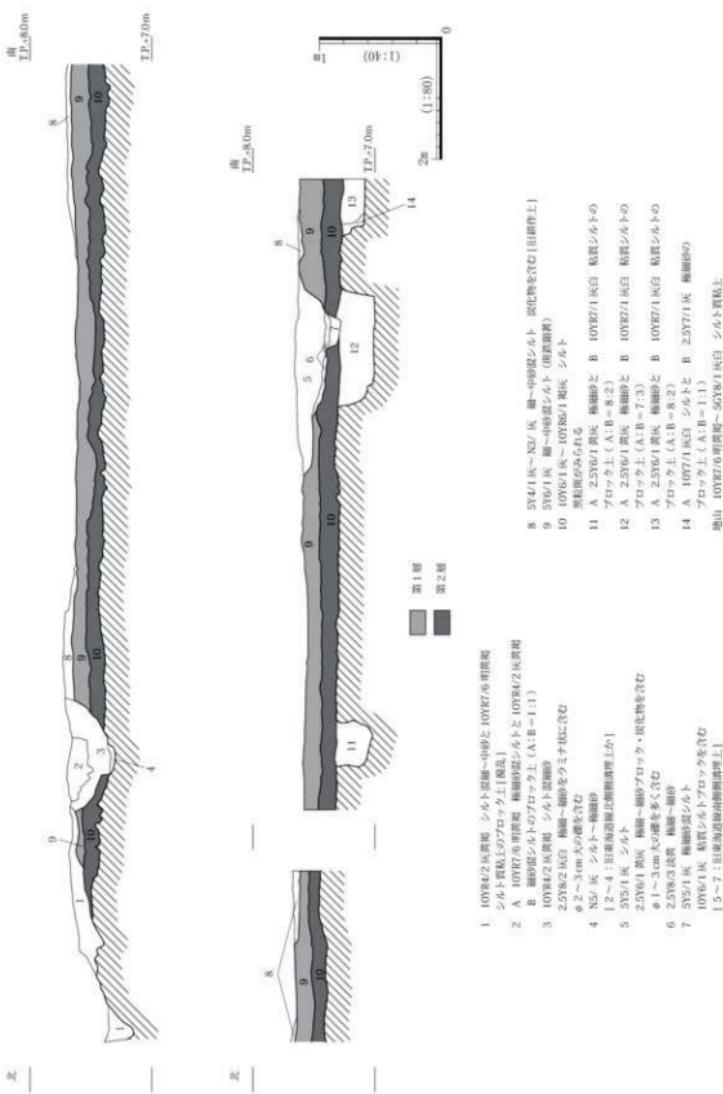
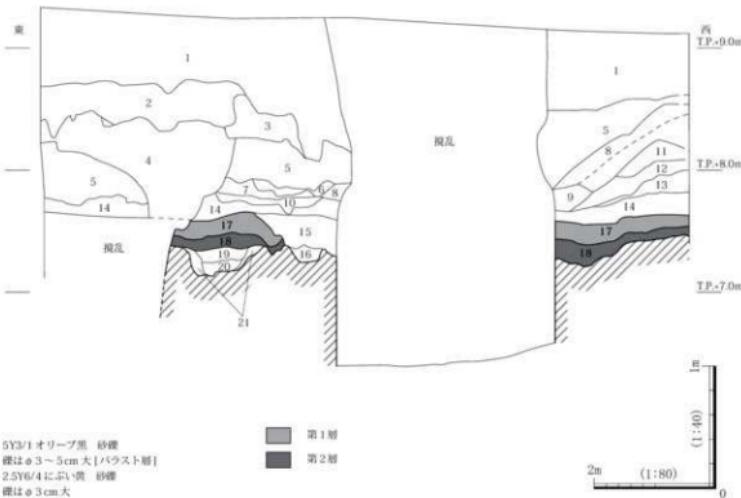


図44 吹田操車場遺跡 4区 東壁断面図

第2層はやや土壌化した灰～褐色シルト或いは明黄褐色細砂混シルトである。比較的均質に攪拌を受けているようであるが、斑鉄の形成は少ない。層厚は0.1～0.2mである。出土遺物は僅少であったが、4区を中心に土器類や須恵器、輸入陶磁器、鐵滓などがみられた。遺物の所属時期が7～12世紀後半頃と幅が広く、古代～中世の包含層と捉えられる。

第2層を掘削し終えた面（地山上面：最終面）を第2面として調査を行なった。地山面では群集土坑が広範囲に亘って掘削されていることが明らかとなった。群集土坑からの出土遺物は僅少であったが7世紀代の須恵器の出土がみられた。

なお、地山は基本的には黄褐色系シルト～粘土が主体である。但し、5・7区の2箇所では淡青灰色細～中砂や橙色砂礫層が地山となっており、既に土地改変によって黄色系シルト～粘土が失してしまい、より下層の堆積層が現れたものと考えられる。



- | | |
|--|---|
| 1 5Y3/1 オリーブ黒 砂礫
縮尺Φ3～5cm 大 [バースト層]
2 2.5Y6/4 ふく黄 砂礫
縮尺Φ3cm 大
3 A 2.5Y8/4 淡黄 楊繩～細砂混シルトと
B 2.5Y6/1 的9 黏砂混シルトのブロック土
(A:B=7:3)
4 A 2.5Y8/4 淡黄 シルト混砂と B N4/ 灰～中砂混シルトと
C 2.5Y6/3 淡黄 シルト混楊繩～楊繩のブロック土
(A:B:C=4:3:3)
5 A 2.5G7Y/1 白灰 黏土と B 2.5Y5/1 淡灰 細砂混粘土の
ブロック土 (A:B=8:2) [突出探査場遺土]
6 10YR4/1 開灰 シルト混砂
縮尺Φ1cm 前後
7 2.5Y8/4 淡黄 楊繩～細砂混シルトと N3/ 開灰 シルト混楊繩と
2.5Y8/1 白灰 楊繩のブロック土
8 7.5YR5/3 ふく黄 砂礫
点線より上部がしまった剝離～小窓。点線より下部が
Φ2～8cm 大の塊 [旧東海道網軌道遺土]
9 2.5Y3/1 黒灰 シルト混砂～中砂
Φ3～5cm 大の塊を含む
10 10YR5/3 ふく黄 砂礫
縮尺Φ2～7cm 大の塊
11 2.5Y6/2 淡黄 細～中砂混シルト
2.5Y7/3 淡黄 シルトブロック～炭化物を含む | 12 2.5Y5/1 黄灰 楊繩砂混シルト
13 10YR7/4 ふく黄 砂～中砂混シルト
[9～13: 旧東海道網軌道遺土基盤]
14 N3/ 開灰 楊繩～細砂混シルト
炭化物を含む [旧耕作土]
15 A 10YR7/6 明黄灰 楊繩砂混シルトと
B 10YR6/1 開灰 楊繩砂混シルトのブロック土
(A:B=1:1)
16 10YR4/1～5/1 開灰 楊繩砂混シルト
2.5Y8/1 白灰 楊繩砂混シルト
[15・16: 旧東海道網軌道遺土]
17 5Y6/1 黄 楊繩～細砂混シルト
炭化物を含む
18 10YR9/1 開灰 シルト
19 7.5YR6/1 開灰 楊繩～細砂混シルト Fe沈着
20 10YR6/1 開灰 楊繩砂混シルト
5B5/1 青灰 シルト [地山山] ブロックを含む
21 2.5Y4/1 黄灰 シルト混楊繩～中砂
[19～21: 第2面13測量土] |
|--|---|
- 地山 10YR7/6 明黄灰 シルト質粘土～5GY8/1 白灰 シルト質粘土

図45 吹田操車場遺跡 4区 南壁断面図

第2節 1・6区の調査

1区はX = -135,480 ~ -135,490・Y = -42,190 ~ -42,200にあたり、汚染土壤を撤去するために設定された調査区である。平面は正方形を呈し調査面積は約100 m²である。調査区の北東隅から南西隅に向けてコンクリート製構造物がはさむため、結果として調査区を2分する形での調査となつた。また、上記構造物は調査区外にも延びることが判明し、その撤去に際しては、地山面まで傷むことが明らかとなったため、急速拡張して調査を実施した。拡張範囲は構造物の両側を幅1.5 mで、調査区北東側に約10 m・南西側に約18 m延ばした細長い調査区（6区）である。なお、6区に関して構造物撤去工との関係で、第1面については断面観察に留め、第2面を重点的に行なつた。

（1）第1面（図46・図版22）

第1層である淡灰色シルト混細～中砂を掘削して検出した灰～褐灰色シルト上面を第1面とした。第1面は北東側がやや高くなるもののほぼ平坦な地形で、標高はT.P. + 7.5 m前後である。検出した遺構には鈎溝や土坑がある。

鈎溝

調査区南西部を除く全域でN-55°～60°-Eに軸をもつ鈎溝群が広がる。一部でこれに直交するN-34°-Wに軸をとる鈎溝もみられた。鈎溝は幅約0.1 m、深さ約0.05 m前後である。鈎溝群からは細片となった土師器や須恵器、瓦器等の出土をみたが、明確な時期は決し難い。恐らく中世段階の所産であろう。

1土坑（図46）

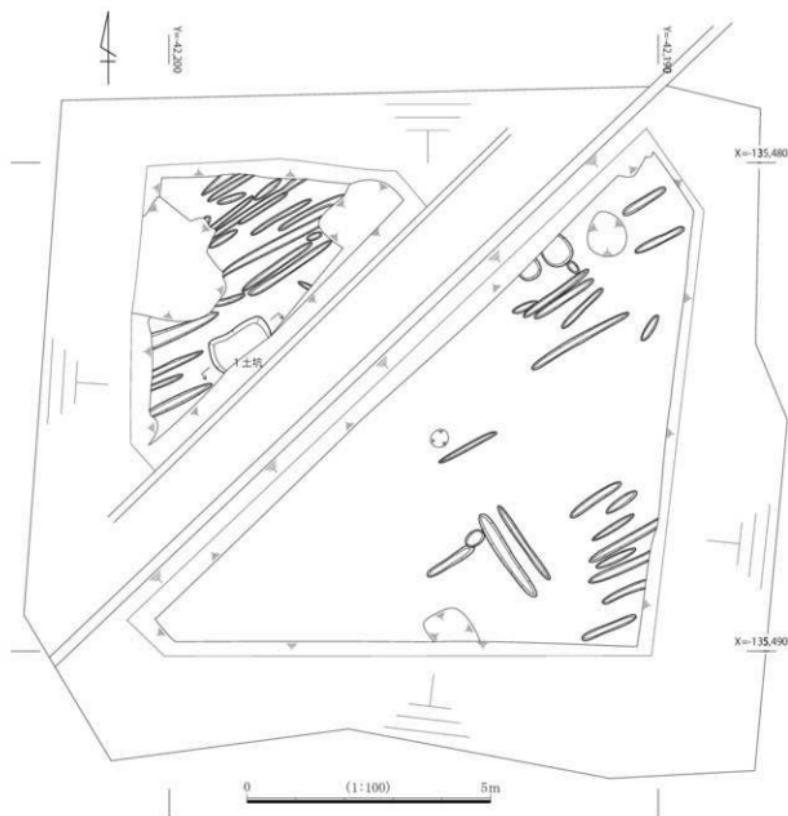
調査区北西部側に位置する平面長方形の土坑である。土坑南側はコンクリート製構造物の掘方によって切られている。土坑は長軸約1.25 m、短軸約0.6 m以上、深さ約0.35 mを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土はシルトや細砂からなるブロック土で3枚に分かれる。遺物の出土はみられなかった。同様な土坑を第2面において多数検出している。当土坑も下位面の土坑群に帰属する可能性が高い。

（2）第2面（図47～49・図版22・23）

第2層である明黄褐色細砂混シルトを掘削して検出した黄褐色系シルト～粘土の上面を第2（地山）面とした。第2面はほぼ平坦な地形となっており、標高はT.P. + 7.4 m前後である。検出した遺構には周辺の調査でも確認されている群集土坑がある。

群集土坑（図47～49・図49-168・169）

群集土坑は全面で検出ましたが、その配置には疎密がみられ、調査区中央部での検出数が少なかった。1区の北西側と南側及び6区の西端で検出した群集土坑は重複して掘削されており、切り合いを正確に捉えて個別の平面形を押さえるのが困難な状況であった。土坑の平面規模は様々で、1×1 mほどの大きさから、2×3 mぐらいの大きさまである。深さは概ね0.2～0.3 mであった。断面形は浅い皿状や逆台形を呈するものがみられた。



- 1 A 2.5Y5/1 黄灰 砂質シルトと
B 10YR7/6 明黄色 粘質シルトと
C 2.5Y7/1 白 細砂のブロック土 (A:B:C = 6:3:1)
2 A 10Y5/6 黄褐 砂質シルトと
B 10Y5/1 黄灰 細砂質砂質シルトと
C 7.5YR7/1 明黄色 粘質シルトのブロック土 (A:B:C = 5:3:2)
3 A 10YR5/1 黄灰 シルト質粗砂 砂質シルトと
B 10YR5/1 黄灰 シルト質粗砂のブロック土 (A:B = 3:2)

0 (1:40) 2m

図46 吹田操車場遺跡 1区 第1面 平面図及び土坑断面図



図47 吹田操車場遺跡 1区 第2面 平面図及び土坑断面図

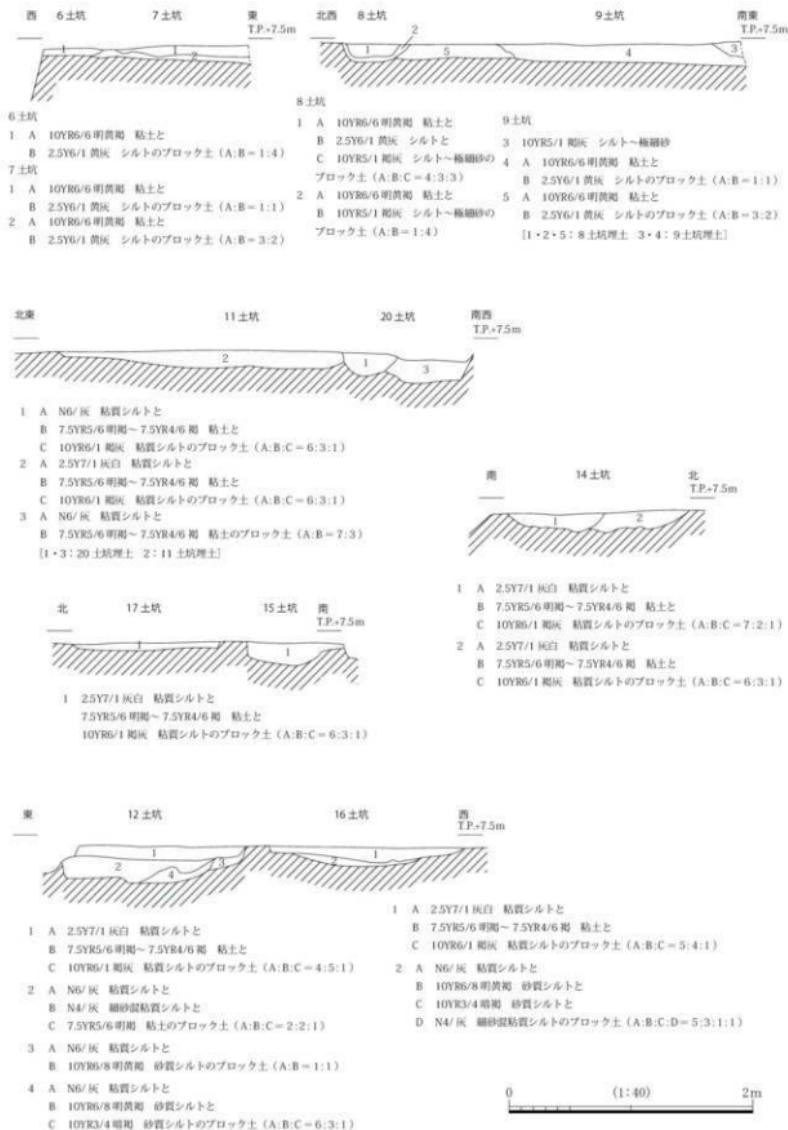


図 48 第2面 土坑断面図

土坑群はブロック土で完全に埋め戻されたものばかりであった。これは、掘削後即座に、掘削に伴う排出土で埋め戻した結果と想定される。いずれの土坑も砂質分が強くなつたところで掘削を停止しているため、粘土を狙って掘削したものと考えられる。なお、土坑内からは遺物の出土が少なく時期を明確にし難いが、周辺での調査状況を勘案すれば古墳時代後期から古代の範疇の所産であろう。

図49-168は1区12土坑出土の須恵器杯身である。器面にみられる黒色粒がヘラケズリに伴い墨流し状になるのが特徴的である。169は6区1土坑出土の須恵器提瓶か。外面はタタキのちカキメを施す。内面には被蓋部の継ぎ目が残る。

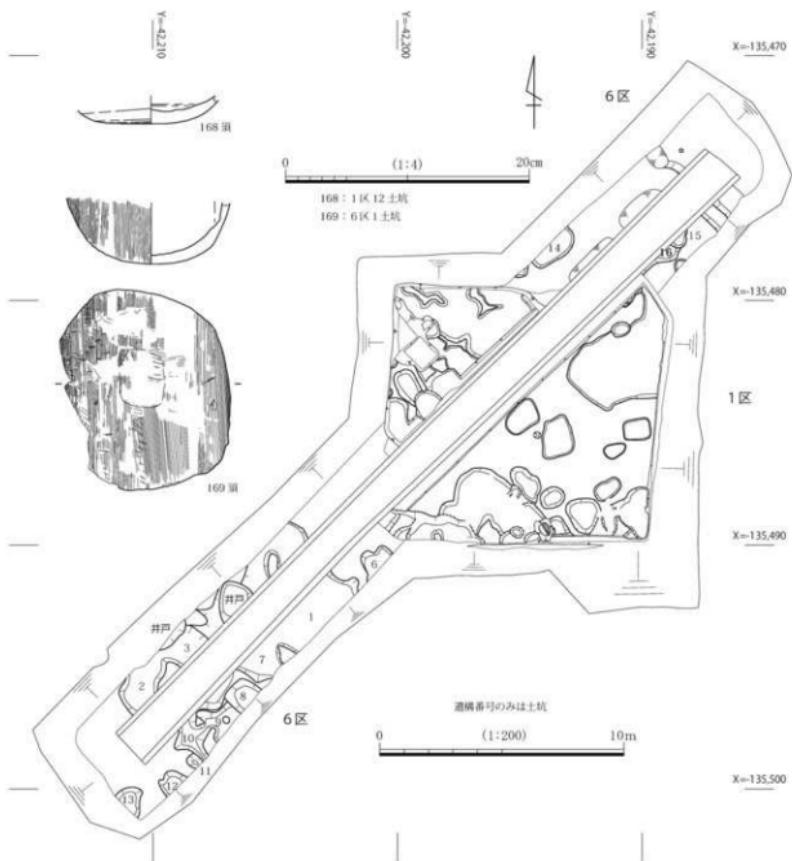


図49 吹田操車場遺跡 1区 第2面・6区 第1面 平面図及び遺構出土遺物

第3節 2区の調査

2区はX = -135,430 ~ -135,440・Y = -42,130 ~ -42,140にあたり、汚染土壌を撤去するために設定された調査区である。平面は正方形を呈し調査面積は約100m²である。しかしながら、調査着手以前に手違いがあって汚染土が既に撤去されてしまい、その後完全に埋め戻されるといった経緯があった。実際に調査に着手したところ、現地表面下約3.7m(T.P.+6.5m付近)まで擾乱を受け、周辺の調査で確認されている近世作土層はおろか、古代～中世の包含層などは全て失している状況であった。

しかし、汚染土撤去に伴う埋め戻し土を全て除去した段階を第1面として精査を行なった。その結果、

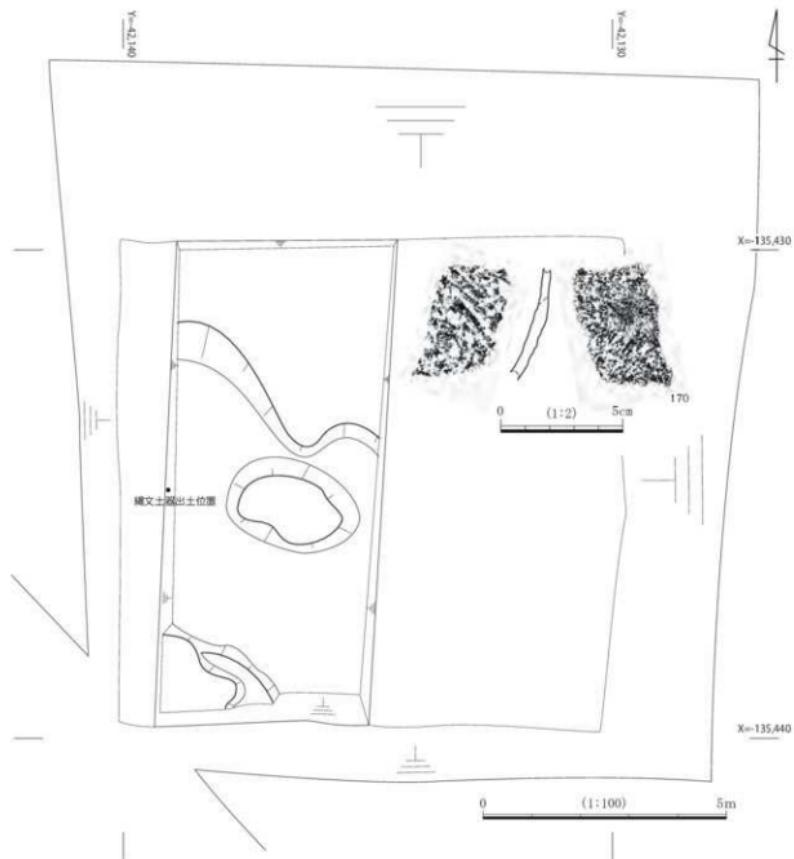


図50 吹田操車場遺跡 2区 第1面 平面図及び遺構出土遺物

流路の存在を想定させる黄灰色～灰白色系のシルト～粗砂の堆積が認められたため、調査区西半部で確認のため調査を実施した。

(1) 第1面 (図50・図版23)

流路 (図50・50-170・図版23)

流路はN-56°-Wを軸にして北西から南東に向けて流れるものである。流路は検出長約5m、幅約7m、深さ約0.5～0.7mを測る。断面形は折れ線皿状を呈する。埋土は灰白～黄灰色系のシルト～粗砂で、総体的に非常に硬くしまっている。流路底や側壁には著しい流水作用による明瞭な凹凸がみられる。埋土の中層付近(図42の44層)で、縄文土器片(図50-170)が1点出土した。170は小片であり磨滅が進行しているため、詳細は不明であるが土器の器面(表裏とも)に条痕調整がみられる。内面の条痕は明瞭で二枚貝条痕である。表裏条痕調整であること及び断面に細かな空隙が多くみられることから、縄文時代早期末から前期頃の織維土器である可能性が高い。

第4節 3区の調査

3区は先述した2区の北東側に位置し、X=-135,410～-135,420・Y=-42,120～-42,130にあたり、汚染土壌を撤去するために設定された調査区である。平面は正方形を呈し調査面積は約100m²である。当区ではコンクリート製構造物撤去に伴う搅乱の影響もあって、第1層の遺存状況は芳しいものではなかった。その為、第1層を掘削した段階での精査を断念し、第2層を掘削して検出した面を第1(地山)面として調査を行なった。

(1) 第1面 (図51～53・図版24・29)

第2層である明黄褐色細砂混シルトを掘削して検出した黄橙色系シルト～粘土の上面を第1(地山)面とした。第1面は北東から南西方向に調査区中央部が尾根状に高くなり、北西及び南東側に緩やかに下がる地形となる。標高はT.P.+7.1～7.3mである。検出した遺構には、周辺の調査でも確認されている群集土坑や落込み、流路がある。

群集土坑 (図51・52・53-171～174・図版24・29)

群集土坑は調査区中央部と北西隅を除いた部分にみられる。周辺部での調査同様、群集土坑は重複して掘削されており、切り合いを正確に捉えて個別の平面形を押さえるのが困難な状況にあった。土坑の平面規模は様々で、1×1mほどの大きさから、3×3mぐらいの大きさまである。深さは概ね0.2～0.4mであった。断面形は浅い皿状や逆台形を呈するものが主体である。

土坑にはブロック土で完全に埋め戻したもの(2・3・11土坑等)と、一定程度埋め戻した後、放置した結果自然堆積層がみられるもの(5土坑等)がある。前者は掘削後即座に、掘削に伴う排出土で埋め戻した結果と想定される。いずれの土坑も砂質分が強くなったところで掘削を停止しているため、粘土を狙って掘削したものと考えられる。中には、2土坑のようにほぼ完形になる須恵器甕が出土する例もあるが、基本的に土坑内からの遺物の出土が少なく、時期を明確にし難い。周辺での調査状況を勘案すれば古墳時代後期から古代の範疇の所産であろう。

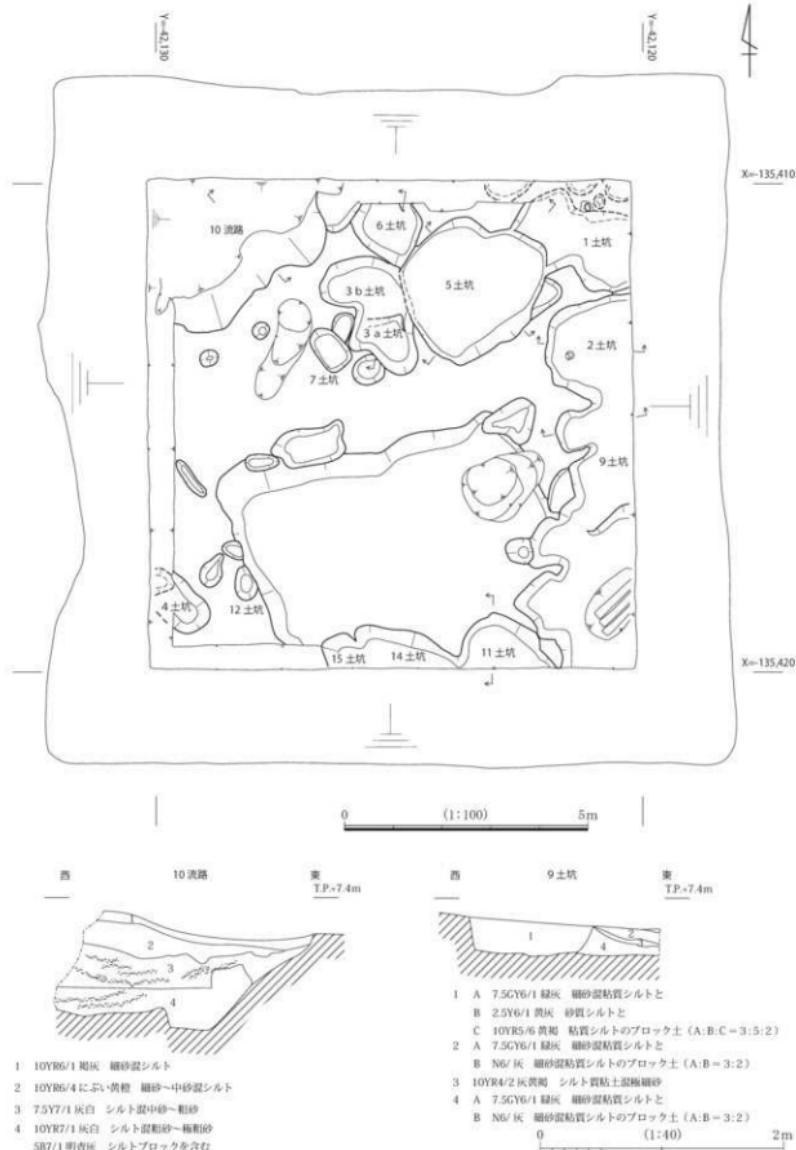


図 51 吹田操車場遺跡 3区 第1面 平面図及び土坑・流路断面図

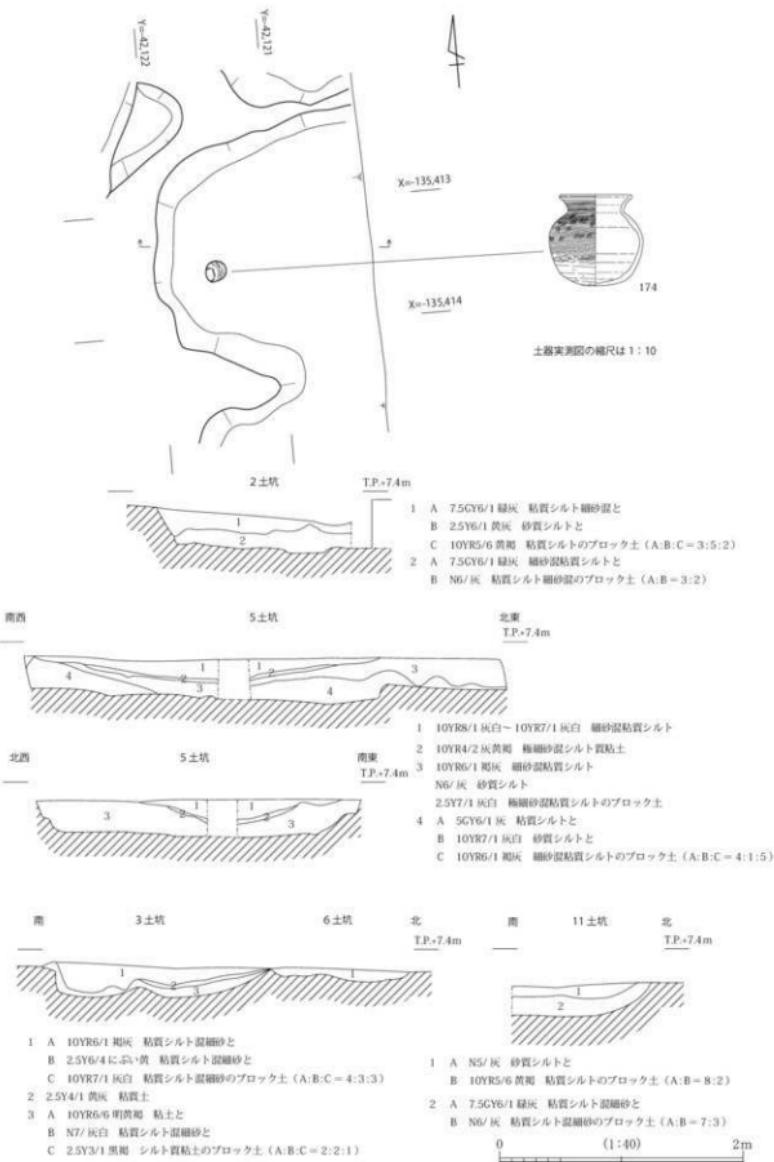


図 52 第1面 土坑平・断面図

図53－171・172は3土坑から出土した須恵器杯蓋である。7世紀前半～後半（TK43～TK209型式併行）代の所産。従前の調査においても群集土坑からの杯蓋や杯身の出土は少ないとされており、今回においても稀有な例である。173は11土坑から出土した須恵器甕である。174は2土坑から出土した須恵器甕である。口縁部は10%程度しか残存していないが、体部は完存である。焼成は不良。図右側の肩から胴部にかけて幅約15cm程度が著しく磨滅している。何かとの接触を繰り返したのであろうか。

10 流路（図51）

調査区の北西隅で検出した流路。南肩のみ検出した。N-51°-Eに軸をもち、北東から南西にはしると考えられる。検出長は約4m、幅2m以上、深さ約0.8mを測る。断面形は逆台形状を呈するとと思われる。埋土は大きく4枚に分かれる。最上層は弱く土壤化した褐灰色細砂混シルト、上層はにぶい黄橙色細～中砂混シルト、中層が灰白色シルト混粗～極粗砂である。下層も灰白色シルト混粗～極粗砂であるが、地山由来の明青灰色シルトブロックを含んでいる。出土遺物がなかったため、形成時期が不明であるが、平面検出時に群集土坑の一部を切っていることが明らかとなったことから、古代以降のものと想定される。

落込み

調査区中央から南側に位置する。落込み南側には群集土坑が広がるため、現状で平面「コ」字状を呈している。長軸約6m、短軸約3m、深さ約0.05～0.1mを測る。底面には地山である黄橙色系粘土が残っており、ほぼ平坦であることを勘案すれば、先述した群集土坑の集合体ではなさそうである。作業スペースとして活用したのであろうか。



図53 3区 遺構出土遺物

第5節 4区の調査

4区はX = -135,370 ~ -135,400・Y = -42,060 ~ -42,080にあたり、汚染土壌を撤去するために設定された調査区である。平面はクランク状を呈し、調査範囲は約400 m²の調査区である。このうち汚染土撤去の対象が浅い箇所（調査区北西部）とボックスカルバートが埋設されている部分（調査区北東部）を調査から外し、実質の調査面積は約356 m²となった。

（1）第1面（図54）

第0層を掘削し終えて検出した灰色系細～中砂混シルト上面を第1面とした。第1面はほぼ平坦な地形で、標高はT.P. + 7.5 m前後である。検出した遺構には、溝や鋤溝、溜池がある。

2溝

調査区南東隅で検出した北東から南西にはしる溝である。2溝は幅約1.3 m、深さ約0.2 mを測る。溝の中央部分は調査区外であったため未確認であるが、検出長は約10 mを測る。溝は北側肩部が二段に掘り込まれており、断面形は柄杓状を呈する。埋土は灰～黄灰色シルトで汚れた土壌であった。

溝はN-40°-Eを軸にして、北東から南西にはしる。東西両端は調査区外へと延びる。この溝が指向する方位や埋土の様相、規模等は、平成21・22（2009・2010）年度に実施した基盤整備工事（貨物専用道路）に伴う調査で確認した旧東海道線の側溝に類している。さらに、図45の南壁断面図で示したように、溝の北西側で旧東海道線軌道盛り土と思われる砂礫層が確認出来たことから、当溝も旧東海道線軌道敷に伴う南側側溝である可能性が高い。

鋤溝

調査区南西部でN-35°-Wに軸をもつ鋤溝群が僅かにみられた。他の部分では耕作痕は既に削平されている可能性が高い。鋤溝は幅約0.1 m、深さ約0.02 m前後である。出土遺物がみられず、時期を決し難い。

1・3溜池（図54・54-175・176）

調査区北東部において2基の溜池を切り合った状態で検出した。1溜池は北肩と西肩が確認出来たが、その多くは調査区外へと広がっているため、全容は明らかにし得ない。検出した規模は長軸で約12 m、短軸で約6.5 m、深さ約3 mであった。埋土は地山や包含層由来のブロック土であった。出土遺物には汽車土瓶や瓦などがみられた。近世以降に掘削されたものである。

3溜池は1溜池に切られており、西肩の一部のみ確認出来た。肩口でみられた埋土は2枚あり、上層が灰色シルト質粘土、下層が灰色細砂混シルト質粘土である。出土遺物には土師器、瓦質土器、国産陶器、須恵器、土師器などがみられた。出土遺物から考えれば、15世紀後半頃に掘削された溜池と思われる。図54-175は土師器皿である。所謂「へそ」皿。口縁端部はやや尖り気味におさめる。体部外面中程にユビオサエが顕著にみられる。橙色系胎土。京IX期古～X古段階（14世紀後半～15世紀後半）の所産であろうか。176は瓦質土器片口捏鉢。全体的に剥落が著しく調整は不明瞭。15世紀後半～16世紀前半の資料であろうか。

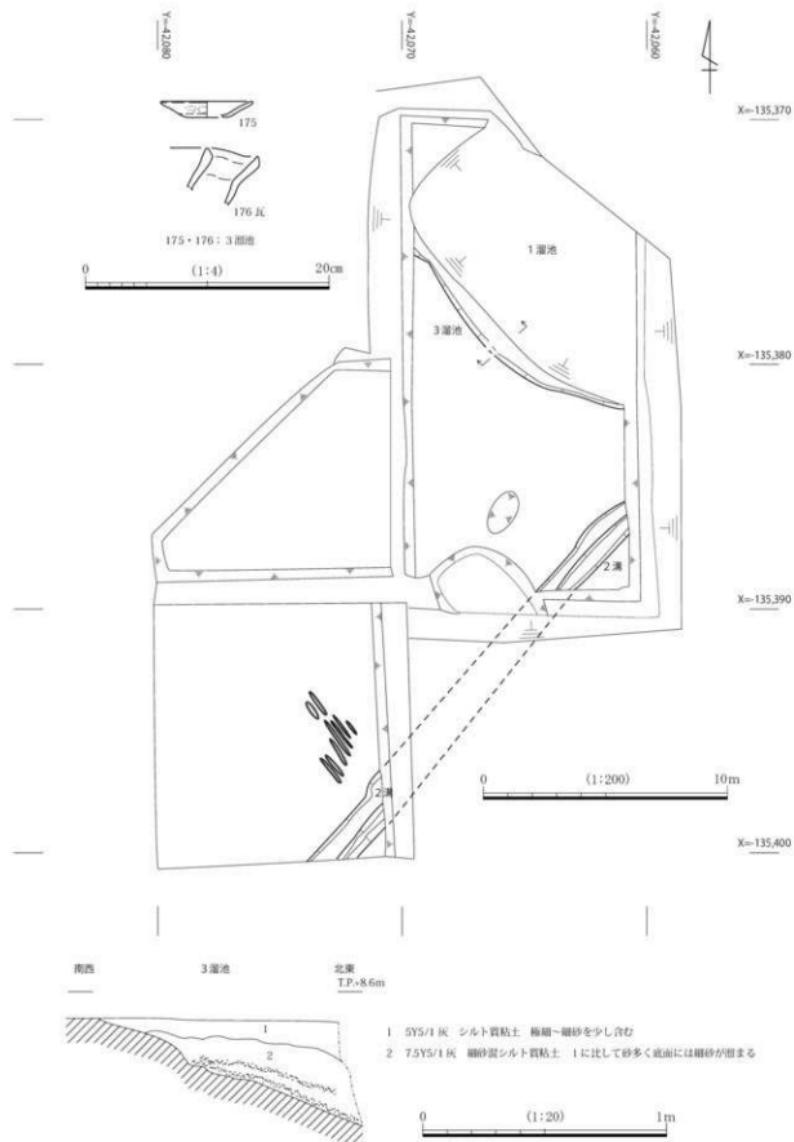


図 54 吹田操車場遺跡 4 区 第 1 面 平面図及び遺構断面図・出土遺物

(2) 第2面 (図55～60・図版25～27・29)

第1層の灰色系細～中砂混シルトを掘削して検出した灰～褐灰色シルト上面で精査を行なったが、明確な遺構を認められなかった。そこで、第2層である灰～褐灰色シルトを掘削して検出した明黄褐色シルト質粘土の上面を第2（地山）面として調査を行なった。第2面は北から南に向けて緩やかに下がる地形となり、標高はT.P. + 7.3～7.5 mである。検出した遺構には、周辺の調査でも確認されている群集土坑や溝、落込みがある。

13溝 (図56・57-177～183・図版25・26・29)

調査区南東部において検出した平面形「く」の字状を呈する溝である。溝はN-33°-Eを軸に北東から南西にはしり、X=-135.3865・Y=-42.065付近でほぼ直角に屈曲し、N-45°-Wを指向して北西から南東にはしる。東肩の一部は後述する14落込みに切られる。

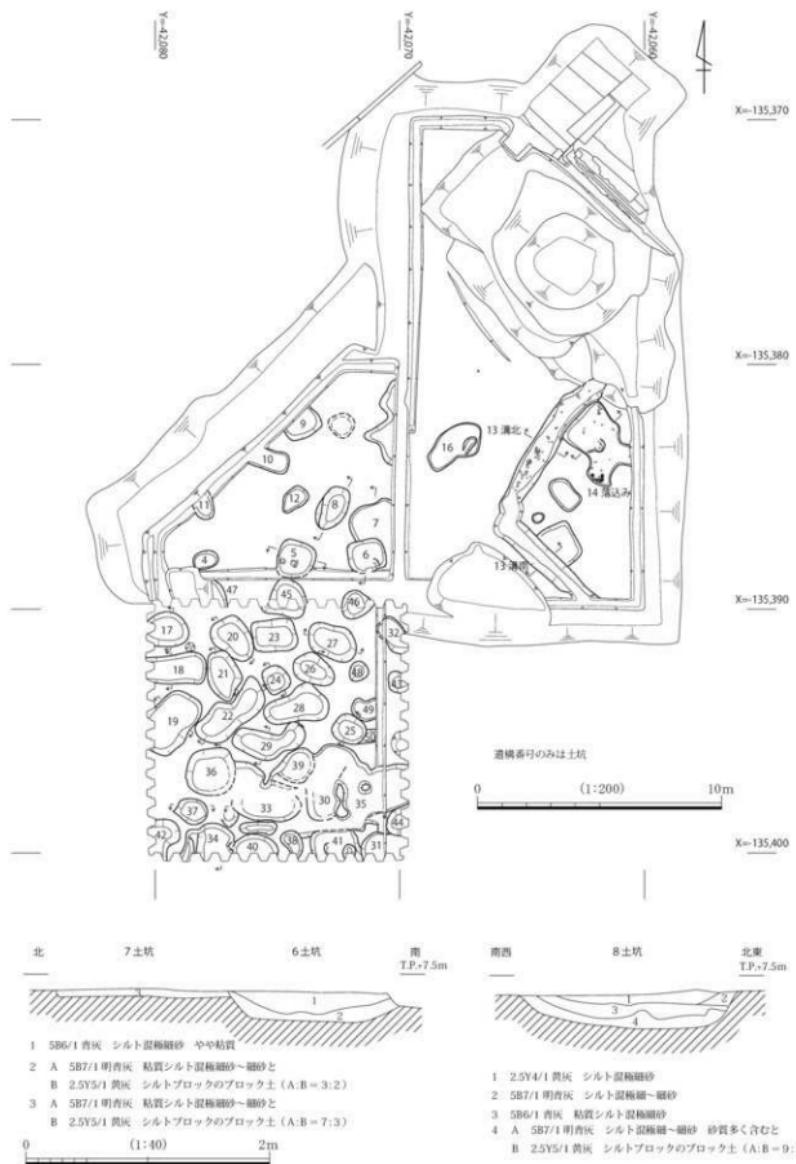
溝は幅約0.9～1.0 m、深さ約0.15～0.25 mを測り、検出長は約7 mであった。溝北側は第1面で検出した溜池に削平され、南側は調査区外へと延びる。断面形は扁平な逆台形を呈する。埋土は3～4枚に分かれ。上層の褐灰色粘質シルトからは細片となった須恵器甕や杯、鉢などが出土している。出土遺物から7世紀後半頃に掘削された溝と考えられる。後述する群集土坑がこの溝よりも西側に掘削されていることを勘案すれば、溝は群集土坑と何らかの施設を区画するためのものと想定出来よう。

図57-177は須恵器杯蓋。口縁端部は丸くおさま、口縁部内面にはかえしがみられる。178は杯A。体部から口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がる。口縁端部は尖り気味におさまる。179は杯である。体部から口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に仕上げる。高台の有無が確認出来ないが、杯Bであろうか。いずれも7世紀後半（飛鳥II～III期）の所産である。

180・181は須恵器甕である。180の口縁部は断面方形に仕上げ、口縁端部は外傾し、面をなす。口縁部外面には沈線と断面鉢形を呈する突帯が各1条廻る。また、頸部にも沈線が1条みられる。181は頸部から口縁部が大きく外反する。口縁部は下方に垂下させる。口縁上端部は摘み上がるよう強いヨコナデを施しており、断面鈍い三角形状を呈する。また、そのヨコナデによって口縁部外面上半部は凹線状に窪む。頸部には2条1対の沈線帯が2箇所に廻る。沈線帯の上位には櫛描き及びヘラ描きによる波状文が廻っている。外面には自然釉が付着。182は須恵器鉢である。口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がる。口縁端部は僅かに内傾。外面には細かなカキメを施す。

14落込み (図56・57-184～186・図版29)

調査区南東部で検出した落込み。落込みは13溝と切り合い関係にあり、当落込みのほうが新しい。落込みの平面形は不定形で、断面形は浅い皿状をなす。落込み東端部は側溝に切られ不明である。検出した規模は長軸約2.6 m、短軸約2 m、深さ約0.1 mを測る。落込みの埋土は2枚に分かれ、上層が褐灰色細～粗砂混シルト、下層が褐灰色シルトである。上層には一辺3～5 cm大の礫とともに細片となった須恵器杯・杯身・甕・高杯（長脚）、土師器、瓦、焼土塊などがみられた。図57-183は須恵器甕である。頸部から口縁部が大きく外反する。口縁部は肥厚させる。口縁上端部は摘み上がるよう強いヨコナデを施しており、断面三角形を呈する。また、そのヨコナデによって口縁部外面上半部は凹線状に窪む。頸部には明瞭な沈線が3条、浅い沈線または段が1条廻る。外面には自然釉が付着する。184は複弁蓮華文軒丸瓦。遺存状態が悪く詳細は不明である。外区には珠文が廻る。吉志部瓦窯産の軒丸瓦



であろう。185は須恵質の壺。186は砾石である。6面に擦痕が確認出来る。肌理が細かいため、仕上げ砥石と思われる。珪質頁岩製であろうか。

群集土坑（図 58～60・60－187～191・図版 26・27・29）

調査区西半部に集中して掘削されている。特に調査区南西部において密にみられ、北側に行くほど疎らになる傾向が窺える。今調査区では、他の調査区に比して、土坑の切り合いが少なかったため個々の輪郭を捉えやすかった。しかし、南西端に位置する土坑群は、周辺部での調査同様、重複して掘削され

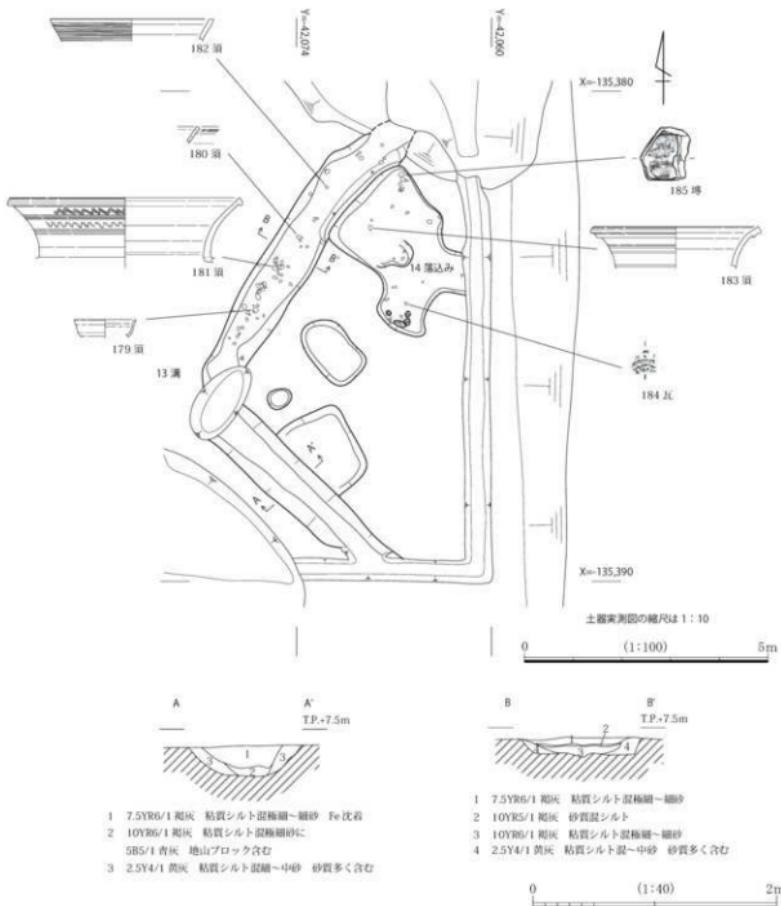


図 56 第2面 13溝平・断面図

ており、切り合いを正確に捉えて個別の平面形を押さえるのが困難な状況にあった。

土坑の輪郭を明確に捉えた箇所でみると、土坑の平面形は長方形を基調にしているものが多い。平面規模は長軸 1.5 ~ 2.0 m、短軸 1 ~ 1.5 m が基本的なサイズであったと考えられる。検出時に切り合いを確認出来ず単独の土坑としたものでも、基本サイズよりも大きい土坑（19・22・28・29 土坑等）は、2 基の土坑が切り合ったものである可能性が高い。土坑の深さは概ね 0.2 ~ 0.4 m であった。断面形は浅い皿状や逆台形呈するものが主体である。

土坑にはブロック土で完全に埋め戻したもの（19・21・28 土坑等）と、一定程度埋め戻した後、放置した結果自然堆積層がみられるもの（5・17・18・22 土坑等）、掘削後しばらく放置され、自然に埋積した窪みを人為的に埋め戻したもの（25・26・27 土坑等）とがある。19・21 土坑等は掘削後即座に、掘削に伴う排出土で埋め戻した結果と想定される。いずれの土坑も砂質分が強くなったところで掘削を停止しているため、粘土を狙って掘削したものと考えられる。中には、5・24・30 土坑のように須恵器壺・壺・横瓶が出土する例もあるが、基本的に土坑内からの遺物の出土が少なく時期を明確にし難い。周辺での調査状況を勘案すれば古墳時代後期から古代の範疇の所産であろう。

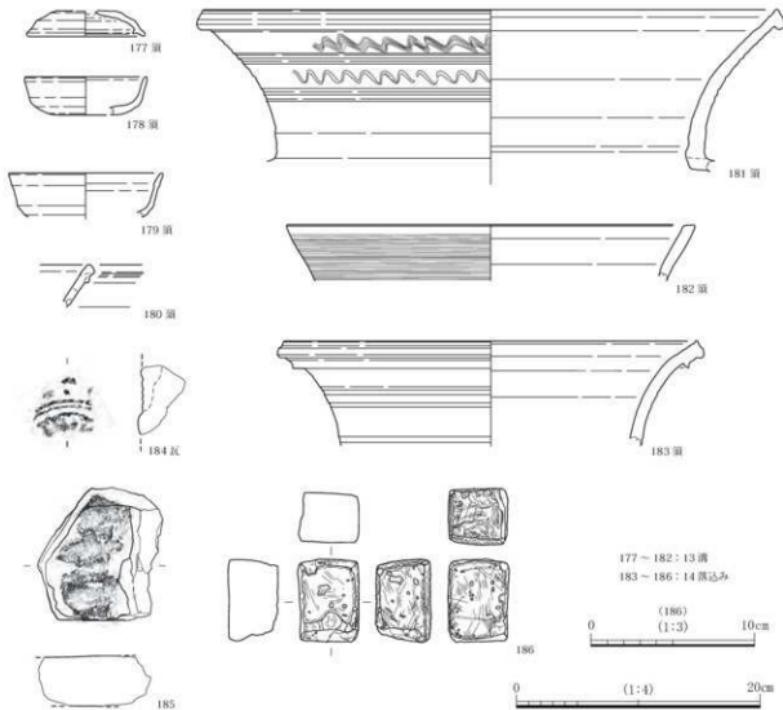


図 57 第 2 面 13 溝・14 落込み出土遺物



- 1 7.5YR6/1 黄灰 粗砂混シルト 点線より東側特に粗砂質者
φ3~5mmの礫も含む
- 2 7.5YR5/1 黄灰 シルト 遺物、炭疽根、土師器、瓦等多い
候土塊も見られる 1の底面付近はFe沈着目立った 砂の節理か

南 西 18 土坑 北
TP. +7.4m



- 1 A 10BG7/1 明青灰 極細砂混シルトと
B 10YR6/1 黄灰 極細砂混のプロック土 (A:B = 9:1)
- 2 2.5Y 6/1 黄灰 極細砂混シルト 壕化物を含む
- 3 5BG7/1 明青灰 シルト 2.5Y7/1 黄灰 極細砂ブロック・壌化物を含む

南東 20 土坑 北西
TP. +7.4m



- 1 A 5BG7/1 明青灰 シルトと
B 10YR6/1 黄灰 極細砂のプロック土 (A:B = 8:2) 壕を含む
- 2 10YR5/1 黄灰 シルト
- 3 10YR7/1 黄灰 極細砂混シルト
- 4 5BG7/1 明青灰 中砂混シルト 10YR5/1 黄灰 シルトブロックを含む (地山か?)

北東 22 土坑



- 1 A 5Y6/1 黄 極細砂混シルトと
B 5BG7/1 明青灰 極細砂混シルトのプロック土 (A:B = 8:2)
- 2 2.5Y6/1 黄灰 シルト 調査含む わずかに 5BG7/1 明青灰 シルトブロックを含む
- 3 A 7.5GY8/1 明緑灰 シルト質粘土と
B 2.5Y6/1 黄灰 極細砂のプロック土 (A:B = 8:2)
- 4 3と同質であるが (A:B = 8:2)
- 5 A 7.5GY8/1 明緑灰 シルト質粘土と
B 5Y7/1 黄 極細砂のプロック土 (A:B = 1:1)
- 6 5Y6/1 黄 シルト質粘土 [第4層] 跳み込みか

北東 25 土坑 南西
TP. +7.4m



- 1 A 2.5Y6/1 黄灰 極細砂混シルトと
B 10YR8/1 黄灰 シルト質粘土 (地山) のプロック土 (A:B = 9:1)
- 2 A 7.5Y8/2 黄灰 極細砂混シルトと
B 2.5Y6/1 黄灰 極細砂混シルトのプロック土 (A:B = 8:2) 壕を含む
- 3 2.5Y7/1 黄灰 極細砂混シルト 壕を含む
- 4 2.5Y5/1 黄灰 質粘シルト 壕を含む



- 1 5Y7/1 黄灰 極細砂混シルト
- 2 10YR5/1 黄灰 シルト 壕化物を含む
- 3 5Y7/1 黄灰 シルト混極細砂 1よりも砂質分離
- 4 10YR5/1 黄灰 極細砂混シルト
- 5 5Y7/1 黄灰 シルト混極細砂
- 6 5Y7/1 黄灰 極細砂混シルト 10YR5/1 黄灰 シルトブロック含む

東南 19 土坑 西北
TP. +7.4m



- 1 A 5BG7/1 明青灰 シルトと
B 10YR6/1 黄灰 極細砂のプロック土 (A:B = 8:2) 壕を含む
- 2 1よりも 10YR6/1 黄灰 極細砂の含み少ない (A:B = 9:1)

南東 21 土坑 北西
TP. +7.4m



- 1 5BG7/1 明青灰 極細砂混シルトと
2.5Y6/1 黄灰 極細砂のプロック土 (A:B = 9:1)

北西 24 土坑 南東
TP. +7.4m



- 1 A 2.5Y4/1 黄灰 シルトと
B 2.5Y7/1 黄灰 極細砂と
- C 7.5GY8/1 明緑灰 シルトのプロック土 (A:B:C = 3:4:3)
- 2 5GY8/1 黄灰 極細砂混シルト
- 3 A 2.5Y7/1 黄灰 極細砂と
B 2.5Y7/1 黄灰 極細砂
- C 7.5GY8/1 明緑灰 シルトのプロック土 (A:B:C = 4:4:2)
- 4 A 5GY8/1 黄灰 シルト質粘土と
B 5Y6/1 黄 極細砂混シルトのプロック土 (A:B = 9:1)

北東 26 土坑 28 土坑 南西
TP. +7.4m



- 1 A 5GY8/1 黄灰 シルト質粘土と
B 5Y7/1 黄灰 極細砂のプロック土 (A:B = 1:1)
- 2 2.5Y5/1 黄灰 質粘シルト
- 3 2.5Y7/1 黄灰 極細砂ヘシルト やや粘性あり
- 4 A 2.5Y5/1 ~ 6/1 黄灰 シルトと
B 2.5Y7/1 黄灰 極細砂
- C 5Y8/2 黄灰 極細砂混シルトのプロック土 (A:B:C = 2:1:7)

0 (1:40) 2m

図 58 第2面 遺構断面図 (1)

図60-187～189は5土坑出土の須恵器。187は杯B。高台は底部最外側の体部への立ち上がりに接するように付く。7世紀後半（飛鳥II期）の所産。188は壺である。50%程度残存している。焼成不良で、全体的に磨滅が著しい。特に割れ口の磨滅が顕著である。189は横瓶。外面は格子目タタキのちカキメを施す。内面には被蓋部の継ぎ目が明瞭に残る。190は30土坑出土の須恵器壺。口縁上端部は上方に摘み上げるようにヨコナデを施し、断面三角形状を呈する。肩部外面はタタキのち細かなカキメを施す。191は24土坑出土の須恵器壺。焼成が不良で、全体的に磨滅、剥落が著しい。外面下半は格子目タタキ、上半はカキメが施されるのか。

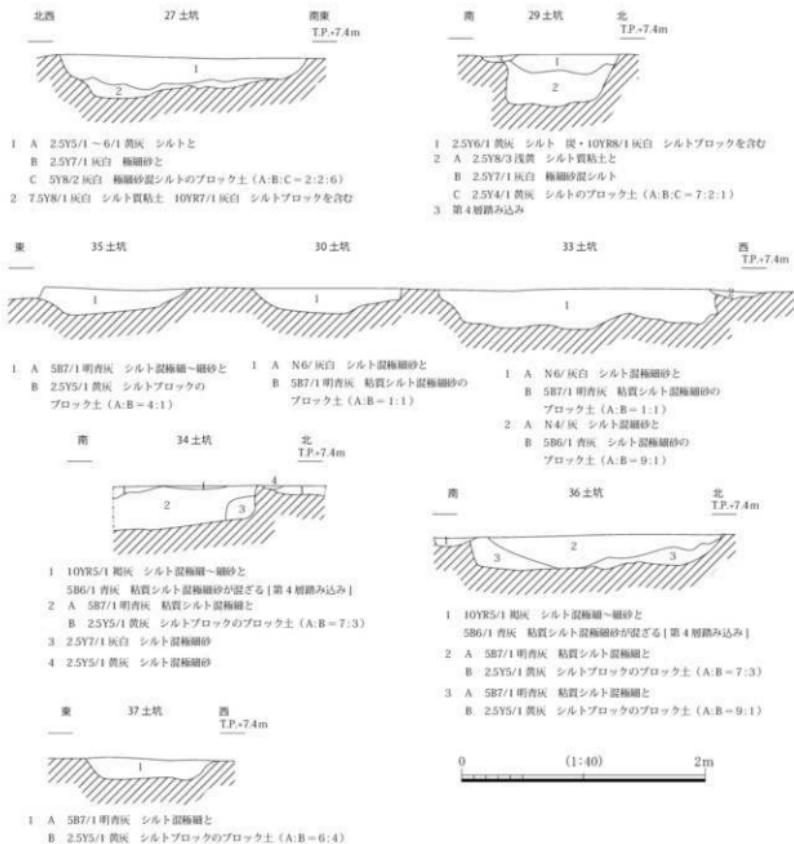


図59 第2面 遺構断面図（2）

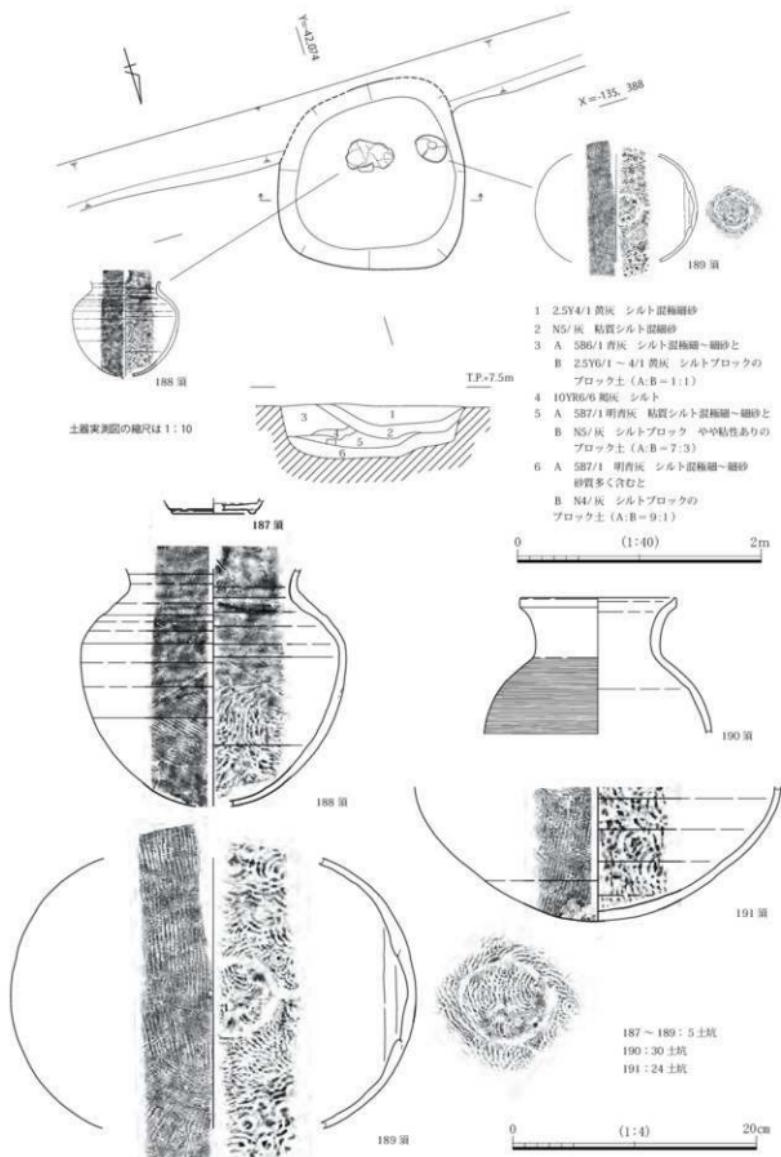


図 60 第 2 面 5 土坑平・断面図及び遺構出土遺物

(3) 包含層出土遺物 (図 61 - 192 ~ 208・図版 30・31)

4 区の包含層からは、他の調査区に比して、多様かつ多量の遺物の出土があった。特に第2面で検出した 13 溝周辺を覆う包含層からの出土が顕著であった。出土遺物の大半は小片となっているため、図化出来たものは少なかったが第2層出土資料を中心に記載する。

192 ~ 197 は第1・2層出土。側溝等の掘削により出土したもので、出土層位の確定が困難であった資料。192・193 は白磁である。192 は白磁碗。高台は削り出し高台。体部外面下半は縦位のヘラ削りを施す。内面見込みには断面 V 字状の沈線が 1 条廻る。内面は全面施釉であるが、外面の体部下半以下は露胎となっている。白磁碗 IV 類 1 a、11 世紀後半～12 世紀前半の資料か。193 は白磁皿。胎土は白色の陶器質で、釉は灰白色。内外面とも全面施釉。但し、高台疊付けは露胎となっている。高台は貼り付け高台か。16 世紀代の所産（森田編年白磁皿 E 類）であろう。194 は緑釉陶器椀。混和材をほどんど含まない緻密な胎土を使用した硬質の緑釉陶器。高台は削り出し高台である。内面見込みに、淡い

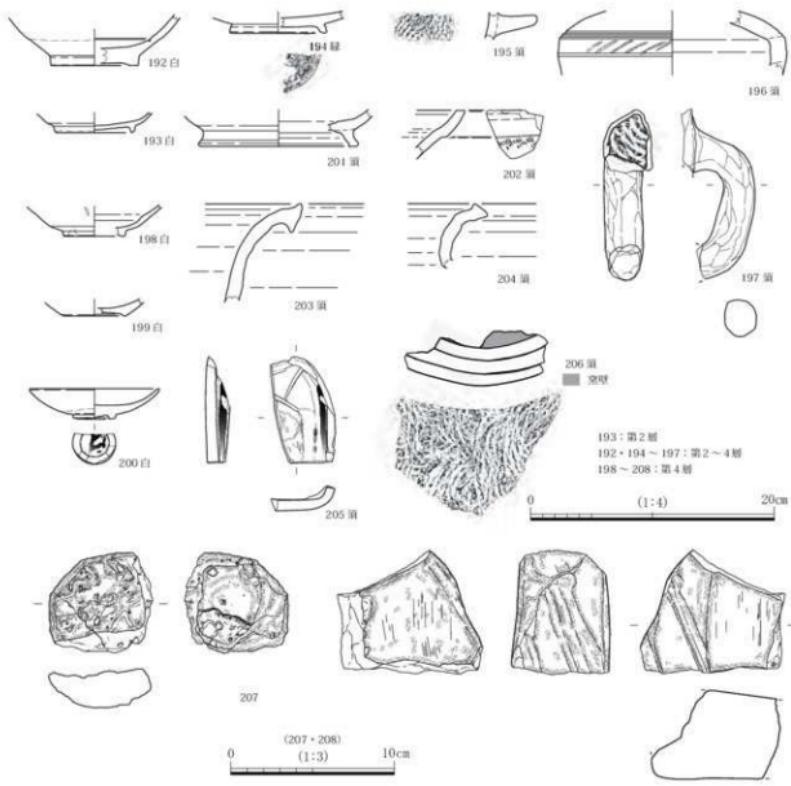


図 61 包含層出土遺物

緑色の釉が掛けられる。高台や体部外面の釉は極めて薄い。高台内や豊付けは露胎である。195は須恵器羽釜の鐔。鐔上面にはナデを、下面にはカキメを施す。内面には同心円の当て具痕がみられる。196は須恵器壺。非常に厚い器壁をもつ。肩部及び胴部外面に浅い沈線が廻る。沈線間には櫛状工具による連続刺突文がみられる。7世紀代の所産であろうか。197は須恵器把手。把手外面は細かな面取り状となっている。内面は同心円の当て具痕がみられる。

198～208は第2層出土。198～200は白磁皿。198の釉はやや緑がかかったもの。高台豊付け以外は施釉される。口縁部が遺存しないため詳細は不明であるが、体部外面にやや凹凸がみられることから、輪花状になっている可能性がある。高台は削り出し高台である。白磁皿V類1か。12世紀中頃～後半の所産であろう。199の釉はやや緑がかかったもの。底部外面を除き、全面施釉される。底部は上げ底状を呈する。白磁皿V類2である。11世紀後半～12世紀前半の資料。200は白色の陶器質の胎土をもち、釉はやや緑がかかった乳白色。体部外面下半以下は露胎となっている。高台は削り出し高台で、豊付けを浅く抉る抉り入り高台となっている。抉りは3箇所にあったと思われる。高台内に「d」字状の墨書き号がみられる。15世紀代の所産（森田編年白磁皿D類）。本来は第1層の帰属であろう。

201は須恵器壺。焼成はやや甘い。高台は貼り付け高台。202～204は須恵器甕。202は内湾しながら立ち上がる口縁部をもつ。口縁端面は浅く凹線状に窪む。頸部には櫛状工具による連続刺突文が施される。203の口縁上端部は摘み上げるようにヨコナデを施し、断面が鈍い三角形状を呈する。また、ヨコナデにより口縁部外面上半は四線状に窪む。頸部外面は平行タタキのちナデを施す。204の口縁上端部は摘み上げるようにヨコナデを施し、断面が鈍い三角形状を呈する。頸部内面～口縁部外面に自然釉が付着。

205は須恵器硯。内面は極めて平滑。陸部奥にT字状を呈する突起がみられる。突起は幅0.2～0.4cm、高さ0.1cm。側壁内面には墨痕が残る。外面には自然釉が付着。脚は遺存していない。風字硯であろう。206は須恵器甕の溶着資料。須恵器甕体部片が3点重なり、さらに窯壁体も付着する。甕の破面に発泡している箇所がみられることから、窯構築材或いは置き台として使用されたものであろう。207は鉄滓。2方向が破面となっており、平面扇形を呈する。全体的に錆化が進んでおり、亀裂が顕著にみられる。表裏面とも比較的滑らかで直径1mm前後の気孔が僅かに認められる。表裏面ともに炭の嗜み込みはみられない。裏面には炉床粘土の付着は認められなかった。古代～中世の所産であろう。メタル度は△、磁着度は4。重量は116.7gを測る。208は砥石。擦痕はあまり明瞭ではないが、3面が非常に平滑となっている。中砥であろうか。

第6節 5区の調査

5区は1・6区から南西に約300m離れたX=-135,690～-135,700・Y=-42,400～-42,410にあたり、汚染土壌を撤去するために設定された調査区である。平面は正方形を呈し調査面積は約100m²である。

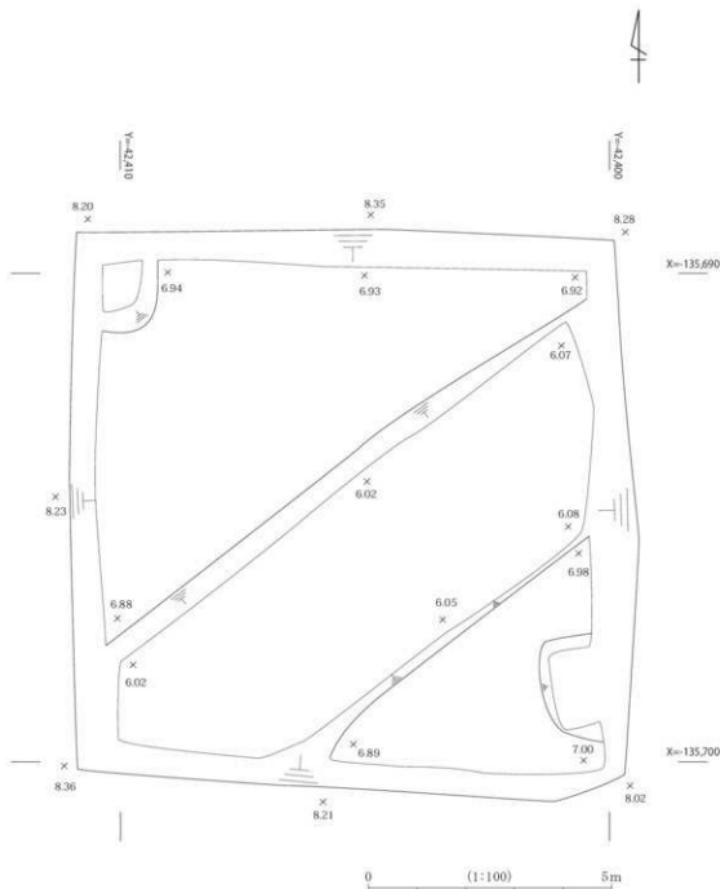
（1）第1面（図62・図版27）

当区は近現代に大幅な土地改変を受けているようで、調査区を北東から南西に向けて斜めにコンクリート製構造物が構築されていた。その為か、現地表面下約1.3～2.2m(T.P.+6.0～6.9m付近)

まで擾乱を受け、古代～中世の包含層や近世作土層などは全て失していた。

擾乱に伴う埋め戻し土を全て除去した段階を第1面として精査を行なったところ、調査区全体に橙色を呈する硬く締まった砂礫層が広がることが明らかになった。この砂礫層は周辺ではみられない堆積物であったため、一部で下層確認を行なったところ、1m以上掘削してもなお状況に変化が認められず、遺構・遺物とともに確認出来なかった。

周辺での吹田市教育委員会による試掘成果や、大幅な土地改変を被っている状況から推察すれば、吹



〔標高値はT.P. +〕

図62 吹田操車場遺跡 5区 第1面 平面図

田操車場遺跡で普遍的に確認され地山と捉えている黄色系シルト～粘土は、今回検出した面よりも高い位置にあったと想定され、既に消失したものと捉えられる。今回確認した橙色砂礫層は、地山の中でも下位に位置する堆積物である可能性が高い。

第7節 7区の立会い調査

7区は5区の南西約420mの位置にある。立会い範囲は、X = -135.970 ~ -135.980・Y = -42,700 ~ -42,710に囲まれた10×10mの区画のうち、公道部分と汚染土を既に撤去し終えた箇所を除いた約28m²である。

立会い箇所は近現代に大幅な土地改変を受けているよう、北東から南西に向けてはしるコンクリート製構造物が構築されていた。その為か、現地表面(公道面)下約2.3~2.4m(T.P.+5.3~5.4m付近)まで擾乱を受け、古代～中世の包含層や近世作土層などは全て失していた。

擾乱に伴う埋め戻し土及びコンクリート製構造物を除去した段階で精査を行なったところ、非常に硬く締まった黄色～青灰色系中～粗砂がみられたが、遺構・遺物ともに確認出来なかつた。周辺での吹田市教育委員会による試掘成果(地山面の標高:T.P.+6.8m前後)や大幅な土地改変を被っている状況から推察すれば、吹田操車場遺跡で普遍的に確認され地山と捉えている黄色系シルト～粘土は、今回検出した層位よりも高い位置にあったと想定され、既に消失したものと捉えられる。今回確認した黄色～青灰色系中～粗砂は、地山の中でも下位に位置する堆積物である可能性が高い。

第8節 小結

今次の調査地は汚染土壤の撤去を目的に設定されたこともあり、各調査区の規模が小さく、点的であったこともあり、耳目を集める調査ではなかったが、従前の調査成果を補強する成果を積み上げることが出来た。調査地は地形的に高位に位置する箇所が多かったため、堆積層が薄くて結果的に検出した遺構面は最大2面であった。

所謂地山面では群集土坑を検出した。以前に行なわれた周辺での発掘調査においても、同様な土坑群を検出している。今次の調査でその範囲が更に広がることを確認した。土坑群は切り合い関係をもつものが多く、個別の詳細を把握し難い状況であった。個別の具体を検討出来た例では、平面方形を呈するものが多くみられ、長軸1.5~2.0m、短軸1~1.5mが基本的なサイズであったと考えられる。これを逸脱する規模の土坑も色々みられたが、それらは複数の土坑が切り合って掘削された結果と推察される。掘削深度は概ね0.2~0.4mであり、底面の砂質分が強くなるところで掘削を停止する傾向がみられる。土坑の断面形は皿状を呈するものが一番多く、次いで逆台形状、方形となる。袋状の断面となるものはみられなかった。土坑埋土の状況は、①ブロック上で完全に埋め戻したもの、②一定程度埋め戻した後に放置した結果、自然堆積層がみられるもの、③掘削後しばらく放置され、自然に埋積した窪みを人為的に埋め戻したもの、の3タイプがあった。①のような埋土は掘削後即座に、掘削に伴う排出土で埋め戻した結果と想定される。土坑内からは遺物の出土が僅少であるため、個々の掘削時期を特定するには至らないが、少数ながら出土した資料から類推すれば7世紀代に掘削されたものが多いと思われる。なお、出土遺物は須恵器甕が圧倒的に多く、焼成不良品で曲面を残した破片が顕著である。

こうした土坑群は現在、所謂粘土探掘坑と捉えられる場合が多い。今回確認した土坑群も粘土探掘坑と考えるならば、この地で採取された粘土を用いて、吹田操車場遺跡から指呼の間にある千里丘陵で、7世紀以降に須恵器窯や瓦窯が操業されたものと推察される。

また4区では、群集土坑の東側で平面「く」の字状を呈する溝を検出した。溝周辺では土坑群がみられなかったことから、溝は群集土坑と何らかの施設を区画するために掘削された可能性が高いと言える。

土坑群が広がる高位部以外の低まった部分（2区）では、北西から南東にはしる自然流路がみられた。自然流路からは縄文土器片が出土している。周辺部の調査においても、縄文土器やサヌカイト製の石器が出土しており、当該期の人々の営みが徐々にではあるが明らかになりつつある。

古代以降の遺構面では鋤溝を検出し、耕作地が広がっていたことを明らかにした。鋤溝はN-34°～35°-Wに軸をもつものを主体にし、一部それに直交するN-55°～60°-Eを指向するものが存在した。古代以降の当地周辺は、岬下郡南部条里の条里地割（N-33°-W）が施行されており、今回確認した鋤溝群もこれに則るものであることが明らかとなった。

以上、局所的な状況ではあるが吹田操車場遺跡における土地利用の動向をある程度明らかに出来た。現在進行している調査の成果や従前の成果と合わせて総合的に検討を加えれば、より一層鮮やかに吹田操車場遺跡を復元出来よう。今後に期待するところ大である。

表1 群集土坑一覧表

土坑番号	法量(m)			平面形状	切合關係	断面形状	底面高(T.P.+m)	理土状況	法量(m)			平面形状	切合關係	断面形状	底面高(T.P.+m)	理土状況							
	長径	短径	深さ						長径	短径	深さ												
1-3 (1.20) 0.80 0.19	II	○	1	7.28	a	4-17 1.75 145 0.28	III	×	4	7.01	c												
1-4 (1.10) (0.70) 0.21	—	×	1	7.23	a	4-18 (2.40) 1.20 0.26	II	×	3	7.03	c												
1-5 (1.10) (0.70) 0.16	—	○	1	7.25	a	4-19 2.90 1.65 0.34	II	×	3	6.95	a												
1-6 (0.60) (0.40) 0.12	—	○	1	7.30	a	4-20 2.00 1.50 0.28	III	○	4	7.00	d												
1-7 (1.20) 1.10 0.12	III	○	1	7.30	a	4-21 1.90 1.40 0.21	III	○	1	7.09	a												
1-8 2.00 1.50 0.16	II	○	4	7.30	a	4-22 3.10 1.35 0.37	III	×	5	6.92	c												
1-9 (2.50) (1.30) 0.16	—	○	1	7.29	a	4-23 1.80 1.30 0.25	II	×	4	7.05	a												
1-10 (1.10) (0.60) 0.15	—	○	1	7.31	a	4-24 1.10 1.00 0.33	II	×	4	6.96	a												
1-11 (3.00) (2.30) 0.18	—	○	1	7.28	a	4-25 1.30 1.00 0.28	II	○	4	7.04	d												
1-12 (2.00) (1.20) 0.25	—	○	4	7.20	a	4-26 1.80 1.15 0.24	III	○	1	7.05	d												
1-13 1.90 (1.20) 0.15	—	○	1	7.28	a	4-27 2.00 1.30 0.31	III	×	1	6.97	d												
1-14 1.50 0.80 0.16	II	○	1	7.28	a	4-28 2.70 1.60 0.2	III	○	4	7.09	a												
1-15 1.00 0.60 0.18	II	○	1	7.28	a	4-29 3.00 1.15 0.4	III	×	4	6.87	a												
1-16 1.40 1.40 0.18	II	×	1	7.26	a	4-30 4.00 1.50 0.25	III	○	1	7.05	a												
1-17 1.20 0.75 0.07	II	×	1	7.37	a	4-31 (1.60) (1.15) 0.16	III	○	4	7.07	a												
1-18 (1.80) (0.70) 0.17	—	○	1	7.28	a	4-32 (1.50) 0.90 0.22	II	×	1	7.07	a												
1-19 1.20 (0.80) 0.37	—	○	4	7.08	a	4-33 (2.00) (1.40) 0.22	III	○	5	6.90	a												
1-20 1.30 (1.00) 0.23	—	○	1	7.19	a	4-34 1.90 (1.20) 0.28	III	○	3	6.87	a												
1-21 1.50 (1.10) 0.23	—	○	1	7.19	a	4-35 2.30 (2.00) 0.23	III	○	1	7.06	a												
1-22 (0.90) (0.50) 0.23	—	○	1	7.22	a	4-36 1.95 (1.90) 0.35	II	○	4	6.89	a												
1-23 (1.00) (0.50) 0.17	—	○	1	7.28	a	4-37 1.20 1.00 0.12	III	×	4	7.09	a												
1-24 (0.80) (0.50) 0.19	—	○	1	7.25	a	4-38 1.15 0.75 0.29	III	○	—	6.93	a												
1-25 (0.60) (0.50) 0.28	—	○	—	7.17	a	4-39 (1.50) (1.25) 0.36	III	○	4	6.91	a												
1-26 1.00 0.80 0.17	II	×	1	7.25	a	4-40 1.80 (0.80) 0.2	I	○	1	6.89	a												
1-27 1.50 1.00 0.07	II	×	1	7.35	a	4-41 1.95 (1.00) 0.31	II	○	4	6.91	a												
1-28 1.60 1.30 0.05	II	×	1	7.39	a	4-42 (1.40) (1.00) 0.24	III	×	1	6.96	a												
1-29 0.95 0.55 0.04	II	×	1	7.41	a	4-43 0.90 (0.50) 0.17	II	×	4	7.12	a												
1-30 1.10 0.90 0.06	II	×	1	7.39	a	4-44 (1.20) (0.90) 0.33	III	○	4	6.92	a												
6-1 3.50 (1.20) 0.37	—	○	—	6.86	a	4-45 1.50 1.50 0.3	III	×	1	6.97	a												
6-2 (1.70) 1.30 0.2	—	○	—	6.98	a	4-46 1.20 1.10 0.09	I	×	1	7.17	a												
6-3 (1.60) (1.00) 0.1	—	○	—	6.91	a	4-47 (1.10) (0.50) 0.12	—	×	1	7.14	a												
6-6 1.50 (0.90) 0.26	II	×	1	6.97	a	4-48 0.90 0.80 0.14	I	×	2	7.14	a												
6-7 1.60 (1.00) 0.4	—	○	—	6.83	a	4-49 (1.00) (0.90) 0.11	III	×	1	7.18	a												
6-8 1.20 (1.00) 0.29	II	×	3	6.90	a	4-50 (0.50) (0.50) 0.18	—	○	1	7.13	a												
6-9 (1.30) (1.20) 0.15	—	○	—	7.04	a	平面形状 断面形状 理土状況																	
6-10 (1.30) 1.10 0.19	—	○	—	6.90	a	I:円形 1:楕形 a:ブロック土																	
6-11 (0.50) (0.50) 0.2	—	○	2	6.89	a	II:方形 2:U字形 b:自然堆積土																	
6-12 1.20 (0.70) 0.06	II	×	1	6.85	a	III:不定形 3:方形 c:ブロック土→自然堆積土																	
6-13 1.30 (0.90) 0.06	II	×	3	6.93	a	—:不明 4:逆台形 d:自然堆積土→ブロック土																	
6-14 2.00 (0.80) 0.11	II	×	1	7.28	a	5:凸状 6:凹状																	
6-15 0.90 (0.60) 0.4	I	○	2	6.90	a	—:不明																	
6-16 (1.00) (0.70) 0.08	—	○	—	7.18	a	法量欄の()付き数値は残存値 切り合い関係欄の○×は切り合いの有無を示す																	
3-1 (2.30) (1.70) 0.24	III	○	—	7.01	a																		
3-2 (2.40) (1.60) 0.37	—	○	—	6.90	a																		
3-3 (2.60) (1.60) 0.27	III	○	5	7.01	c																		
3-4 (1.00) 0.80 0.33	II	○	1	6.82	a																		
3-5 3.00 2.60 0.37	III	○	4	6.90	c																		
3-6 (1.40) (1.30) 0.1	II	○	1	7.14	a																		
3-7 1.00 0.60 0.18	II	○	1	7.09	a																		
3-8 (2.20) (1.20) 0.37	—	○	4	6.90	a																		
3-11 2.00 (1.10) 0.28	III	○	1	6.84	a																		
3-14 (1.80) (0.90) 0.33	—	○	1	6.74	a																		
3-15 (0.80) (0.70) 0.28	—	○	1	6.76	a																		
4-4 1.00 0.70 0.08	II	×	1	7.26	a																		
4-5 1.50 1.50 0.5	II	×	4	6.85	c																		
4-6 1.50 1.30 0.29	II	○	4	7.05	c																		
4-7 (2.00) (1.70) 0.03	II	○	1	7.28	a																		
4-8 1.90 1.20 0.3	II	×	1	7.05	c																		
4-9 1.50 (0.90) 0.18	II	×	4	7.22	a																		
4-10 (1.40) 0.80 0.16	II	×	1	7.21	a																		
4-11 (0.90) 0.80 0.29	II	×	1	7.07	a																		
4-12 1.20 0.80 0.09	II	×	—	7.25	a																		

第5章 西の庄東遺跡の調査

第1節 基本層序と遺構面

調査地はJR吹田駅の北西側に位置する。吹田駅とアサヒビール吹田工場に挟まれた狭小な範囲であり、北東から南西にかけて総延長約370mの細長い調査区である。工事用進入路を残しながら且つ、空撮用ラフタークレーンの使用限界距離を確保しながらの調査となった。その為、調査地を大きく八分割し、さらに工事用進入路用地が確保出来ない調査区間（1～5区）に関しては長軸方向に二分割して調査を行なった。また、遺物を多量に出土する遺構を確認した4区の東端部北側については調査範囲を拡張し、9区と称した。

西の庄東遺跡は、先述したようにJRやアサヒビール吹田工場に挟まれた箇所であるため、近現代の土地変更が著しく、隣接する吹田操車場遺跡で確認している近世～近代の作土層や中世・古代の包含層等が既に削平され、機械掘削完了時点で即地山となる地点が大半であった。従って、当遺跡における基本層序を構成する堆積層は明確にはし難いが、辛うじて最東端に位置する8区においてのみ純粹な堆積が確認出来た（図66）ので、これを代表させて基本層序として記述を進める。なお、ここで記載する調査面の呼称は8区におけるものであり、調査地全域で共通するものでないことをお断りしておく。

層序は大別7層に分層出来る。部分的に分層が可能な場合は新たな層番号を付与せず、枝番を設定して対応した。

第0層は明治期の耕作土（灰黒色シルト混細砂）・吹田操車場造成用盛土（明黄褐色シルト～極細砂・粘土等）・近現代のバラスト層で構成され、近代～現代の所産である。これらのうちバラスト層のみが調査地全域で認められる。

第0層を構成する各層の層厚は、概ね旧耕作土が0.2m、吹田操車場盛土が0.3m、バラスト層が0.7～1.2mであった。この結果、第0層の層厚は調査区によりバラつきがあり、現地表面から0.7～1.4mの厚さとなつた。

第1層は灰色シルト混細砂で近世～近代の耕作土である。近現代の造成に伴い著しく改変を受け、遺存状態が不良である。層厚は0.1～0.2mである。第1層を掘削し終えた面（第2層上面）を第1面として調査を行なった。第1面で検出した遺構には耕作痕がある。耕作地が広がっていたものと考えられる。遺構からの出土遺物がほとんどみられず、時期を決し難いが概ね近世段階の所産と推定される。

第2層は灰白・黄灰色シルト混細～中砂で中世後半～近世の耕作土である。近現代の造成に際して著しく改変を受け、遺存状態が不良である。層厚は0.15～0.2mである。第2層を掘削し終えた面（第3層上面）を第2面として調査を行なった。第2面で検出した遺構には鈎溝、溝がある。遺構からは土師器皿・土師器へそ皿、瓦器椀、瓦器皿、土師器羽釜、須恵器等が出土している。大半が細片となっているため、時期を決し難いが概ね中世後半段階の所産と推定される。

第3層は調査区北東部においてのみ広がる黄灰色シルト～シルト質粘土で中世前半～後半の耕作土である。層厚は0.2mである。第3層を掘削し終えた面（第4層上面）を第3面として調査を行なった。検出した遺構には平面不定形な落込みがある。遺構からは土師器皿や土師器鍋、須恵器等が出土している。

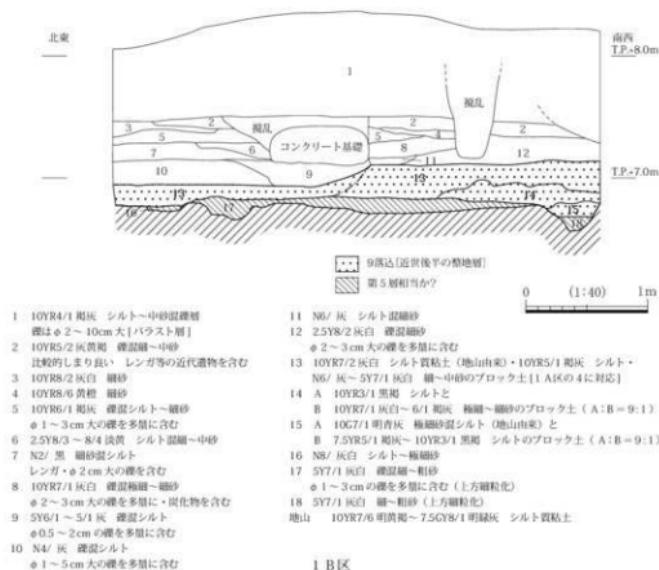
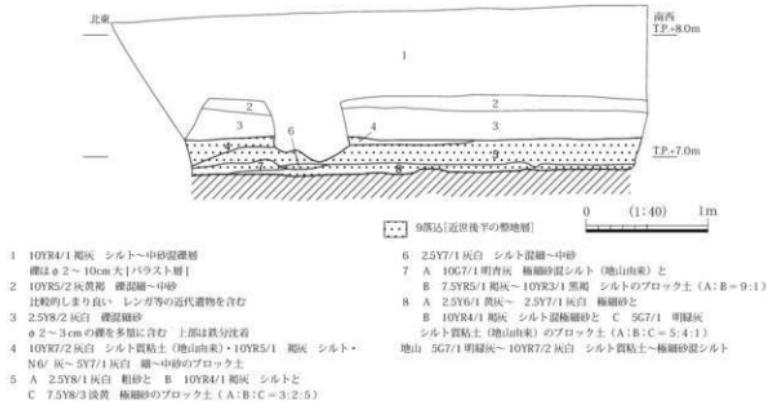


図 63 西の庄東遺跡 1区 南壁断面図

る。大半が細片となっているため、時期を決し難いが概ね中世前半段階の所産と推定される。

第4層は調査区北東部の東に向けて下がる谷状地形を埋める形で堆積する土壤化の進んだ褐灰～黒色粘土～シルトである。第4層は断面でみると、地震による搖れの影響か、上層の第3層及び下層の第6層（地山）を巻き込む形で炎が立ち上がるよう細かく波打っており、第4層上面（第3面）はマーブル模様状を呈する状況にあった。古墳時代～古代の湿地状堆積物と思われる。層厚は0.1～0.3mである。同様な土壤化の進んだ黒色粘土～シルトは、平成21・22（2009・2010）年に調査を行なった吹田操車場遺跡でも確認しており、西へと開く谷状地形を埋める堆積物であった。第4層を掘削し終えた面（第5層または地山上面）を第4面として調査を行なった。検出した遺構には溝、土坑、落込み等がある。遺構からは土師器皿や瓦器楕、黒色土器、須恵器等が出土している。大半が細片となっているため、時期を決し難いが概ね古代（平安時代が主体か）段階の所産と推定される。

第5層は下位の地山面（第6層上面）の低まった部分にのみ存在する灰白～灰黑色・黄灰色シルト～粗砂である。同様な堆積は平成21・22（2009・2010）年に調査を行なった吹田操車場遺跡でも確認しており、古墳時代以前の氾濫堆積物と考えられる。

第6層は所謂地山である。基本的には黄色系粗砂～粘土を主体とするが、場所によっては緑灰色細砂混シルトや粘土となる部分（主に調査地西側の1～3区）がある。

なお、調査地西側に位置する1～3区は西に向かって緩やかに傾斜する地形となっていた。その傾斜地に平坦面を造成するため、近現代の盛り土と地山の間に緑灰色シルト～粘土（地山）ブロックと褐灰色シルトブロック（古代～中世の包含層由来か）を用いた層厚0.25～0.3mの近世後半～近代頃の整地層が認められた（図63・64）。

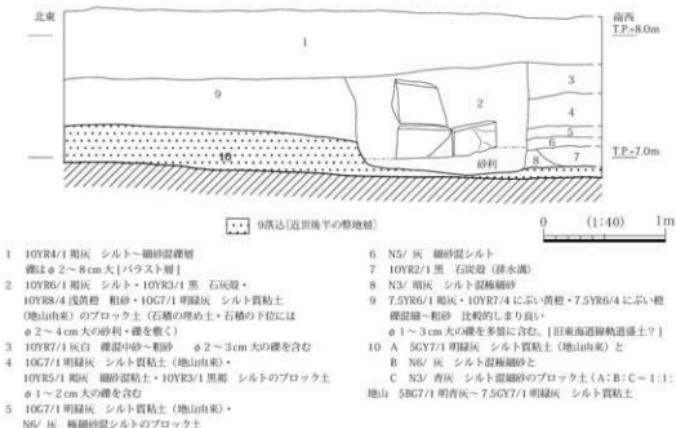


図64 西の庄東遺跡 3区 南壁断面図

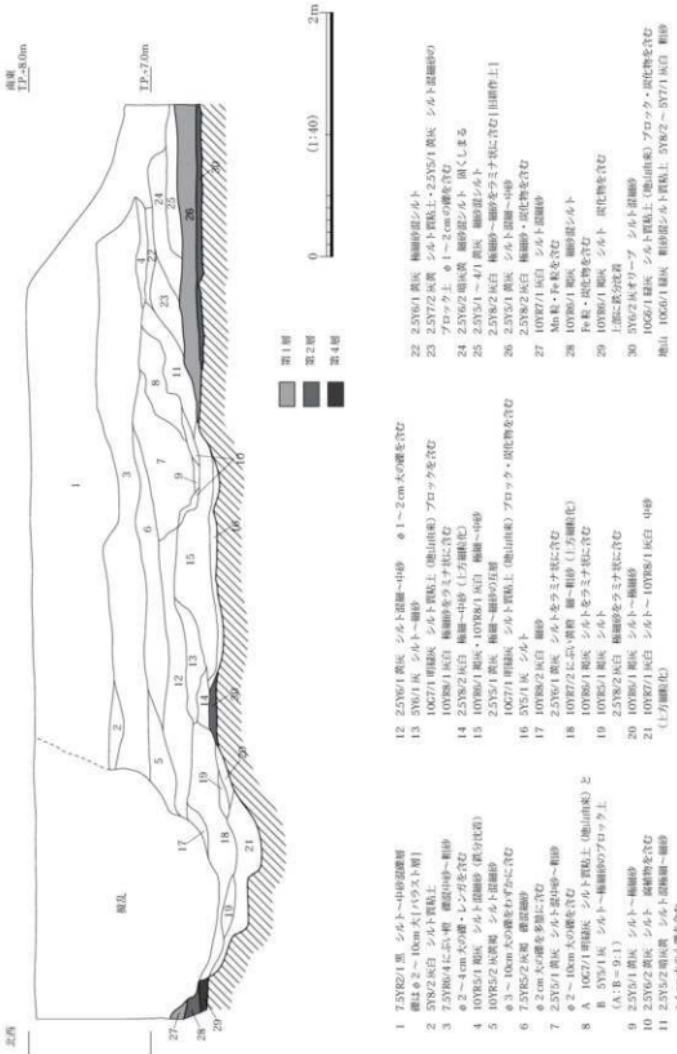
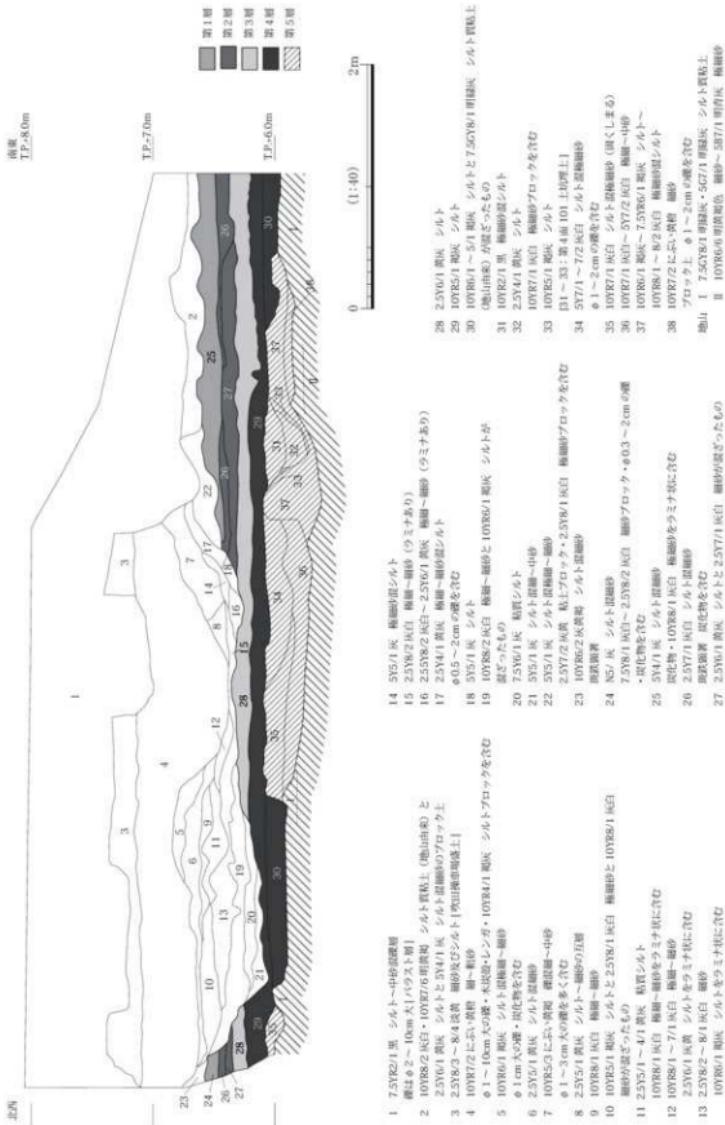


図65 西の庄東遺跡 7区 北壁断面図

高差
TP-8.0m

北



第2節 1～3区の調査

1～3区は調査地の南西側、 $X = -137,225 \sim -137,309$ ・ $Y = -43,762 \sim -43,840$ に位置する北東から南西に長い狭小な調査区である。1区の長さが約25m、2区の長さが約31m、3区の長さが約55mで、幅は各調査区とも約8mを測る。いずれの調査区も近現代の土地改变が著しく、近世の作土層や中世・古代の包含層等が既に削平され存在していなかった。近現代のパラスト層を除去すると、 $Y = -43,790$ 付近以西では緑灰色シルト～粘土（地山）ブロックと褐灰色シルトブロック（古代～中世の包含層由来か）を用いた層厚0.25～0.3mの近世後半以降の整地層がみられた。一方、 $Y = -43,790$ 付近以東は近現代のパラスト層直下が即地山となった。

（1）第1面（図67・図版32・33）

$Y = -43,790$ 付近以西では近世後半以降の整地層を掘削し終えて検出した地山面を、 $Y = -43,790$ 付近以東は近現代のパラスト層直下で検出した地山面を第1面として調査を行なった。

第1面は北東から南西へ緩やかに下がる地形となっており、標高はT.P. + 6.8～7.3mである。検出した遺構には、中世以降に掘削された井戸やそれに取り付く溝、中世以降に埋め立てられる溜池状遺構、落込み、自然流路等がある。

9落込み（図68～209～212）

$Y = -43,790$ 付近以西に広がる大きな落込みである。調査地の幅が極めて狭いため、その規模は不明である。落込みは緩やかに西へと傾斜する。この傾斜地を埋めて平坦面を造成するために近世後半以降に大規模な整地が行なわれたようである。出土遺物には肥前系染付け碗・蛸唐草鉢、外青磁染付け筒碗、関西系陶器、肥前系陶器、萩焼、土師質柿釉皿、瓦質羽釜、黒色土器両黑椀、須恵器等がある。図68～209は萩焼ビラ掛け椀である。内面から口縁部外面にかけて薺灰釉が掛けられ、胴部外面には鉄釉と白色釉が線状に掛け分けられている。19世紀代の所産。210は土師器皿。口縁端部の上方への反りは少ない。所謂「て」の字状口縁皿である。白色系胎土。211は須恵器杯B蓋。8世紀中頃～後半（平城Ⅲ～VI期）の所産か。212は土師器皿である。斜め上方に短く立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部内面は僅かに肥厚させる。210～212は9落込みを埋めるブロック土の中でも、褐灰色シルトブロック（古代～中世の包含層由来か）からの出土であった。

1溜池（図68～213・214）

$X = -137,250$ ・ $Y = -43,780$ 付近に位置する溜池。1溜池は北肩及び西肩を確認したが、その多くは調査区外へと広がっているため、全容は明らかにし得ない。検出した規模は長軸で約10m、短軸で約3mである。肩部は2段に掘削されている。南西肩部には護岸のためか杭が打ち込まれている。溜池の東側直近に貨物専用の営業線路が通っているため、線路への影響を考慮して検出面から約0.6mの深さまでの掘削に止めた。従って、底の確認に至っていない。埋土は3枚を確認しており、上層が腐植物を含む黄灰色シルト、中層が暗灰黄色極細砂混シルトと黄灰色細～中砂の互層、下層が灰色細～中砂である。埋土からは肥前系外青磁染付け碗、陶胎染付け、唐津焼皿・甕、備前焼甕・擂鉢、丹波焼擂鉢、堺焼擂鉢、関西系陶器、須恵器等が出土している。出土遺物からみれば概ね18世紀後半～19世紀頃

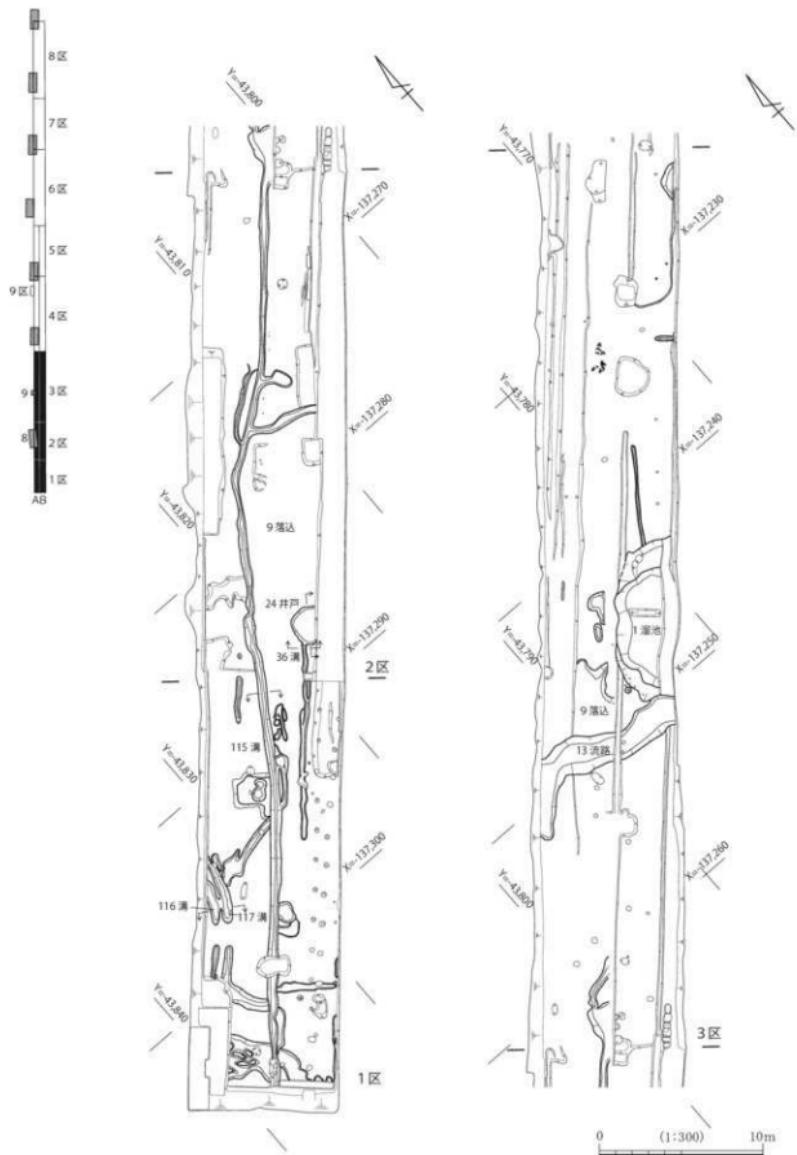
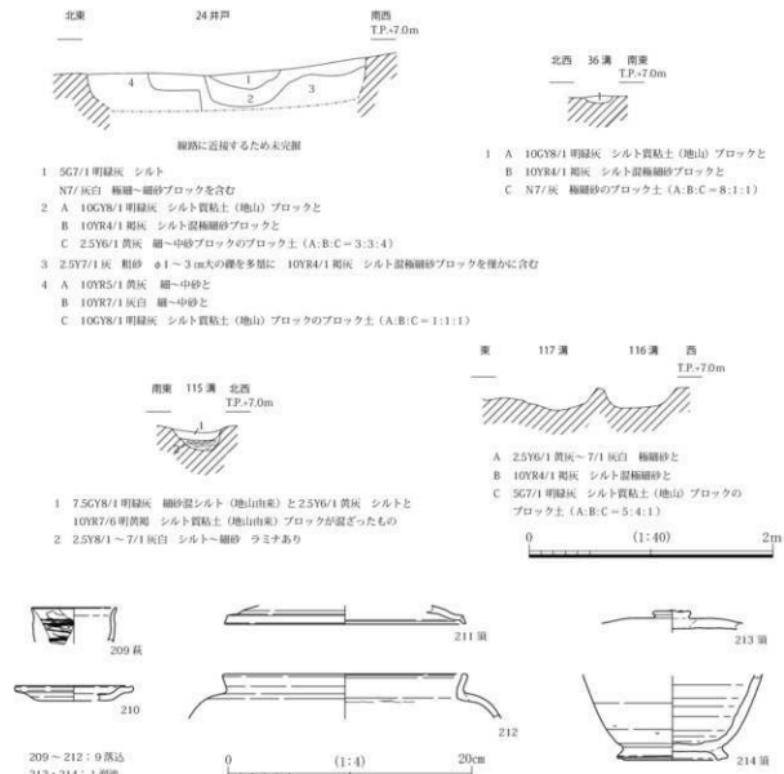


図 67 西の庄東遺跡 1～3区 第1面 平面図

に埋め立てられたと思われる。図68-213は須恵器B蓋。ボタン状の摘みをもつ。外面には自然釉が付着。214は須恵器壺。貼り付け高台をもつ。内面及び高台外面に自然釉が付着。ともに8世紀代の所産であろう。9落込み等の整地の際に削平された包含層に含まれていた資料であろうか。

24井戸(図68)

X = -137.287 Y = -43.818付近に位置する井戸。線路に影響を与えるため撤去出来なかったコンクリート製構造物に切られており、井戸西側半分のみ確認した。また、井戸南西側には36溝が取り付く。井戸の掘方は直径約2.3mを測る。線路側からの湧水が著しいこともあり、線路への影響を考慮して検出面から約0.3mの深さまでの掘削に止めた。掘削停止面で、掘方のほぼ中央に直径約0.6mの井筒部を確認している。井戸の上部はブロック土で埋め戻されていた。出土遺物には肥前系染付け筒碗・広東碗、土師器炮烙等がある。出土遺物から概ね18世紀後半～19世紀頃に埋められたと思われる。



36 溝（図 68）

N - 40° - E に軸をもち、24 井戸の南西側に取り付く溝。検出長約 12 m、幅約 0.2 m、深さ約 0.1 m を測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土にはブロック土がみられる。

115～117 溝（図 68・図版 32）

115 溝は X = - 137,260・Y = - 43,798 付近を始発として、N - 40° - E を軸に南北方向にはしり、X = - 137,277・Y = - 43,815 付近で屈曲して N - 30° - E を軸として流れる。溝西端は調査区外へと延びる。検出長約 62 m、幅約 0.2 ~ 0.3 m、深さ約 0.1 ~ 0.2 m を測る。埋土は大きく 2 枚に分かれ、上層は明緑灰シルトや明黄褐色シルト質粘土などの地山由来のブロック土で、下層はラミナがみられる灰白色シルト～細砂である。

116・117 溝は調査区西端部 X = - 137,296・Y = - 43,833 付近に位置する溝である。一部途切れるが、X = - 137,300・Y = - 43,836 付近で屈曲し、平面「L」字状を呈する。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は黄灰色～灰白色極細砂や褐灰色シルト、地山由来の明緑灰色シルト質粘土のブロック土である。

こうした溝は調査区南西部に比較的多くみられ、大半が地山の傾斜方向に沿うようにはしたことから、人為的な溝ではないように思われる。溝からは遺物がみられず、帰属時期は不明。

13 流路

1 溝池の直ぐ南、X = - 137,250 ラインに沿うように東西にはしる自然流路。東西両端は調査区外へと延びる。検出長は約 10 m、幅約 1.5 ~ 2 m、深さ約 0.45 m を測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は大きく 2 枚に分かれ。上層は上方粗粒化した灰白色系のシルト～細砂で、下層は上方細粒化した明赤褐色粗砂～浅黄橙色細砂である。出土遺物がみられず、帰属時期は不明である。

第 3 節 4・9 区の調査

3 区の東側、調査地の中央西寄りの X = - 137,177 ~ - 137,225・Y = - 43,723 ~ - 43,769 に位置する北東から南西に長い狭小な調査区である。調査区中央部は北東から南西にはしるコンクリート製構造物や近現代の溝によって、幅約 4 m 程度搅乱を受けている。4 区東端部北側で遺物を多量に出土する土坑の一部を検出したため、その性格を確認すべく調査範囲を拡張した。拡張した部分を 9 区とする。4 区は長さ約 60 m、幅約 8 m を測る。9 区は長さ約 9 m、幅約 3 m である。

どちらの調査区も近現代の土地変更が著しく、近世の作土層や中世・古代の包含層等が既に削平され存在していないかった。機械掘削完了時点での地山面（第 1 面）となる。

（1）第 1 面（図 69 ~ 77・図版 33 ~ 36・44 ~ 47）

当区は近現代の土地変更が著しく、近現代のパラスト層直下で検出した地山面を第 1 面として調査を行なった。

第 1 面は標高 T.P. + 7.3 ~ 7.4 m、削平のダメージが少ない箇所（9 区）では T.P. + 7.5 m を測る。一見するとほぼ平坦な地形にみえるが、削平が著しいため旧地形を完全に反映した姿ではないと考えられる。

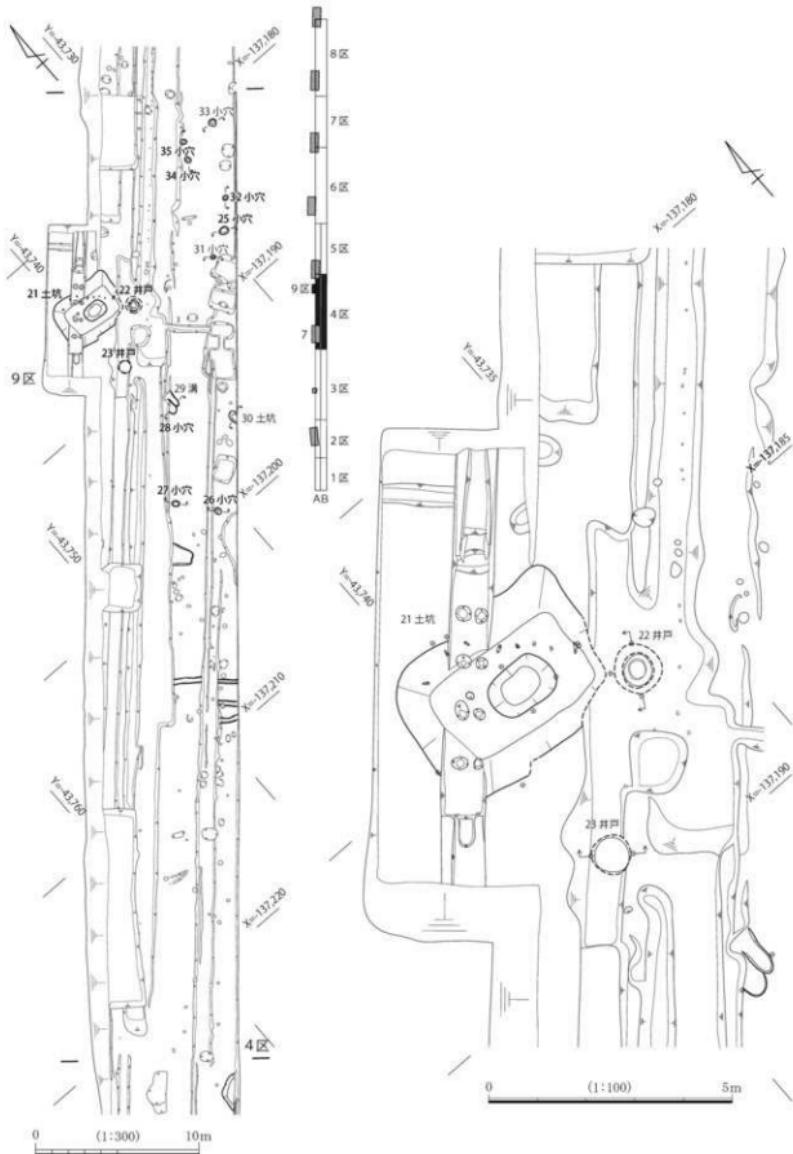


図69 西の庄東遺跡 4・9区 第1面 平面図

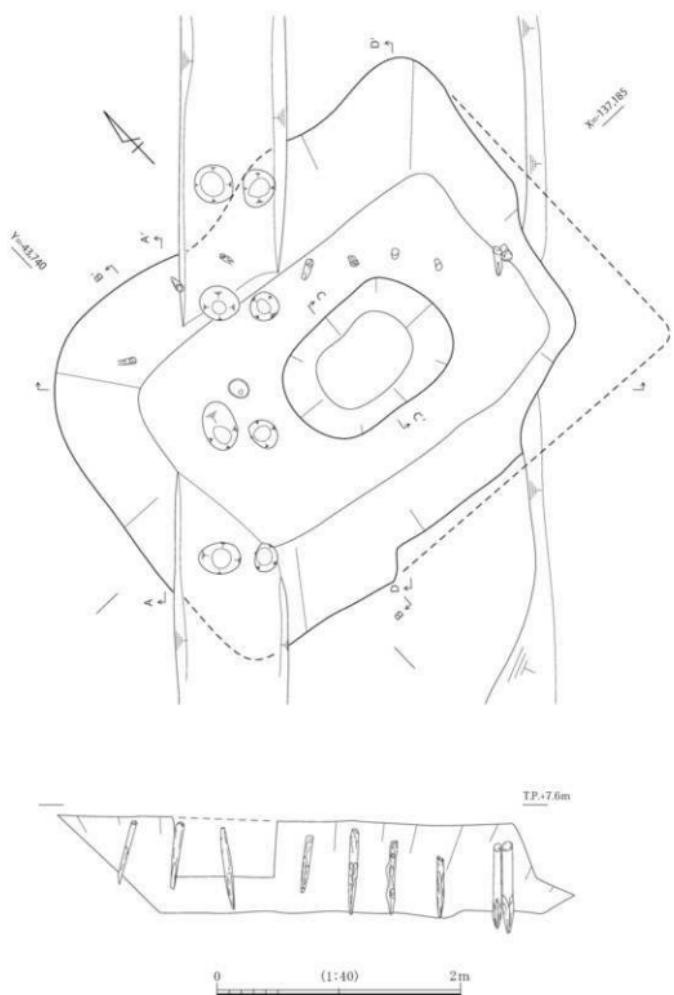


図 70 第1面 21 土坑平面図及び杭列立面図

先にも述べたが、第1（地山）面は大幅に削平されているようで、Y = -43.750以西では遺構が確認出来なかった。一方、Y = -43.750以東では僅かではあるが溝、小穴、井戸を検出することが出来た。井戸は深度があるために比較的の遺存状態は良好であったが、溝や小穴等の遺構は上部が削られており、辛うじて基底部が残存しているような状態であった。

21 土坑（図70～72・73～215～259・74～260～293・75～294～303・巻頭図版・図版34～36・44～46）

調査区の東端部北側、X = -137.185・Y = -43.738付近に位置する大形の遺構である。当初、性格が不明であったため土坑とした。21土坑周辺では井戸が集中して掘削される。4区調査時に土坑の南東隅部分を検出し、土坑内から多量の遺物が出土したことを受け、調査範囲を拡張して全容確認を行なった。

土坑は長辺約4.4m、短辺約3.3mを測り、平面隅丸長方形を呈する。土坑の南西隅や南東隅、北辺中央部は近代の土地改変によって削平されている。

土坑は二段掘りとなっており、底面中央には長辺約1.4m、短辺約0.9～0.95mを測る小形の土坑が掘削されている。二段掘りであるため、断面形は逆凸字状を呈する。

深さは検出面から中段までが約0.75m、最深部までが約1.5mを測る。土坑底面付近(T.P.+6.0m)で著しい涌水がみられた。涌水があることや周辺に井戸が複数掘削されている状況から、21土坑は井戸として使用されていたものと推察される。平面・断面観察の結果、井戸枠の痕跡や枠を抜き取ったような痕跡が認められなかったので、素掘り井戸であったと思われる。

また、土坑の東辺中央部から土坑北西隅に向けて9本の杭（マツ科の材を使用）が打設されていた。これらの杭は井戸機能時に打設されたものではなく、ブロック土で埋めた段階で打ち込まれたようである。

土坑の埋土は図71の断面模式図で示したように、大きく5枚に分かれる。最下層には灰白色粘質シルト、下層に黄灰色～灰色粘質シルト、中層に地山由来の緑灰色シルト質粘土ブロック土、上層にはラミナのみられる褐色系～黒色系シルト・灰～灰白色系シルト～中砂の堆積がみられる。堆積状況からすると、最下層～下層は井戸機能時から機能終了時にかけての自然堆積層と考えられ、中段の平坦面にも自然堆積層が確認出来る。中層のブロック土は井戸廃棄後に井戸北側から人為的に埋め戻しを行なったものであろう。ただ、完全に埋め戻さず放置していたようで、上部の疊んだ空間に自然堆積層が埋積したと想定される。

下層の灰色粘質シルトから土器器皿もしくは杯、瓦器碗をはじめとする多量の遺物（土器器皿、黒土器両黑椀、須恵器、白磁皿・椀、漆器椀等）が出土した。特に土器器皿もしくは杯の出土量が多く、油煙が付着する例の多いことが特徴的である。また、被熱痕跡のある礫も多くみられた。なお、最下層～下層の堆積物を持ち帰り、水洗いしたところ土器の細片とともに18点の桃核やマクワウリの仲間の種子がみられた。出土遺物から11世紀後半頃に機能を停止した井戸と思われる。

図73-215～231は土器器皿である。所謂「て」の字状口縁皿である。胎土は白色系(218～222等)と黄褐色系(215・216等)の二種がみられる。215は弱い二次焼成を受けたようで、部分的に明赤灰色を呈する。216は内外面ともに油煙の付着が著しい。219・220は口縁端部の上方への反りが弱い。221は口縁端部の上方への反りが弱く、口縁部外面に沈線状の窪みが廻る。222は口縁部外面に沈線状の窪みが廻る。底部外面には切り込み円盤技法の痕跡が残る。内外面ともに油煙の付着が著しい。223は口縁部外面に沈線状の窪みが廻る。底部外面には切り込み円盤技法の痕跡が残る。二次焼成を受けたのか、部分的に明褐色を呈する。224～226は口縁部の外反が弱く「て」の字状口縁に見え

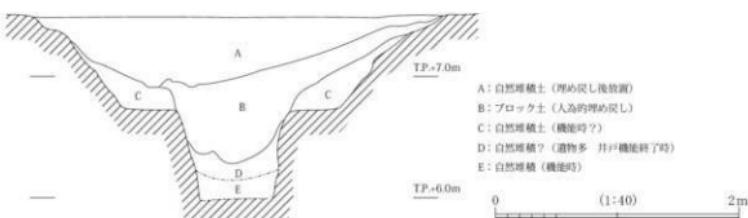
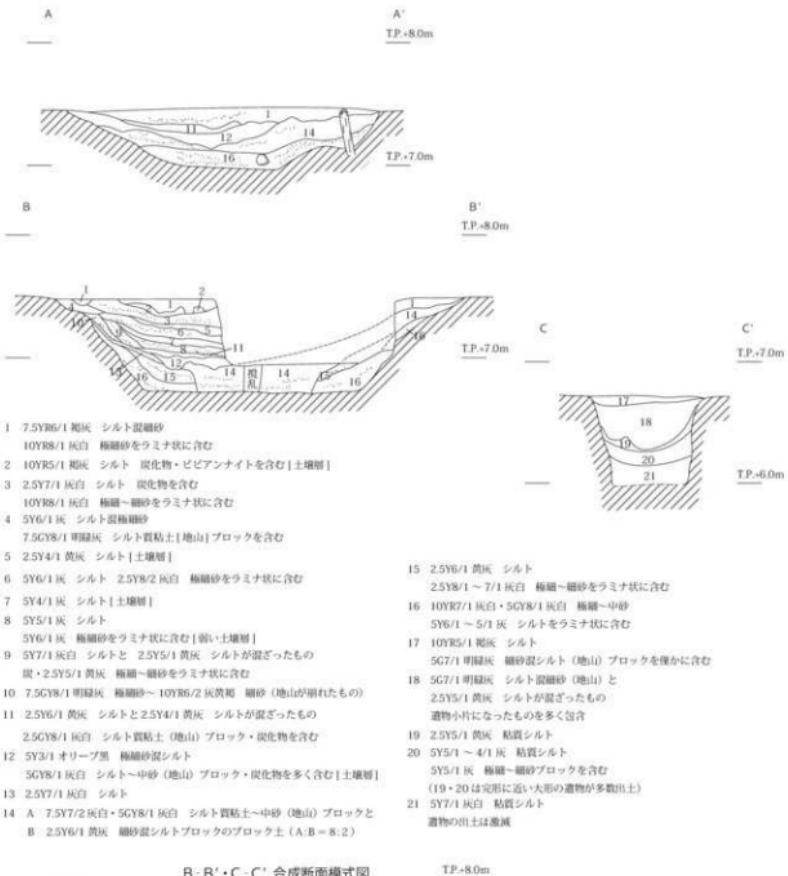


図 71 第1面 21 土坑断面図 (1)

難いもの。口縁部外面に沈線状の窪みが廻る。225は底部外面に切り込み円盤技法の痕跡が残る。226は二次焼成を受けたのか、全体的に赤味を帯びる。227は扁平でコースター状を呈する。口縁部外面に凹線状の窪みが廻る。228は口縁部の外反が弱い。内面見込みに「く」の字状のヘラ記号がみられる。229は口縁部の外反が弱く、端部の反りもみられず、「て」の字状口縁皿に見え難い。二次焼成を受けたようで、部分的に淡赤橙色を呈する。230は扁平でコースター状を呈する。口縁端部の反りもみられない。231は他の皿に比して器壁が厚い。口縁部の外反が弱く、端部の反りもみられず、「て」の字状口縁皿に見え難い。いずれも11世紀後半（京V期新段階）の所産であろう。

232～254は土器皿もしくは杯である。胎土は白色系（232・233・235等）と褐色系（239・245等）の二種がみられる。232～240は内湾しながら立ち上がる体部をもつもの。基本的に口縁部二段窪みナデを施し、体部外面下半にはユビオサエが顕著にみられる。234は内面に数箇所油煙が付着する。235は口縁部二段窪みナデを意識して、下段ヨコナデに相当する部分に連続するユビオサエを施す。弱い二次焼成を受けているのか、外面に橙色を呈する箇所や剥落がみられる。236は体部外

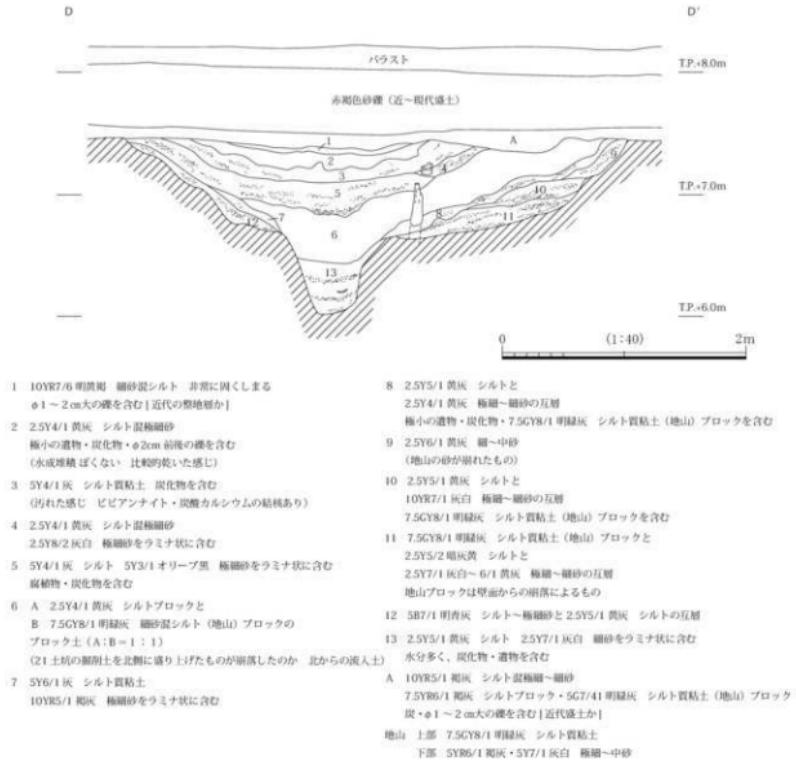


図 72 第1面 21 土坑断面図 (2)

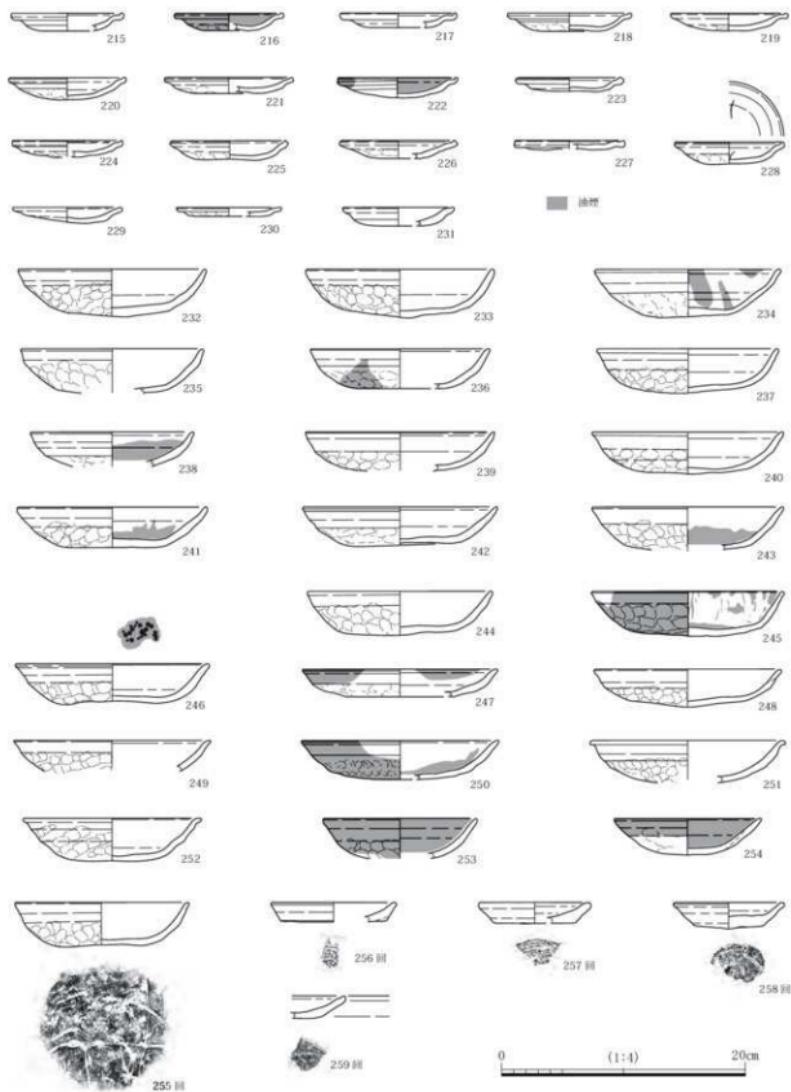


图 73 第1面 21土坑出土遗物 (1)

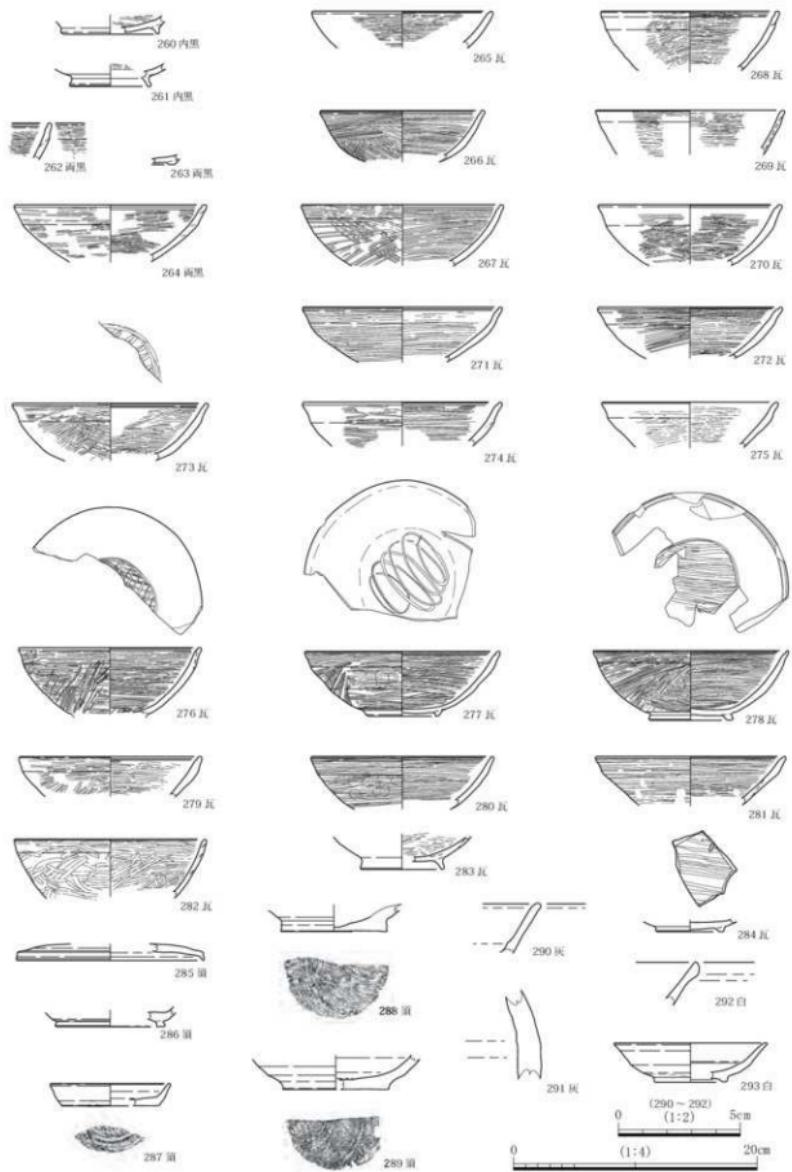


图 74 第1面 21 土坑出土遗物 (2)

面下半に油煙が付着する。弱い二次焼成を受けているのか、外面にふい橙色を呈する箇所がみられる。238は内面及び口縁部外面に油煙が付着する。239は内外面ともに油煙が付着。

241～250は直線的に立ち上がる体部をもつもの。基本的に口縁部二段窪みナデを施し、体部外面下半にはユビオサエが顕著にみられる。241は外面にスポット的に油煙が付着する。242は口縁部外面に沈線状の窪みが廻る。243は内面見込みに油煙が付着。二次焼成を受けたのか、外面に明赤灰色を呈する箇所がみられる。244・245は口縁部二段窪みナデを意識して、下段ヨコナデに相当する部分に連続するユビオサエを施す。245は内面見込み全面及び体部外面はスポット的に油煙が付着する。246は内面見込みに油煙が付着する。247・249・250は口縁部二段窪みナデを意識して、下段ヨコナデに相当する部分に連続するユビオサエを施す。247は口縁部内外面にスポット的に油煙が付着。249は二次焼成を受けているのか、部分的に外面に明褐灰色を呈する箇所や剥落がみられる。250は内面見込み及び口縁部外面に油煙が付着する。

251は内湾しながら立ち上がる体部をもち、口縁端部は端反りとなる。口縁部二段窪みナデを施し、体部外面にはユビオサエが顕著にみられる。252は直線的に立ち上がる体部をもち、口縁端部端反りとなる。口縁部二段窪みナデを施し、体部外面にはユビオサエが顕著にみられる。口縁部外面に油煙が付着する。253・254は他のものに比して小形のもの。ともに口縁二段窪みナデを施す。253は内湾しながら立ち上がる体部をもつ。内面及び外面の大半に油煙が付着。254は直線的に立ち上がる体部をもつ。内面～口縁部外面に油煙が付着する。いずれも11世紀後半～12世紀前半（京V期新段階～京VI期古段階）の所産であろう。

255は器壁にザラツキがみられ、他の資料と比べて胎土が異なる感じを受ける。体部は直線的に立ち上がり、口縁部二段窪みナデを施す。底部外面にヘラ切り痕が廻る。内外面に部分的に油煙が付着。回転台土器である。

256～259は回転台土器師器皿である。胎土は白色系（256～258）と褐色系（259）の二種がみられる。256・257は短い口縁部が直線的に斜め上方に立ち上がる。底部と口縁部の器壁の厚さに差がなく、全体的に厚いもの。底部外面に回転糸切り痕が廻る。258は短い口縁部が直線的に斜め上方に立ち上がる。底部と口縁部の器壁の厚さに違いがみられ、口縁部がかなり薄く作られる。底部外面に回転糸切り痕が廻る。259は口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁部内面には段がみられる。底部と口縁部の器壁の厚さに差がなく、全体的に薄いもの。底部外面には回転糸切り痕が廻る。いずれも11世紀後半～12世紀前半（京V期新段階～京VI期古段階）の所産であろう。

図74～260～264は黒色土器碗である。260・261は内黒碗、262～264は両黒碗。260・261は外側に踏ん張る高い高台をもつ。11世紀前半（京V期古段階）の資料。262は口縁部片。口縁部内面には沈線が1条廻る。内外面ともに細かな横位のヘラミガキを施す。263は底部片。扁平で断面逆台形を呈する高台が付く。264は内湾しながら立ち上がる体部をもち、口縁部は斜め上方に延びる。口縁部内面には沈線が1条廻る。内外面ともに細かな横位のヘラミガキを施す。11世紀前半～中頃（京V期中段階）の所産か。21上坑は後述する22井戸を切って掘削されているため、その際に22井戸帰属の黒色土器が混入した可能性が窺える。

265～284は瓦器碗である。265～267は体部から口縁部にかけて内湾ながら立ち上がり、ボール状の器形を呈するもの。265は口縁部内面に段状の沈線が廻る。内外面ともに細かなヘラミガキが施される。器壁が非常に厚い。266・267は口縁部内面に沈線が1条廻る。体部外面は分割ヘラミガキ

が、内面には密な横位のヘラミガキが施される。266は内外面に直径3mm程度のクレーター状剥離がみられる。267は外面に直径3~5mm程度のクレーター状剥離が多くみられ、内面には直径2~3mmのものが僅かに認められる。

268・270~274・276~278・280・282は体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部がやや外反するもの。268の口縁部内面には沈線が1条廻る。体部外面は分割ヘラミガキが、内面には密な横位のヘラミガキが施される。器壁は他の資料に比して薄く、器面にクレーター状剥離がみられない。270・272・273は口縁部内面に段状の沈線が1条廻る。体部外面は分割ヘラミガキが、内面には密な横位のヘラミガキが施される。いずれも器壁は厚い。270は内外面ともに直径2mm程度のクレーター状剥離がみられるが、272・273は器面にクレーター状剥離がみられない。271・274の口縁部内面には段状の沈線が1条廻る。体部外面の分割ヘラミガキは不明であるが、内外面に密な横位のヘラミガキが施される。271は内外面ともに直径2mm程度のクレーター状剥離が、274は外面に直径3~8mmのクレーター状剥離がみられる。276~278は口縁部内面に段状の沈線が1条廻る。体部外面は分割ヘラミガキが、内面には密な横位のヘラミガキが施される。276は内面見込みに斜格子状暗文が施される。内外面には直径1~5mm程度のクレーター状剥離が顕著にみられる。277は内面見込みに螺旋状暗文が施される。内外面には直径2~5mmのクレーター状剥離が顕著にみられる。278の内面見込みには暗文ではなく、密なヘラミガキが施される。内外面に直径3~8mmのクレーター状剥離がみられる。280は口縁部内面に沈線が1条廻る。体部外面の分割ヘラミガキは不明であるが、内外面に密な横位のヘラミガキが施される。他の資料に比して器壁が薄く、器面にクレーター状剥離はみられない。282の口縁部内面には沈線がみられない。体部外面は分割ヘラミガキが施される。内外面ともやや太いヘラミガキ。他の資料に比して器壁が厚く、器面にクレーター状剥離はみられない。

269・275・279・281は体部が直線的に立ち上がり、口縁部が斜め上方に延びるもの。269の口縁部内面には沈線が廻らない。体部外面の分割ヘラミガキは不明であるが、内外面に密な横位のヘラミガキが施される。内外面には直径2~5mmのクレーター状剥離がみられる。275の口縁部内面には沈線が廻らない。体部外面は分割ヘラミガキかどうか不明である。外面はやや幅広のヘラミガキが、内面は外面よりも細い横位のヘラミガキが施される。内面には直径4mmのクレーター状剥離がみられる。279は口縁部内面に沈線が1条廻る。体部外面は分割ヘラミガキが、内面には密な横位のヘラミガキが施される。器壁が厚く、外面には直径3~7mmのクレーター状剥離が顕著に、内面は直径1~2mmのものがみられる。281は口縁部内面に沈線が1条廻る。体部外面の分割ヘラミガキは不明であるが、内外面に密な横位のヘラミガキが施される。器壁が厚く、外面には直径2~8mmのクレーター状剥離が顕著に、内面は直径1~2mmのものが僅かにみられる。

283・284は底部片である。283は高台内外面に直径3~5mmのクレーター状剥離が連続してみられ、底部外面には直径2~3mmのものがみられる。284の内面見込みには平行線状暗文が施される。

瓦器椀はほとんど全てが楠葉型I~2・3期の資料であるが、282のみ和泉型I~2期の所産と思われる。11世紀中頃~後半に帰属する資料であろう。

285~289は須恵器である。285は杯B蓋。286は杯Bか。高台は貼り付け高台。断面形は台形状で、外側に踏ん張る形をなす。287は皿である。短い口縁部が直線的に斜め上方に立ち上がる。底部と口縁部の器壁の厚さに違いがみられ、口縁部がかなり薄く作られる。底部外面にヘラ切り痕が残る。288は椀もしくは鉢。焼成はやや甘い。底部外面に静止糸切り痕がみられる。289は鉢であろう。内面は

使用によるためか、非常に平滑になっており、それに伴うと考えられる無数の擦痕が斜・横位にみられる。底部外面には静止糸切り痕がみられる。

290・291は灰釉陶器である。290は椀。口縁部は斜め上方に立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味におさめる。内外面に釉が掛けられる。291は壺であろうか。292・293は白磁である。292は碗。口縁部外面が肥厚し、断面三角形状を呈する。釉はやや黄緑色がかった感じ。白磁碗XI類、10世紀後半～11世紀中頃の所産か。293は皿。体部内面中程に段をもつ。高台は削り出し高台で、露胎となっている。白磁皿XI'3類であろう。10世紀後半～11世紀中頃の所産。

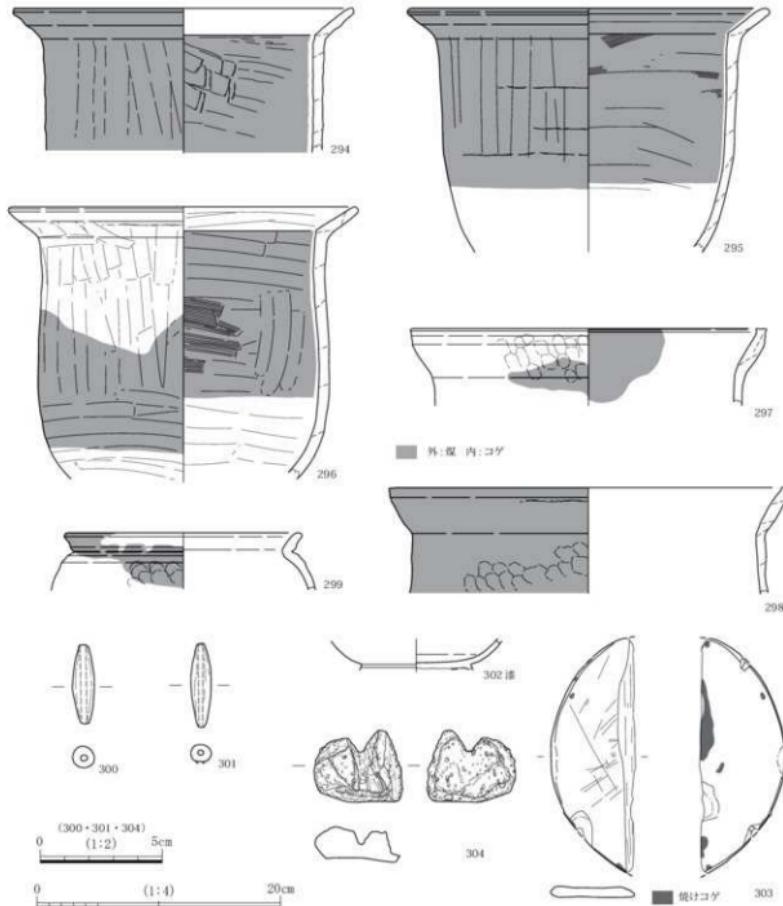


図75 第1面 21 土坑出土遺物（3）

図 75 - 294 ~ 296・299 は土師器甕。297・298 は土師器甕もしくは鍋である。294 ~ 296 は口縁部が大きく外反する長胴の甕。296 は下膨れ気味である。294 は外面及び体部内面に、295 は内外面の上部 4 分の 3 に、296 は体部外面下半及び内面上半 3 分の 2 に煤やコゲが付着する。299 は球状の胴部で短く外反する口縁部をもつ。肩部から口縁部外面に煤が付着する。297・298 の口縁部は内湾しながら立ち上がり、キャリバー状の口縁に似ている。口縁上端面は強いナデにより、四線状に窪む。297 は頸部外面及び口縁部内面に煤やコゲが、298 は外面に煤が付着する。

300・301 は土錘。重量は 300 が 2.3 g、301 が 2.1 g である。302 は漆器椀である。木胎にケヤキを用いた椀。外面に黒漆を塗布している。303 は曲物もしくは桶の底と考えられる。ヒノキを使用。復元される直径は 21.4 cm。側面 2箇所に木釘孔がみられる。部分的に炭化した箇所がある。304 は軽石。表面に V 字状の深い切れ込みや浅い凹線状の窪みがみられる。裏面は鋭利な刃物で切り取ったかのような平坦面がみられる。砥石として使用したのであろうか。重量は 3.3 g。

22 井戸（図 76・76 - 305 ~ 313・図版 36・47）

21 土坑の南東隅に接する位置で、コンクリート製構造物の撤去後に検出した井戸である。検出面と井戸直近の最も高い地山との比高差は 0.4 m を測るために、上部は相当削られているものと考えられる。

井戸掘方は平面不整橢円形を呈し、長軸約 0.85 m、短軸約 0.7 m を測る。掘方中央やや西寄りに曲物を組んだ井筒が設置される。曲物は現状で 4 段分を確認している。最上段の曲物は直径約 0.5 m、高さ約 0.15 m を測る。上部は削られている。2 ~ 4 段目の曲物は直径約 0.3 ~ 0.35 m・高さ約 0.2 m である。深さは検出面から 0.9 m で、底面付近 (T.P. + 6.0 m 付近) で湧水がみられる。

井筒内埋土は上部に黒褐～褐色系シルトが、下部に灰～褐色細～中砂が堆積する。裏込めには地山由来の明青灰色シルトと黄灰色シルトのブロック土が用いられる。

井筒内からは、土師器皿、土師器皿もしくは杯、土師器椀、黒色土器両黒椀、須恵器、木製櫛が出土している。

図 76 - 305・306 は土師器皿である。所謂「て」の字状口縁皿である。最下段（4段目）の曲物上端部に引っ掛かるように合わせ口の状態で検出した。上部皿における状態は確認出来なかったが、下部皿の底部外面には幅約 2 cm 程の有機物が腐食したようなシルトが帶状にみられたことから、紐などで固定していた可能性が窺える。305 は上部皿。内面見込みの約 4 分の 1 に油燃とは異なる褐色に変色した箇所がみられる。底部外面に切り込み円盤技法の痕跡が残る。306 は下部皿。口縁部の外反は弱い。器壁が 305 に比して厚い。どちらも 11 世紀前半～中頃（京 V 期古～中段階）の所産であろう。合わせ口状態で出土していることから、祭祀に用いられた可能性が高いと思われる。

307・308 は土師器皿もしくは杯。器面にややザラツキがあり、ともに 21 土坑出土の資料と比較すると胎土が異なる感じを受ける。口縁二段窪みナデを施す。内面全体的にミガキかと思うような丁寧なナデを施している。307 の底部外面は切り離しのあとナデを施し、切り離しの痕跡を消す。また、307 は内外面に煤が付着する。308 の底部外面にはヘラ切り痕を残す。どちらも回転台土師器であろう。11 世紀前半～中頃（京 V 期古～中段階）の所産か。309 は土師器椀。体部から口縁部は内湾しながら立ち上がり、ポール状を呈する。口縁部外面は強いヨコナデにより段が付く。体部外面上半部及び内面はヘラミガキを施す。高台は貼り付け高台。黒色土器を意識して作成したのか、丁寧な作りである。11 世紀前半頃の所産であろうか。

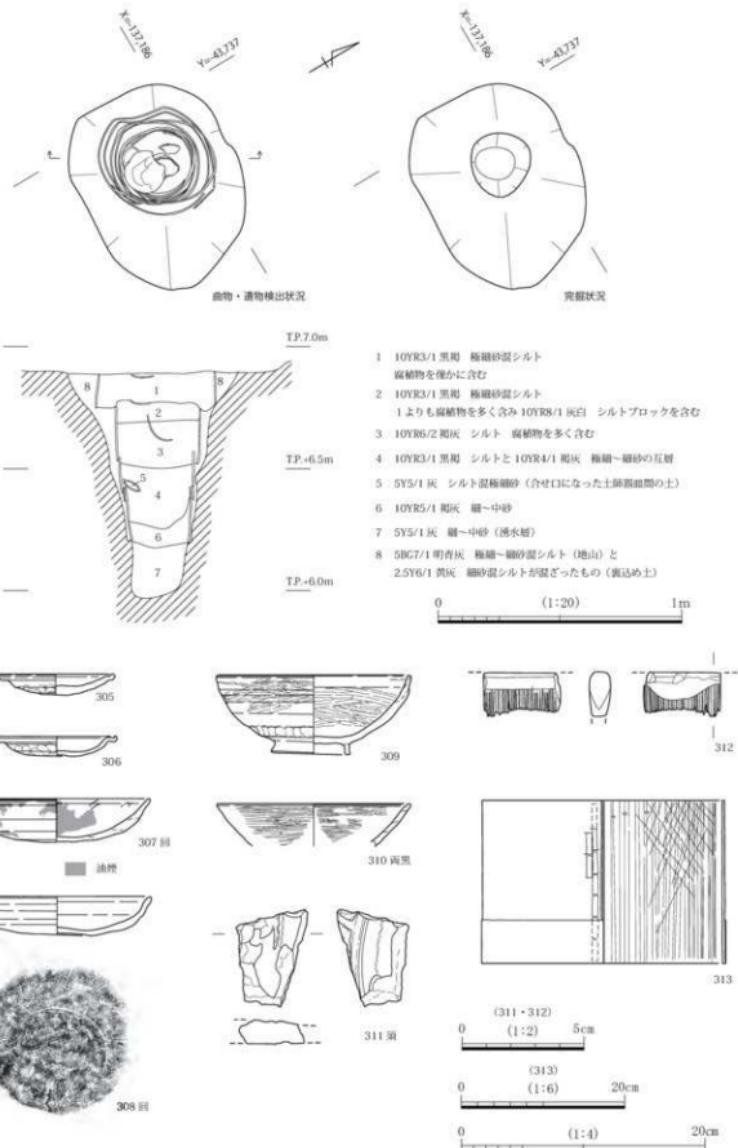


図 76 第1面 22 井戸平・断面図及び出土遺物

310は黒色土器両黒椀。体部から口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部内面には段状の沈線が1条廻る。また、内面には直径1～5mmの細かなクレーター状剥離が多くみられる。11世紀前半（京V期古段階）の資料であろう。311は須恵器円面硯か。非常に精良な胎土を用い、内外面とも丁寧にナデて仕上げられている。312はツゲ材を使用した横櫛。櫛歯部分は非常に細かな切込みを入れて作成されているため、歯間の隙間は少ない。313は井筒として使用されていた曲物（3段目）。乾燥のため、歪みが生じていることから図は復元図に近いものである。籠が外面下段に巻かれる。内面のケビキは垂直方向に施されるが、部分的に斜方向にも加えられる。側はヒノキを使用し、サクラ樹皮で留めている。出土遺物から11世紀前半～中頃に機能を停止した井戸と思われる。

現地は擾乱が著しかったため、22井戸と21土坑との切り合い関係を明確に捉えられなかったが、両者の位置関係や使用時期から勘案すれば、21土坑が22井戸を切って構築されたものと思われる。

23井戸（図77）

21土坑の南側約2mの位置で検出した井戸である。コンクリート製構造物の撤去後に検出した。検出面と井戸直近の最も高い地山面との比高差は0.4mを測るため、上部は相当削られているものと考えられる。

井戸は直径約0.8mの素掘り井戸である。検出面から0.9m（T.P.+6.2m付近）の深さで著しい湧水があり、壁の崩落がみられたので完掘には至らなかった。井戸は地山由来の明青灰シルト質粘土や失われた包含層由來の褐灰～黒褐色シルト質粘土等からなるブロック土で埋め戻されている。埋土からは備前焼壺、瓦器、土師器皿の小片が出土しているが、時期は明確ではない。中世段階の所産と考えられる。

小穴群（図77・77-314～317）

21土坑の東側約7m、X=-137,180～190・Y=-43,725～730の範囲で小穴を集中して検出した。近現代のバラスト層除去後、すぐに第1（地山）面となるため、遺構は上部が削られており、辛うじて基底部が残存しているような状態である。

25小穴（図77・77-314・315）

22井戸の東側約5mで検出した平面不整楕円形を呈する小穴。長軸約0.5m、短軸約0.2m、深さ約0.06mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は灰白色細砂～シルトと褐灰色シルトが混ざったブロック土である。出土遺物には土師器皿や甕の小片がある。図77-314は土師器皿である。所謂「て」の字状口縁皿。橙色系の胎土である。10世紀末～11世紀初頭（京IV期新段階）頃の所産か。315は土師器甕。口縁端面は外傾し、面をなす。

26小穴（図77）

21土坑の南側約13m、X=-137,200・Y=-43,740付近で検出した平面楕円形を呈する小穴。長軸約0.45m、短軸約0.2m、深さ約0.2mを測る。断面形はポール状を呈する。埋土は2枚に分かれ、上層が褐灰色シルト混極細砂、下層が明緑灰色シルト混極細砂である。出土遺物には小片となった土師器甕がある。

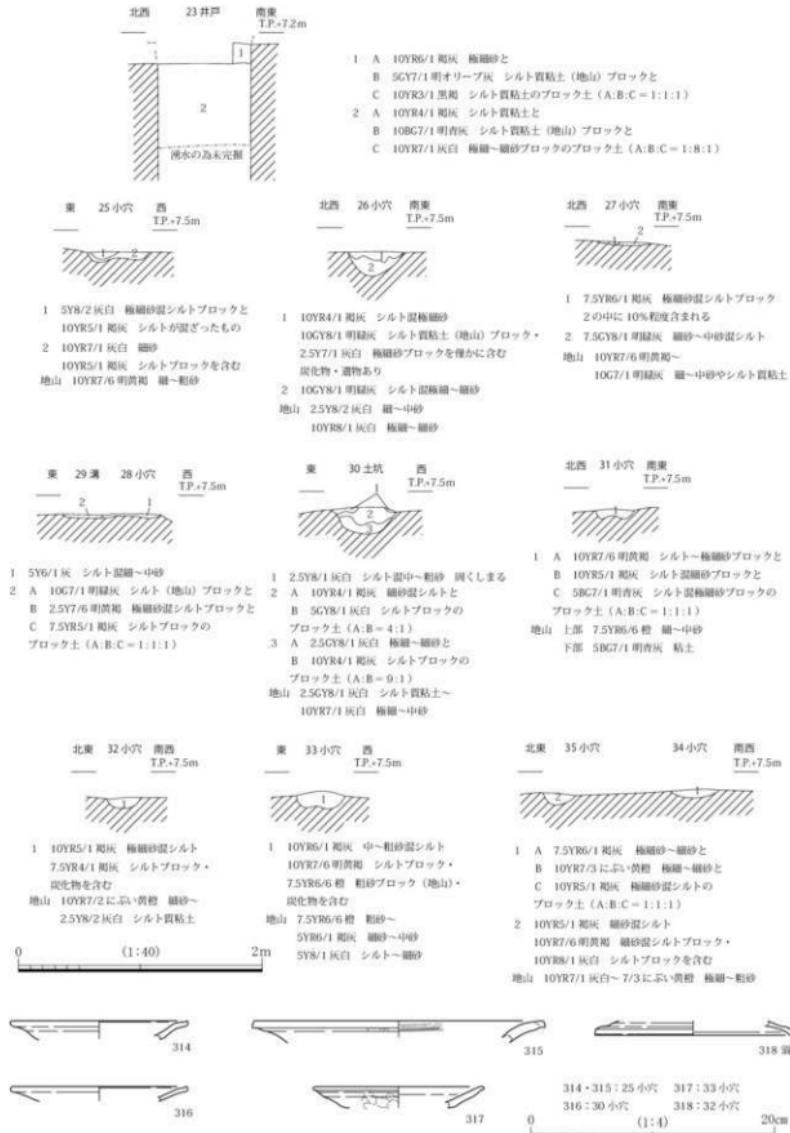


図77 第1面 23井戸・小穴群断面図及び小穴群出土遺物

27 小穴（図 77）

26 小穴の北西側約 1.5 m に位置する平面楕円形を呈する小穴。長軸約 0.4 m、短軸約 0.2 m、深さ約 0.04 m を測る。断面形は非常に浅い皿状を呈する。埋土は褐色極細砂混シルトと明緑灰色細～中砂混シルトのブロック土である。

28 小穴・29 溝（図 77）

21 土坑の南側約 5 m、X = -137.192 Y = -43.739 付近で検出した小穴と溝。北側は搅乱によつて削平されているため、平面形は不明。29 溝が 28 小穴を切っている。深さは約 0.04 m で、断面形は 28 小穴・29 溝とともに非常に浅い皿状を呈する。埋土は 28 小穴が灰色シルト混細～中砂、29 溝が明緑灰シルトや褐色シルト等のブロック土である。遺物は出土していない。

30 土坑（図 77・77-316・図版 33）

28 小穴・29 溝の南東約 4 m に位置する。土坑東側は調査区外に延びるため全形は不明である。検出長約 0.5 m、幅約 0.4 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は 3 枚に分かれる。上層が灰白色シルト混中～粗砂、中層が褐色細砂混シルトと灰白色シルトのブロック土、下層が灰白色極細～細砂と褐色シルトのブロック土である。出土遺物には小片となった土師器皿・皿がある。図 77-316 は土師器皿である。所謂「て」の字状口縁皿。白色系の胎土である。10 世紀末～11 世紀初頭（京 IV 期新～京 V 期古段階）頃の所産か。

31 小穴（図 77）

25 小穴の西側約 1 m に位置する平面楕円形を呈する小穴。長軸約 0.3 m、短軸約 0.2 m、深さ約 0.1 m を測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は明黄褐色シルトと褐色シルト混細砂と明青灰色シルト混極細砂のブロック土である。遺物は出土していない。

32 小穴（図 77・77-318・図版 33）

25 小穴の北東側約 2 m に位置する平面楕円形を呈する小穴。長軸約 0.4 m、短軸約 0.3 m、深さ約 0.1 m を測る。断面形は皿状を呈する。埋土は褐色極細砂混シルトで炭化物を含んでいる。出土遺物には土師器や須恵器がある。図 77-318 は須恵器蓋である。

33 小穴（図 77・77-317）

32 小穴の北東側約 5 m に位置する平面不整円形を呈する小穴。直径約 0.3 m、深さ約 0.15 m を測る。断面形は皿状を呈する。埋土は褐色中～粗砂混シルトで炭化物や橙色粗砂ブロック等を含んでいる。出土遺物には小片となった土師器皿や黒色土器内黒椀がみられた。図 77-317 は土師器皿もしくは杯。白色系の胎土である。体部は直線的に斜めに立ち上がり、口縁端部は端反りとなる。口縁部二段窪みナデを施す。11 世紀中頃～後半（京 V 期中～新段階）の所産であろうか。

34・35 小穴（図 77・図版 33）

33 小穴の西側約 2 m に位置する平面楕円形を呈する小穴。どちらも長軸約 0.4 m、短軸約 0.3 m、

深さ約0.1mを測る。断面形は皿状を呈する。34小穴の埋土は褐色極細砂～細砂とにぶい黄橙色極細～細砂と褐色極細砂混シルトのブロック土。35小穴の埋土は褐色細砂混シルトである。35小穴からは小片となった黒色土器内黒楕が出土している。

溝や小穴からは、土師器甕・皿・「て」の字状口縁皿、黒色土器内黒楕等の細片が僅かに出土したが、時期を明確にし難い。しかし、先述した21土坑や22井戸との関係や出土遺物から推察すれば平安時代の所産と想定される。

第4節 5区の調査

調査地の中央に位置する調査区である。 $X = -137,145 \sim -137,180$ ・ $Y = -43,708 \sim -43,730$ に位置する北東から南西に長い狭小な調査区である。調査区中央部は北東から南西にはしるコンクリート構造物や近現代の溝によって、幅約4m程度搅乱を受けている。5区は長さ約40m、幅約8mを測る。近現代の土地改変が著しく、近世の作土層や中世・古代の包含層等が既に削平され存在していなかった。機械掘削完了時点で地山面（第1面）となる。

（1）第1面（図78～82・図版37・38・48）

当区は近現代の土地改変が著しく、近現代のパラスト層直下で検出した地山面を第1面として調査を行なった。

第1面は標高T.P.+7.25～7.4m、削平のダメージが少ない箇所でT.P.+7.5mを測る。一見するとほぼ平坦な地形にみえるが、旧地形を完全に反映した姿ではない。地山は相当削られているようで、4区同様に遺構は希薄で、深度のある大形の遺構（大溝や土坑群）は比較的遺存状態が良好であったが、溝や小穴等の遺構は上部が削られており、辛うじて基底部が残存しているような状態であった。

4溝（図79～80・81～319～328・図版38・48）

調査区の中央部、 $X = -137,160$ ライン付近で検出した大溝。大溝はN-70°-Wに軸をもち、残りの良い北西部で幅約6m、深さ約1.2mを測る。検出長は約7mで大溝の西側は調査区外へと延びる。断面形は逆台形状を呈するが、大溝南側法面の傾斜角は30°、北側法面の傾斜角は50°となっており、北側壁が急な角度になるように掘削されている。大溝の東端部は $Y = -43,710$ ライン付近で急激に立ち上がり、行き止る。大溝の東端外側に当たる $Y = -43,708 \sim 710$ m間は遺構の空白部分であることから、土橋状の性格も想定されるが、それ以東が調査区外になるため、詳細は不明である。平面・断面観察の結果、この大溝は後述する5落込みや土坑群を切って掘削されていることが明らかになった。

大溝は最下層に地山由来の緑灰色シルト質粘土と褐色シルトと灰白色細～中砂のブロック土がみられ、下層には灰色系シルト～中砂が、中層には褐色シルト～粘土が、上層には黄灰色系シルト～中砂が堆積している。下層～上層の堆積にはラミナが認められるため、一気に人为的に埋め立てたものではなく、止水堆積層と思われる。最下層の堆積土は地山や既に失している包含層由来のシルトブロックから構成されることを考えると、大溝掘削時の排土を土壠状に積み上げたものが崩れ落ちたものであろうか。

大溝埋土からは土師器甕・甕、瓦器楕・皿、瓦質土器甕、東播系須恵器鉢、須恵器、瓦等が出土した。

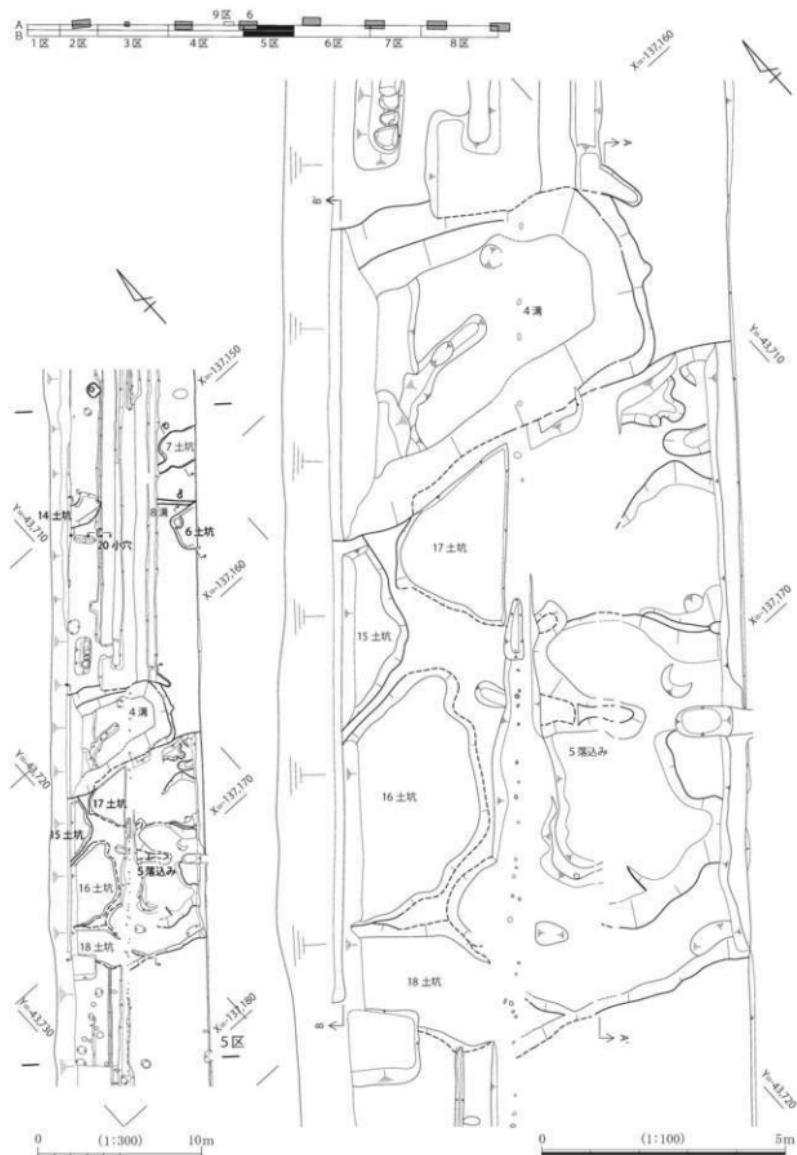
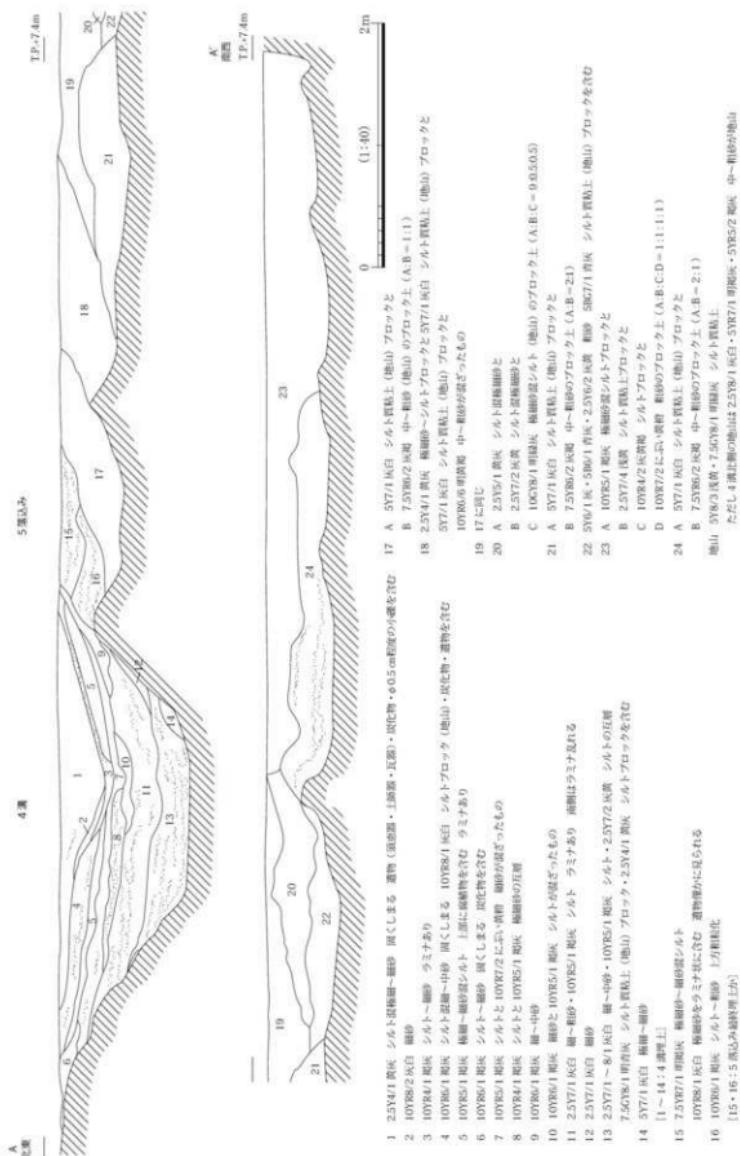


図 78 西の庄東遺跡 5区 第1面 平面図



また、ウマ左中足骨1点やウシ左上腕骨1点といった獸骨も出土している。

図81-319～321は土師器皿。底部から口縁部に向けて内湾しながら短く立ち上がる。内面は口縁部に沿うようにナデを一周廻らせ、内面見込みは横位のナデを施す。319・321は14世紀前半（京VII期中段階）、320は14世紀前半～中頃（京VII期中～新段階）の所産であろう。322・323は瓦器椀。322の器形は縮小化している。体部から口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部内面には沈線が廻らない。体部外面にはユビオサエが残り、内面は粗いヘラミガキを施す。13世紀末～14世紀中頃（楠葉型IV-1・2期）の資料であろう。323は体部から口縁部にかけて緩やかに内湾しながら立ち上がる。口縁部内面に沈線は廻らない。体部外面にはユビオサエが残り、内面は粗いヘラミガキを施す。13世紀前半～中頃（和泉型III-3期）の所産であろう。324は土師器鍋か。口縁部内外面に横位のハケメを、頸部外面には縱位のハケメを施す。頸部外面には煤が付着。325・326は東播系須恵器鉢。325は口縁端部の上下を拡張させ、断面三角形状を呈する。326は口縁端部の上部をやや拡張させ、断面三角形状を呈する。どちらも12世紀末～13世紀初頭（森田編年第II期第2段階）の所産であろう。327は瓦質土器甕。頸部は短く立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は下方に拡張させる。肩部外面は横位の平行タタキを施した後、斜方向の平行タタキを行なう。内面は横位の強いナデ。14世紀前半の所産。328は瓦質土器足釜。出土遺物の年代観から14世紀前半～中頃に機能していたものと推察される。

5落込み・土坑群（15～18土坑）（図79～80・81～329～333・図版38・48）

調査区中央部やや西寄り、4溝の南西側に5落込みや土坑群が展開する。これらの土坑群は4溝によって切られている。

5落込み（図81～330・332・図版38・48）

調査区中軸をはしる擾乱よりも東側で検出した。検出長は南北約12m、検出幅は約4mを測る。深さは約0.5～0.6mである。落込み西側は擾乱に削平されるが、その西側に展開する土坑群に繋がるものと想定される。落込み東側は調査区外へと広がる。当初、調査に着手した段階では平面で明確な切り合いを捉えることが出来なかつたため、4溝のような大溝かと思われた。しかし、断面観察や掘削後の底面の凹凸が顕著であった様子から、複数の土坑が重複して掘削された結果形成されたものであることが明らかとなつた。

落込みは地山由来の灰白色・緑灰色系シルトや失われた包含層由来の褐灰色・黄灰色系シルトのブロック土が充填されていた。

出土遺物には細片となった土師器皿・椀・甕、黒色土器、瓦器、須恵器等がある。こうした遺物は包含層由来の褐灰色・黄灰色系シルトのブロック土に含まれていた。図81-330は土師器椀である。口縁部外面は強いナデにより段がみられ、内面には段状になった沈線が1条廻る。体部外面にはユビオサエがみられ、内面は細かな横位のヘラミガキが施される。黒色土器椀を意識して作成されたのか丁寧な作りである。10世紀前半～11世紀前半の所産であろう。332は須恵器杯B。体部から口縁部は内湾しながら立ち上がる。外面は口縁部及び高台付近の底部以外に非常に細かなヘラミガキが施される。高台は貼り付け高台。8世紀後半～9世紀前半（平城V期～平安京I期新段階）の資料であろう。

土坑群（15～18土坑）（図81～329・331・333・図版38・48）

土坑群は5落込みの西側で検出した複数の土坑が切り合ったもの。5落込みとの間に擾乱があるため、

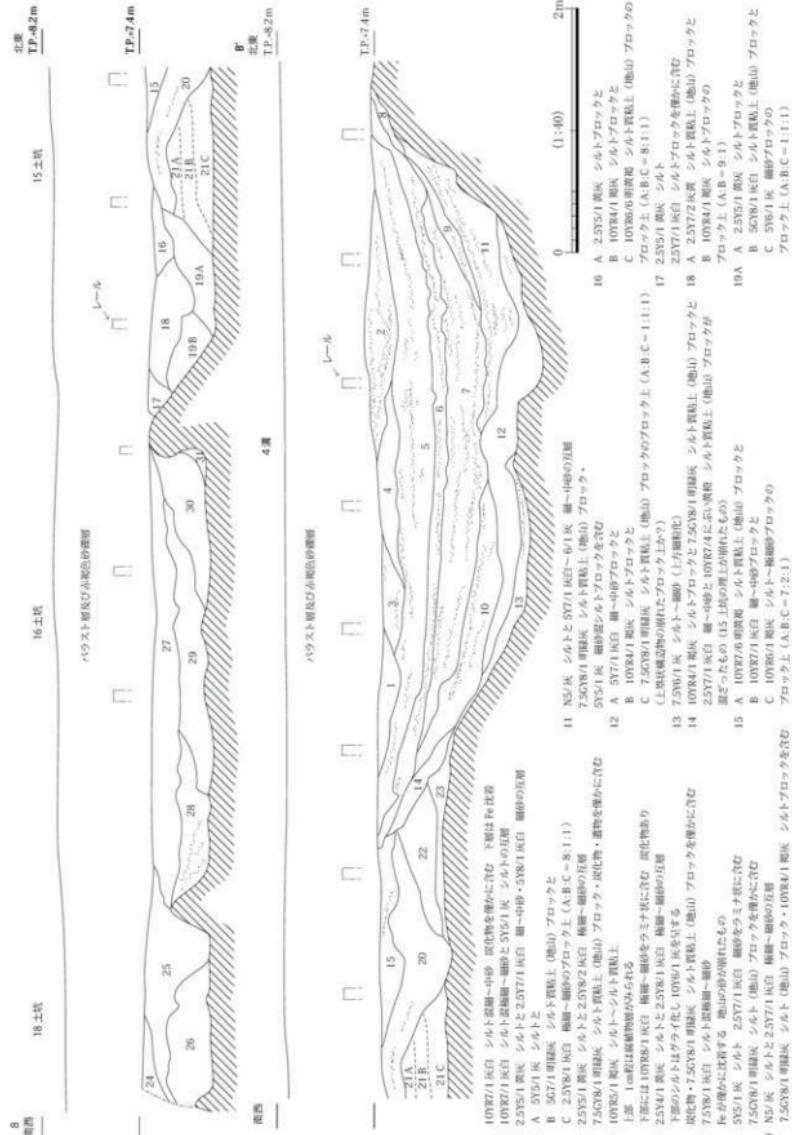


図 80 第1面 4溝・15・16・18土坑断面図

明確ではないが、現状で4基（15～18土坑）を確認した。土坑群西側は調査区外へと広がる。土坑は平面不定形なものが多い。狭小な範囲での調査であるため、明確な規模を明らかに出来なかつたが、概ね3×4m程度になるのであろうか。深さは約0.5mである。

土坑群は5落込み同様、地山由来の灰白色・緑灰色系シルトや失われた包含層由來の褐色・黄灰色系シルトのブロック土が充填されていた。

出土遺物には細片となった土師器皿・甕、黒色土器内黒挽、瓦器、須恵器等がある。こうした遺物の

- 19B 7.5YR7/1 明褐灰～10YR7/1 灰白 細砂（地山）ブロックと
5Y7/2 黄灰 シルト質粘土（地山）ブロックが混ざつたもの
- 20 A 2.5Y5/1 黄灰 シルトブロックと
B 2.5Y7/1 灰白 中砂ブロックと
C 2.5Y3/1 黒褐 シルトブロックと
D 5BG7/1 明褐 粘土質粘土（地山）ブロックの
ブロック土（A:B:C:D=7:0.5:5.2）
- 21 A 10YR7/1 灰白 細砂・細砂と
B 10YR5/1 褐灰 シルト質粘土質砂と
C 2.5Y7/2 黄灰 中・粗砂が互層状に堆積
上→下 C 7.5GY8/1 明褐灰 シルト質粘土ブロックを含む
- 22 10YR7/3 にぶい黄灰 細～中砂（地山）で埋めたもの
- 23 A 10YR5/1 褐灰 シルトブロックと
B 2.5Y7/1 灰白 シルト質粘土ブロックと
C 5BG7/1 明褐 粘土質粘土（地山）ブロックと
D 2.5Y6/1 黄灰 細～中砂ブロックの
ブロック土（A:B:C:D=1:1:1:1）
- 24 2.5Y7/4 黄灰 極細粒シルトブロックと
2.5Y6/1 黄灰 シルト・シルト質粘土質砂の
最下層には2.5Y5/1 黄灰 シルトと10YR5/1 灰白 極細砂がラミナ状に堆積
- 25 A 2.5Y7/1 浅黄 シルト（地山）ブロックと
B 2.5GY8/1 灰白 シルト質粘土（地山）ブロックと
C 5BG7/1 明褐灰 極細～細砂ブロックの
D 2.5Y5/1 黄灰 シルトブロックの
ブロック土（A:B:C:D=7:1:1:1）
- 26 A 2.5Y6/1 黄灰 極細粒シルトブロックと
B 10YR4/1 褐灰 シルトブロックと
C 10YR7/1 灰白 中砂（地山）ブロックと
D 7.5GY8/1 明褐灰 シルト質粘土（地山）ブロックの
ブロック土（A:B:C:D=6:1:1:2）
[24～26 18土坑埋土]
- 27 A 2.5Y6/1 黄灰 シルト・泥炭細砂ブロックと
B 10YR8/6 明褐灰 極細粒シルトブロックと
C 2.5Y7/1 灰白 細砂ブロックと
D 10YR4/1 褐灰 シルトブロックの
ブロック土（A:B:C:D=4:4:1:1）
- 28 2.5Y7/1 灰白 細砂 2.5GY1 黄灰 シルトブロック・
7.5GY8/1 明褐灰 シルト質粘土（地山）ブロックを僅かに含む
- 29 2.5Y7/1 灰白 細砂・細砂および10YR7/1 灰白 細～中砂
5Y7/2 黄灰 シルト質粘土（地山）ブロックを含む
- 30 A 10YR7/1 灰白 細～中砂（地山）ブロックと
B 10YR5/1 褐灰 シルトブロックと
C 5Y7/2 黄灰 シルト質粘土（地山）ブロックの
ブロック土（A:B:C=4:3:3）
[27～31 16土坑埋土]

（図80の土色の統計）

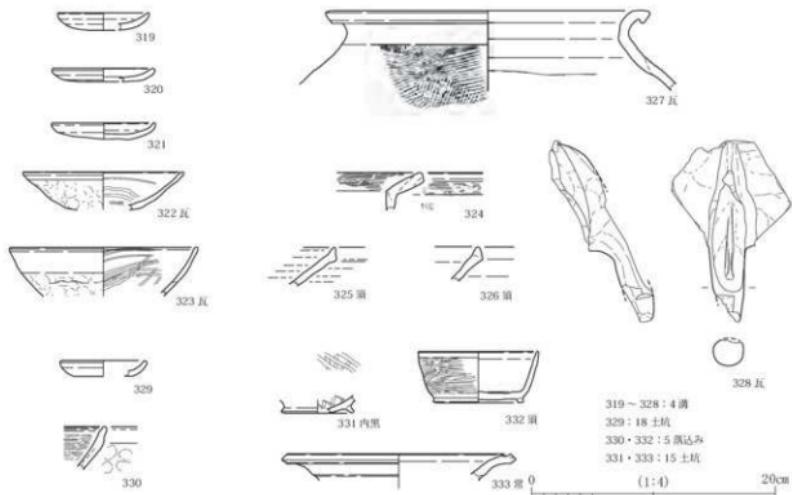


図81 第1面 4溝・5落込み・土坑群出土遺物

多くは失われた包含層由来の褐色灰色・黄灰色系シルトのブロック土に含まれていた。図 81-329 は 18 土坑出土の土師器皿である。底部から口縁部に向けて内湾しながら立ち上がる。内面は口縁部に沿うようにナデを一周廻らせる。12世紀末～13世紀中頃(京VII期古～新段階)の所産。331・333は 15 土坑出土。331 は黒色土器内黒椀。内面見込みに斜格子状の暗文が施される。333 は常滑焼壺か。口縁部は大きく外反する。口縁端面の両端は強いナデによって摘み上げるようシャープに仕上げる。12世紀後半～末(中野編年2～3型式)の所産であろう。

一連の落込み・土坑群は X = -137.164 ~ 175 の間、約 11 m の幅で、N = 70° - W を軸にもち帶状に掘削されている。遺構周辺が削平されているとは言え、深さ約 0.5 m を測る土坑群がこの範囲を逸脱して検出されなかったことは極めて特異的である。限定された場所で掘削を重ねる重要な目的があつたのであろう。こうした土坑群の状況(埋土の状況や重複して掘削されること等)は、個別の土坑の大さきは今回の方が大きいものの、隣接する吹田操車場遺跡で確認された群集土坑に近いものと思われる。本調査区で検出した土坑群も粘土探柵坑であろうか。

5 落込みや土坑群が掘削された時期は、出土遺物及び 4 溝との切り合い関係から鑑みて、古代以降で 4 溝が掘削されるまでの間、14世紀前半までの所産と想定される。

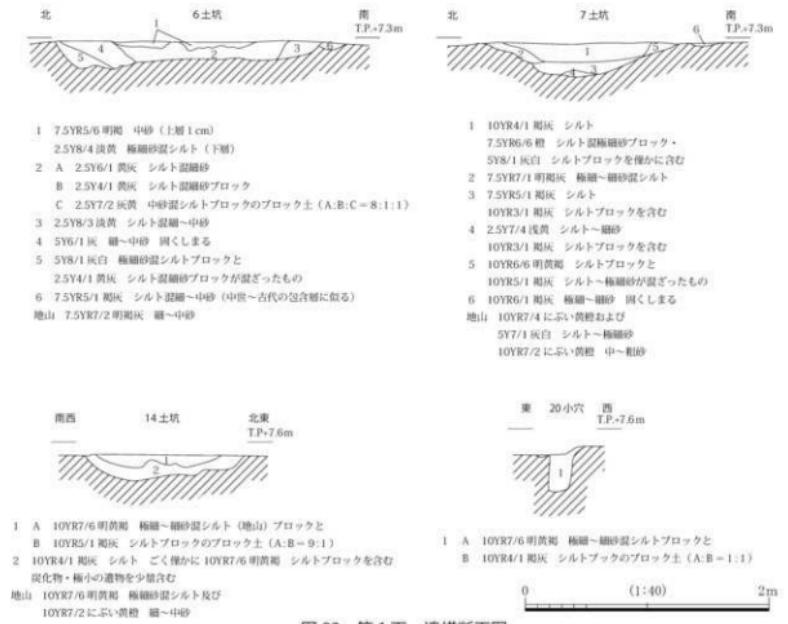


図 82 第1面 遺構断面図

6 土坑（図 82）

調査区北東隅、 $X = -137,155 \cdot Y = -43,702$ 付近で検出した土坑である。土坑東側は調査区外へと延びるため、全形は不明である。検出長東西約 2 m、幅南北約 2.2 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形は扁平な逆台形を呈する。出土遺物には細片となった土師器がみられたが、時期は決め難い。

7 土坑（図 82・図版 37）

調査区北東隅、6 土坑の北側約 2 m で検出した土坑。土坑東側は調査区外へと延びるため、全形は不明である。検出長東西約 2.5 m、幅南北約 2 m、深さ約 0.3 m を測る。断面形は皿状を呈する。遺物の出土がみられなかったため、時期は不明である。

14 土坑（図 82・図版 37）

調査区北西隅、 $X = -137,150 \cdot Y = -43,706$ 付近で検出した土坑である。土坑西側は調査区外に広がり、東側は搅乱に切られるため全形は不明である。検出長東西約 2 m、幅南北約 1.2 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は 2 枚に分かれる。上層は地山由来の明黄褐色シルトと褐灰色シルトのブロック土、下層は褐灰色シルトで炭化物を含んでいる。出土遺物には細片となった土師器があるが、時期は決め難い。

20 小穴（図 82・図版 37）

14 土坑の南側約 1 m の位置で検出した小穴。東側はコンクリート製構造物によって切られるため、判然としないが概ね直径約 0.4 m 程度の小穴であろう。埋土は明黄褐色シルトと褐灰色シルトのブロック土である。遺物の出土がみられなかったため、時期は不明である。

6・7・14 土坑及び 20 小穴からは時期比定を成し得る遺物の出土に恵まれなかつたため、帰属時期を明らかにし得なかつた。しかし、これらの遺構と隣接する 6 区南端で検出した遺構群の埋土は近いものであった。調査区は跨るもの、至近距離で検出した両者が関連する可能性が高いと思われる。時期不明とした土坑や小穴も古代（8 世紀代）の所産である可能性を指摘しておきたい。

第 5 節 6 区の調査

調査地の中央東側に位置する調査区である。 $X = -137,100 \sim -137,145 \cdot Y = -43,659 \sim -43,702$ に位置する北東から南西に長い狹小な調査区である。6 区は長さ約 60 m、幅約 8 m を測る。

調査区の中軸よりも北西側は、北東から南西にはじるコンクリート製構造物や近現代の石炭殻が充填された溝・2 列の枕木が延々と打設された溝によって、幅約 4 ~ 6 m も搅乱を受け、地山面（第 1 面）が大きく傷んでいた。調査区北東側も東方に開く中世以降の大きな落込み（南北 40 m・東西 4 + α m・深さ約 0.3 m）に削られていた。幸うじて一部分で中世の包含層が確認出来たものの、その残存状況は芳しくなかった。その中にあって、調査区南西部部分は比較的ダメージが少なく、古代の遺構を確認することが出来た。基本的に機械掘削完了時点で地山面（第 1 面）となる。

なお、先述した石炭殻が充填された溝からは写真 1・2・図 6 に掲載した、汽車土瓶や木製弁当箱蓋、

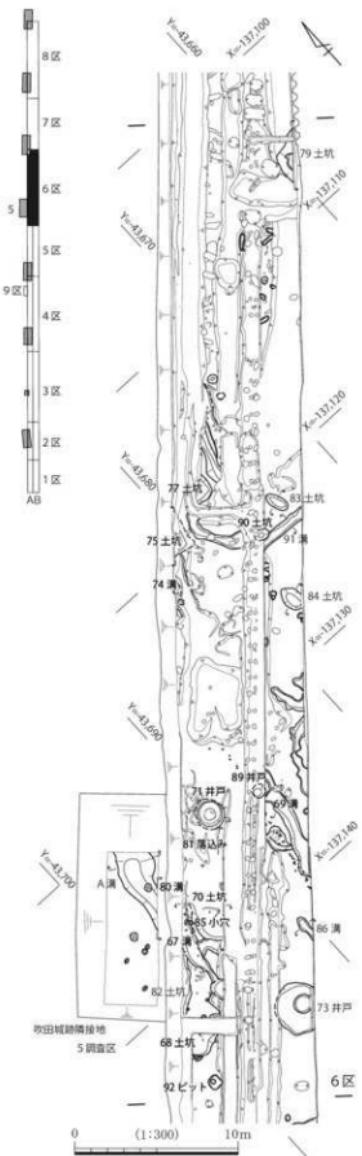


図 83 西の庄東遺跡 6 区 第 1 面 平面図

ビール瓶、ダニエル電池素焼き容器、煉瓦等の近代資料が多数採集された。

(1) 第 1 面 (図 83 ~ 90・図版 39 ~ 41・49)

当区は近現代の土地改変が著しく、大半で近現代のバラスト層直下で検出した地山面を第 1 面として調査を行なった。なお、調査区北東側の一部で僅かに中世の包含層が遺存していたが、大きく削平されているようで包含層上面では遺構を確認することが出来なかった。従って、この部分も中世包含層を掘削して検出した地山面を第 1 面として調査を実施した。

地山面（第 1 面）は標高 T.P. + 7.0 ~ 7.2 m、削平の影響が少ないと測定した。調査区南西部で T.P. + 7.5 m を測る。一見すると平坦な地形に見えるが、旧地形を完全に反映した姿ではない。他の調査区同様、擾乱の影響は大きく、調査区北西隅のように遺構が全く検出出来ない部分も存在した。

検出した遺構は希薄ながら、井戸 3 基、土坑、溝、ピットなどがある。深度のある遺構（井戸や土坑）は比較的遺存状態が良好であったが、溝や小穴等の遺構は上部が削られており、辛うじて基底部が残存しているような状態であった。なお、調査区南西部で検出した古代の溝は平成 21 年（2009）度に実施した吹田城隣接地確認調査の 5 調査区で検出した溝と繋がるものであったため、確認調査の成果も併せて本節で報告する。

71 井戸 (図 84・図版 39)

調査区南西部、X = - 137,133・Y = - 43,690 付近で検出した平面円形を呈する井戸である。上部は擾乱によって大幅に削平されている。掘方の直径は約 1.8 m を測る。掘方のほぼ中央に幅 0.1 m、長さ約 1 m の板材を組んだ桶を井戸枠として設置している。検出面から約 1.8 m 下 (T.P. + 5.4 m 付近) で湧水が著しくみられ、壁面の崩落が激しくなったため、掘削を停止した。井戸枠内埋土は黄灰

色シルトで、裏込めは灰白色細～中砂。井戸枠の上部には褐色シルト混細～中砂や黄灰色シルト混細～中砂が充填されており、埋め戻されたと思われる。出土遺物には土師器、瓦質土器捏ね鉢、近世陶磁器等がみられることから、近世以降の所産と思われる。

73 井戸

調査区南東部分で検出した井戸である。東側の一部は調査区外へと広がる。掘方の直径は約3m。掘方中央よりやや北側に直径約1.2mの井戸枠の痕跡を確認した。線路への影響を考慮して検出面から約0.4mの深さまでの掘削に止めた。近世陶磁器が僅かに出土したことから近世以降の所産であろう。

89 井戸

71井戸の東側約2mで検出した素掘りの井戸である。上部は枕木が多数打設された近現代の溝に切らされている。井戸の直径は約0.75mである。検出面から約0.9m下(T.P.+5.8m付近)で湧水がみられた。

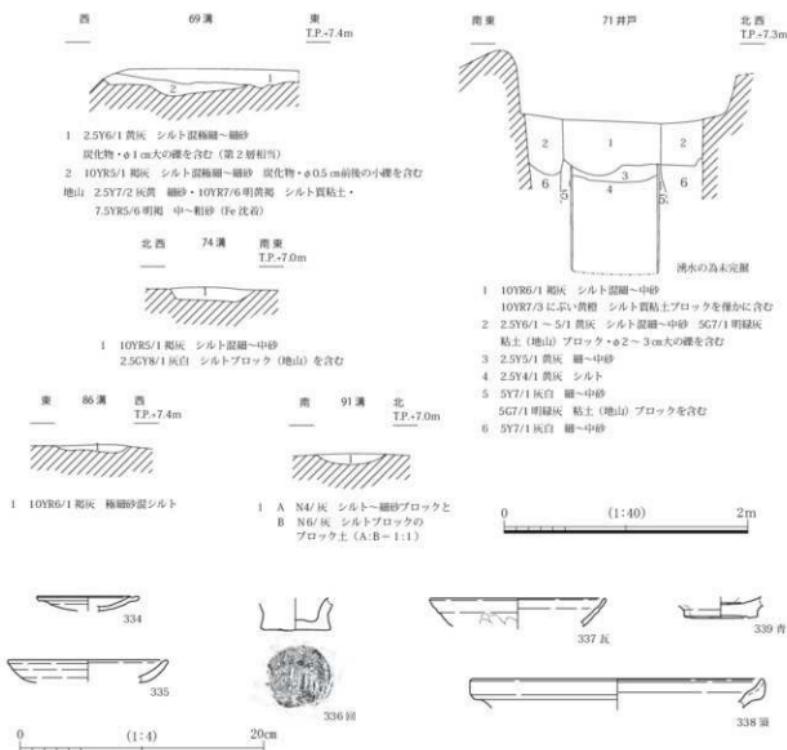


図 84 第1面 遺構断面図（1）及び69溝出土遺物

埋土は地山由来の明緑灰色シルト質粘土と灰色シルト、灰色細砂のブロック土である。細片となった須恵器杯B蓋が出土しているが、埋土の状況を考えると近世以降の所産であろう。

69 溝（図 84・84－334～339・図版 39）

調査区の南東部分、 $X = -137,140 \cdot Y = -43,690$ 付近で検出した溝。N-17°-Eを軸に北から南にはしる。溝北側は89井戸や攪乱によって削平され、南側は調査区外へと延びる。検出長は約6m、幅約1.1m、深さ約0.15～0.2mを測る。溝の南肩部に沿ってマツ科の材を用いた杭列が打設されている。溝の北側は大幅に削平されており、明確ではないが、杭列が北側へも展開することからX=-137,120・Y=-43,680付近で確認した74溝に繋がる可能性が高いと想定される。

溝の断面形は浅い皿状を呈し、埋土は褐灰色シルト混極細～細砂で炭化物を含んでいる。

出土遺物には土師器皿・羽釜、瓦器椀、青磁碗、須恵器、鉄滓などが出土している。図84-334は土師器皿である。所謂「て」の字状口縁皿。二次焼成を受けているのか、全体的に赤味を帯びる。11世紀後半（京V期新段階）の所産であろう。335は土師器皿もしくは杯、口縁部二段窪みナデか。器壁がかなり厚い。13世紀中頃～後半（京VII期新～VIII期古段階）であろうか。336は回転台上師器皿。底部から大きく外反する口縁部をもつ。11世紀中頃～12世紀後半頃の所産であろうか。337は瓦器椀。器形は縮小化している。体部から口縁部は直線的に立ち上がる。口縁内部には沈線が廻らない。体部外面にはユビオサエが残り、内面はナデを施す。13世紀代（和泉型III-2期～IV-2期）の資料であろう。338は東播系須恵器鉢。口縁部は上方に拡張し、端部は丸くおさめる。12世紀中頃～後半（森田編年第二期第1段階）であろう。339は青磁碗。基本的に高台は露胎であるが、一部豊付けや高台にも釉が掛かる。内面も施釉されているはずであるが、釉が掛けられている範囲は少ない。13世紀初頭から前半の龍泉窯系青磁碗I～5類か。出土遺物の傾向から13世紀代の溝と考えられる。

74 溝（図84）

調査区北辺中央のX=-137,120・Y=-43,680付近で検出した溝。N-27°-Eを軸に北から南にはしる。溝北側は75土坑に切られ、南側は攪乱に削平されている。検出長は約2.5m、幅約0.7m、深さ約0.15mを測る。断面形は扁平な逆台形を呈する。埋土は褐灰色シルト混細～中砂である。遺物は須恵器細片が僅かに出土したのみである。

86 溝（図84）

調査区南東部分、 $X = -137,140 \cdot Y = -43,690$ 付近で検出した溝。南側は調査区外へと延びる。検出長は約1.5m、幅約0.6m、深さ約0.1mを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は褐灰色極細砂混シルトである。遺物の出土はみられなかった。

91 溝（図84）

調査区南辺中央のX=-137,123・Y=-43,675付近で検出した溝。N-88°-Wを軸に西から東へはしる。溝西侧は枕木が多数打設された近現代の溝に切られ、東側は調査区外へと延びる。検出長は約3m、幅約0.6m、深さ約0.1mを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰色系シルト～細砂のブロック土である。遺物の出土はみられなかった。

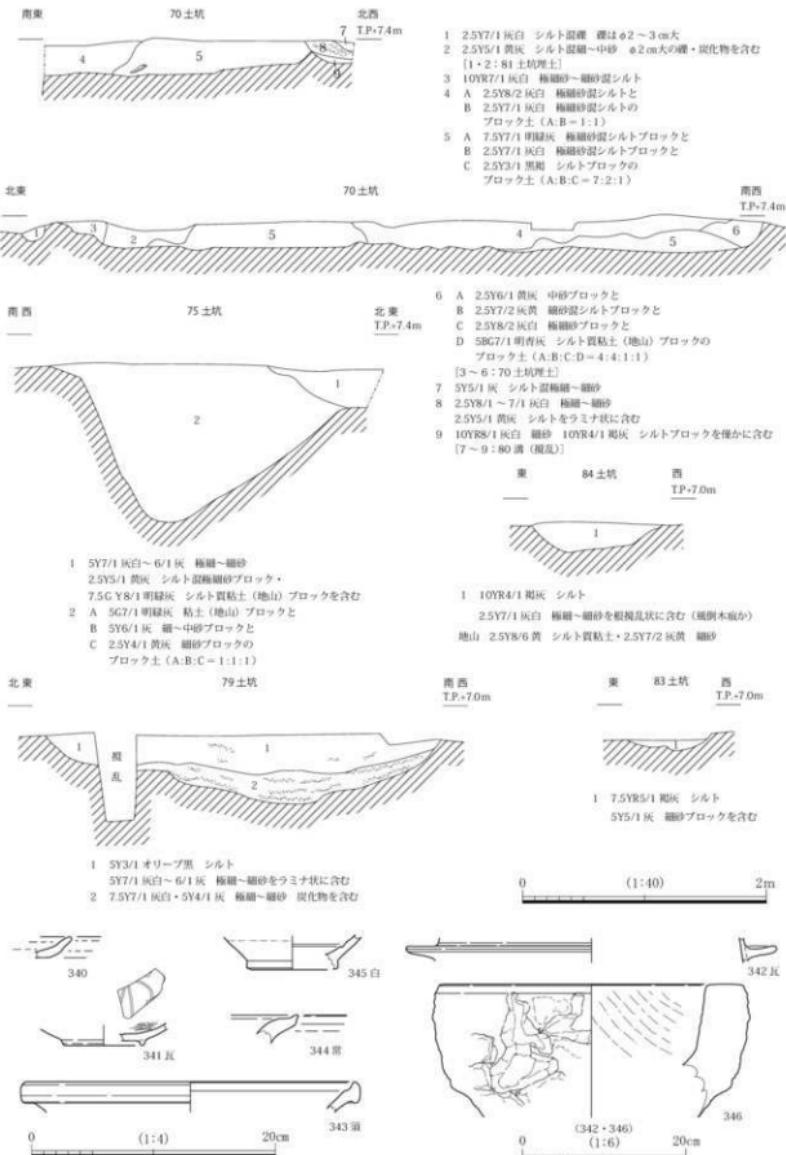


図 85 第1面 遺構断面図(2) 及び 70 土坑出土遺物

70 土坑（図 85・85-340～346・図版 49）

調査区南西部部分、X = -137,137・Y = -43,695 付近で検出した大形の土坑。土坑西側は 80 溝（近代溝）に切られ、東側は枕木が多数打設された近現代の溝に削平される。検出長は約 5.8 m、検出幅約 2.2 m、深さ約 0.3 m を測る。埋土にはブロック土が充填されている。出土遺物には土師器皿、土師器甕、瓦器椀、瓦質土器羽釜、黒色土器内黒椀、東播系須恵器鉢、須恵器等がある。

図 85・340 は土師器皿。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸くおさめる。器壁は厚い。橙色系の胎土である。13世紀後半～14世紀前半（京VII期古～中段階）の所産であろうか。341 は瓦器椀。内面見込みに螺旋状或いは鋸歯状の暗文がみられる。高台は低く、幅の狭い逆台形を呈する。13世紀初頭（楠葉型III-2期）か。342 は瓦質土器羽釜。鉢はやや短く、斜め上方を向く。14世紀後半の資料か。343 は東播系須恵器鉢。口縁部は上下に拡張するが、下方への拡張は少ない。口縁部内面に段が形成される。13世紀前半～後半（森田編年第III期第1段階）の所産。344 は常滑焼甕か。口縁部上端部は上方に摘み上げるように強いヨコナデを施す。口縁部外面は四線状に窪む。12世紀末～13世紀初頭（中野編年4型式）であろう。345 は白磁碗である。内面見込みに浅い沈線が1条廻る。体部外面下半以下は露胎である。白磁碗IV 1a 類。11世紀後半～12世紀前半の所産。346 は石臼。掲き白と思われる。内面には右下がりの線状の凹凸がみられるが、使用により平滑となっているため使用による結果か調整痕であるのかは不明。外面は成形時のハツリ痕であるのか凹凸が著しい。

一部にやや新しい時期の遺物がみられるが、出土遺物の年代観から概ね 13～14世紀頃所産の土坑である。

75 土坑（図 85・図版 39）

調査区北辺中央、X = -137,120・Y = -43,680 の交点付近で検出した土坑。土坑西側は調査区外へ広がる。検出長は約 2 m、検出幅約 1.5 m、深さ約 1.3 m を測る。埋土は地山由来の明瞭灰色シルト質粘土～粘土や灰色系細～中砂、黄灰色系シルト～細砂のブロック土である。出土遺物には土師器皿や近世陶磁器が僅かにみられた。

79 土坑（図 85・図版 39）

調査区北東隅、X = -137,107・Y = -43,660 付近で検出した土坑。土坑東側は調査区外へと広がる。検出長は東西約 2.5 m、検出幅は南北約 2 m、深さ約 0.6 m を測る。断面形は皿状を呈し、埋土は 2 枚に分かれる。上層はオリーブ黒色シルトで、下層は灰色系極細～細砂である。埋土にラミナが認められることから、水溜め状施設と想定される。遺物の出土はみられなかった。

83 土坑（図 85）

調査区南辺中央、91 溝の北側約 0.5 m で検出した土坑。平面楕円形を呈し、長軸約 1.5 m、短軸約 0.7 m、深さ約 0.15 m を測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は褐灰色シルトである。遺物の出土はみられなかつた。

84 土坑（図 85）

調査区南辺中央、91 溝の南側約 3 m で検出した土坑。土坑東側は調査区外へと広がるが、概ね平面

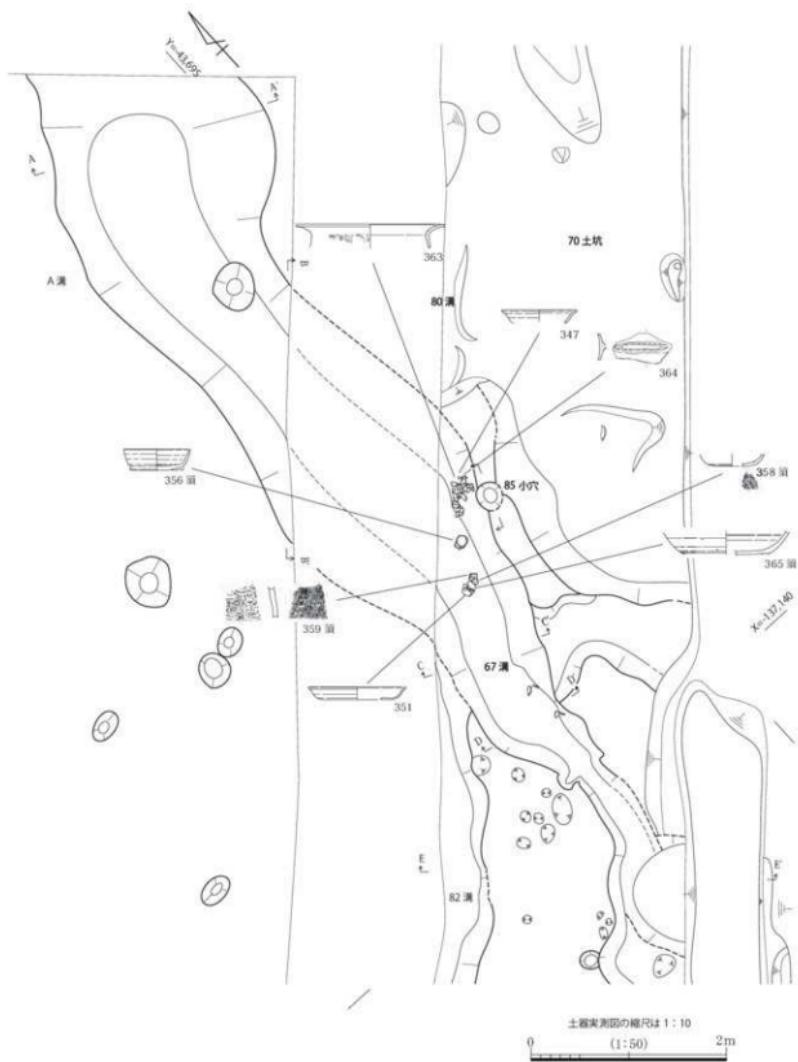


図 86 第1面 67 溝・85 小穴平面図

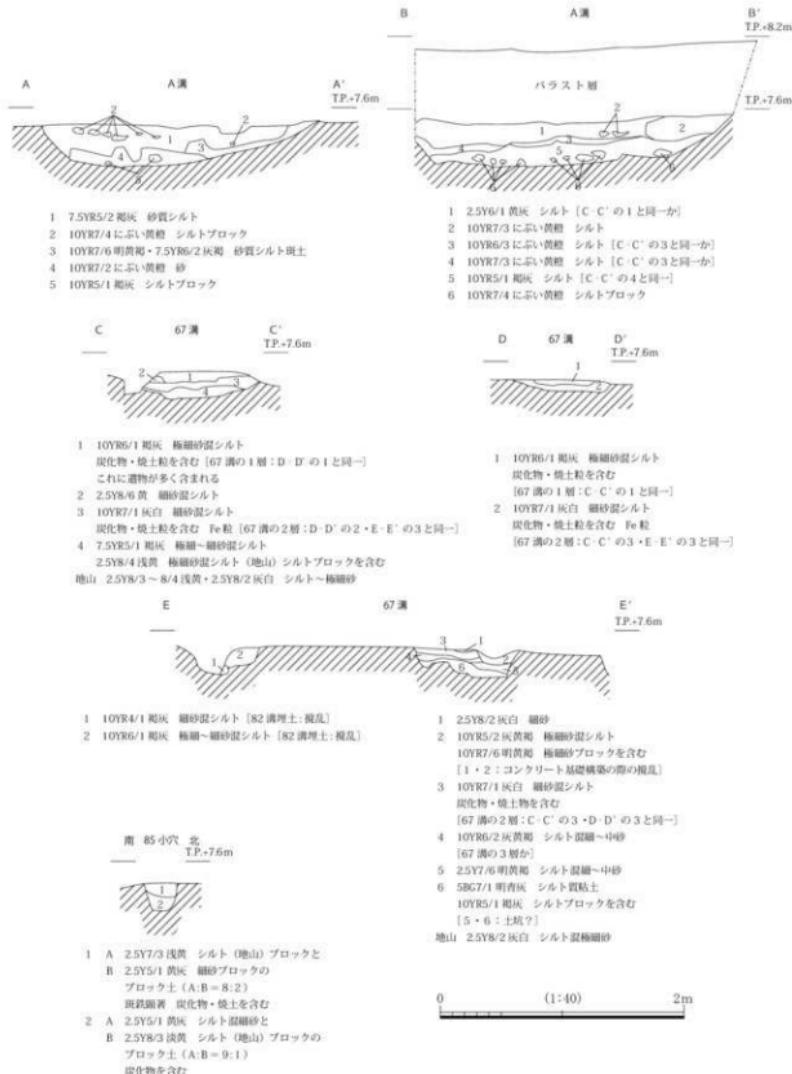


図 87 第1面 67溝・85小穴断面図

不整橢円形を呈するものと考えられる。長軸約2m、短軸約1m、深さ約0.25mを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は褐色シルトである。遺物の出土はみられなかった。

67溝(図86・87・88-347~366・図版40・49)

調査区南西部分、X=-137,140・Y=-43,696付近で検出した溝である。N-7°-Eを軸に北から南にはしる。溝北側は調査区外へと延び、平成21年(2009)度に実施した吹田城隣接地確認調査の5調査区で検出した溝と繋がる。溝南側はコンクリート製構造物によって切られている。確認調査部分を含めた規模は、検出長約10m、幅約0.4~2.2m、深さ約0.1~0.4mを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は大きく3枚に分かれ、上層に褐色系細砂混シルトが、中層に灰白色細砂混シルトが、下層に褐色系細砂混シルトが堆積している。上層の褐色系細砂混シルトから、土師器や須恵器がまとめて出土した。出土遺物には土師器皿・杯・甕・鍋、須恵器杯・甕等がある。

図88-347~349は土師器皿A。347は内外面とも磨滅、剥落が著しい。348は内面見込みから体部下半に暗文状の非常に細い斜直線がみられる。349は内面見込みから体部下半に斜め方向の暗文がみられる。350・351は土師器皿A。内面は剥落著しく調整不明。352・353は須恵器皿B蓋。352の口縁端部はややぶい三角形状を、353の口縁端部は三角形状を呈する。354・355は須恵器皿口縁部。355の外面には自然釉が付着。356・357は須恵器皿Bである。高台は断面逆台形を呈し、底部の外側に付く。358は須恵器皿A。底部外面にはヘラ切り痕を残す。359は須恵器甕。外面は格子目タキ

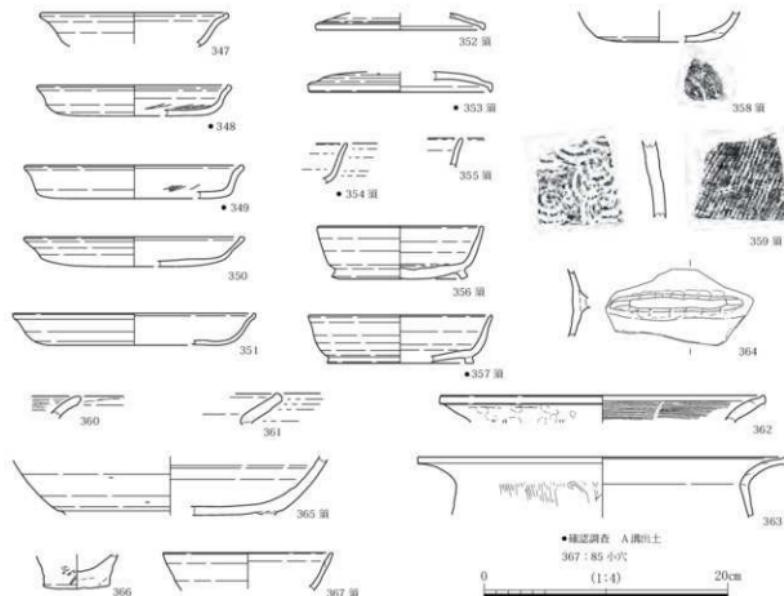


図88 第1面 67溝・85小穴出土遺物

を施す。内面には同心円の當て具痕を残す。

360～363は土師器甕である。360は口縁部内面にハケメを施す。口縁部外面には煤が付着。小片のため傾きは不確か。361の内面はほぼ全体的に剥離しており、調整不明。口縁部外面に煤が付着。362の口縁部内面には細かな横位のハケメを施す。363は内外面とも剥離が著しい。外面には縦位のハケメを施す。364は土師器鍋の把手部分。把手の大半は欠損。体部との接合部分には細かなユビオサエを施す。365は須恵器壺であろう。高台は剥落。366は弥生後期土器甕。外面には右上がりのタタキを施す。出土遺物は概ね8世紀前半～中頃（平城II～IV期）の所産である。

85 小穴（図87・88・367・図版41）

調査区南西部分、X = -137.137・Y = -43.696付近で検出した小穴である。67溝の東肩部を切つ

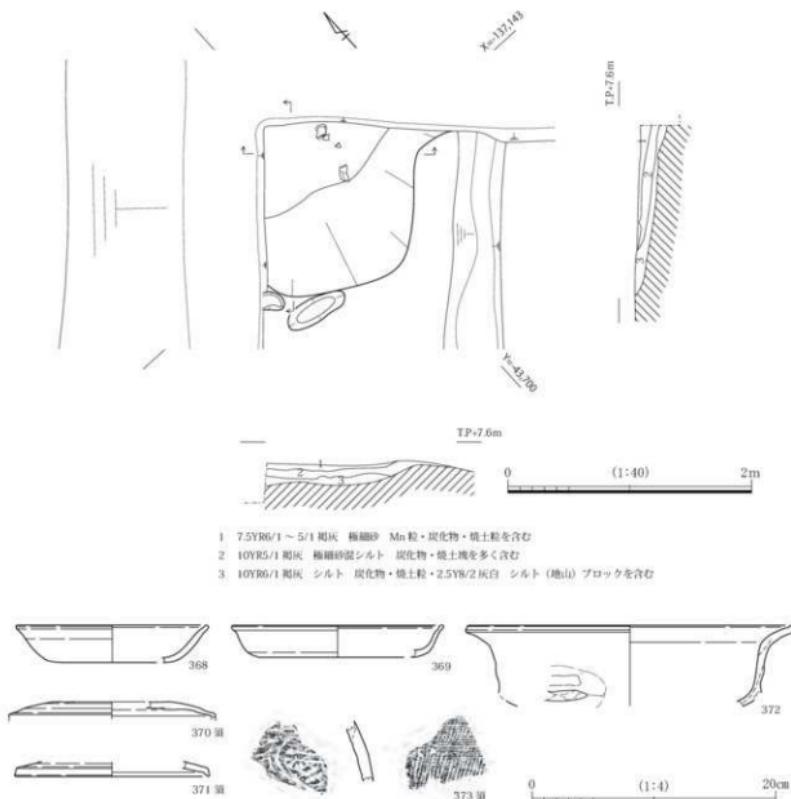


図89 第1面 68 土坑平・断面図及び出土遺物

ている。また、小穴東肩部は70土坑に切られている。平面円形を呈し、直径約0.3m、深さ約0.2mを測る。埋土は地山由来の浅黄色シルトと黄灰色細砂のブロック土で、上下2枚に分かれ。埋土には炭化物や焼土を含んでいる。図88-367は須恵器杯である。8世紀後半（平城Ⅲ～V期）の所産であろうか。

68 土坑（図89・89-368～373・図版41・49）

調査区南西部分、67溝の南西約2mで検出した土坑。土坑の北東及び北西側は近代以降の溝に切られるため、検出した平面形は扇形を呈する。検出長は約1.5m、幅約1.3m、深さ約0.2mを測る。断面形は皿状を呈し、埋土は3枚に分かれ。上層に褐灰色系極細砂が、中層に褐灰色極細砂混シルトが、下層に褐灰色シルトが堆積している。埋土上層に67溝同様、遺物が含まれる。また、土坑埋土に炭化物や焼土塊を多く包含するのが特徴的である。出土遺物には土師器杯・鍋、須恵器杯蓋・甕等がみられる。

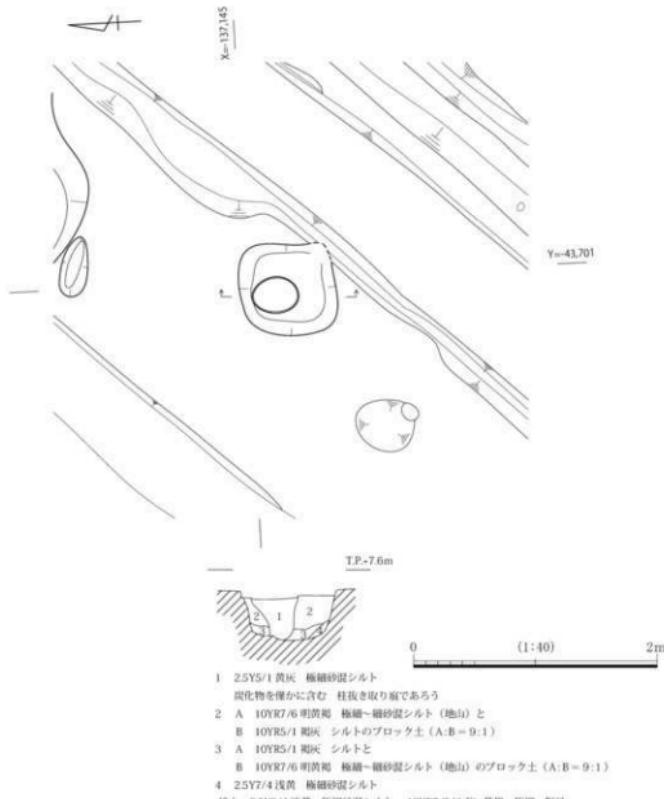


図90 第1面 92ピット平・断面図

図89-368・369は土師器杯である。全体的に磨滅が進んでおり、調整が不明である。370・371は須恵器杯B蓋。372は土師器鍋。口縁上端部は摘み上げるようにヨコナデを施す。口縁部外面上半部は凹線状に窪む。把手の大半は欠損。373は須恵器甕である。外面は平行タタキのちカキメを施す。内面には同心円凸で具痕を残す。出土遺物は概ね8世紀前後半頃（平城II～V期）の所産であろう。

92 ピット（図90・図版41）

調査区南西部分、68土坑の南西約1.5mで検出した平面方形を呈する柱穴。一边約0.75～0.8m、深さ約0.4mを測る。掘方北辺に柱抜き取り痕がみられた。裏込め土は地山由来の明黄褐色シルトと褐灰色シルトのブロック土である。埋土からは土師器皿の小片しか出土しなかったため、時期を決し難い。

第6節 7区の調査

調査地の東側に位置する調査区である。X = -137,070～-137,105・Y = -43,631～-43,663に位置する北東から南西に長い狭小な調査区である。7区は長さ約40m、幅約7～8mを測る。

調査区の北側部分（X = -137,080ライン付近よりも北側）は、北東から南西にはしシルト～粗砂が堆積した近現代の溝・2列の枕木が延々と打設された溝によって、幅約4～6mも搅乱を受け、第1面・第2（地山）面とともに大きく傷んでおり、辛うじて調査区南辺沿いに遺構面が遺存する状態であった。調査区南側部分（X = -137,090ライン付近よりも南側）は近現代の石炭殻が充填された溝・2列の枕木が延々と打設された溝、東方に開く中世以降の大きな落込み（南北19m・東西2+αm・深さ約0.3m）に削られており、遺構面の状態は芳しくなかった。また、調査区中央部分は調査区の両端側に比すると搅乱を被る程度は少なかったものの、幅約3m程度を失する状況であった。

当区は中央部以南では機械掘削完了時点まで地山面（第2面）となるが、調査区北側東端付近は緩やかに北東方向に傾斜する地形となっているためか、1～6区とは異なり機械掘削完了時点で下位に第1～2層の存在が確認出来た。その結果、調査区北側東端部分のみ2面の遺構面を調査する運びとなった。

なお、先述した近現代の石炭殻が充填された溝や砂が堆積した溝からは写真1・2・図3に掲載した汽車土瓶やビール瓶、ダニエル電池素焼き容器、煉瓦等の近代資料が多数採集された。

（1）第1面

調査区北側東端で、灰色シルト混細砂である第1層を掘削し終えて検出した灰白・黄灰色シルト混細砂（第2層）上面を第1面として調査を行なった。第1面の標高はT.P.+6.7～6.65mで僅かに東へと傾斜する地形となっている。検出した遺構には耕作痕と溝がある。

耕作痕と40溝

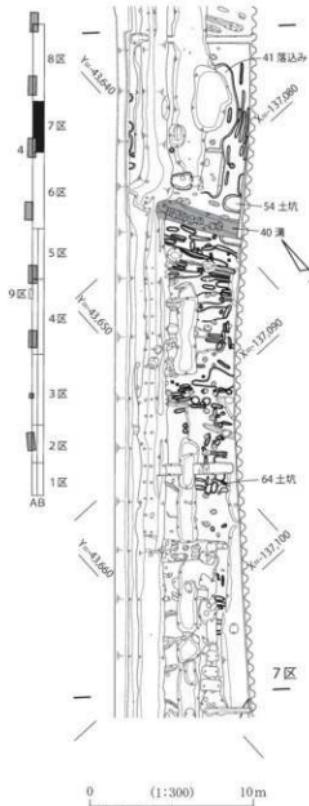
耕作痕はN-39°-Wを軸に広がっている。40溝はY=-43,640付近に位置し、N-35°-Wを軸に北西から南東にはし。同位置に近世～近代の溝も築かれているため、詳細は明らかにし得ないが、黄灰色・灰白・橙系の極細砂～中砂が堆積していた。検出長は約5m、深さは約0.25～0.3mであった。溝北側は近現代の溝に切れられ、南側は調査区外へと延びる。溝埋土の状況からすると耕作地に水を供給する水路であったと思われる。近世以降も同位置に溝が掘削されていることを考えれば、基幹水路

の可能性が高い。遺物の出土がみられなかつたため、時期は不明である。なお、40溝を境に西側が高くなつておき、東西で約0.3mの比高差が生じている。

(2) 第2面(図91・図版41)

調査区北側東端部では、灰白・黄灰色シルト混細～中砂(第2層)を掘削し終えて検出した地山面を、 $X = -137.080$ ライン付近よりも南側では機械掘削完了時点で検出した地山面を第2面として調査を行なつた。

第2面は標高T.P. + 6.6～6.9mで、緩やかに北東へ向かって下がる地形となる。削平が著しい調査区であるが、比較的旧地形を反映したものであろう。削平率が高いと思われる $Y = -43.650$ 以西では、検出した遺構は疎らであったが、以東では鈎溝や溝、土坑、落込みを検出した。出土遺物の傾向から古代末から中世段階の遺構面と想定される。



鉤溝群

鉤溝群は $Y = -43.640$ 付近に位置する上位面の40溝を境に、西側は $N = 30^{\circ} \sim 33^{\circ} - W$ を軸に広がり、東側は $N = 46^{\circ} - E$ を軸に広がる。鉤溝は概ね幅約0.1～0.2mで、深さは約0.05mである。埋土は褐灰色極細砂混シルト。出土遺物には細片となった土師器皿や瓦器椀、須恵器等がある。古代末～中世段階の耕作地であろう。

54土坑(図91-374・375)

調査区南辺沿い、 $X = -137.082 \sim Y = -43.639$ 付近で検出した土坑。土坑東側は調査区外に広がる。検出長は東西約1.4m、幅南北約1m、深さ約0.1mである。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は褐灰色シルト混細～中砂である。出土遺物には土師器皿、瓦器椀・皿、須恵器等がある。

図91-374は土師器皿。底部から口縁部に向けて内湾しながら立ち上がる。口縁部二段窪みナデを施す。11世紀

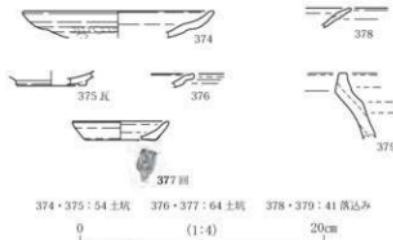


図91 西の庄東遺跡 7区 第2面 平面図及び遺構出土遺物

前半～12世紀前半（京V期古～VI期古段階）の所産か。375は瓦器椀である。内外面とも磨滅が著しく、調整は不明である。高台は扁平な逆台形を呈する。

64 土坑（図91-376・377）

調査区南側、X = -137,094・Y = -43,651付近で検出した土坑。平面椭円形を呈する。長軸約0.7m、短軸約0.4m、深さ約0.05mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は褐色極細～細砂混シルトである。出土遺物には土師器皿・甕、回転台土師器、黒色土器内黒塗等がある。

図91-376は土師器皿である。所謂「て」の字状口縁皿。褐色系胎土である。口縁端部の上方への反りはほとんどみられない。11世紀末～12世紀前半（京VI期古段階）の所産か。377は回転台土師器皿である。短い口縁部が直線的に斜め上方に立ち上がる。底部外面に回転糸切り痕が残る。白色系の胎土を用いる。11世紀末～12世紀前半（京VI期古段階）の所産であろうか。

41 落込み（図91-378・379）

調査区北側、X = -137,079・Y = -43,635付近で検出した落込み。落込み西側は近現代の大形土坑や砂が堆積する溝に切られる。検出長は約8m、検出幅約1m、深さ約0.05～0.1mを測る。埋土は褐色極細砂混シルトである。出土遺物には土師器皿・甕・羽釜、瓦器椀、須恵器がある。

図91-378は土師器皿。口縁部は大きく外反し、端部はやや尖り氣味におさめる。白色系胎土である。14世紀前半～中頃（京VII期新～IX期古段階）の所産であろう。379は土師器羽釜。内外面とも剥離が著しく、調整不明である。

第7節 8区の調査

調査地の最東端に位置する調査区である。X = -137,031～-137,075・Y = -43,595～-43,636に位置する北東から南西に長い狭小な調査区である。8区は長さ約53m、幅約8mを測る。

当区も近現代の土地改变が著しいものであり、調査区中軸よりも北西側は幅2mを測る近代の砂が厚く堆積する溝等で地山面（第4面）までが大きく傷んでいた。しかし、旧地形が北東側（京都方）へと大きく下がる地形であったため、調査区北東端付近では、今次の調査で初めて古代や中世の包含層及び近世作土層を良好な状態で確認することが可能であった。その結果、最大5面の遺構面を調査することが出来た。

（1）第1面

淡灰黒色シルト混細砂である第1層を掘削して検出した灰白・黄灰色シルト混細～中砂（第2層）上面を第1面として調査を行なった。

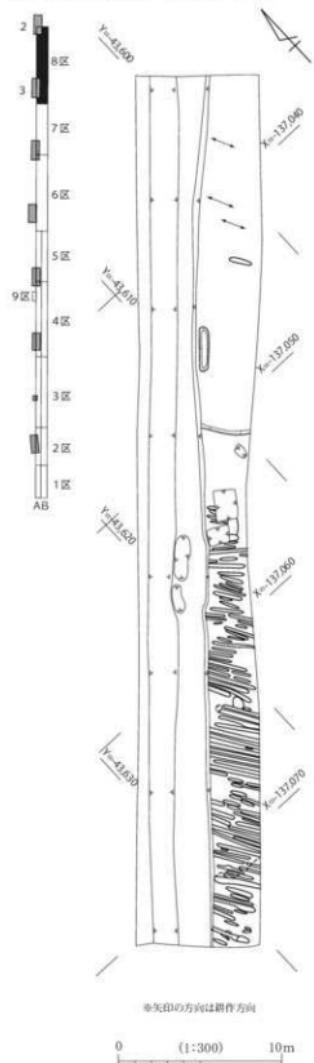
第1面は南西から北東に緩やかに傾斜する地形で、標高はT.P. + 6.45～6.6mである。当面ではN-33°-Wを軸とする耕作痕が広がる。中世後半～近世段階の耕作地であろうか。

（2）第2面（図92-92-380・381・図版42・50）

灰白・黄灰色シルト混細～中砂である第2層を掘削して検出した黄灰色シルト～シルト質粘土（第3

層) 上面を第2面として調査を行なった。なお、この段階で調査区南東端部分は地山が姿をみせる。

第2面は南西から北東に緩やかに傾斜する地形で、標高はT.P. + 6.35 ~ 6.6 mである。検出した遺構には段・鋤溝群・耕作痕がある。



段・鋤溝群及び耕作痕 (図 92・92-380・381・図版 42・50)

当面ではY = - 43.610付近にN - 40° - Wを軸とする段が形成されている。段の高さは約0.05 mである。段よりも北東側は不明瞭ながらN - 33° - Wを軸とする耕作痕がみられた。一方、段よりも西側ではN - 33° - Wを軸とする鋤溝群が広がっている。鋤溝は概ね幅約0.2 m、深さ約0.05 mを測る。

鋤溝群からは土師器皿・羽釜・瓦器椀・皿・須恵器甕等が出土している。図92-380は土師器羽釜。口縁部内面は横位のハケメのちヨコナデ、体部内面は粗いハケメを施す。体部外面はユビオサエのちナデを施している。381はサヌカイト製石鎌折損品。調整剥離の際に先端部を欠損している。加工の進行により主要剥離面は不明となっている。凹基式石鎌。重量は0.8 gを量る。

出土遺物の傾向から中世後半段階の遺構面と想定される。

(3) 第3面 (図 93・図版 42)

黄灰色シルト～シルト質粘土である第3層を掘削して検出した土壤化の進んだ褐灰～黒色粘土～シルト(第4層)上面を第3面として調査を行なった。第4層は上位面で段がみられたY = - 43.610以東にしか存在せず、Y = - 43.610以西は地山となっている。第3面は地震の揺れのためか、第3層が沈降して第4層の巻上げと混ざり合い、マーブル模様状を呈していた。そのため、明確な遺構は確

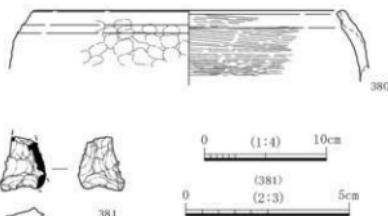


図 92 西の庄東遺跡 8区 第2面 平面図及び鋤溝群出土遺物

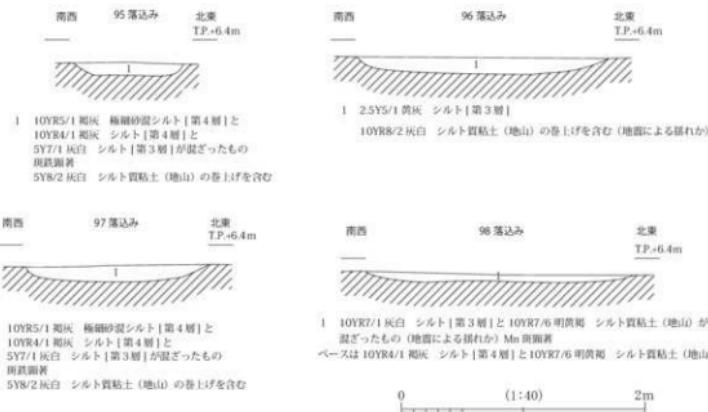
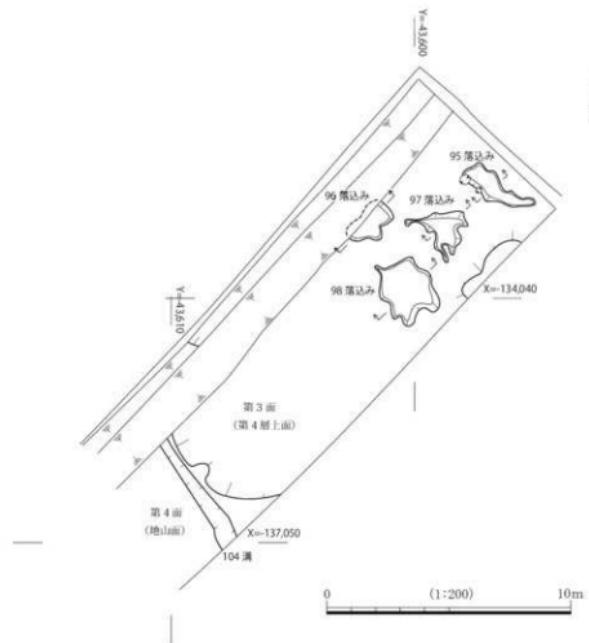


図93 西の庄東遺跡 8区 第3面 平面図及び落込み断面図

認し得なかつたが、僅かに不定形な落込みを数基検出した。第4層上面での標高はT.P. + 6.2 ~ 6.3 mで、北東に緩やかに下がる地形となる。

95 落込み（図 93）

調査区北東部分に位置する南北に細長い平面不定形の落込み。検出長は約3m、幅約0.5~1m、深さ約0.1mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は褐灰色極細砂混シルト（第4層）と灰白色シルト（第3層）が混ざったもので、地山の灰白色シルト質粘土の巻き上げを含んでいる。遺物は僅かに須恵器の細片が出土したのみである。

96 落込み（図 93）

95落込みの西側約4mに位置する東西に長い平面不定形の落込み。近現代のシルト～粗砂が厚く堆積した溝によって落込み北西部が削平される。検出長約2m、幅約0.5~1m、深さ約0.1mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は黄灰色シルト（第3層）で、地山の灰白色シルト質粘土の巻き上げを含んでいる。遺物は僅かに上師器皿が出土したのみである。

97 落込み（図 93）

95落込みの西側約1mに位置する平面不定形の落込み。南北長約2m、東西幅約2.5m、深さ約0.15mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は褐灰色極細砂混シルト（第4層）と灰白色シルト（第3層）が混ざったもので、地山の灰白色シルト質粘土の巻き上げを含んでいる。出土遺物には土師器皿・鍋が僅かにみられた。

98 落込み（図 93）

95落込みの西側約4mに位置する平面不定形の落込み。南北長約3m、東西幅約2.2m、深さ約0.1mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は灰白色シルト（第3層）で、地山の灰白色シルト質粘土の巻き上げを含んでいる。遺物の出土はみられなかった。

出土遺物の傾向や下位面の時期から推察すれば中世前半段階の遺構面と想定される。

（4）第4・5面（図 94・95・95-382・383・図版 42・43）

調査区北東部、Y=-43,610以東でみられる土壤化の進んだ褐灰～黒色粘土～シルトを掘削して検出した地山面、既に第3面段階で検出していたY=-43,610以西でみられる地山面を第4面として調査を行なった。第4面の標高はT.P. + 6.0 ~ 6.6 mで、Y=-43,610以東が大きく下がり、谷状地形となることを明らかにした。それ以西の谷肩部では溝や土坑、小穴、不定形な落込みを検出している。

また、調査区東端壁際では、部分的であるが、地山面の窪んだ箇所に第5層である灰白～灰黒色・黄灰色シルト～粗砂の堆積がみられた。第4面調査後、第5層の溜まりを掘削した。これを第5面として調査を行なった。第5面では東側へ下がる不定形の落込みを検出している。底面は不規則に凹凸がみられた。

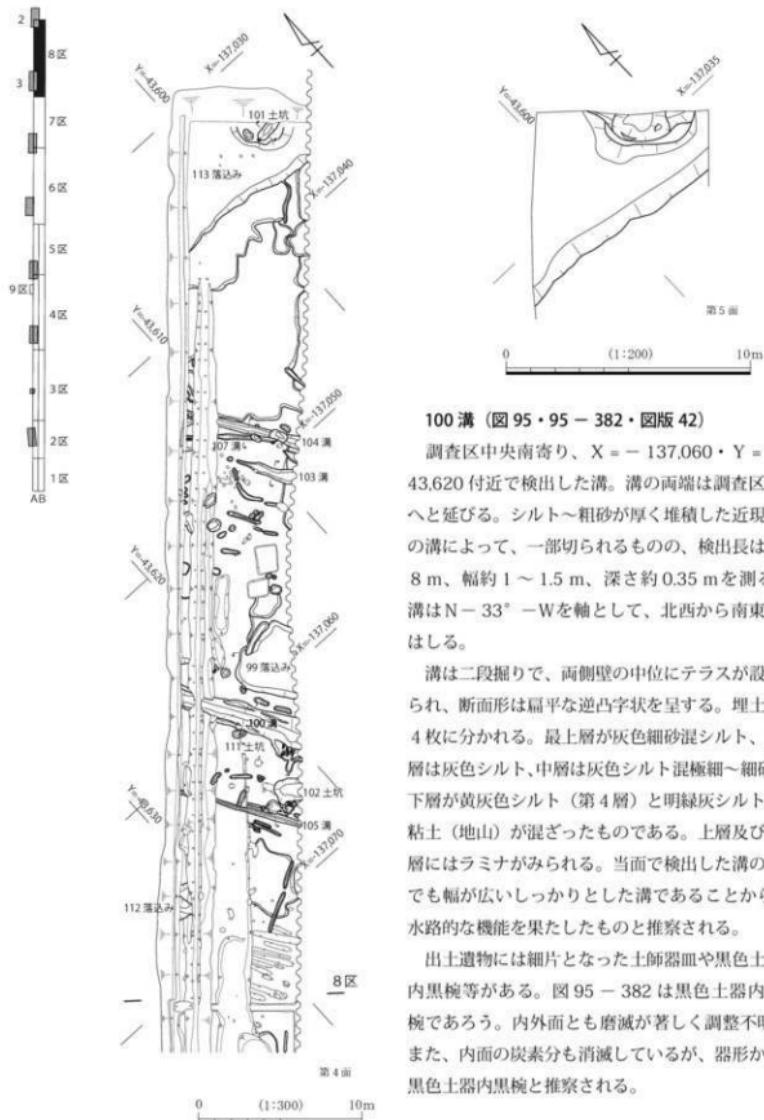


図 94 西の庄東遺跡 8区 第4・5面 平面図

100 溝 (図 95・95-382・図版 42)

調査区中央南寄り、X = - 137,060・Y = - 43,620 付近で検出した溝。溝の両端は調査区外へと延びる。シルト～粗砂が厚く堆積した近現代の溝によって、一部切られるものの、検出長は約 8 m、幅約 1 ~ 1.5 m、深さ約 0.35 m を測る。溝はN-33°-Wを軸として、北西から南東にはしる。

溝は二段掘りで、両側壁の中位にテラスが設けられ、断面形は扁平な逆凸字状を呈する。埋土は4枚に分かれ。最上層が灰色細砂混シルト、上層は灰色シルト、中層は灰色シルト混極細～細砂、下層が黄灰色シルト（第4層）と明緑灰シルト質粘土（地山）が混ざったものである。上層及び中層にはラミナがみられる。当面で検出した溝の中でも幅が広いしっかりとした溝であることから、水路的な機能を果たしたものと推察される。

出土遺物には細片となった土師器皿や黒色土器内黒椀等がある。図 95-382 は黒色土器内黒椀であろう。内外面とも磨滅が著しく調整不明。また、内面の炭素分も消滅しているが、器形から黒色土器内黒椀と推察される。

103 溝（図95・図版43）

調査区中央北寄り、 $X = -137,050$ ・ $Y = -43,610$ 付近で検出した溝。溝西端は調査区内におさまるが、東端は調査区外へと延びる。検出長約4m、幅0.1~1m、深さ約0.05mを測る。溝はN~33°Wを軸として、北西から南東にはしる。

断面形は浅い皿状を呈し、埋土は褐灰色シルトである。遺物の出土はみられなかった。

104 溝（図95・図版43）

103溝の北東側約1.2mに位置する溝。北東に開く谷状地形の肩部に当たる。溝の両端は調査区外へ

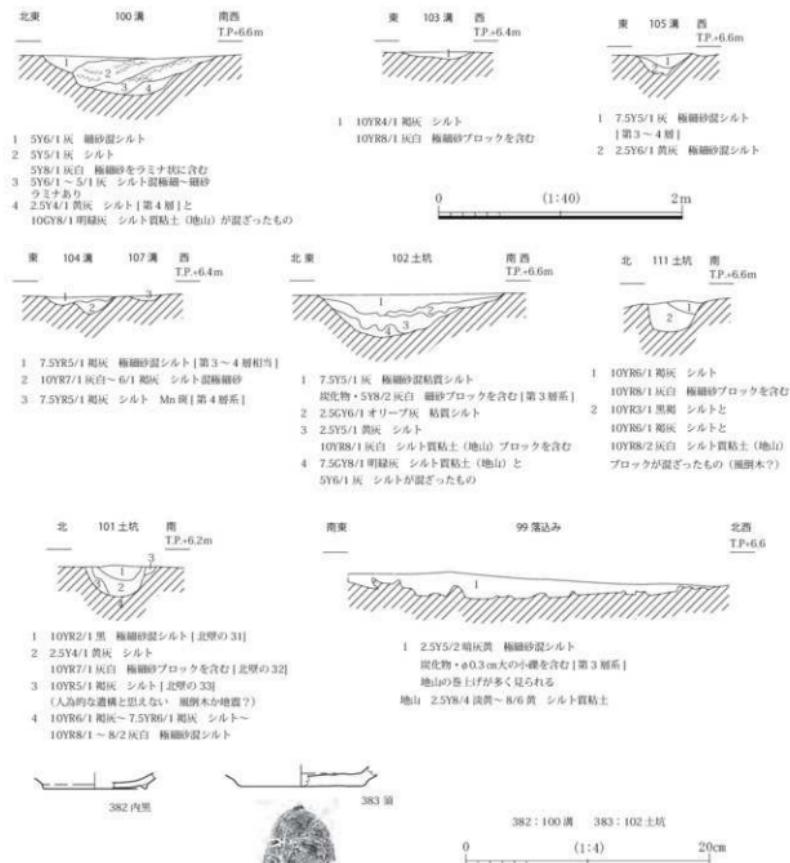


図95 第4面 遺構断面図及び遺構出土遺物

と延びる。シルト～粗砂が厚く堆積した近現代の溝によって一部切られるものの、検出長は約7m、幅約0.5～0.7m、深さ約0.15mを測る。溝はN-33°-Wを軸として、北西から南東にはしる。

溝の東肩部のみが二段掘りとなっており、断面形は寸詰まりの柄杓状を呈する。埋土は2枚みられ、上層が褐灰色極細砂混シルト、下層が褐灰色シルトである。遺物の出土はみられなかった。

107 溝（図95・図版43）

104 溝に溝南東部分を切られる。溝北西端は調査区外へと延びる。他の溝同様、シルト～粗砂が厚く堆積した近現代の溝によって一部切られている。検出長は約5.5m、幅約0.2～0.35m、深さ約0.05mを測る。107溝は他の溝とは軸を異にして、N-46°-Wを指向し、北西から南東にはしる。

断面形は浅い皿状を呈し、埋土は褐灰色シルトである。遺物の出土はみられなかった。

105 溝（図95・図版43）

100 溝の南西側約4.5mに位置する溝。溝の両端は調査区外へと延びる。シルト～粗砂が厚く堆積した近現代の溝によって一部切られるものの、検出長は約7.5m、幅約0.1～0.5m、深さ約0.2mを測る。溝はN-33°-Wを軸として、北西から南東にはしる。

断面形は逆台形を呈し、埋土は2枚に分かれる。上層は灰色極細砂混シルトで、下層は黄灰色極細砂混シルトである。出土遺物には細片となった土器器皿が僅かにみられた。

102 土坑（図95・95-383・図版42）

105溝の北東側約1mに位置する土坑。土坑東側は調査区外に広がる。検出長東西約1.8m、幅南北約1.5m、深さ約0.35mを測る。断面形は皿状を呈し、埋土は4枚に分かれる。最上層は灰色極細砂混粘質シルトで炭化物を含んでいる。上層はオリーブ灰色粘質シルト、中層は黄灰色シルト、下層は灰色シルトと明緑灰シルト質粘土が混ざったものである。出土遺物には細片となった土器器皿・甕、瓦器楌、須恵器鉢等がみられた。図95-383は須恵器鉢か。内面見込みは使用によるためか、細かなアバタ状に器面が荒れている。底部外面は静止糸切り痕が残る。11世紀末～12世紀初頭(京VI期古段階)の所産。

111 土坑（図95）

100溝南肩を切るX=-137,061・Y=-43,622付近で検出した平面橢円形を呈する土坑。長軸約0.9m、短軸約0.45m、深さ約0.25mを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は2枚で、上層が褐灰色シルト、下層が黒褐色シルトと褐灰色シルトと灰白色シルト質粘土のブロック土である。出土遺物はみられなかった。

101 土坑（図95・図版43）

調査区東端壁際で検出した土坑。101土坑は地山面の窪んだ箇所に堆積した第5層(灰白～灰黒色・黄灰色シルト～粗砂)上面で確認したものである。土坑東側は調査区外に広がる。検出長は東西約1.4m、南北幅約0.6m、深さ約0.25mを測る。土坑底面は不規則に凹凸がみられた。基本的に断面形はボール状を呈するが、場所によっては袋状になる箇所も存在する。埋土は黒色極細砂シルト・黄灰色シルト・褐灰色シルトである。出土遺物はみられなかった。土坑の形状や埋土の状況から人為的な遺構ではなく、

風倒木痕や地震によるものである可能性が高い。

99 落込み（図 95）

調査区中央やや南寄りで検出した落込み。落込み東側は調査区外へ広がる。検出長は南北約4m、東西幅4.4m、深さ約0.2mを測る。断面形は浅い皿状を呈するが、底面の凹凸が著しい。埋土は暗灰黄色極細砂混シルトで、下位にみられる地山（淡黄～黄色シルト質粘土）の巻上げを多く含む。遺物の出土はみられなかった。

113 落込み

調査区北側部分、X = -137,040 ライン以北に広がる北へ向かって下がる落込み。肩部と最深部との比高差は約0.3mである。落込みに堆積するのは第4層である褐色シルトである。底面の地山は地震による搖れのためか、断面でみると炎が沸き立つように細かく波打っている。

第8節 包含層出土遺物（図 96 – 384 ~ 405）

今次調査は、6区以西では近現代のバラスト層を除去した直下が地山となるため、包含層がほとんど残存していない状況であったが、調査地東側に位置する7・8区で幸うじて古代～中世の遺物包含層を確認することが出来た。包含層からの遺物の出土は少なくなかったが、大半が細片となっているため図化を行なえるものは僅少であった。ここでは図化が可能であった第2～3層出土遺物を中心に報告する。

図96～384は4区機械掘削出土。385～395・404が第2層（386・391・404が7区。それ以外は8区）、396～401が8区第3層、402が8区第3～4層、403・405が8区第4層出土である。

384は瓦器皿である。口縁部は大きく外反し、端部はやや尖り気味におさめる。内面はヨコナデのち粗いヘラミガキを施す。385は土師器皿。口縁部は内湾しながら立ち上がる。口縁端部は強いヨコナデによって断面形は鋭い三角形状を呈する。13世紀中頃～後半頃（京VII期新～VIII期古段階）の所産。386・387は瓦質土器甕。386は折り返し口縁。二種の胎土を使用したのか、断面は灰色及び灰白色のマーブル模様状を呈している。14世紀後半頃の資料であろう。387は口縁部を上・下方に拡張させ、断面N字状を呈する。388・389は瓦質土器羽釜。どちらも口縁部はやや内湾し、鍔は短く水平に延びる。390・391は東播系須恵器鉢である。どちらも口縁部を上・下方に拡張する。口縁上端部はヨコナデによって上方に摘み上げる。口縁部外面上半は凹線状に窪む。390は口縁部外面に自然軸が付着。391の口縁部外面は重ね焼きのためか黒色化している。12世紀末～13世紀初頭（森田編年第二期第2段階）の所産であろう。392は青磁碗。高台内以外は全面施釉。高台を取り外すためか、豊付けから底部方向に連続した打撃を加えて剥離を行なっている。13世紀初頭～前半頃の龍泉窯系青磁碗であろう。393は瀬戸焼折縁深皿。体部は直線的に斜め上方に立ち上がり、口縁部はそこから大きく外反し折れ曲がる。14世紀末～15世紀初頭（藤澤編年古瀬戸後二期）の資料。394は備前焼捕鉢である。口縁部は上方に拡張し、「く」の字状に屈曲する。口縁端部は尖り気味におさめる。15世紀後半（秉岡編年中世5期）の所産。395は須恵器転用円盤。東播系須恵器捏ね鉢を転用したもの。重量は33.5gを測る。

396は土師器皿である。底部から短く立ち上がる口縁部をもつ。端部は尖り気味におさめる。褐色系の胎土である。12世紀中頃～後半（京IV期新段階）の所産であろう。397は綠釉陶器椀。須恵質で

硬質の縁軸陶器。全面に施釉される。高台内に焼成後、針状工具を用いた「二」の字状の線刻がみられる。398は瓦質土器鍋。口縁部は内湾しながら立ち上がり、受け口状を呈する。口縁端部はやや肥厚する。口縁部外面には煤が付着。内面の炭素分は消失している。13世紀前半～14世紀前半頃の資料か。

399・400は東播系須恵器鉢である。399は口縁部を上・下方に400は口縁部を上方に拡張する。どちらも口縁上端部はヨコナデによって上方に摘み上げる。口縁部外面は重ね焼きのためか黒色化している。399は13世紀初頭～後半（森田編年第II期第2段階～第III期第1段階）、400は12世紀末～13世紀初頭（森田編年第II期第2段階）の所産であろう。401は備前焼壺。須恵質の備前焼。口縁部は折り返して形成され、玉環状になる。13世紀中頃～14世紀前半（東岡編年中世2期）の資料。

402は須恵器杯B。底部外側に高台が付く。8世紀前半～中頃（平城II～III期）の所産。403は瓦器椀。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。口縁部内面には段状の沈線が1条廻る。口縁部外面はヨコナデを施し、部分的に細かいヘラミガキを行なう。内面は細かで密なヘラミガキ。器壁はやや厚めである。楠葉型II-1期、12世紀前半の所産である。

404はサヌカイト製剝片。一部に自然面を残す。左図左側辺にみられる剥離は風化が弱い。405はサヌカイト製平基式石鎌。左図中央にみられる剥離が主要剥離面と思われる。重量は1.0gを測る。

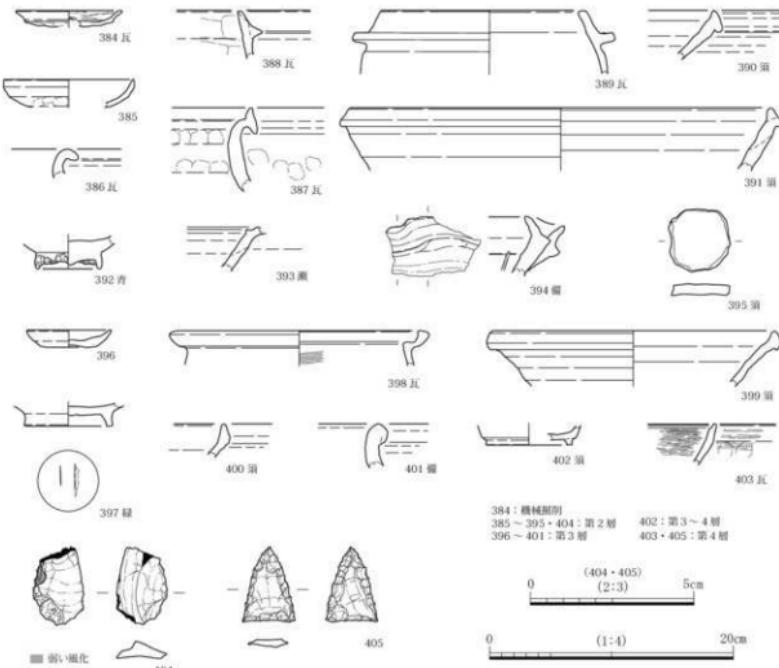


図 96 包含層出土遺物

第9節 小結

西の庄東遺跡では、近現代の土地改变が著しく堆積層や遺構面の状態が良好でなかったものの、幾つかの重要な知見が得られた。以下では概略的に調査成果を総括しておく。

調査地は北東から南西に延びる狭小な範囲であったため、具体的な地形を詳らかには出来なかつたが、調査地中央部で検出した地山面の標高が高くて尾根状になり、そこから北東・南西方向へならかに傾斜する旧地形を明らかにした。遺跡は北西から南東に延びる吹田砂堆上に位置するため、調査地中央部（4～6区）が概ね砂堆頂部に当たると想定され、北東（7・8区）・南西（1～3区）部分は砂堆の肩部から斜面に近い位置に相当すると思われる。このことは、現地北西側に位置するアサヒビル吹田工場南門前が西へ下がる急な坂道となつてゐることからも首肯出来よう。

古代以前の様子は、遺構が検出出来なかつたこともあり判然としないが、弥生土器片やサヌカイト製石鏃・剥片の存在から弥生時代には周辺で何らかの活動が行なわれていたと想像するに難くない。今後の周辺での調査が大いに期待される。

古代においては、砂堆頂部付近で古代（奈良～平安時代）の集落の一端を検出することが出来た。奈良時代に関しては極僅かに溝や土坑（6区第1面）を確認したのみであるが、平成21（2009）年に実施した吹田城隣接地確認調査の5調査区で小穴を複数検出していることから、周辺には建物も存在していた可能性が高い。

平安期は砂堆頂部付近で2基の井戸と井戸周辺から小穴（4・9区第1面）を、砂堆東側肩部付近（8区第4面）でN-33°-Wを軸として、北西から南東にはしる溝5条を確認した。砂堆頂部付近では集落が形成され、砂堆東側肩部付近には耕作地が広がっていた可能性が高い。溝が指向する方位は、岬下郡南部条里の条里地割（N-33°-W）に一致するものであり、調査地にも岬下郡南部条里が施行されていたものと推察される。

井戸からは土師器や瓦器をはじめとした多種多様な一括遺物が出土した。これらの遺物は北摂地域の当該期の土器編年を考える上で貴重な資料になることは言を待たない。また、22井戸でみられた合わせ口状態で出土した土師器皿は、井戸に対する祭祀を窺わせる重要な事例である。出土遺物には土器類だけでなく、櫛や核、マクワウリの仲間の種子がみられたことも重要な知見と言える。こうした遺物は井戸を埋める際に行なつたと思われる祭祀を復元する上で貴重な資料となるであろう。

中世期では、砂堆東側肩部付近（7・8区第1～2面）でN-33°-Wを軸として展開する耕作地が広がっていた。これらの指向する方位も、先述した岬下郡南部条里の条里地割（N-33°-W）に一致するものであり、この条里地割に則って耕地が営まれていたものと推察される。

また、砂堆頂部には14世紀前半～中頃に掘削されたと考えられる大溝（5区第1面4溝）や大溝以前に掘削された土坑群（5区第1面）がある。

土坑群は出土遺物及び4溝との切り合い関係から鑑みて、古代以降で4溝が掘削されるまでの間、14世紀前半までに掘削されたものと想定される。土坑群は3×4m、深さ約0.5m程度の土坑が連續して重なるように掘削されたものである。こうした土坑群の状況（埋土がブロック土であること、重複して掘削されること等）は、個別の土坑の大きさは今回の方が大きいものの、隣接する吹田操車場遺跡で確認された群集土坑に近いものと思われる。調査段階で性格を明らかにし得なかつたが、今次の調査で検出した土坑群も中世前半代の粘土採掘坑であったと位置付けておきたい。

調査地の北西側で操業されるアサヒビール吹田工場地内は、14～16世紀に営まれた吹田城跡の推定地となっている。これまで、周辺で実施された調査では吹田城跡に関する資料がみつかっていないかった。城が営まれた時期と一致する時に掘削された大溝は、濠であった可能性を秘めており、今後、吹田城跡を検討する上で大きな意味をもつものと言える。

中世以降では、砂堆西側線辺部（1～3区）において近世後半段階に大規模な整地を行なって平坦面を造成していることを明らかにした。整地は周辺の土壤を削って行なったようで、調査段階では既に消失していた包含層由来と思われる褐色シルトや黒褐色シルトのブロックが多くみられ、古代～中世の遺物が出土している。近世後半の整地の際には、近世期に使用された井戸や溜池は完全に埋められていた。こうした遺構が存在していることを勘案すれば、近世段階にも耕作地が展開していたものと想像される。

近代以降には調査地周辺は旧東海道線（大阪・敦賀間）が明治22（1889）年までに開通し、現アサヒビール工場南門付近には吹田駅が建設された。明治24（1891）年に大阪麦酒吹田村醸造所（現アサヒビール吹田工場）の操業が始まり、アサヒビール工場への引き込み線も敷設され大幅に土地変更が進む。こうした状況が調査にも反映されており、7・8区では石炭殻が充填された溝や枕木を打設した溝等が多数据削されていた。

（1）鐘方正樹 2003 「第6章 井戸の祭祀」『ものが語る歴史シリーズ⑧ 井戸の考古学』 同成社

第6章 総括

今回の調査は浜津市・明和池遺跡、吹田市・吹田操車場遺跡においては汚染土撤去に伴う小規模な調査で、且つ点在的な調査であったが今後に繋がる貴重な成果を上げることが出来た。吹田市・西の庄東遺跡においては、JR 東海道線とアサヒビール吹田工場に挟まれた狭小で細長い調査地であり、遺跡全体像を把握するまでには至らなかったが、古代を中心に重要な成果を上げることが出来た。それぞれの成果については、各遺跡の調査報告の末尾に小結として記述してあるが、最後に総括として、時代毎のまとめを簡単に記しておきたい。

縄文時代：明和池遺跡や西の庄東遺跡では当該期の遺構・遺物は確認出来なかった。

吹田操車場遺跡では、2区において北西から南東にはし自然流路をT.P. + 6.5 m付近で確認した。流路内から縄文時代早期末から前期初頭頃に比定される表裏条痕土器片が1点出土した。縄文時代の土器として、これまで吹田操車場遺跡では晩期土器が確認されているが、それを遡る資料としては初めての資料である。縄文時代早期段階の流路は平成21～22（2009～2010）年度に行なった吹田操車場遺跡西端部の調査で検出している。当該期には遺跡内に複数の流路が存在していたと思われ、起伏の著しい地形であったことが想定される。

弥生時代：吹田操車場遺跡では当該期の遺構・遺物は確認出来なかった。西の庄東遺跡でも明瞭な遺構を確認することが出来なかったが、弥生時代後期土器やサヌカイト製石器・剥片の出土をみた。吹田砂堆上では、西の庄東遺跡南東に位置する都呂須遺跡や高浜遺跡で弥生時代の集落が形成されていたことが明らかになっていることから、当遺跡においても何らかの活動が行なわれていたことは想像に難くない。今後の周辺部での更なる調査に期待がもたれる。

明和池遺跡では、弥生時代後期以前から活発に形成される自然流路を検出した。自然流路は微妙に東から西へと位置を変えながら長期に亘って存在しており、現山田川の前身であることを明らかにした。

弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構面で検出した流路からは、当該期の土器以外に少量ながら弥生前期土器も出土した。かなり磨滅していることから、流されてきたものと推察されるが、遺跡北方に弥生時代前期集落の存在が予想される。

また、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構面で検出した埋没流路の上には、多量の土器（24・25土器群）が置かれていた。調査区内では集落を構成する竪穴建物等を確認出来なかったが、土器群の存在から近傍に集落が営まれていたことは明白である。土器群の西側には流路が広がるため、集落域は自ずと土器群よりも東側或いは擾乱を被った北側に求められる。調査地東方での調査に期待されるところである。

また、明和池遺跡でも基盤層が高位に位置する調査区（2区）では平面不整形形を呈し、断面形が折れ線皿状を呈する落込みを検出している。落込みからの出土遺物が僅少であったため、積極的な時期比定に躊躇を覚えるが、落込み底面で検出した土坑から弥生後期土器片が1点出土していることに注視して、弥生後期段階の帰属としておきたい。落ち込み自体の平面形や、底面に点在する各遺構の状況をみれば竪穴建物とも考えられるが、周壁溝がみられないこと、壁の立ち上がりがなだらかであること、小穴の掘り込みが浅いこと等から積極的に竪穴建物として評価を行なわなかった。当遺構の評価は今後の検討課題である。

古墳時代後期から古代：明和池遺跡の流路が形成されてきた低位部分（1区）では、自然流路が調査区内から外れた位置に流れを変えたようで、安定した土地へと変化している。この変化に伴って、調査地では井戸や土坑等が掘削され、集落域が広がったようである。調査地が狭小であるため具体的な様相は掴めなかった。周辺での調査に大いに期待される部分である。

吹田操車場遺跡では、従前の調査でも多数検出している群集土坑を確認し、その掘削範囲が更に広がることを明らかにした。土坑内からは遺物の出土が僅少であるため、個々の掘削時期を特定するには至らないが、少數ながら出土した資料から類推すれば概ね7世紀代に掘削されたものが多いと思われる。なお、出土遺物は須恵器甕や横瓶等の袋状の体部をもつ資料が圧倒的に多く、焼成不良品で曲面を残した破片が顕著にみられる。こうした傾向は従前の調査でも指摘されている。曲面を残した破片が多くみられることは、例えば土坑に溜まった水を汲み出す等の作業に使用したためであろうか。現在進んでいる周辺での調査も含めて、今後解明すべき点と思われる。

西の庄東遺跡では、奈良～平安期の遺構を検出することが出来た。検出された奈良時代の遺構は僅少であったが、以前の試掘調査の結果も踏まえるならば、吹田砂堆頂部付近に集落が形成されていた可能性が高い。当遺跡周辺での調査では、奈良時代の遺構・遺物の検出例は管見に触れなかった。新たなる知見として注目すべき成果である。平安期には吹田砂堆頂部付近で2基の井戸及び小穴を、砂堆東側肩部付近でN-33°-Wを軸として、北西から南東にはしる溝5条を確認している。すなわち、砂堆頂部には集落が形成され、東側縁辺部に耕作地が展開していた姿を描き出せるであろう。そして耕作地は嶋下郡南部条里の条里地割（N-33°-W）に一致するものであり、調査地も嶋下郡南部条里内に位置する可能性が高いことが明らかとなった。

西の庄東遺跡と同じく吹田砂堆上に位置し、当遺跡南東にひろがる高城B遺跡では10世紀後半～11世紀前半の極めて短期間に営まれた集落が検出されている。周囲に広がる高城遺跡や高畠遺跡、元町遺跡の集落も短期間に廃絶する傾向が指摘されている。翻って当遺跡では11世紀前半～中頃と11世紀中頃～後半の二時期の井戸があった。周辺遺跡とやや時期を異にする状況であるため、周辺での調査成果も含めて、向後、砂堆上での集落の移動と展開を視野に入れて検討しなければならないであろう。なお、当遺跡周辺で平安時代中期以降に遺跡数が増加する傾向にあるのは、寺社等による莊園開発の進展に伴い、開発が進められた結果であろう。

中世：明和池遺跡東側調査区（1区）では中世後半段階の井戸・土坑・溝を検出した。搅乱を大きく被っているため検出された遺構面は僅かであったが、深度のある井戸は調査区全域に点在していることがわかった。井戸には、大阪府南部地域ではよくみられる円柱形の瓦質井戸枠を用いたものがあった。北摂地域では管見に触れておらず、貴重な検出例と言える。残念ながら明確な建物を復元するには至らなかつたが、多くの土坑や小穴の存在や多量に出土した瓦類から、瓦葺建物が建てられていたことは想像に難くない。果たして、この居住域がどのような性格であったのかは詳らかに出来なかったが、国産陶磁器や輸入陶磁器が比較的まとまって出土していること、瓦質井戸枠を用いた稀有な井戸や瓦葺建物の存在等から勘案すれば、有力者の邸宅または寺院の敷地であった蓋然性が高いと思われる。井戸から出土した「芝鍵（定鍵）法師」なる人名が刻まれた瓦が土地利用の具体像を描く上で大きな鍵になるかも知れない。

一方、地形的に高位に位置する2区では鋤溝や溝を検出し、耕作地が広がっていたことを明らかにした。出土遺物がほとんどなかったため時期は判然としないが、検出した鋤溝はN-34°-Wに軸をも

つものとそれに直交するN-50°～56°-Eを指向するものが存在し、嶋下郡南部条里の条里地割（N-33°-W）に則る耕作地であることが明らかとなった。こうした状況は吹田操車場遺跡でも同様であった。

西の庄東遺跡では砂堆東側縁辺部で嶋下郡南部条里の条里地割（N-33°-W）に則る耕作地が展開することが明らかとなった。砂堆頂部付近では削平されていることもあろうが、6区で検出した13世紀代の69溝のように軸を異にする溝はあるものの、この地割に則る遺構は確認出来なかった。このことから、嶋下郡南部条里は砂堆東側縁辺部が西端となる可能性が高い。⁽¹⁾ そう考えた場合、7区Y=-43,640付近に位置する40溝の存在が注目される。この溝は中世以降近代まで同位置に築かれ続け、溝を境に東西で約0.3mの比高差を生じている。近現代の削平により、詳細は不明であるが注目すべき点であろう。

一方、砂堆頂部付近では、14世紀前半～中頃に掘削されたと考えられる大溝（5区第1面4溝）や大溝以前に掘削された土坑群（5区第1面）がある。土坑群は出土遺物や4溝との切り合い関係から14世紀前半までに掘削されたものと捉えられる。このような中世段階の土坑群は遺跡南東約400mに位置する高城B遺跡でも確認されている。高城B遺跡例も土坑群が帶状に連続して掘削され、地山である淡黄色粘土を狙っており、埋土には暗茶褐色粘土や灰色粘土、黄色系粘土のブロック土が充填されるなど、類似点が非常に多い。また掘削時期も高城B遺跡例は14世紀前半までを主体とすることから、今回検出した土坑群と非常に近いと言える。粘土採掘坑である蓋然性は高いが、果たしてその操業主体や生産物は明確にし得ない。現状では既に指摘されているように、例えば在地での消費を賄う土器類や瓦の生産のために、小規模かつ日常的な生産組織による生産体制のもとで採掘された（吹田市教育委員会 1993）ものであったと位置づけておきたい。

大溝（4溝）は幅約6m、深さ約1.2mを測る大規模なものである。著しい削平を被っているためか、調査区内には大溝と同時期の遺構が他に確認出来なかった。従って、その性格を明らかにはし難いが、注目しておかなければならぬ点がある。それは、吹田市域には14～16世紀に営まれた吹田城跡伝承地が複数残されており、その一つに遺跡北西側で操業されているアサヒビール吹田工場敷地が挙げられることがある。今回検出した大溝は、掘削された位置や掘削時期からみれば、吹田城に関わる施設であった可能性を秘めたものと言える。その規模からすれば、濠と看做すことも出来よう。吹田城跡伝承地のいざれにおいても城跡と断定出来る確たる遺構・遺物が確認されていない現在、吹田城を検討する上で大きな意味をもつ資料と言える。

中世以降：いざれの遺跡も近世～近代には広大な耕作地が展開していたものと考えられる。その後、吹田操車場遺跡4区第1面で検出したように旧東海道線が敷設され、大きく景観が変わって行くこととなつた。特に西の庄東遺跡では大阪麦酒吹田村醸造所（現アサヒビール吹田工場）が操業され、現アサヒビール吹田工場南門付近に旧吹田駅が造られたこともあり、その変化が顕著であったことは想像に難くない。西の庄東遺跡で確認した近代以降に掘削された溝には、多量の石炭灰が充填されるもの、枕木を打設するもの等があり、その一端を垣間見ることが出来る。また、こうした溝からは多量の煉瓦とともにビール瓶や汽車土瓶・水了軒銘の入った弁当箱の木蓋、ダニエル電池の素焼き容器等の近代資料が数多く採集されている。ダニエル電池容器は島根県御崎谷遺跡や東京都汐留遺跡（旧新橋停車場）、大阪市堂島蔵屋敷遺跡B地点等で出土例がある。御崎谷遺跡では通信施設に、汐留遺跡では停車場に関わる資料として出土している。こうした事例からすれば、今回採集した資料は旧吹田駅あるいは大阪麦酒吹田村醸造所に関連する電力供給源として使用されたものと言える。

以上、局所的な状況ではあるが、3遺跡における地形環境の違いや時期ごとの地形変遷或いは土地利用の動向をある程度明らかに出来た。現在進行している明和池遺跡や吹田操車場遺跡の調査成果と合わせて総合的に検討を加えれば、より一層鮮やかに歴史像を復元することが出来よう。今後に期待するところである。

(1) 服部昌之氏は淀川右岸地域の条里についてまとめる中で、嶋下郡南部条里西端部についても触れている。すなわち、嶋下郡南部条里の西は吹田の砂堆の東端付近まであり、砂堆上には条里地割はみられないと指摘される。今回の調査成果に近い指摘であり、今後の周辺部での調査に注目したい。

参考文献

- (財) 大阪市文化財協会 2010 『大阪市北区 岩島藏屋敷跡Ⅲ』
- (財) 大阪府文化財センター 2005 『(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第136集 御羅橋遺跡Ⅲ』
- (財) 大阪府文化財センター 2008 『(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第180集 吹田操車場遺跡Ⅲ』
- (財) 大阪府文化財センター 2009 『(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第192集 大和川今池遺跡Ⅱ』
- (財) 大阪府文化財センター 2011 『(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第217集 吹田操車場遺跡VI』
- 島根県教育委員会 2001 『隱岐空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 第1冊 御崎谷遺跡・大床遺跡』
- 島根県教育委員会 2002 『隱岐空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 第3冊 御崎谷II遺跡』
- 吹田市教育委員会・吹田市都市整備部 1993 『高城B遺跡』
- 吹田市立博物館 1996 『平成8年度特別展 鉄道沿線物語—鉄道の発達と吹田—』
- 吹田市立博物館 2008 『平成20年度(2008年度)秋季特別展 ビールが村にやってきた!』
- 吹田市立博物館 2009 『わかりやすい吹田の歴史 本文編』
- 東京都埋蔵文化財センター 1997 『東京都埋蔵文化財センター調査報告 第37集 汐留遺跡I』
- 東京都埋蔵文化財センター 2000 『東京都埋蔵文化財センター調査報告 第79集 汐留遺跡II』
- 服部昌之 1983 『律令国家の歴史地理学的研究—古代の空間構造—』 大明堂

遺 物 觀 察 表

国 番 号	地名	地層名	調査名 所分 区	測 定 部 位	測 定 者	測 定 日 期	測 定 地 點	法 面 (m)	法 面 長 さ	底 柱 幅	底 柱 厚	底 柱 形	色 調	斷 面	地 質	特 徴	
14	15 新潟市	1 第1面	2 2月3日	瓦町井戸中	51.2	48.1~ 51.2	N27° E62°	黒~ 黒~N7°	45.4 45.2	45.2	45.2	直 壁	φ 1~3m前後の長石・黒	直 壁	井戸内壁下段	良好	
14	2 新潟市	1 第1面	2 2月3日	瓦町井戸中	51.0	49.4	N27° E62°	黒~ 黒~N7°	45.2	45.2	45.2	直 壁	φ 0.5m前後の長石・黒	直 壁	井戸内壁から一段目 井戸内壁から二段目	良好	
3	新潟市	1 第1面	3 2月3日	瓦町井戸中	1.56	(3.4)	51.0	35.0/4 35.0/4	46.0	46.0	46.0	直 壁	φ 0.5m前後のチャート・やや 長石を含むN7°	直 壁	井戸内壁にセミエクスカバーリング 井戸内壁から二段目 14世紀油面	良好	
4	13 新潟市	1 第1面	3 2月3日	瓦町井戸中	9.0	(3.0)	1076/2	オリーブ	47m	47m	47m	直 壁	直 壁	直 壁	井戸内壁にセミエクスカバーリング 井戸内壁から三段目	良好	
5	13 新潟市	1 第1面	3 2月3日	瓦町井戸中	5.8	(2.2)	516/2	オリーブ	47m	47m	47m	直 壁	直 壁	直 壁	井戸内壁にセミエクスカバーリング 井戸内壁から三段目	良好	
6	新潟市	1 第1面	3 2月3日	瓦町井戸中	1.5	(2.5)	516/6	ナチュラル	45.4	45.4	45.4	直 壁	φ 1~3m前後のチャート	直 壁	井戸内壁奥へ引く 井戸内壁奥へ引く(後半)	良好	
7	新潟市	1 第1面	3 2月3日	瓦町井戸中	23.0	(4.5)	75VR3/1	黒岩	46.0	46.0	46.0	直 壁	φ 1~3m前後のチャート 長石・赤色・赤色	直 壁	井戸内壁奥へ引く 井戸内壁奥へ引く(後半)	良好	
8	新潟市	1 第1面	3 2月3日	瓦町井戸中	30.0	(5.2)	516/2	ナチュラル	46.0	46.0	46.0	直 壁	φ 1~3m前後のチャート	直 壁	井戸内壁奥へ引く 井戸内壁奥へ引く(後半)	良好	
9	13 新潟市	1 第1面	3 2月3日	瓦町井戸中	12.1	(4.5)	1076/2	オリーブ	47m	47m	47m	直 壁	直 壁	直 壁	井戸内壁は斜い 井戸内壁は斜い 3面使用 岩盤 469-2g	良好	
10	新潟市	1 第1面	2 2月3日	青森田	14.8	(3.2)	75VR3/3	オリーブ	47m	47m	47m	直 壁	直 壁	直 壁	井戸内壁は斜い 井戸内壁は斜い 3面使用 岩盤 469-2g	良好	
11	新潟市	1 第1面	2 2月3日	瓦町井戸中	1.5	(5.0)	1076/2	オリーブ	47m	47m	47m	直 壁	直 壁	直 壁	井戸内壁は斜い 井戸内壁は斜い 3面使用 岩盤 469-2g	良好	
12	新潟市	1 第1面	2 2月3日	瓦町井戸中	1.5	(3.3)	NAF	灰	46.0	46.0	46.0	直 壁	φ 1~3mの長石・石英	直 壁	井戸内壁は斜い 井戸内壁は斜い 3面使用 岩盤 469-2g	良好	
13	13 新潟市	1 第1面	2 2月3日	上野原鉱業	21.3	(9.8)	1078B/2	灰白	46.0	46.0	46.0	直 壁	φ 1~5mの長石・石英	直 壁	井戸内壁は斜い 井戸内壁は斜い 3面使用 岩盤 469-2g	良好	
14	13 新潟市	1 第1面	2 2月3日	瓦町井戸中	25.6	(13.0)	2376/2	灰岩	46.0	46.0	46.0	直 壁	φ 1~3mの長石・石英	直 壁	井戸内壁は斜い 井戸内壁は斜い 3面使用 岩盤 469-2g	良好	
15	新潟市	1 第1面	2 2月3日	瓦町井戸中	36.0	(4.0)	NAF	灰	46.0	46.0	46.0	直 壁	φ 1~3mの長石・石英	直 壁	井戸内壁は斜い 井戸内壁は斜い 3面使用 岩盤 469-2g	良好	
16	新潟市	1 第1面	2 2月3日	偏前地層	10.6	(2.5)	1073/2	オリーブ	47m	47m	47m	直 壁	φ 1~3m前後の長石・チャ ートを含む部分	直 壁	井戸内壁外側に自然軸付 井戸内壁外側に自然軸付	良好	
17	新潟市	1 第1面	2 2月3日	偏前地層	0.3	(0.3)	1085/1	灰ホ ホホホ	46.0	46.0	46.0	直 壁	φ 1~3m前後の長石を偏理	直 壁	井戸内壁外側に自然軸付 井戸内壁外側に自然軸付	良好	
18	13 新潟市	1 第1面	2 2月3日	偏前地層	21.8	(11.2)	9.4	2.53R7/6	相	46.0	46.0	46.0	直 壁	φ 1~3mの長石・チャ ートを偏理部分に含む	直 壁	井戸内壁外側に自然軸付 井戸内壁外側に自然軸付	良好
19	新潟市	1 第1面	2 2月3日	偏前地層	10.8	(5.7)	1084/1	明ホ ホホホ	46.0	46.0	46.0	直 壁	φ 1~3m前後の長石・チャ ートを偏理部分に含む	直 壁	井戸内壁外側に自然軸付 井戸内壁外側に自然軸付	良好	
20	新潟市	1 第1面	2 2月3日	偏前地層	11.6	(6.3)	1085/2	灰ホ ホホホ	46.0	46.0	46.0	直 壁	φ 2~3m前後の長石を偏理	直 壁	井戸内壁外側に自然軸付 井戸内壁外側に自然軸付	良好	
21	新潟市	1 第1面	2 2月3日	偏前地層	12.0	(8.8)	1078A/1	明ホ ホホホ	46.0	46.0	46.0	直 壁	φ 1~3mの長石・石英 チャートを多量に含む	直 壁	井戸内壁外側に自然軸付 井戸内壁外側に自然軸付	良好	

国 番 号	植物 学名	通称名	調査 区	面積 ha	測 量 者	測 量 日	測 量 地	測 量 器	法 面(m)	口 径×長 さ	底 径×幅	面 積(m ²)	色 調	断 面	地 質	特 徴	
横 幅	長 さ	幅 度															
38	16	野地	1	第2面	19月4日	上山原野A	上山原野	(14.6)	(1.9)	5.9R7/4	に5.5m	40	墨 色	φ 0.5m程度の長石・石英 ・白色・さり織合	良好		
39	16	野地	1	第2面	19月4日	上山原野A	上山原野	(20.8)	(2.5)	5.9R7/4	に5.5m	40	墨 色	φ 0.5m程度の長石・石英 ・白色・さり織合	良好	平成20年～M（世界記録～後）	
40	16	野地	1	第2面	14上杭	浅山原野B	浅山原野	(12.0)	(3.8)	NS5/9K	NS5/9K	NS5/9K	墨 色	φ 0.5m程度の長石・石英 ・白色・さり織合	良好	平成20年～M（世界記録～後）	
41	16	野地	1	第2面	19月4日	浅山原野B	浅山原野	(13.0)	(4.6)	NS5/9K	NS5/9K	NS5/9K	墨 色	φ 0.5m程度の長石・石英 ・白色・さり織合	良好	大井川河面上に位置する 大井川河面上に位置する MT15-6 (世界記録～後)	
42	16	野地	1	第2面	19月4日	浅山原野B-A	浅山原野	(13.2)	(2.7)	NS5/9K	NS5/9K	NS5/9K	墨 色	φ 0.5m程度の長石・石英 ・白色・さり織合	良好	TK43 (世界記録～後)	
43	16	野地	1	第2面	19月4日	浅山原野B-A	浅山原野	(15.6)	(3.7)	NS5/9K	NS5/9K	NS5/9K	墨 色	φ 1m程度の長石・石英・黒色	良好	TK43 (世界記録～後)	
44	16	野地	1	第2面	19月4日	浅山原野B	浅山原野	(0.8)	(4.5)	NS5/9K	NS5/9K	NS5/9K	墨 色	墨色のほとんどが白い	良好	透かしと2面傾斜する 透かしと2面傾斜する TK47 (世界記録～後)	
45	16	野地	1	第2面	16上杭	上山原野A	上山原野	(1.8)	(6.2)	5.9R7/6	5.9R7/6	5.9R7/6	墨 色	φ 1-2mmのチャート ・長石・石英・赤色・さり織合	良好	平成元年～III（世界記録～後）	
46	野地	1	第2面	4上杭	火打5石	火打5石	(4.0)	(2.5)	17	10/9/2	10/9/2	10/9/2	墨 色	φ 1mm程度のチャート・長 石・石英・赤色・さり織合	良好	岩盤の風化度はあまり高い 岩盤の風化度はあまり高い せずアガシ	
47	野地	1	第4面	22流域	上山原野	上山原野	(13.1)	(3.4)	10/9/2	10/9/2	10/9/2	10/9/2	10/9/2	墨 色	φ 1mm程度のチャート・長 石・石英・赤色・さり織合	良好	岩盤の風化度はあまり高い 岩盤の風化度はあまり高い せずアガシ
48	野地	1	第4面	22流域	上山原野	上山原野	(12.4)	(1.8)	10/9/2	10/9/2	10/9/2	10/9/2	10/9/2	墨 色	φ 1-2mmのチャート・長 石・石英・赤色・さり織合	良好	火打口付壁 火打口付壁
49	野地	1	第4面	22流域	上山原野	上山原野	(24.6)	(4.5)	10/9/2	10/9/2	10/9/2	10/9/2	10/9/2	墨 色	φ 1-2mmのチャート・長 石・石英・赤色・さり織合	良好	火打口付壁 火打口付壁
50	20	野地	1	第4面	22流域	上山原野	(12.4)	15.6	2.5/9R7/2	2.5/9R7/2	2.5/9R7/2	2.5/9R7/2	2.5/9R7/2	墨 色	φ 1-2mmの長石・石英 ・チャート・白色を含む	良好	剥離部下位外縁に露出する 剥離部下位外縁に露出する 森岡・竹村藤吉吉田6種
51	野地	1	第4面	22流域	上山原野	上山原野	(3.0)	(4.7)	2.5/9R6/6	2.5/9R6/6	2.5/9R6/6	2.5/9R6/6	2.5/9R6/6	墨 色	φ 1mm程度の長石・石英・チャ ート・白色を含む	良好	
52	野地	1	第4面	22流域	上山原野B	上山原野B	(2.9)	(4.0)	2.5/9R7/2	2.5/9R7/2	2.5/9R7/2	2.5/9R7/2	2.5/9R7/2	墨 色	φ 2-3mmの長石・石英・良好	良好	穿孔は柱状の外縁から 穿孔は柱状の外縁から
53	野地	1	第4面	22流域	上山原野B	上山原野B	(15.0)	(3.6)	10/9/1	10/9/1	10/9/1	10/9/1	10/9/1	墨 色	φ 1mm程度の長石・石英・赤色 ・チャート・白色を含む	良好	石孔は柱状の外縁から 石孔は柱状の外縁から
54	20	野地	1	第4面	22流域	争生上山原野	(10.4)	(6.3)	2.5/9R5/8	2.5/9R5/8	2.5/9R5/8	2.5/9R5/8	2.5/9R5/8	墨 色	φ 1mm程度の長石・石英・赤色 ・チャート・白色を含む	良好	石孔は柱状の外縁から 石孔は柱状の外縁から
55	野地	1	第4面	22流域	争生上山原野	争生上山原野	(10.1)	(6.7)	2.5/9R7/2	2.5/9R7/2	2.5/9R7/2	2.5/9R7/2	2.5/9R7/2	墨 色	φ 1mm程度の長石・石英・赤色 ・チャート・白色を含む	良好	石孔は柱状の外縁から 石孔は柱状の外縁から
56	野地	1	第4面	22流域	争生上山原野	争生上山原野	(11.7)	(7.5)	7.5/9R6/4	7.5/9R6/4	7.5/9R6/4	7.5/9R6/4	7.5/9R6/4	墨 色	φ 1mm程度の長石・石英・赤色 ・チャート・白色を含む	良好	石孔は柱状の外縁から 石孔は柱状の外縁から
57	野地	1	第4面	22流域	上山原野B	上山原野B	(4.0)	(5.0)	10/9/2	10/9/2	10/9/2	10/9/2	10/9/2	墨 色	φ 1mm程度の長石・石英 ・白色・さり織合	良好	森岡・竹村藤吉吉田5種

国 番 号	植物 名	固有 名	調査 地 区	油・割合	遺傳子	高橋名	高橋	口径×長 径(正幅)	周長×厚 (正幅)	色調	形状	
											外 面	内 面
58	薄叶油桐	1	第4面	22%油桐	野生上部長距離			3.4	(7.8)	全分類1、4.1～3.0の長石・ 石英・チャート・赤褐色 多く含まれ	直 長頭端 V形底槽 斜面 竹輪年輪4種式少	斜面 骨生葉側面半弓形微
59	薄叶油桐	1	第4面	24.1油桐	上油桐葉	(1.30)	2.7	19.0	2.39/2 水白 107R7/2 色・紫・鉛粉	直 Φ1～2.0の長石・石英・ チャート含む	直 長頭端 V形底槽 斜面 竹輪年輪4種式少	
60	薄叶油桐	1	第4面	24.1油桐	上油桐葉	(14.3)	5.0	21.6	2.39/2 水白	直 Φ1～2.0の長石・石英・ チャート含む	全体的に水頭を吸受けたもの外見に2.5%R7/2 淡青色を呈 する箇所が多い、またその影響か、外見の一部に神がかり するV形底槽 骨面・竹輪年輪4種式少	
61	薄叶油桐	1	第4面	24.1油桐	上油桐葉	(15.2)	5.2	18.5	2.39/1 黄灰 107R7/1	直 Φ0.5～1.0の長石・石英・ チャート含む	V形底槽 斜面 竹輪年輪4種式少	
24	薄叶油桐	1	第4面	24.1油桐	上油桐葉	(17.2)	5.3	29.3	107R7/2 色・紫・鉛粉 107R7/2 色・紫・鉛粉	直 Φ0.5～1.0の長石・石英・ チャート含む	V形底槽 斜面 竹輪年輪4種式少	
63	薄叶油桐	1	第4面	24.1油桐	上油桐葉	(15.0)	9.7	(11.8)	2.39/3 淡青 107R7/3 淡青	直 Φ1～2.0の長石・石英・ チャート含む	直 軸部下に孔少少あり (Φ0.5mで神から穿孔)	
64	薄叶油桐	1	第4面	24.1油桐	上油桐葉					直 Φ1～2.0の長石・石英・ チャート含む	V形底槽 斜面 竹輪年輪4種式少	
65	薄叶油桐	1	第4面	24.1油桐	上油桐葉			4.4	(4.3)	直 Φ1～2.0の長石・石英・ チャート含む	V形底槽 斜面 竹輪年輪4種式少	
66	薄叶油桐	1	第4面	24.1油桐	上油桐葉			4.9	(4.5)	直 Φ1～2.0の長石・石英・ チャート含む	V形底槽 斜面 竹輪年輪4種式少	
67	薄叶油桐	1	第4面	24.1油桐	上油桐葉	(10.8)		(4.7)	7.5YR8.4 107R8/3 淡青	直 Φ1～2.0の長石・石英・ チャート含む	直 小頭部透かし2回出現する 森林・竹輪年輪5種式少	
68	薄叶油桐	1	第4面	25.1油桐	上油桐葉	(9.9)	2.8	11.9	2.39/2 水白	直 Φ1～2.0の長石・石英・ チャート含む	直 轴部下に穿孔 V形底槽 森林・竹輪年輪4種式少	
69	薄叶油桐	1	第4面	25.1油桐	上油桐葉	(13.0)		(6.1)	2.37/1 黑 2.3Y4/1 黄灰	直 Φ1～2.0の長石・石英・ チャート含む	直 上頭部透かし2回出現する 森林・竹輪年輪4種式少	
70	薄叶油桐	1	第4面	25.1油桐	上油桐葉	(13.4)		(8.6)	107R8/2 淡青	直 Φ1～2.0の長石・石英・ チャート含む	V形底槽 斜面 竹輪年輪4種式少	
71	薄叶油桐	1	第4面	25.1油桐	上油桐葉	(13.6)		(9.8)	2.39/2 水白 107R8/2 淡青	直 Φ1～2.0の長石・石英・ チャート含む	V形底槽 斜面 竹輪年輪4種式少	
72	薄叶油桐	1	第4面	25.1油桐	上油桐葉	(18.0)		(4.5)	107R8/2 水白	直 Φ1～2.0の長石・石英・ チャート含む	直 森林・竹輪年輪4種式少	
73	薄叶油桐	1	第4面	25.1油桐	上油桐葉	16.2		(6.3)	7.5YR8.3 淡青	直 Φ1～2.0の長石・石英・ チャート含む	V形底槽 斜面 竹輪年輪4種式少	
74	薄叶油桐	1	第4面	25.1油桐	上油桐葉	(16.8)		(17.0)	2.39/2 水白	直 Φ1～2.0の長石・石英・ チャート含む	V形底槽 斜面 竹輪年輪4種式少	
75	薄叶油桐	1	第4面	25.1油桐	上油桐葉	(16.5)	4.2	27.0	2.39/2 水白	直 Φ1～2.0の長石・石英・ チャート含む	直 上頭部透かし2回出現する 森林・竹輪年輪4種式少	
76	薄叶油桐	1	第4面	25.1油桐	上油桐葉	(16.5)		(27.5)	2.39/1 水白	直 Φ1～2.0の長石・石英・ チャート含む	直 森林・竹輪年輪4種式少	
77	薄叶油桐	1	第4面	25.1油桐	上油桐葉	(16.5)		(16.3)	107R7/2 色・紫・鉛粉	直 Φ1～2.0の長石・石英・ チャート含む	直 森林・竹輪年輪5種式少	

国 番 号	地 名	通 称	測 量 区 分	面 積 ha	測 量 年 度	測 量 者	測 量 地 点	法 規(m)	法 規(m)	法 規(m)	法 規(m)	法 規(m)	色 調	地 質	特 徴	
78	新潟市	第4面	25.1測面	上油原裏	3.2	(13.3)	20.0	2.378/2	K白	面 石 英	やや 白色	上園部下 竹林谷西 面	やや 白色	上園部下 竹林谷西 面	やや 白色	
79	新潟市	第4面	25.1測面	上油原裏	3.4	(4.1)	107R7/2	K白	面 石 英	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	
80	新潟市	第4面	25.1測面	上油原裏	3.6	(5.0)	2.377/2	K白	面 石 英	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	
81	新潟市	第4面	25.1測面	上油原裏	5.2	(6.3)	378/2	K白	面 石 英	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	
25	新潟市	第4面	25.1測面	上油原裏	14.7	4.2	12.1	107R7/2	K白	面 石 英	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色
83	新潟市	第4面	25.1測面	上油原 二重口耕種	22.0	(3.3)	107R7/2	K白	面 石 英	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	
84	新潟市	第4面	25.1測面	上油原山口前	16.7	(11.2)	2.378/2	K白	面 石 英	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	
85	新潟市	第4面	25.1測面	上油原山口前	24.6	(12.7)	2.379/2	K白	面 石 英	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	
86	新潟市	第4面	25.1測面	上油原山口前	35.2	(10.6)	107R8/3	浅黃 K白	面 石 英	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	
87	新潟市	第4面	25.1測面	上油原跡分	13.8	(3.9)	2.378/2	K白	面 石 英	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	
88	新潟市	第4面	25.1測面	上油原跡分	24.7	(7.9)	2.378/2	K白	面 石 英	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	
89	新潟市	第4面	25.1測面	上油原跡分	18.9	(15.3)	15.3	107R7/2	K白	面 石 英	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色
26	新潟市	第4面	25.1測面	上油原跡分	20.2	(14.8)	15.1	107R8/3	浅黃 K白	面 石 英	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色
91	新潟市	第4面	25.1測面	上油原跡分	20.0	(14.2)	13.7	107R7/2	K白	面 石 英	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色
92	新潟市	第4面	25.1測面	上油原跡分	19.4	15.0	15.4	2.378/2	K白	面 石 英	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色
93	新潟市	第4面	25.1測面	上油原跡分	15.3	10.7	11.1	107R8/3	浅黃 K白	面 石 英	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色
94	新潟市	第4面	25.1測面	上油原跡分	13.4	(7.0)	2.377/2	K白	面 石 英	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	
95	新潟市	第4面	25.1測面	上油原跡分	12.4	12.5	7.7	107R8/2	K白	面 石 英	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色
96	新潟市	第5~6面	27包絡	争引上油原	16.2	(5.7)	2.378/2	K白	面 石 英	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	
30	新潟市	第5~6面	27包絡	争引上油原	10.7	(3.0)	2.379/2	K白	面 石 英	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	やや 白色	

国 名 番 号	地圖 番号	測量 区	調 査 員 名	測 量 日	高 程	面積 (ha)	法 面 (m)	法 面 長 (m)	法 面 幅 (m)	色調		地質	特徴等
										東 北 部 外 縁	東 北 部 内 部		
98	新潟地	1 第5・6画	27/685	上耕原畠	(1.58)	(2.4)	109741 黑	2.537/2 長英	4.1 (6.7)	面 φ 1~3mの長石・石英・角閃石 面白	面 φ 1~3mの長石・石英・角閃石 面白	生駒山地東 森林・竹林地等西面3~4種式	
99	新潟地	1 第5・6画	27/685	争牛~上耕原畠			109742 黑	2.537/2 長英	3.0 (5.7)	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	朝倉山に偏在する 森林・竹林地等西面3~4種式	
100	新潟地	1 第5・6画	27/685	争牛~上耕原畠			109743 黑	2.537/2 長英	4.2 (12.5)	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	朝倉山に偏在する 森林・竹林地等西面3~4種式	
101	新潟地	1 第5・6画	27/685	争牛~上耕原畠			109744 黑	2.537/2 長英	4.3 (10.0)	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	朝倉山に偏在する 森林・竹林地等西面3~4種式	
102	新潟地	1 第5・6画	27/685	争牛~土耕原畠			109745 黑	2.538/2 長英	4.3 (2.4)	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	紙面外に稀有あり	
103	新潟地	1 第5・6画	27/685	争牛~上耕原畠			109746 黑	2.538/2 長英	5.3 (7.7)	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	口根野方面に2~3の複数個が分布する 森林・竹林地等西面3~4種式	
104	新潟地	1 第5・6画	27/685	上耕原畠			109747 黑	2.538/2 長英	4.9 (14.2)	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	森林・竹林地等西面3~4種式	
30	105 20	新潟地	1 第5・6画	27/685	上耕原畠		109748 黑	2.538/2 長英	5.4 (14.0)	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	森林・竹林地等西面3~4種式	
106	20	新潟地	1 第5・6画	27/685	争牛~上耕原畠		109749 黑	2.538/2 長英	6.1 (13.1)	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	口根野方面に1~2の複数個が分布する 森林・竹林地等西面3~4種式	
107	20	新潟地	1 第5・6画	27/685	上耕原畠		109750 黑	2.538/2 長英	6.0 (26.0)	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	森林・竹林地等西面3~4種式	
108	20	新潟地	1 第5・6画	27/685	争牛~上耕原畠		109751 黑	2.538/2 長英	6.7 (21.4)	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	森林・竹林地等西面3~4種式	
109		新潟地	1 第5・6画	27/685	上耕原畠		109752 黑	2.538/2 長英	6.8 (19.7)	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	朝倉山に偏在する 森林・竹林地等西面3~4種式	
110	21	新潟地	1 第5・6画	27/685	上耕原畠		109753 黑	2.538/2 長英	6.9 (13.6)	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	森林・竹林地等西面3~4種式	
111	21	新潟地	1 第5・6画	27/685	争牛~土耕原畠		109754 黑	2.538/2 長英	12.1 (13.0)	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	中央の断面 森林・竹林地等西面3~4種式	
112		新潟地	1 第5・6画	40/685	争牛~土耕原畠		109755 黑	2.538/2 長英	12.1 (14.0)	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	争牛に偏在する 森林・竹林地等西面3~4種式	
113		新潟地	1 第5・6画	40/685	争牛~土耕原畠		109756 黑	2.538/2 長英	13.0 (20.0)	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	争牛後壁下部	
31	114	新潟地	1 第5・6画	40/685	争牛~土耕原畠		109757 黑	2.538/2 長英	14.2 (17.6)	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	争牛後壁下部	
115		新潟地	1 第5・6画	40/685	争牛~土耕原畠		109758 黑	2.538/2 長英	14.0 (6.5)	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	面 φ 1~3mの長石・石英 面白	争牛後壁下部	

国 番 号	植物 名	通称名	調査区 域	調査点 名	標高(m)	測量者	測量	法面(m)	法面(m)	色調	地表		特徴等
								口徑・長	底径・幅	表面・深	表面・深	表面・深	
116	河原地	1 号5・6面	40m道路	勞牛土壠梗	(18.0)			(5.8)		■ 1 ~ 2 mの長石・石英・ チャートを多く含む (7.0)	外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり	11)	
117	河原地	1 号5・6面	40m道路	勞牛土壠梗	(15.3)	4.2	15.1	2.5/8.2 黄白 N45°E-2.5/8.2 黄白	■ 1 ~ 2 mの長石・石英・ チャートを多く含む (7.0)	外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり	11)		
118	河原地	1 号5・6面	40m道路	勞牛土壠梗	(17.7)	(8.4)	3/8.4 黄白 NS2/ 開裂	■ 1 ~ 2 mの長石・石英・ チャートを多く含む (7.0)	外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり	11)			
119	河原地	1 号5・6面	40m道路	勞牛土壠梗	(13.0)	(14.0)	10/8.0/2 灰褐色 10/8.0/2 に灰岩付着	■ 1 ~ 2 mの長石・石英・ チャートを多く含む (7.0)	外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり	11)			
120	河原地	1 号5・6面	40m道路	勞牛土壠梗	(9.0)		7.5/8.6 灰褐色 7.5/8.6 亂層岩	■ 1 ~ 2 mの長石・石英・ チャートを多く含む (7.0)	外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり	11)			
121	河原地	1 号5・6面	40m道路	勞牛土壠梗	(4.0)	(2.6)	10/8.0/2 黄白 10/8.0/2 に灰岩付着	■ 1 ~ 2 mの長石・石英・ チャートを多く含む (7.0)	外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり	11)			
122	河原地	1 号5・6面	40m道路	勞牛土壠梗	(4.1)	(3.8)	10/8.0/2 灰褐色 10/8.0/2 に灰岩付着	■ 1 ~ 2 mの長石・石英・ チャートを多く含む (7.0)	外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり	11)			
123	河原地	1 号5・6面	40m道路	勞牛土壠梗	(4.6)	(3.4)	10/8.0/2 黄白 10/8.0/2 亂層岩	■ 1 ~ 2 mの長石・石英・ チャートを多く含む (7.0)	外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり	11)			
124	河原地	1 号5・6面	40m道路	勞牛土壠梗	(4.9)	(6.4)	2.5/8.7/1 亂層岩 10/8.0/2 に灰岩付着	■ 1 ~ 2 mの長石・石英・ チャートを多く含む (7.0)	外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり	11)			
125	河原地	1 号5・6面	40m道路	勞牛土壠 二重口脚筋	(15.0)	(2.2)	10/8.0/2 灰褐色 10/8.0/2 亂層岩	■ 1 ~ 2 mの長石・石英・ チャートを多く含む (7.0)	外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり	11)			
126	河原地	1 号5・6面	40m道路	勞牛土壠小凹窪	(6.6)	(3.4)	2.5/7.2 亂層 5.5/8.6 灰	■ 0.5 ~ 2 mの長石・石英・ チャートを多く含む (7.0)	外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり	11)			
127	河原地	1 号5・6面	40m道路	勞牛土壠林	(14.4)	(6.8)	10/8.0/1 黄白 10/8.0/1 亂層 10/8.0/2 亂層	■ 1 ~ 2 mの長石・石英・ チャートを多く含む (7.0)	外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり	11)			
128	河原地	1 号5・6面	40m道路	勞牛土壠林	(13.0)	(3.0)	10/8.0/3 亂層 5.5/8.6 灰	■ 1 ~ 2 mの長石・石英・ チャートを多く含む (7.0)	外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり	11)			
129	河原地	1 号5・6面	40m道路	土壤發育行	(4.8)	(2.3)	2.5/8.3 漢漿 7.5/8.4 亂層	■ 1 ~ 2 mの長石・石英・ チャートを多く含む (7.0)	外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり	11)			
130	河原地	1 号5面	35m³	土壤發育	(11.6)	(2.2)	10/8.0/2 亂層 10/8.0/2 に灰岩付着	■ 1 ~ 2 mの長石・石英・ チャートを多く含む (7.0)	外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり	11)			
131	河原地	1 号5面	38m³	瓦質土壠	(17.8)	(5.0)	N45°E NS2/ 亂層	■ 1 ~ 2 mの長石・石英・ チャートを多く含む (7.0)	外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり	11)			
132	河原地	1 号5面	38m³	瓦質土壠	(18.6)	(8.7)	N2/ 黑 10/8.0/1 亂層	■ 1 ~ 2 mの長石・石英・ チャートを多く含む (7.0)	外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり	11)			
133	河原地	1 号5面	38m³	瓦質土壠	(22.2)	(5.7)	3/8.1 黑 3/8.1 亂層	■ 1 ~ 2 mの長石・石英・ チャートを多く含む (7.0)	外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり	11)			
134	河原地	1 号5面	38m³	瓦質土壠	(33.2)	(8.9)	N45°E NS2/ 亂層	■ 0.5 ~ 2 mの長石・石英・ チャートを多く含む (7.0)	外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり 外面上には灰岩付着部あり	11)			

国 番 号	植物 名	固有 種子 数	調 査 区 域	油・割合	遺傳子	高橋	法面(m)	法面(延長) 延長(幅)	色調	断土	地質
									頂 面 外 面	頂 面 内 面	頂 面 外 面
135 14	明神地	1	第6面	38件/3	偏光電照林	(4.8)	1.5YR4/2 白系 10YR4/3 灰系	偏光電照林	偏光 偏光 偏光	偏光 偏光 偏光	月の輪山山土。偏光電照林は白系のもののみ、新鮮している 委員会山中世帯 (15世紀後半)。
136 14	明神地	1	第6面	38件/3	偏光電照林	(6.1)	NS/ 白系	偏光電照林	偏光 偏光 偏光	偏光 偏光 偏光	月の輪山山土。内側へ偏光電照林が付着する 偏光電照林 (16世紀後半)。
137 14	明神地	1	第6面	38件/3	偏光電照林	(29.2)	10YR5/4 黄系 7.5YR5/4 黄系	偏光電照林	偏光 偏光 偏光	偏光 偏光 偏光	月の輪山山土。偏光電照林は黄系のもののみ、新鮮している 偏光電照林 (16世紀後半)。
138	明神地	1	第6面	38件/3	偏光電照林	(12.2)	2.5YR6/6 相 5YR6/6 相	偏光電照林	偏光 偏光 偏光	偏光 偏光 偏光	月の輪山山土。偏光電照林は黄系のもののみ、新鮮している 偏光電照林 (16世紀後半)。
139 14	明神地	1	第6面	38件/3	偏光電照林	(14.1)	6.6 5.3	偏光電照林	偏光 偏光 偏光	偏光 偏光 偏光	月の輪山山土。偏光電照林は黄系のもののみ、新鮮している 偏光電照林 (16世紀後半)。
140 15	明神地	1	第6面	38件/3	巴文施瓦 K	[H:12.7~ 13.0]	長(31.0) 宽(29.2) NA/ K	偏光電照林	偏光 偏光 偏光	偏光 偏光 偏光	月の輪山山土。偏光電照林は黄系のもののみ、新鮮している 偏光電照林 (16世紀後半)。
34	141	明神地	1	第6面	38件/3	水流交渉平瓦	K:3W4/5 NS/ 通用	水流交渉平瓦	偏光 偏光 偏光	偏光 偏光 偏光	月の輪山山土。偏光電照林 (10.0 m - 1.5YR6/7.0 m) + 外剥離 1.0 m 左剥離 0.5 m - 右剥離 1.0 m + 外剥離 2.0 m 偏光電照林 (15世紀後半)。
142 15	明神地	1	第6面	38件/3	水流交渉平瓦	H:12.7~ 13.0	長(31.0) 宽(29.2) NA/ K	水流交渉平瓦	偏光 偏光 偏光	偏光 偏光 偏光	月の輪山山土。偏光電照林 (2.43 m - 1.5YR6/7.0 m) + 外剥離 0.7 m 左剥離 1.1 m - 右剥離 1.8 m + 外剥離 0.5 m + 外剥離 0.7 m 偏光電照林 (15世紀後半)。
143	明神地	1	第6面	38件/3	瓦瓦	(24.3)	NS/ 通用	瓦瓦	偏光 偏光 偏光	偏光 偏光 偏光	月の輪山山土。偏光電照林 (1.5m - 1.5YR6/7.0 m) + 外剥離 1.0 m 左剥離 0.5 m - 右剥離 1.0 m + 外剥離 2.0 m 偏光電照林 (15世紀後半)。
144	明神地	1	第2層	上剥離面	(7.8)	1.5 7.5W6/3 未開 7.5W6/3 未開	上剥離面	上剥離面	偏光 偏光 偏光	偏光 偏光 偏光	月の輪山山土。偏光電照林 (2.43 m - 1.5YR6/7.0 m) + 外剥離 0.7 m 左剥離 1.1 m - 右剥離 1.8 m + 外剥離 0.5 m + 外剥離 0.7 m 偏光電照林 (15世紀後半)。
145	明神地	1	第2層	上剥離面	8.0	1.7 2.5W7/4 未開	上剥離面	上剥離面	偏光 偏光 偏光	偏光 偏光 偏光	月の輪山山土。偏光電照林 (2.43 m - 1.5YR6/7.0 m) + 外剥離 0.7 m 左剥離 1.1 m - 右剥離 1.8 m + 外剥離 0.5 m + 外剥離 0.7 m 偏光電照林 (15世紀後半)。
146 21	明神地	1	第6層	瓦質磚 ミニチャーブ	2.1	2.7	NA/ K	瓦質磚 ミニチャーブ	偏光 偏光 偏光	偏光 偏光 偏光	月の輪山山土。偏光電照林 (1.5m - 1.5YR6/7.0 m) + 外剥離 1.0 m 左剥離 0.5 m - 右剥離 1.0 m + 外剥離 2.0 m 偏光電照林 (15世紀後半)。
147 21	明神地	1	第2層	瓦もじらはめ	(18.8)	(5.3)	NT 4/6+7.5W7/4 オードブーム	瓦もじらはめ	偏光 偏光 偏光	偏光 偏光 偏光	月の輪山山土。偏光電照林 (0.7m - 1.5YR6/7.0 m) + 外剥離 1.0 m 左剥離 0.5 m - 右剥離 1.0 m + 外剥離 2.0 m 偏光電照林 (15世紀後半)。
35	148	明神地	1	第2層	偏光電照林	(4.3)	2.5YR5/4 にごり M:3W6/3 未開 2.5W5/4 にごり	偏光電照林	偏光 偏光 偏光	偏光 偏光 偏光	月の輪山山土。偏光電照林 (1.5m - 1.5YR6/7.0 m) + 外剥離 0.7 m 左剥離 1.1 m - 右剥離 1.8 m + 外剥離 0.5 m + 外剥離 0.7 m 偏光電照林 (15世紀後半)。
149	明神地	1	第2層	偏光電照林	(5.0)	2.5YR4/1 未開 2.5YR4/1 未開	偏光電照林	偏光 偏光 偏光	偏光 偏光 偏光	月の輪山山土。偏光電照林 (1.5m - 1.5YR6/7.0 m) + 外剥離 0.7 m 左剥離 1.1 m - 右剥離 1.8 m + 外剥離 0.5 m + 外剥離 0.7 m 偏光電照林 (15世紀後半)。	
150	明神地	1	第2層	絆物角形陶	(7.4)	2.2 3W8/7-2.5Y7/2 灰白 (無)	絆物角形陶	絆物 絆物 絆物	絆物 絆物 絆物	絆物 絆物 絆物	月の輪山山土。偏光電照林 (1.5m - 1.5YR6/7.0 m) + 外剥離 0.7 m 左剥離 1.1 m - 右剥離 1.8 m + 外剥離 0.5 m + 外剥離 0.7 m 偏光電照林 (15世紀後半)。

国 番 号	地名 及び 都道 府 県	通称 名	調 査 年 度	調 査 者	法面(m)			色調		断 面	地質	特徴
					口	壁	底	左	右			
151	新潟市 第2層	白鐵	(17.2)	(2.8)	3.0	(1.8)	3.0	377/1 白白	377/2 灰白	断面 壁の黒色板を含む 中に含む	玉林(6)の口縁部 が露出する。壁はやや上に傾斜する。 白通路(1.6m)。(11世紀初頭～11世紀後半)	良好
152	新潟市 第2層	白鐵	(17.2)	(2.8)	3.0	(1.8)	3.0	377/1 白白	377/2 灰白	断面 壁の黒色板を含む 中に含む	平安(1.0m)～新(1.0m)。(11世紀初頭～12世紀初頭)	良好
153	新潟市 第2層	越州京原御 用材	(4.5)	2.97/7 旗黄(7.5m/6)	0.5	0.5	0.5	断面 壁の黒色板を含む 中に含む	断面 壁の黒色板を含む 中に含む	断面 壁の黒色板を含む 中に含む	白通路(1.6m)。(11世紀初頭～12世紀初頭)	良好
154	新潟市 第2層	青竹合子	(1.7)	567/1 白	0.5	0.5	0.5	断面 壁の黒色板を含む 中に含む	断面 壁の黒色板を含む 中に含む	断面 壁の黒色板を含む 中に含む	内面は全体的に 白い傾斜部である。 外側は全体的に 黒い傾斜部である。 壁は傾斜するが、下端八角形を呈す。 内面は漆喰で仕上げられ る。	良好
155	新潟市 第2層	上野御料釜	(3.8)	(7.5)	1.0	1.0	1.0	107R/2 上:灰黄 (1.8) 下:灰黄 (1.8)	107R/2 上:灰黄 (1.8) 下:灰黄 (1.8)	断面 壁の黒色板を含む 中に含む	内面は漆喰で仕上げ られる。外側は全体的に 白い傾斜部である。 壁は傾斜するが、下端八角形を呈す。 内面は漆喰で仕上げられ る。	良好
156	新潟市 第2層	上野御料釜	(1.5)	(3.8)	0.5	0.5	0.5	107R/2 上:灰黄 (1.8) 下:灰黄 (1.8)	107R/2 上:灰黄 (1.8) 下:灰黄 (1.8)	断面 壁の黒色板を含む 中に含む	内面は漆喰で仕上げ られる。外側は全体的に 白い傾斜部である。 壁は傾斜するが、下端八角形を呈す。 内面は漆喰で仕上げられ る。	良好
157	新潟市 第2層	御也器御杯釜	(1.5)	(3.8)	0.5	0.5	0.5	107R/2 上:灰黄 (1.8) 下:灰黄 (1.8)	107R/2 上:灰黄 (1.8) 下:灰黄 (1.8)	断面 壁の黒色板を含む 中に含む	内面は漆喰で仕上げ られる。外側は全体的に 白い傾斜部である。 壁は傾斜するが、下端八角形を呈す。 内面は漆喰で仕上げられ る。	良好
158	新潟市 第2層	御也器御杯釜	(1.0)	(3.8)	0.5	0.5	0.5	107R/2 上:灰黄 (1.8) 下:灰黄 (1.8)	107R/2 上:灰黄 (1.8) 下:灰黄 (1.8)	断面 壁の黒色板を含む 中に含む	内面は漆喰で仕上げ られる。外側は全体的に 白い傾斜部である。 壁は傾斜するが、下端八角形を呈す。 内面は漆喰で仕上げられ る。	良好
159	新潟市 第2層	御也器御杯釜	(1.5)	(3.8)	0.5	0.5	0.5	107R/2 上:灰黄 (1.8) 下:灰黄 (1.8)	107R/2 上:灰黄 (1.8) 下:灰黄 (1.8)	断面 壁の黒色板を含む 中に含む	内面は漆喰で仕上げ られる。外側は全体的に 白い傾斜部である。 壁は傾斜するが、下端八角形を呈す。 内面は漆喰で仕上げられ る。	良好
160	新潟市 第2層	御也器御杯釜	(1.4)	(4.0)	0.5	0.5	0.5	107R/2 上:灰黄 (1.8) 下:灰黄 (1.8)	107R/2 上:灰黄 (1.8) 下:灰黄 (1.8)	断面 壁の黒色板を含む 中に含む	内面は漆喰で仕上げ られる。外側は全体的に 白い傾斜部である。 壁は傾斜するが、下端八角形を呈す。 内面は漆喰で仕上げられ る。	良好
161	新潟市 第2層	御也器御杯 釜	(1.3)	(4.0)	0.5	0.5	0.5	107R/2 上:灰黄 (1.8) 下:灰黄 (1.8)	107R/2 上:灰黄 (1.8) 下:灰黄 (1.8)	断面 壁の黒色板を含む 中に含む	内面は漆喰で仕上げ られる。外側は全体的に 白い傾斜部である。 壁は傾斜するが、下端八角形を呈す。 内面は漆喰で仕上げられ る。	良好
162	新潟市 第2層	平瓦	(1.4)	(4.0)	0.5	0.5	0.5	7.5YR7/3 上:灰 (1.8) 下:灰 (1.8)	2.5YR7/1 灰白	断面 壁の黒色板を含む 中に含む	内面は漆喰で仕上げ られる。外側は全体的に 白い傾斜部である。 壁は傾斜するが、下端八角形を呈す。 内面は漆喰で仕上げられ る。	良好
163	新潟市 第2層	御也器御 用材	(1.3)	(4.0)	0.5	0.5	0.5	5FBG/1 青灰	5FBG/1 青灰	断面 壁の黒色板を含む 中に含む	内面は漆喰で仕上げ られる。外側は全体的に 白い傾斜部である。 壁は傾斜するが、下端八角形を呈す。 内面は漆喰で仕上げられ る。	良好
164	新潟市 第2層	御也器御 用材	(1.2)	(4.0)	0.5	0.5	0.5	5YR7/1 灰白	2.5YR8/2 灰白	断面 壁の黒色板を含む 中に含む	内面は漆喰で仕上げ られる。外側は全体的に 白い傾斜部である。 壁は傾斜するが、下端八角形を呈す。 内面は漆喰で仕上げられ る。	良好
165	新潟市 第2層	4清	(3.4)	(4.0)	0.5	0.5	0.5	2.5Y3/1 黑褐	2.5Y7/2 灰白	断面 壁の黒色板を含む 中に含む	内面は漆喰で仕上げ られる。外側は全体的に 白い傾斜部である。 壁は傾斜するが、下端八角形を呈す。 内面は漆喰で仕上げられ る。	良好
166	新潟市 第2層	7清	(1.5)	(4.0)	0.5	0.5	0.5	5YR7/1 灰白	5YR7/1 灰白	断面 壁の黒色板を含む 中に含む	内面は漆喰で仕上げ られる。外側は全体的に 白い傾斜部である。 壁は傾斜するが、下端八角形を呈す。 内面は漆喰で仕上げられ る。	良好
167	新潟市 第2層	9上灰	(4.2)	(3.8)	0.5	0.5	0.5	5YR7/1 灰白	5YR7/1 灰白	断面 壁の黒色板を含む 中に含む	内面は漆喰で仕上げ られる。外側は全体的に 白い傾斜部である。 壁は傾斜するが、下端八角形を呈す。 内面は漆喰で仕上げられ る。	良好

国 名 番 号	植物 名	通称名	調 査 地 区	油 脂 ・ 制 油 工 場	過 橋 名	過 橋 名	高 橋	法 律 (m)	法 律 規 定 (m)	色 調		地 域	特 徴	
										口 径 × 長 さ	幅 度 × 幅	周 囲 面 積	内 面 積	
49	168	西山油畠場	1	第2面	1.2t柱	油田過橋N9		(10.5)	(2.3)	全 面 S7/ N8/ K8	0.5~2 m	大の柱は 多く、 石英・チー ト・石英・黒色を含む 色	自	ヘタ側方に斜く、 路面に抵抗した形態がみられる
49	169	西山油畠場	6	第1面	1.上杭	油田過橋N9		(4.7)	(0.8)	N8/ K8	0.1~2 m	柱はチーク柱で、 下部は黒色を含む 色	自	外周には柱はなく、 斜面に斜めに傾いた形態が みられる
50	170	西山油畠場	2	第1面	1.流路	綿丈土密接木		(4.6)	2.377/2	底面	0.5~2 m	柱はほとんどが 1m未満	自	底面が薄く、柱は少ないが 斜面のみ柱がある
51	171	西山油畠場	3	第1面	3.上杭	油田過橋N9	(3.0)	(3.0)	N8/ K8/N5/ K8	0.1~4 m	柱は斜面・ 底面を除く、 柱は黒色を含む	自	斜面はややくねり、 柱は柱頭部が丸い	
53	172	西山油畠場	3	第1面	3.上杭	油田過橋N9	(4.6)	(2.6)	N8/ K8	0.1~2 m	柱は斜面・ 底面を含む	自	斜面はややくねり、 柱は柱頭部が丸い	
53	173	西山油畠場	3	第1面	1.1t柱	油田過橋		(5.7)	N8/ K8	0.3~1 m	柱は斜面を含む	自	柱は用ひ難く、柱頭 部は柱子ドタクナ	
54	174	西山油畠場	3	第1面	2.上杭	油田過橋	(1.4.2)	18.6	N8/ K8	0.5~2 m	柱は斜面・ 底面を含む	自	柱の並びは特に斜面に多く、 柱頭部が丸い	
54	175	西山油畠場	4	第1面	3.船体	上油過橋	(7.4)	(3.2)	107R/2	0.5~2 m	柱は斜面・ 底面を含む	自	柱頭部は丸い	
54	176	西山油畠場	4	第1面	3.船体	瓦質土密接木		(4.7)	2.377/2	K8~2575/1	0.3~2 m	柱は斜面・ 底面を含む	自	全体的に斜面の柱は多く、 柱頭部が丸い
57	177	西山油畠場	4	第1面	1.3t柱	油田過橋N9	(8.6)	(2.1)	N8/ K8	0.1~1 m	柱は斜面・ 底面を含む	自	斜面はややくねり、 柱頭部が丸い	
57	178	西山油畠場	4	第2面	1.3t柱	油田過橋N9	(9.9)	(3.1)	N8/ K8	0.5~3 m	柱は斜面・ 底面を含む	自	柱頭部は丸く、 柱頭部が丸い	
57	179	西山油畠場	4	第2面	1.3t柱	油田過橋	(12.6)	(3.2)	3771/ オリーブ K8/1	0.5~2 m	柱は斜面を含む	自	柱頭部は丸く、 柱頭部が丸い	
57	180	西山油畠場	4	第2面	1.3t柱	油田過橋		(3.5)	375/1 K8/K	0.1~1 m	柱は斜面・ 底面を含む	自	柱頭部は斜面と底面の実面を各々 斜面も底面も柱頭部が丸い	
57	181	29	西山油畠場	4	第2面	1.3t柱		(47.0)	(13.3)	N8/ N8/ K8	2~3 m	柱は多く、 柱は斜面を含む	自	柱頭部は丸く、 柱頭部が丸い
182	182	西山油畠場	4	第2面	1.3t柱	油田過橋	(33.3)	(4.6)	N8/ N8/ K8	0.1~3 m	柱は斜面を含む	自	柱頭部は丸く、 柱頭部が丸い	
183	183	29	西山油畠場	4	第2面	1.4t柱N5		(33.6)	(8.6)	N7/ K8/1 K8/1	0.1~2 m	柱は斜面を含む	自	柱頭部は丸く、 柱頭部が丸い

国 番 号	植物 名	通称名	調査区 域	調査位 置	標 高	地質名	岩種	法面(m)		色調		地質
								口徑・長	底径・幅	露高・厚	固・外露	
184	29	西山掛山場	4	第2面	148m	砂岩	砂岩	(5.0)	107R/3 2.5YR8/6	墨 チャート・赤色 層・黑色を含む	φ 0.5 ~ 1 mの長石・石英 チャート・赤色を含む	外区は露文が発達する 内区は露文が乏しい 古生層の露頭
57								(10.0)	35Y6/4 N6/4	墨 多く含む	φ 0.5 ~ 5 mmの長石・石英を含む	内化した4面はどの2面とも露れが薄いもの地用物が認められ る。6面は同じ風景である。削理はほかく、柱上げ現行 であろう。柱理用の露頭か
186	29	西山掛山場	4	第2面	148m	砂岩	長石 長石	(5.0)	35Y6/4 N6/4	墨 層(3.3)	φ 0.5 mmの長石・石英を含む	内化した4面はどの2面とも露れが薄いもの地用物が認められ る。6面は同じ風景である。削理はほかく、柱上げ現行 であろう。柱理用の露頭か
187								(6.7)	11Z N7/4	墨 層(1.2)	φ 0.5 mmの長石・石英を含む	内化した4面はどの2面とも露れが薄いもの地用物が認められ る。6面は同じ風景である。削理はほかく、柱上げ現行 であろう。柱理用の露頭か
188	29	西山掛山場	4	第2面	51上坑	露出岩塊	角状 角状	(20.0)	19A N8/4	墨 層(19.4)	φ 0.2 mmの長石・石英・チャート・黒色を含む	下身が斜面で全く斜面に斜面が重複し、特に斜面の露頭が圓滑 である。
189								(2.0)	11Z N7/4	墨 層(22.1)	φ 1 ~ 2 mmの長石・石英・黒色を含む	外山は露子タマのちからタマの露頭が複数ある
60								(12.0)	35Y6/4 N6/4	墨 層(11.1)	φ 1 mm程度の長石・石英・黒色を含む	口腔・喉頭部は「方に詰みこむ」というようヨココナ子を施し、歯面に 舌を擦り付けて舌苔を付ける
190	29	西山掛山場	4	第2面	30上坑	露出岩塊	角状 角状	(30.0)	11A 2.5YR8/6	墨 層(11.0)	φ 0.2 mmの長石・石英・黒色を含む	舌苔が斜面で全く斜面が重複し、特に斜面の露頭が圓滑である。
191								(24.0)	2.5YR8/6 N6/4	墨 層(23.9/2 N6/4)	φ 1 ~ 2 mmの長石・石英・チャート・黒色を含む	外山は露子タマのちからタマの露頭が複数ある
192	30	西山掛山場	4	第1~2面	白画面	白画面	白画面	(7.1)	14Z N6/4	墨 層(4.2)	φ 0.5 mmの長石・石英・黒色を含む	内面も斜面で全く斜面が重複し、特に斜面の露頭が圓滑である。
193	30	西山掛山場	4	第1面	白画面	白画面	白画面	(6.2)	7.5Y7/1 N6/4	墨 層(1.6)	φ 0.5 mmの長石・石英・黒色を含む	内面も斜面で全く斜面が重複し、特に斜面の露頭が圓滑である。
194	31	西山掛山場	4	第1~2面	経理岩塊	経理岩塊	経理岩塊	(7.9)	11B N6/4	墨 層(1.8)	φ 0.5 mmの長石・石英・黒色を含む	内面も斜面で全く斜面が重複し、特に斜面の露頭が圓滑である。
195	30	西山掛山場	4	第1~2面	露出岩塊	角状 角状	角状 角状	(38.4)	11B N6/4	墨 層(2.1)	φ 1 ~ 2 mmの長石・石英・チャートを含む	内面も斜面で全く斜面が重複し、特に斜面の露頭が圓滑である。
61								(18.8)	11B N6/4	墨 層(15.3)	φ 0.5 ~ 6/4 mの長石・石英・チャートを含む	内面も斜面で全く斜面が重複し、特に斜面の露頭が圓滑である。
196								(14.1)	35Y6/4 N6/4	墨 層(14.1)	φ 1 mm程度の長石・石英・黒色を含む	内面も斜面で全く斜面が重複し、特に斜面の露頭が圓滑である。
197	30	西山掛山場	4	第1~2面	露出岩塊	手	手	(2.0)	11Z N7/4	墨 層(2.0)	φ 0.5 mmの長石・石英・黒色を含む	内面も斜面で全く斜面が重複し、特に斜面の露頭が圓滑である。
198	30	西山掛山場	4	第2面	白画面	白画面	白画面	(5.0)	7.5Y8/1 N6/4	墨 層(2.6)	φ 0.5 ~ 1 mmの長石・石英・チャートを含む	内面も斜面で全く斜面が重複し、特に斜面の露頭が圓滑である。
199	30	西山掛山場	4	第2面	白画面	白画面	白画面	(5.0)	10Y8/1 N6/4	墨 層(1.4)	φ 0.5 mmの長石・石英・黒色を含む	内面も斜面で全く斜面が重複し、特に斜面の露頭が圓滑である。

国 番 号	通 名	通 名 地 区	調 査 地 区	調 査 名	調 査 地 点	高 度	口徑×長 さ(正×幅)	法 面(m)	色 調	断 面	
										断 面	内 面
200	30	西の庄東	4	第2層	白礫層	(10.5)	3.4	2.5	3781 N7+1.0784 Km (116)	断 面 φ 1~2 mmの嵌合・黒色	白 灰白色
201	30	西の庄東	4	第2層	淡色泥岩層	(12.9)	(3.0)	断 面 φ 0.3~2 mmの嵌合・石英・石英	断 面 φ 1~2 mmの嵌合・黒色	白 灰白色	
202	30	西の庄東	4	第2層	淡色泥岩層	(4.0)	N7/2 Km	断 面 φ 0.3~2 mmの嵌合・石英・石英	断 面 φ 1~2 mmの嵌合・石英・石英	白 灰白色	
203	30	西の庄東	4	第2層	淡色泥岩層	(8.0)	SFB5/1 SFB6/1 Km	断 面 φ 1 mmの嵌合・石英・石英	断 面 φ 1 mmの嵌合・石英・石英	白 灰白色	
204	30	西の庄東	4	第2層	淡色泥岩層	(5.2)	N4/	断 面 φ 0.3~3 mmの嵌合・石英・石英	断 面 φ 0.3~3 mmの嵌合・石英・石英	白 灰白色	
205	31	西の庄東	4	第2層	淡色泥岩層	(2.1)	SFT2/2 Km (116)	断 面 φ 0.5~3 mmの嵌合・石英・石英	断 面 φ 0.5~3 mmの嵌合・石英・石英	白 灰白色	
206	31	西の庄東	4	第2層	淡色泥岩層	(9.4)	Kf(13.0) N4/4.5	断 面 φ 1 mmの嵌合・石英・石英	断 面 φ 0.3~1 mmの嵌合・石英・石英	白 灰白色	
207	31	西の庄東	4	第2層	灰岩	(6.1)	Kf(6.3)	断 面 φ 2.0 mmの嵌合・石英・石英	断 面 φ 0.3~1 mmの嵌合・石英・石英	白 灰白色	
208	西の庄東	1B	第1面	9底ふら	赤燒付少頭付層	(6.8)	(2.8)	(0)P80/3 Km SFB1/7.1 Km Kf(4.0)	断 面 φ 1 mmの嵌合・石英・石英	白 灰白色	
209	西の庄東	1B	第1面	9底ふら	上部泥岩層	(9.4)	(5.4)	断 面 φ 0.5~1 mmの嵌合・石英・石英	断 面 φ 0.5~1 mmの嵌合・石英・石英	白 灰白色	
210	西の庄東	1B	第1面	9底ふら	上部泥岩層	(9.4)	1.2	断 面 φ 0.5~1 mmの嵌合・石英・石英	断 面 φ 0.5~1 mmの嵌合・石英・石英	白 灰白色	
211	西の庄東	1B	第1面	9底ふら	淡色泥岩層	(19.6)	(1.5)	N6/	断 面 φ 1 mmの嵌合・石英・石英	白 灰白色	
212	西の庄東	1B	第1面	9底ふら	上部泥岩層	(19.4)	(3.7)	SFB5/4 Km SFB7/2 Km	断 面 φ 0.5~1 mmの嵌合・石英・石英	白 灰白色	
213	西の庄東	3B	第1面	1頭地	淡色泥岩層	(3.1)	(1.0)	断 面 φ 1~2 mmの嵌合・石英・石英	断 面 φ 1~2 mmの嵌合・石英・石英	白 灰白色	
214	西の庄東	3B	第1面	1頭地	淡色泥岩層	(7.0)	(7.0)	断 面 φ 1~2 mmの嵌合・石英・石英	断 面 φ 1~2 mmの嵌合・石英・石英	白 灰白色	
215	西の庄東	4V*	第1面	21上杭	上部泥岩層	(9.0)	(4.2)	SFB6/1 Km	断 面 φ 1 mmの嵌合・石英・石英	白 灰白色	
216	西の庄東	9	第1面	21上杭	上部泥岩層	(9.0)	(4.0)	I/FR1/	断 面 φ 1 mmの嵌合・石英・石英	白 灰白色	

国	植物 番号	固有 名	通称名	種 子 区	育 苗 地	通 購 者	播 種 期	播 種 量	播 種 期	法 量(m)	口 徑(ミ リ) ×長 さ(ミ リ)	底 径(ミ リ)	高 さ(ミ リ)	色 調	植 栽 期	地 域	特 徴
217	西の生葉 9	第1面	21±5	土耕園圃	(9.4)	(5.0)	(1.2)	7.5YR8/2	K6D	密	底面はほとんど丸られず 人のくさりを握り方にむけ 手で	底 面 φ 0.3~1.0mmのチャート・ チャート	直	“T”的子葉 白色無粉土	京V新 (11世紀後半)		
218	西の生葉 9	第1面	21±5	土耕園圃	(10.0)	(6.0)	2.0	2.5YR8/2	K6D	密	底面はほとんど丸られず 人のくさりを握り方にむけ 手で	底 面 φ 0.3~1.0mmのチャート・ チャート	直	“T”的子葉 白色無粉土	京V新 (11世紀後半)		
219	西の生葉 9	第1面	21±5	土耕園圃	9.3	2.6	1.9	2.5YR8/1	K6D	密	φ 1mm程度の石子・チャー ト・赤色・さりげなく含む	底 面 φ 0.3~1.0mmのチャート・ チャート	直	“T”的子葉 白色無粉土	京V新 (11世紀後半)		
220	西の生葉 9	第1面	21±5	土耕園圃	(9.4)	(2.0)	1.8	2.5YR8/2	K6D	密	底面はほとんど丸られず 人のくさりを握り方にむけ 手で	底 面 φ 0.3~1.0mmのチャート・ チャート	直	“T”的子葉 白色無粉土	京V新 (11世紀後半)		
221	西の生葉 9	第1面	21±5	土耕園圃	(10.4)	(5.6)	1.3	2.5YR8/1	K6D	密	底面はほとんど丸られず 人のくさりを握り方にむけ 手で	底 面 φ 0.3~1.0mmのチャート・ チャート	直	“T”的子葉 白色無粉土	京V新 (11世紀後半)		
222	44 西の生葉 9	第1面	21±5	土耕園圃	9.7	2.2	1.7	2.5YR8/2	K6D	密	φ 0.5mm以下は下の岩石を磨か にむけ 細目	底 面 φ 0.5mm以下は下の岩石を磨か にむけ 細目	直	口耕園圃の外反筋、口耕園圃外筋に 底面が付いていて中筋が埋め 内外面ともに無理矢理付けていた 底面を受いたのが部分的に 底面が外側に切り込みで取付た状態 京V新 (11世紀後半)	京V新 (11世紀後半)		
223	44 西の生葉 9	第1面	21±5	土耕園圃	8.3	3.4	1.2	10YR8/4	K6D	密	φ 1mm程度の石子・チャー ト・赤色・さりげなく含む	底 面 φ 0.3~1.0mmのチャート・ チャート	直	“T”的子葉 白色無粉土	京V新 (11世紀後半)		
73	44* 西の生葉 9	第1面	21±5	土耕園圃	(9.0)	(2.0)	1.4	2.5YR8/1	K6D	密	φ 0.5mm以下は下の色ぬき砂 礫を握り方にむけ 細目	底 面 φ 0.3~1.0mmのチャート・ チャート	直	口耕園圃の外反筋、口耕園圃外筋に 底面が付いていて中筋が埋め 内外面ともに無理矢理付けていた 底面を受いたのが部分的に 底面が外側に切り込みで取付た状態 京V新 (11世紀後半)	京V新 (11世紀後半)		
224	西の生葉 9	第1面	21±5	土耕園圃	9.3	5.0	1.9	2.5YR8/1	K6D	密	φ 1mm程度の石子・チャート・ 赤色・さりげなく含む	底 面 φ 0.3~1.0mmのチャート・ チャート	直	口耕園圃の外反筋、口耕園圃外筋に 底面が付いていて中筋が埋め 内外面ともに無理矢理付けていた 底面を受いたのが部分的に 底面が外側に切り込みで取付た状態 京V新 (11世紀後半)	京V新 (11世紀後半)		
225	西の生葉 9	第1面	21±5	土耕園圃	(9.8)	(3.8)	(1.5)	5YR8/3	K6D	密	φ 1mm程度の石子を僅かに含む 赤色・さりげなく含む	底 面 φ 0.3~1.0mmのチャート・ チャート	直	口耕園圃の外反筋、口耕園圃外筋に 底面が付いていて中筋が埋め 内外面ともに無理矢理付けていた 底面を受いたのが部分的に 底面が外側に切り込みで取付た状態 京V新 (11世紀後半)	京V新 (11世紀後半)		
226	西の生葉 9	第1面	21±5	土耕園圃	(9.8)	(3.8)	(1.5)	10YR7/3	K6D	密	φ 1mm程度の石子を僅かに含む 赤色・さりげなく含む	底 面 φ 0.3~1.0mmのチャート・ チャート	直	口耕園圃の外反筋、口耕園圃外筋に 底面が付いていて中筋が埋め 内外面ともに無理矢理付けていた 底面を受いたのが部分的に 底面が外側に切り込みで取付た状態 京V新 (11世紀後半)	京V新 (11世紀後半)		
227	西の生葉 9	第1面	21±5	土耕園圃	(9.0)	(6.0)	0.8	10YR7/3	K6D	密	φ 0.3~1.0mmのチャートを 僅かに含む 細目	底 面 φ 0.3~1.0mmのチャート・ チャート	直	口耕園圃の外反筋、口耕園圃外筋に 底面が付いていて中筋が埋め 内外面ともに無理矢理付けていた 底面を受いたのが部分的に 底面が外側に切り込みで取付た状態 京V新 (11世紀後半)	京V新 (11世紀後半)		
228	44 西の生葉 9	第1面	21±5	土耕園圃	8.8	4.4	1.8	3YR8/1	K6D	密	φ 1mm程度の長石・チャート ・赤色・さりげなく含む	底 面 φ 0.3~1.0mmのチャート・ チャート	直	口耕園圃の外反筋、口耕園圃外筋に 底面が付いていて中筋が埋め 内外面ともに無理矢理付けていた 底面を受いたのが部分的に 底面が外側に切り込みで取付た状態 京V新 (11世紀後半)	京V新 (11世紀後半)		
229	西の生葉 9	第1面	21±5	土耕園圃	8.8	1.3	2.5YR8/2	KGD	密	φ 1mm程度の赤色・さりげなく含 む	底 面 φ 0.3~1.0mmのチャート・ チャート	直	口耕園圃の外反筋、口耕園圃外筋に 底面が付いていて中筋が埋め 内外面ともに無理矢理付けていた 底面を受いたのが部分的に 底面が外側に切り込みで取付た状態 京V新 (11世紀後半)	京V新 (11世紀後半)			
230	西の生葉 9	第1面	21±5	土耕園圃	(8.5)	(5.6)	0.8	10YR8/2	K6D	密	底面はほとんど丸られず 人のくさりを握り方にむけ 手で	底 面 φ 0.3~1.0mmのチャート・ チャート	直	白色無粉土	京V新 (11世紀後半)		

国 番 号	地図 番号	地名 所在 区	調 査 者	遺跡名	高 度	口径×長 さ(直径) 幅(正面幅)	法面(m)	色調	断土		地質		
									前面	背面			
231	44v 9	西の庄東	第1面	21.1m	上耕原	(9.1) (4.4)	1.5	2.578/1 白白～NOYRZ/6 黒 前面削	断 地下深度のチャートを重 ねて、挖削した上部	直	白色風化土 えんじ色、褐色の風化土		
232	44v 9	西の庄東	第1面	21.1m	上耕原	最もしくは斜 面	15.2	3.9	2.578/1 白白	断 地下深度のチャートを重 ねて、挖削した上部	直	白色風化土 えんじ色、褐色の風化土	
233	44v 9	西の庄東	第1面	21.1m	上耕原	最もしくは斜 面	15.2	4.0	SYT/2 黒 SYR/1 白	断 地下深度のチャートを重 ねて、挖削した上部	直	白色風化土 えんじ色、褐色の風化土	
234	45	西の庄東	44v 9	第1面	21.1m	上耕原	最もしくは斜 面	15.0	4.0	SYT/2 黒 SYR/1 白	断 地下深度のチャートを重 ねて、挖削した上部	直	白色風化土 えんじ色、褐色の風化土
235	44v 9	西の庄東	第1面	21.1m	上耕原	最もしくは斜 面	(14.8)	3.6	2.397/1～8/2 白 SYR/1～8/2 白	断 地下深度のチャートを重 ねて、挖削した上部	直	白色風化土 えんじ色、褐色の風化土	
73	236	西の庄東	44v 9	第1面	21.1m	上耕原	(14.6)	3.3	2.397/2 白 SYR/1 白	断 地下深度のチャートを重 ねて、挖削した上部	直	白色風化土 えんじ色、褐色の風化土	
237	44v 9	西の庄東	第1面	21.1m	上耕原	最もしくは斜 面	14.7	3.7	SYT/2 黒 SYR/1 白	断 地下深度のチャートを重 ねて、挖削した上部	直	白色風化土 えんじ色、褐色の風化土	
238	44v 9	西の庄東	第1面	21.1m	上耕原	(13.3)	(2.30)	7.579/1 黒～NOYRZ/2 N2/ 黒～SYR/4 白	断 地下深度のチャートを重 ねて、挖削した上部	直	白色風化土 えんじ色、褐色の風化土		
239	44v 9	西の庄東	第1面	21.1m	上耕原	最もしくは斜 面	(15.4)	(3.2)	N2/ 黒 N2/ 黒	断 地下深度のチャートを重 ねて、挖削した上部	直	白色風化土 えんじ色、褐色の風化土	
240	44v 9	西の庄東	第1面	21.1m	上耕原	最もしくは斜 面	15.6	(3.3)	SYR/2 黒 SYR/1 白	断 地下深度のチャートを重 ねて、挖削した上部	直	白色風化土 えんじ色、褐色の風化土	
241	44v 9	西の庄東	第1面	21.1m	上耕原	最もしくは斜 面	(15.4)	3.3	2.378/1 白 SYR/1 白	断 地下深度のチャートを重 ねて、挖削した上部	直	白色風化土 えんじ色、褐色の風化土	

国 番 号	物 名	通 番 号	調 査 区 域	面 積 ha	通 締 者	地 形	標 高	口 径 m	長 さ m	底 径 m	深 さ m	法 面(m)	色 調	断 面	地 質	特 徴
242	西の庄東	4N-9	第1面	21.15	上地路 最もしくは井	15.9		3.3	2.378/2 白白			面 φ 0.5 mのほり・赤くさ り波を含む。柱	白色無筋 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋
243	西の庄東	4N-9	第1面	21.15	上地路 最もしくは井	(15.6)		3.5	1.078/2 にこだら 1.078/4 黄白			底 調査付ほとんどこれら 底 調査付	底 調査付ほとんどこれら 底 調査付	底 調査付ほとんどこれら 底 調査付	底 調査付ほとんどこれら 底 調査付	底 調査付ほとんどこれら 底 調査付
244	45 西の庄東	4N-9	第1面	21.15	上地路 最もしくは井	15.0		3.6	2.378/1 白白			面 φ 1~2 m程度の良石・チ ートを含む 相	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋
245	44 西の庄東	4N-9	第1面	21.15	上地路 最もしくは井	15.6		3.7	2.378/1 1.06/1~2.378/4 黒灰			面 φ 1~2 m程度の良石・チ ートを含む 相	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋
73	246 45 西の庄東	4N-9	第1面	21.15	上地路 最もしくは井	15.8		3.3	2.378/1 黄白			面 φ 1~2 m程度の良石・赤く さり波を含む。柱	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋
247	西の庄東	4N-9	第1面	21.15	上地路 最もしくは井	(15.9)		(2.3)	2.378/2 白白			面 φ 1~2 m程度の良石・チ ート・赤くさり波を含む。柱	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋
248	西の庄東	4N-9	第1面	21.15	上地路 最もしくは井	15.0		3.1	2.377/1 黄白 2.376/1 黄灰			面 φ 1~2 m程度の良石・チ ート・赤くさり波を含む。柱	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋
249	西の庄東	4N-9	第1面	21.15	上地路 最もしくは井	(16.0)		(2.5)	2.377/1 黄白~2.576/1 黒灰			面 φ 1~2 m程度の良石・チ ートを含む。柱	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋
250	西の庄東	4N-9	第1面	21.15	上地路 最もしくは井	(16.1)		3.2	N3/ 周長~575/1 黄 2.376/1 黄灰~2.573/2 黒			面 φ 1~2 m程度の良石・チ ートを含む。柱	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋	白色無筋上 白色無筋・頂端がカーブ 白色無筋

国 番 号	地圖 番号	地圖 名	地 位 区	遺跡名	遺跡名	高 橋	口径×長 さ(井筒)	法面(m)	色調		地質	特徴等
									内面	外面		
251	44*	西の庄東	9	第1面	21上坑	上油路 最もしくは井	(1.5)	(3.5)	■ φ 1 磨度の長石・チャート を含む	白	白色砂岩土 白い層理が顕著に認められる 部分で外側へ向かって傾斜して おり、内部は均質な砂岩土 である。(IV-VI 11世紀後～12世紀後)	白
252	44*	西の庄東	9	第1面	21上坑	上油路 最もしくは井	(1.4)	3.5	■ φ 1 磨度の長石・チャート を含む	白	白色砂岩土 白い層理が顕著に認められる 部分で外側へ向かって傾斜して おり、内部は均質な砂岩土 である。(IV-VI 11世紀後～12世紀後)	白
253	44*	西の庄東	9	第1面	21上坑	上油路 最もしくは井	(1.25)	(3.3)	■ φ 1 磨度の長石・チャート を含む	白	白色砂岩土 白い層理が顕著に認められる 部分で外側へ向かって傾斜して おり、内部は均質な砂岩土 である。(IV-VI 11世紀後～12世紀後)	白
254	44*	西の庄東	9	第1面	21上坑	上油路 最もしくは井	(1.20)	3.0	■ φ 1 磨度の長石・チャート を含む	白	白色砂岩土 白い層理が顕著に認められる 部分で外側へ向かって傾斜して おり、内部は均質な砂岩土 である。(IV-VI 11世紀後～12世紀後)	白
73	44*	西の庄東	9	第1面	21上坑	回転台 上油路 最もしくは井	1.4.2	3.5	■ φ 1 磨度の長石・石英 を含む	白	白色砂岩土 白い層理が顕著に認められる 部分で外側へ向かって傾斜して おり、内部は均質な砂岩土 である。(IV-VI 11世紀後～12世紀後)	白
256	44*	西の庄東	9	第1面	21上坑	回転台 上油路	(1.0)	(8.6)	■ φ 1 磨度の長石・石英 を含む	白	白色砂岩土 白い層理が顕著に認められる 部分で外側へ向かって傾斜して おり、内部は均質な砂岩土 である。(IV-VI 11世紀後～12世紀後)	白
257	45	西の庄東	9	第1面	21上坑	回転台 上油路	(9.0)	(6.6)	■ φ 1 磨度の長石・石英 を含む	白	白色砂岩土 白い層理が顕著に認められる 部分で外側へ向かって傾斜して おり、内部は均質な砂岩土 である。(IV-VI 11世紀後～12世紀後)	白
258	45	西の庄東	9	第1面	21上坑	回転台 上油路	(8.8)	(5.6)	■ φ 0.5 磨度の長石・チャ ート・珪藻を含む	白	白色砂岩土 白い層理が顕著に認められる 部分で外側へ向かって傾斜して おり、内部は均質な砂岩土 である。(IV-VI 11世紀後～12世紀後)	白
259	44*	西の庄東	9	第1面	21上坑	回転台 上油路		3.2	■ 極小の白色砂粒(長石か) を含む	白	白色砂岩土 白い層理が顕著に認められる 部分で外側へ向かって傾斜して おり、内部は均質な砂岩土 である。(IV-VI 11世紀後～12世紀後)	白
260	44*	西の庄東	9	第1面	21上坑	黒色上部内油路	(7.8)	(1.4)	■ φ 1 磨度の長石・チャ ート・矽藻を多く含む	白	白色砂岩土 白い層理が顕著に認められる 部分で外側へ向かって傾斜して おり、内部は均質な砂岩土 である。(IV-VI 11世紀後～12世紀後)	白
74	44*	西の庄東	9	第1面	21上坑	黒色上部内油路		(6.5)	■ φ 1 磨度のチャート・ホ ワイト・矽藻を多く含む	白	白色砂岩土 白い層理が顕著に認められる 部分で外側へ向かって傾斜して おり、内部は均質な砂岩土 である。(IV-VI 11世紀後～12世紀後)	白
262	44*	西の庄東	9	第1面	21上坑	黑色上部内油路		(3.0)	■ 藍鐵鉄鉱はほとんど認められ ない	白	白色砂岩土 白い層理が顕著に認められる 部分で外側へ向かって傾斜して おり、内部は均質な砂岩土 である。(IV-VI 11世紀後～12世紀後)	白

国	植物 番号	種子 番号	通称名	種子・製品 区分	通販者	播種期	播種量	播種	法面(m)	法面(㎝)	色調	断面	地質	特徴等
	263	西の庄東	44*	第1面	21上丸	黒色土壌黒頭原		(1.8)	N3/ 開闢	100/ 開闢	褐色	図 φ 1 mの長石を撒かに合 せし断面	直	直行は長い扁平な逆台形 直行は直角が1本ある
	264	西の庄東	44*	第1面	21上丸	黒色土壌黒頭原	(1.6)	(4.7)	N3/ 開闢	100/ 開闢	褐色	直	直行は直角が1本ある 直行は内側ががらくち上がり、口縁部は直角間に斜め 方に立ち上がる。外側なども内側の頭部がへたりミガキ 直V中 (1) 世紀前後 - 4世紀	
	265	西の庄東	44*	第1面	21上丸	瓦頭原	(1.6)	(3.0)	N3/ 開闢	100/ 開闢	褐色	直	直行は直角が1本ある 直行は内側ががらくち上がり、頭部がグレーで、他の頭部はみら れない	
	266	西の庄東	44*	第1面	21上丸	瓦頭原	(1.3)	(4.2)	N3/ 開闢	100/ 開闢	褐色	直	直行は直角が1本ある 直行は内側ががらくち上がり、頭部がグレーで、他の頭部はみら れない	
	267	44	西の庄東	44*	第1面	21上丸	瓦頭原	(1.4)	(5.0)	N3/ 開闢	100/ 開闢	褐色	直	直行は直角が1本ある 直行は内側ががらくち上がり、頭部がグレーで、他の頭部はみら れない
	268	西の庄東	44*	第1面	21上丸	瓦頭原	(1.4)	(4.5)	N3/ 開闢	100/ 開闢	褐色	直	直行は直角が1本ある 直行は内側ががらくち上がり、頭部がグレーで、他の頭部はみら れない	
74	269	西の庄東	44*	第1面	21上丸	瓦頭原	(1.5)	(3.7)	N4/ 白	100/ 白	白色	直	直行は直角が1本ある 直行は内側ががらくち上がり、頭部がグレーで、他の頭部はみら れない	
	270	西の庄東	44*	第1面	21上丸	瓦頭原	(1.8)	(5.0)	N3/ 開闢	235Y7/1 白	白色	直	直行は直角が1本ある 直行は内側ががらくち上がり、頭部がグレーで、他の頭部はみら れない	
	271	西の庄東	44*	第1面	21上丸	瓦頭原	(1.2)	(4.5)	N3/ 開闢	100/ 白	白色	直	直行は直角が1本ある 直行は内側ががらくち上がり、頭部がグレーで、他の頭部はみら れない	
	272	西の庄東	44*	第1面	21上丸	瓦頭原	(1.5)	(4.2)	N4/ 白	100/ 白	白色	直	直行は直角が1本ある 直行は内側ががらくち上がり、頭部がグレーで、他の頭部はみら れない	
	273	西の庄東	44*	第1面	21上丸	瓦頭原	(1.6)	(4.7)	N4/ 白	100/ 白	白色	直	直行は直角が1本ある 直行は内側ががらくち上がり、頭部がグレーで、他の頭部はみら れない	

国 番 号	植物 名	固有 番号	調査 地・別立 区	調 査 日	遺傳名	高 橋	口径×長 径(正)幅 (mm)	法 則(m)	色調		断土	地質		
									口 徑	外 面 内 面				
274	西の庄東	44v 9	第1面	21上杭	瓦割輪	(16.2)	(3.6)	N3/ 暗灰	密 密	深褐色はとんどときます 且 且	体部は内面側ながら立ち上がり、口縁部はやや灰黒色。 外側は分離した、テラコッタ色の柱状で、表面にツマギ チ・骨格なども見られる。(1)既記削除。(2)既記削除。	且	体部は内面側ながら立ち上がり、口縁部はやや灰黒色。 外側は分離した、テラコッタ色の柱状で、表面にツマギ チ・骨格なども見られる。(1)既記削除。(2)既記削除。	
275	西の庄東	44v 9	第1面	21上杭	瓦割輪	(14.2)	(3.7)	N5/ 灰	密 極小の白色砂粒(辰石か) を摺かれてむし 無痕	且 且	体部は直線的な立ち上がり、外側は分割ヘタがどうか不明。 内面側は細かな砂粒のラメ状の跡がある。表面にツマギ チ・骨格・内面側はとくに。(1)既記削除。(2)既記削除。	且	体部は直線的な立ち上がり、外側は分割ヘタがどうか不明。 内面側は細かな砂粒のラメ状の跡がある。表面にツマギ チ・骨格・内面側はとくに。(1)既記削除。(2)既記削除。	
276	44	西の庄東	44v 9	第1面	21上杭	瓦割輪	(14.8)	(5.5)	N3/ 灰 N4/ 灰	密 密	深褐色はとんどときます 且 且	体部は内面側ながら立ち上がり、外側は分離した、テラコッタ色の柱状で、表面にツマギ チ・骨格なども見られる。(1)既記削除。(2)既記削除。	且	体部は内面側ながら立ち上がり、外側は分離した、テラコッタ色の柱状で、表面にツマギ チ・骨格なども見られる。(1)既記削除。(2)既記削除。
277	44	西の庄東	44v 9	第1面	21上杭	瓦割輪	(15.9)	5.3	N3/ 暗灰 N4/ 灰	密 密	深褐色はとんどときます 且 且	体部は内面側ながら立ち上がり、外側は分離した、テラコッタ色の柱状で、表面にツマギ チ・骨格なども見られる。(1)既記削除。(2)既記削除。	且	体部は内面側ながら立ち上がり、外側は分離した、テラコッタ色の柱状で、表面にツマギ チ・骨格なども見られる。(1)既記削除。(2)既記削除。
278	西の庄東	44v 9	第1面	21上杭	瓦割輪	(15.9)	5.7	N3/ 暗灰 N4/ 灰	密 密	深褐色はとんどときます 且 且	体部は内面側ながら立ち上がり、外側は分離した、テラコッタ色の柱状で、表面にツマギ チ・骨格なども見られる。(1)既記削除。(2)既記削除。	且	体部は内面側ながら立ち上がり、外側は分離した、テラコッタ色の柱状で、表面にツマギ チ・骨格なども見られる。(1)既記削除。(2)既記削除。	
74														
279	西の庄東	44v 9	第1面	21上杭	瓦割輪	(14.8)	(3.3)	N3/ 暗灰 N4/ 灰	密 密	深褐色はとんどときます 且 且	体部は内面側ながら立ち上がり、外側は分離した、テラコッタ色の柱状で、表面にツマギ チ・骨格なども見られる。(1)既記削除。(2)既記削除。	且	体部は内面側ながら立ち上がり、外側は分離した、テラコッタ色の柱状で、表面にツマギ チ・骨格なども見られる。(1)既記削除。(2)既記削除。	
280	西の庄東	44v 9	第1面	21上杭	瓦割輪	(14.8)	(4.3)	N3/ 暗灰 N4/ 灰	密 φ 0.5 mm程度の黒色粒を含む 且 且	深褐色はとんどときます 且 且	体部は内面側ながら立ち上がり、外側は分離した、テラコッタ色の柱状で、表面にツマギ チ・骨格なども見られる。(1)既記削除。(2)既記削除。	且	体部は内面側ながら立ち上がり、外側は分離した、テラコッタ色の柱状で、表面にツマギ チ・骨格なども見られる。(1)既記削除。(2)既記削除。	
281	西の庄東	44v 9	第1面	21上杭	瓦割輪	(15.6)	(3.2)	N3/ 暗灰 N4/ 灰	密 密	深褐色はとんどときます 且 且	体部は内面側ながら立ち上がり、外側は分離した、テラコッタ色の柱状で、表面にツマギ チ・骨格なども見られる。(1)既記削除。(2)既記削除。	且	体部は内面側ながら立ち上がり、外側は分離した、テラコッタ色の柱状で、表面にツマギ チ・骨格なども見られる。(1)既記削除。(2)既記削除。	
282	西の庄東	44v 9	第1面	21上杭	瓦割輪	(15.6)	(4.8)	N7/2 N6/1-N8/1 N5/2 N5/1	密 密	深褐色はとんどときます 且 且	体部は内面側ながら立ち上がり、外側は分離した、テラコッタ色の柱状で、表面にツマギ チ・骨格なども見られる。(1)既記削除。(2)既記削除。	且	体部は内面側ながら立ち上がり、外側は分離した、テラコッタ色の柱状で、表面にツマギ チ・骨格なども見られる。(1)既記削除。(2)既記削除。	

国 番 号	地 名	通 名	調 査 区 分	調 査 年 度	通 査 者	測 定 器	測 定 方 向	法 面(m)	法 面	色 調	断 面		地 成	特 徴
											口 径 長	底 径 幅	高 度	内 面
283 44	西の庄東	44*	第1面	21上杭	人形鏡	測量	直	(6.8)	(2.7)	K3/ K2/ 黒	断 面	底 部付近はほとんどままで	やや 高い 高い	高行山奥面にむかへる風景で、ターポン形の断面が連続してみ られる。縦断面は少しだけ下がり、谷筋に沿う。内面は2・3段の凹凸があり る。
284	西の庄東	44*	第1面	21上杭	瓦26枚	測量	直	(5.2)	(1.0)	N4/ 灰	断 面	底 部付近はほとんどままで	や い	高行山奥面にむかへる風景で、谷筋に沿う。内面は2・3段の凹凸があり る。
285	西の庄東	44*	第1面	21上杭	油壺形耳皿	測量	直	(1.4)	(1.4)	N4/ 灰	断 面	底 部付近はほとんどままで	自	高行山奥面にむかへる風景で、谷筋に沿う。内面は2・3段の凹凸があり る。
286	西の庄東	44*	第1面	21上杭	董型耳杯	測量	直	(1.7)	(1.7)	N5/ 灰	断 面	φ 1.2mm程度の灰白色・ナ ード・光沢有り	自	高行山奥面にむかへる風景で、谷筋に沿う。内面は2・3段の凹凸があり る。
287	西の庄東	44*	第1面	21上杭	銅器	直	(9.8)	(8.0)	1.8	N6/ 灰	断 面	φ 1.1mm程度の灰白色・黒色	自	高行山奥面はヘアガリ等が残る。内面は2・3段の凹凸があり る。
74	西の庄東	44*	第1面	21上杭	里路器	直	(9.8)	(8.0)	(2.2)	23Y7/2 反映	断 面	φ 1.1mm程度の灰白色・小 さくり巻き端がむら	や い	高行山奥面は静止状態が現る。内面は2・3段の凹凸があり る。
288	西の庄東	44*	第1面	21上杭	里路器	直	(8.7)	(2.8)	23Y6/2 反映	断 面	φ 1.1mm程度の灰白色・ナ ード・光沢有り	自	高行山奥面は2・3段の凹凸があり る。	
290 46	西の庄東	44*	第1面	21上杭	瓦26枚	測量	直	(2.0)	3Y7/1 黑(1)	N6/ 白	断 面	底 部付近はほとんどままで	自	内面に火炎跡が残る。
291	西の庄東	44*	第1面	21上杭	瓦26枚	測量	直	(1.9)	3Y5/2 黒(1)リープ 3Y7/1 黑(1)	N6/ 白	断 面	φ 0.5mm程度の灰白色・ナ ード・光沢有り	自	内面に火炎跡が残る。
292 46	西の庄東	44*	第1面	21上杭	白漆瓶	測量	直	(1.5)	3Y7/1 黑(1)	N6/ 白	断 面	底 部付近はほとんどままで	自	口縫部が大きい。内面は2・3段の凹凸がありたが て、白漆部は2・3段の凹凸がある。
293 46	西の庄東	44*	第1面	21上杭	白漆瓶	測量	直	(1.25)	(6.0)	N8/ 灰(1) 白(1) 漆(1)	断 面	底 部付近はほとんどままで	自	口縫部が大きい。内面は2・3段の凹凸がありたが て、白漆部は2・3段の凹凸がある。
294	西の庄東	44*	第1面	21上杭	土師器	測量	直	(27.8)	(11.9)	23Y6/1 露灰 23Y7/1 露白	断 面	やや粗 い	自	口縫部は大きい。外縫 長縫部は少
295 46	西の庄東	44*	第1面	21上杭	土師器	測量	直	(29.4)	(20.0)	23Y7/1 黑(1) 23Y8/1 黑(1) 漆(1)	断 面	φ 1.~3mm程度の長石 ・石英・チャートを多く含む	自	口縫部が大きい。外縫 長縫部は少
296	西の庄東	44*	第1面	21上杭	土师器	測量	直	(28.1)	(22.3)	3Y7/1 黑(1)	断 面	φ 0.5~2mm程度の長石 ・石英・チャートを多く含む	自	口縫部が大きい。外縫 長縫部は少
75	西の庄東	44*	第1面	21上杭	土師器	測量	直	(27.8)	(6.3)	10YR2/6 黑(1)	断 面	φ 0.1~2mm程度の長石 ・石英・チャートを多く含む	自	口縫部は2・3段の凹凸がありたが て、白漆部は2・3段の凹凸がある。
298	西の庄東	44*	第1面	21上杭	土師器	測量	直	(31.6)	(8.8)	10YR2/2 黑(1) 23Y7/2 黑(1)	断 面	φ 0.1~2mm程度の長石 ・石英・チャートを多く含む	自	口縫部は2・3段の凹凸がありたが て、白漆部は2・3段の凹凸がある。
299	西の庄東	44*	第1面	21上杭	土师器	測量	直	(18.8)	(4.7)	10YR2/2 黑(1)	断 面	φ 0.1mm程度の小粒化 した粘土	自	口縫部は2・3段の凹凸がありたが て、白漆部は2・3段の凹凸がある。
300 46	西の庄東	44*	第1面	21上杭	土师器	測量	直	(3.2)	0.9	N4/ 灰	断 面	φ 0.1~1mm程度の小粒化 した粘土	自	平面は2・3段の凹凸がありたが て、白漆部は2・3段の凹凸がある。

国 番 号	通 用 名	通 称 名	調 査 区	地 番・別 区	遺 跡 名	高 度	口 径×長 さ	法 鉄(cm)	周 囲×幅 (cm)	周 囲×厚 (cm)	色 調	断 面		状 況	
												内 面	外 面	下 面	
301 46	西の庄東	4A*	第1面	21上段	土壇	3.4	0.8	2.536/2	長筒	直	深褐色はどんどみられせず	自	平面は外側形状を呈する。長径 0.2 cm・厚径 0.1 cm	斜面等	
302 46	西の庄東	4A*	第1面	21上段	油刷塗	(9.3)	(2.6)				本物の外側面とともに黒褐色が並ぶ。木軸はナットを施す				
75 303	西の庄東	4A*	第1面	21上段	油刷塗	19.2	(7.0)	0.9			外側の外側面ともには黒褐色が並ぶ。木軸はナットを施す				
304 46	西の庄東	4A*	第1面	21上段	粘石	1.9	3.6	1.3	3/771/7-72	純白	円形の輪郭もしくは輪郭のどこよりも多く、側面に水平丸みが現れる。裏面は表面より薄く、切削部の跡みがみられる。裏面としての削り出しがある。底面がある。底面と側面の間に凹みがある。				
205 47	西の庄東	4A*	第1面	22上段	土壇高塗	10.0	3.0	1.6	2.57/2	純白	直面の左側面の白色部は白い。右側面は黒褐色が並んでおり少々、円形の輪郭も現れる。側面全体は黒褐色である。底面は側面に凹みがある。底面と側面の間に凹みがある。				
206 47	西の庄東	4A*	第1面	22上段	土壇高塗	9.6	2.2	1.7	2.57/2	純白	直面の左側面の白色部は白い。右側面は黒褐色が並んでおり少々、底面と側面の間に凹みがある。				
307 47	西の庄東	4A*	第1面	22上段	油刷塗 埴もじこみ付	(15.3)		3.5	3/771	純白	直面の左側面の白色部は白い。右側面は黒褐色が並んでおり少々、底面と側面の間に凹みがある。				
76 308 47	西の庄東	4A*	第1面	22上段	油刷塗 埴もじこみ付	15.4	3.2	2.536/2	純白~2.57/4	直面	直面の左側面は白色部は白い。右側面は黒褐色が並んでおり少々、底面と側面の間に凹みがある。				
309 47	西の庄東	4A*	第1面	22上段	土壇高塗	15.7	6.5	2.57/2	7-72	純白	直面の左側面は白色部は白い。右側面は黒褐色が並んでおり少々、底面と側面の間に凹みがある。				
310 47	西の庄東	4A*	第1面	22上段	黒色土壇高塗	(1.56)	(3.5)	N3/	油刷	直面	直面の左側面は白色部は白い。右側面は黒褐色が並んでおり少々、底面と側面の間に凹みがある。				
311 47	西の庄東	4A*	第1面	22上段	油刷塗油刷合			1.0	3/771	純白	直面の左側面は白色部は白い。右側面は黒褐色が並んでおり少々、底面と側面の間に凹みがある。				
312 47	西の庄東	4A*	第1面	22上段	油	(1.8)	(3.1)	0.9			直面の左側面は白色部は白い。右側面は黒褐色が並んでおり少々、底面と側面の間に凹みがある。				
313 47	西の庄東	4A*	第1面	22上段	油物	(30.0)	(20.5)				直面の左側面は白色部は白い。右側面は黒褐色が並んでおり少々、底面と側面の間に凹みがある。				
77 314	西の庄東	4B	第1面	25小字	土壇高塗	(14.3)	(1.5)	7.50R7/6	相	直面の左側面は白色部は白い。右側面は黒褐色が並んでおり少々、底面と側面の間に凹みがある。					

国 番 号	植物 名	通称名	調 査 地 区	標 本 番 号	通 査 者	標 本 数	法 面 (m)	法 面 形 状	法 面 色 調	断 面 形 状	断 面 色 調	地 質	特 徴
口径・長さ	底径・幅さ	高さ	幅										
315	西の杜葉	48	第1面	25×9~6	通査者	標本	(23.8)	上部断面 (14.2)	白色系 白色	1 mmの 長石・チ ート・斜 方輝石	白色系 白色	白色系 白色	白色系 白色
316	西の杜葉	48	第1面	30×10	上部断面 (14.2)	白色系 白色	(1.4)	10YR7/2 に近い傾斜	白色系 白色	1 mmの 長石・チ ート・斜 方輝石	白色系 白色	白色系 白色	白色系 白色
77	西の杜葉	48	第1面	33×9~7	上部断面 (13.7)	白色系 白色	(1.7)	23YR8/2 に近い傾斜	白色系 白色	0.5 mm前後の 長石・チ ート・斜 方輝石	白色系 白色	白色系 白色	白色系 白色
318	西の杜葉	48	第1面	32×9~7	上部断面 (16.0)	白色系 白色	(1.2)	N6/ N7/2	白色系 白色	長石はほとんど 認められず 長石は多く 認められ る	白色系 白色	白色系 白色	白色系 白色
319	西の杜葉	54	第1面	4 深	上部断面 (7.4)	白色系 白色	1.4	5YR8/4 に近い傾斜	白色系 白色	長石はほとんど 認められず 長石は多く 認められ る	白色系 白色	白色系 白色	白色系 白色
320	西の杜葉	54	第1面	4 深	上部断面 (8.2)	白色系 白色	1.4	23YR8/2 に近い傾 斜	白色系 白色	0.2~0.5 mm以 上のチート ・斜方輝石	白色系 白色	白色系 白色	白色系 白色
321	西の杜葉	54	第1面	4 深	上部断面 (8.3)	白色系 白色	1.4	23YR8/2 に近い傾 斜	白色系 白色	0.1~1 mm以 上の長石を含む 斜方輝石	白色系 白色	白色系 白色	白色系 白色
322	西の杜葉	58	第1面	4 深	上部断面 (13.1)	白色系 白色	(3.1)	N3/ N4/2	白色系 白色	斜方輝石を含む 長石を含む	白色系 白色	白色系 白色	白色系 白色
323	西の杜葉	58	第1面	4 深	上部断面 (15.2)	白色系 白色	(4.0)	N3/ N4/2	白色系 白色	0.5 mm前後の 長石・チ ート・斜 方輝石	白色系 白色	白色系 白色	白色系 白色
324	西の杜葉	58	第1面	4 深	上部断面 (13.1)	白色系 白色	(3.1)	23YR5/2 に近い傾 斜	白色系 白色	0.5 mm前後の 長石・チ ート・斜 方輝石	白色系 白色	白色系 白色	白色系 白色
325	西の杜葉	58	第1面	4 深	上部断面 (15.2)	白色系 白色	(3.2)	N5/ N6/2	白色系 白色	0.5 mm前 後の長石・チ ート	白色系 白色	白色系 白色	白色系 白色
326	西の杜葉	58	第1面	4 深	上部断面 (24.8)	白色系 白色	(1.4)	7.5YR2/1 に近い傾 斜	白色系 白色	やや細い、0.1 mmの 長石・長石・ 斜方輝石を含む	白色系 白色	白色系 白色	白色系 白色
327	西の杜葉	58	第1面	4 深	上部断面 (25.6)	白色系 白色	(6.6)	2.5YR7/1 に近い傾 斜	白色系 白色	0.1~1 mmの 長石・長石・ 斜方輝石を含む	白色系 白色	白色系 白色	白色系 白色
328	西の杜葉	58	第1面	4 深	上部断面 (14.8)	白色系 白色	(1.3)	10YR8/1 に近い傾 斜	白色系 白色	0.1~1 mmの 長石・長石・ 斜方輝石	白色系 白色	白色系 白色	白色系 白色
329	西の杜葉	58	第1面	18±10	上部断面 (6.9)	白色系 白色	(1.3)	7.5YR7/4 に近い傾 斜	白色系 白色	長石はほとんど 認められず 長石は多く 認められ る	白色系 白色	白色系 白色	白色系 白色
330	西の杜葉	58	第1面	5 程度	上部断面 (3.5)	白色系 白色	(3.5)	23YR8/4 に近い傾 斜	白色系 白色	0.3 mmの 長石・チ ート	白色系 白色	白色系 白色	白色系 白色

国 名 番 号	通 用 名	通 称 名	調 査 地 区	油 ・利 用 部 位	遺 跡 名	高 度	口径・長 さ	法 剖 面 (cm)	色 調	断 面		地 質
										外 縁 部	内 縁 部	
331 48	西の庄東	5A	第1面	15±板	黒色上部内部層		(15.5)	(1.4)	■SY711 灰白	■ 0.5mm程度の斑点・石斑 ・褐色・さざれ感を帶びたむら	直	内部の岩盤分は薄く、内面は込みみに斜格子状の暗文。内面は黄褐色で、外縁は青褐色で、表面は細かく剥離する。
81 332 48	西の庄東	5B	第1面	5板のみ	復元断面B	(9.8)	6.6	4.2	NW/ 灰白	■ 1mm程度の斑点・石斑 ・褐色が混じる	直	外縁から断面及び内部に於ける断面は均等で、直く、断面進行形を呈し、外輪部は入る形
333 48	西の庄東	5A	第1面	15±板	断面地質か	(18.2)		(3.0)	SY514 灰	■ 0.5~1mm程度の斑点・石斑 ・チャート・黑色を含む	直	断面は大きくて、直線的で、断面進行形を呈する。
334	西の庄東	6	第1面	60mm	上部断面	(8.2)		(1.2)	SYK76 相 SYR74 に接する	■ 1mm程度の斑点・チャート を帯びたむら	直	断面は1次の直線、口縫隙が少ない完全な形が見出せる。
335	西の庄東	6	第1面	60mm	七輪断面 もしくは井戸	(13.0)		(1.8)	SYR82.2 灰白 SYR82.6 黄白	■ 断面はほとんど含まれず	直	直線的で、外縁が少しある。
336	西の庄東	6	第1面	60mm	回力土塁断面	(5.7)	(2.0)	2SY81 灰白-NW/ 灰 2SY77.1 灰白	■ 0.5~7mm程度の斑点・石斑 ・チャート・雲母色くさり	直	断面は2次の直線を呈す。安須山山麓に於ける。	
84 337	西の庄東	6	第1面	60mm	瓦面	(14.2)		(2.0)	NW/ 灰	■ 断面はほとんど含まれず	直	断面が2次の直線を呈す。瓦面が外縁に付いていた。
338	西の庄東	6	第1面	60mm	瓦通水渠断面	(23.8)		(2.2)	NW/ 灰	■ 0.5~1mm程度の斑点・チャート を帯びたむら	直	断面は2次の直線を呈す。
339	西の庄東	6	第1面	60mm	青磁磚	(6.0)	(1.1)	SY711 灰白-SYR/2 長オーバー地	■ 断面はほとんど含まれず	直	断面は1次の直線を呈す。	
340 49	西の庄東	6	第1面	70±板	上部断面	(1.7)	SYR8.3 長角形		■ 0.5~1mmの色くさり ・板を方に含む	直	断面は1次の直線を呈す。	
341 49	西の庄東	6	第1面	70±板	瓦面	(6.8)	(1.7)	NW/ 灰 N7/ 灰白	■ 断面はほとんど含まれず	直	断面は1次の直線を呈す。	
342	西の庄東	6	第1面	70±板	瓦質上部断面	(4.5)		(3.1)	NW/ 灰	■ 0.5~3mm程度の斑点・石斑 ・チャートを多く含む	直	断面は2次の直線を呈す。
85 343 49	西の庄東	6	第1面	70±板	瓦通水渠断面	(27.0)		(2.5)	SY75/1 灰 N7/ 灰白	■ 0.5~1mm程度の斑点・石斑 ・黒色を多く含む	直	断面は2次の直線を呈す。
344 49	西の庄東	6	第1面	70±板	断面地質か		(2.3)	SYR4.1 灰灰 SYC75/1 チャート	■ 0.5mmの斑点・石斑を含む	直	断面は2次の直線を呈す。	
345 49	西の庄東	6	第1面	70±板	瓦面	(7.4)	(2.8)	SY711 灰白-SY72 灰 白砂	■ 断面はほとんど含まれず	直	断面は2次の直線を呈す。	

国 番 号	地名	調査 区	油・刹立 遺跡名	高 橋	高 橋	法面(m)	法面(幅)	露頭(厚)	露頭(長)	露頭(幅)	色調		地質	特徴等	
											内面	外面			
364	西の庄東	6	第1面	677m	上砂岩層	(6.2)	10788.3	灰褐色	φ 1~2mmの良石・石英・砂質 チャート・シート岩を含む	手の大きさで握り易い	111	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	
365	西の庄東	6	第1面	677m	須走岩層	(17.2)	(4.8)	NS/ R	φ 1~3mmの良石を多く含む	良	111	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	
388	西の庄東	6	第1面	677m	牛生土岩層	(5.4)	(2.8)	10786.2	灰褐色 10785.1 剥離層 10785.3 二段目 10785.1 露頭	全や粗 φ 1~3mmの良石・石英・砂質 チャート・シート岩を含む	111	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	
367	西の庄東	6	第1面	855m	須走岩層	(1.38)	(3.1)	286/ 4	青灰	露頭はほとんど見えず 部分に黒斑を含む	直	平野Ⅲ-V (5世紀中期～後半)	露頭はタキ・サリの代用	露頭はタキ・サリの代用	
368	西の庄東	6	第1面	686.7m	上砂岩層A	(1.56)	(3.0)	5978.6	稍 5986.6 相	φ 1~2mmの良石・チャート・赤色 やくらり岩・母岩・風化	直	平野Ⅳ-V (6世紀後半)	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	
369	西の庄東	6	第1面	686.7m	上砂岩層A	(16.2)	(2.6)	25385.8	灰褐色	φ 1~2mmの良石・石英・自 チャートを多く含む	111	全体に削減しており、調整・切削	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	
370	西の庄東	6	第1面	686.7m	須走岩層A	(16.0)	(1.4)	5977.1	灰白	φ 1~2mmの良石・石英・自 チャートを多く含む	直	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	
89	西の庄東	6	第1面	686.1m	須走岩層A	(15.8)	(1.2)	NS/ R	灰	φ 0.5~2mmの良石・石英・自 色板を含む	直	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	
371	西の庄東	6	第1面	686.1m	須走岩層A	(15.8)	(6.6)	10787.3	にじみ青 10786.2 灰褐色	φ 0.5~2mmの良石・石英 ・チャートを多く含む	111	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	
372	西の庄東	6	第1面	686.1m	上砂岩層	(26.4)	(6.6)	N7/ R	灰白	φ 0.5~2mmの良石・石英 ・チャートを多く含む	直	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	
373	西の庄東	6	第1面	686.1m	須走岩層	(5.0)	(5.0)	N7/ R	灰白	φ 0.5~2mmの良石・石英 ・チャートを多く含む	直	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	
374	西の庄東	7	第2面	54.1m	上砂岩層	(15.2)	(2.2)	10786.3	灰褐色	φ 0.5~2mmの良石・石英・自 由に剥離する	直	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	
375	西の庄東	7	第2面	54.1m	瓦岩層	(5.6)	(1.2)	57584.4	灰褐色	φ 0.5~2mmの良石・石英・自 由に剥離する	直	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	
376	西の庄東	7	第2面	64.1m	上砂岩層	(1.1)	(1.1)	10786.2	灰白	露頭はほとんど見えず 部分に白い風化物を含む	直	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	
91	西の庄東	7	第2面	64.1m	所棲谷 上砂岩層	(7.8)	(5.8)	1.5	2.538/ 2	灰白	φ 0.3~1mmの良石・石英 ・チャート・赤色	直	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い
378	西の庄東	7	第2面	41.9m	上砂岩層	(1.6)	(1.6)	2.537/ 2	灰白	φ 0.5~2mmの良石・石英 ・赤色	直	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	
379	西の庄東	7	第2面	41.9m	上砂岩層	(5.4)	(5.4)	2.538/ 2	灰白	φ 0.3~1mmの良石・石英 ・チャート・赤色	直	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	
380	西の庄東	8	第2面	35.6	上砂岩層	(3.6)	(3.6)	2.538/ 4	灰白	φ 0.3~1mmの良石・石英 ・チャート・赤色	直	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	
381	西の庄東	8	第2面	35.6	石炭岩層A	(1.65)	(1.65)	NS/ R	灰白	露頭は大きめで外見上 露出部が大きい	直	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	
382	西の庄東	8	第2面	100.9m	100.9m	(8.5)	(1.3)	10788.2	灰白	φ 1~2mmの良石・石英・自 由に剥離する	直	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	手の大きさで握り易い	

国 番 号	地 名	調 査 区	面 積 ha	測 量 者	測 量 日	法 面(m)			色 調		地 質	特 徴			
						口 径	長 軸	底 面	面 積	長 軸	底 面				
95 383	西の庄東	8	第3層	102.1坪	測量部林	測量	(10.2)	(1.6)	N6/ 底 N7/ 底	0.5~1 mの長石・石英を 僅かに含む	白	内面見込みは細かなアバタイトに富むが完めており。使用による ものとのみならず、底面は青い色調が保る。 内面見込みは大きなナトリウム長石で、底面は青い色調が保る。 「日輪島産」や「ミガタ」を施す。	内面見込みは細かなアバタイトに富むが完めており。使用による ものとのみならず、底面は青い色調が保る。 内面見込みは大きなナトリウム長石で、底面は青い色調が保る。 「日輪島産」や「ミガタ」を施す。		
384	西の庄東	4A	横須賀川	五郎田	(8.6)	N4/ 底 N5/ 底	(1.3)	N4/ 底 N5/ 底	0.5~1 mの長石・石英を 僅かに含む	白	白	内面見込みは大きなナトリウム長石で、底面は青い色調が保る。 内面見込みは大きなナトリウム長石で、底面は青い色調が保る。 「日輪島産」や「ミガタ」を施す。	内面見込みは大きなナトリウム長石で、底面は青い色調が保る。 内面見込みは大きなナトリウム長石で、底面は青い色調が保る。 「日輪島産」や「ミガタ」を施す。		
385 50	西の庄東	8	第2層	上野原畠	(10.6)	(1.6)	2.578/2 底白 1078/2 底白	0.5~1 mの長石・石英・赤 色くさび形を帶びる。含む	白	白	1.5m以内にしづらかうじかうじかうじかうじかうじかうじかうじか より、底面シーフードを含む。薄い青色。	1.5m以内にしづらかうじかうじかうじかうじかうじかうじか より、底面シーフードを含む。薄い青色。	1.5m以内にしづらかうじかうじかうじかうじかうじか より、底面シーフードを含む。薄い青色。		
386	西の庄東	7	第2層	五郎田高根		(2.3)	2.377/1 底白 N7/ 底	0.5~1 mの長石を僅かに 含む	白	白	所見なし	所見なし	所見なし	所見なし	
387 50	西の庄東	8	第2層	五郎田高根		(6.9)	2.377/2 底白 2.377/1 底白	0.1~1 mの長石・石英・不規 則チャートを含む	白	白	口縁部を土中に埋められた 所見なし	口縁部を土中に埋められた 所見なし	口縁部を土中に埋められた 所見なし	口縁部を土中に埋められた 所見なし	
388 50	西の庄東	8	第2層	瓦質土高根		(4.0)	N7/ 底 N8/ 底	0.5~1 mの長石・石英 を含む	白	白	口縁部はやや尖鈍 弱い青色。	口縁部はやや尖鈍 弱い青色。	口縁部はやや尖鈍 弱い青色。	口縁部はやや尖鈍 弱い青色。	
389 50	西の庄東	8	第2層	瓦質土高根	(1.5)	(5.2)	NG/ 底 NSC/ 底	0.5~1 mの長石・石英 を含む	白	白	口縁部は水平面に伸びる 白色。	口縁部は水平面に伸びる 白色。	口縁部は水平面に伸びる 白色。	口縁部は水平面に伸びる 白色。	
390 50	西の庄東	8	第2層	通透性強化部		(4.0)	N7/ 底 N8/ 底 N9/ 底 N10/ 底	0.5~1 mの長石・石英 を含む	白	白	所見なし	所見なし	所見なし	所見なし	
391	西の庄東	7	第2層	東透性強化部	(3.4)	(5.2)	NSU/ (1)~(7)/1 底白 (4) 7.986/3 从灰岩	0.5~1 mの長石・石英・ 白色を含む	白	白	口縁部を土中に埋められた 所見なし	口縁部を土中に埋められた 所見なし	口縁部を土中に埋められた 所見なし	口縁部を土中に埋められた 所見なし	
392 50	西の庄東	8	第2層	骨頭層		(5.2)	5.76/1 オリーブ灰 1076/2 オリーブ灰	0.5~1 mの黒色鉱物・白色岩 を含む	白	白	所見なし	所見なし	所見なし	所見なし	
393 50	西の庄東	8	第2層	黒鉄鉱鉱脈带	(3.7)	3.77/2 (底白) 3.78/3 (底灰岩)	0.5~1 mの黒色鉱物・白色岩 を含む	白	白	所見なし	所見なし	所見なし	所見なし		
394 50	西の庄東	8	第2層	偏光強化部		(4.8)	3.796/1 黑色 2.350/6 黒 明礬化	0.5~1 mの長石・石英 を含む	白	白	外縁部に黑色鉱物を含む所見なし	外縁部に黑色鉱物を含む所見なし	外縁部に黑色鉱物を含む所見なし	外縁部に黑色鉱物を含む所見なし	
395 50	西の庄東	8	第2層	偏光強化部	(1.5)	(9.8)	3.794/1 底白 2.358/2 底白	0.5~1 mの長石・石英 を含む	白	白	所見なし	所見なし	所見なし	所見なし	
396 50	西の庄東	8	第2層	上野原畠	(7.0)	(1.4)	1077/1 底白 1078/2 底白	0.1~2 mの長石・チャ ート・灰色を含む	白	白	外縁部を土中に埋められた 所見なし	外縁部を土中に埋められた 所見なし	外縁部を土中に埋められた 所見なし	外縁部を土中に埋められた 所見なし	
397 50	西の庄東	8	第3層	経済帯		(7.2)	(1.9)	NS/ (底白) Mg-5/R7/2 (底白)	0.5~1 mの長石・石英 を含む	白	白	所見なし	所見なし	所見なし	所見なし
398 50	西の庄東	8	第3層	瓦質土高根	(9.4)	(2.8)	2.374/1 地灰 2.378/2 底白	0.5~1 mの長石・チャ ート・白色を含む	白	白	1.5m以内に白色を含む所見なし	1.5m以内に白色を含む所見なし	1.5m以内に白色を含む所見なし	1.5m以内に白色を含む所見なし	

国 番 号	通 用 名	通 称 名	地 域 ・制 区	遺 跡 名	高 度	法 律 (cm)	法 律 口 径 ・長 さ(±幅)	規 則 外 面 内 面	色 調	施 工	地 域	特 徴			
												規 則 外 面 内 面	規 則 外 面 内 面		
399 50	西の庄東	8	第3層	東通水道箱体	(23.0)	(4.0)	NS/ K(11)・N6/ K(8)	N5/ N7/ K	全や明 る・チート・取 りむ	石 英石・石英 板	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。	
400 50	西の庄東	8	第3層	東通水道箱体		(2.7)	NS/ K(1)・N6/ K	N5/ N6/ K	φ 0.5 mm前後の 良石・石英 板・チートを含む	石 英石・石英 板	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。	
401 50	西の庄東	8	第3層	備用電池		(3.0)	N7/ K	N7/ K	φ 1 ~ 2 mmの良石・石英 板・チートを多く含む	石 英石・石英 板	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。	
96	西の庄東	8	第3~4層	退避井B		(7.0)	(1.6)	N6/ K	規則外面	黒色	良好	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。
402 50	西の庄東	8	第3~4層	退避井B		(7.0)	(1.6)	N6/ K	規則外面	黒色	良好	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。
403	西の庄東	8	第4層	瓦池			(3.3)		密 詰めはとんと 詰め	白 色	良好	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。	口頭規則上 下方に起居 室。1面は外 面。他の3面 は内面。規則 外面は白。
404 50	西の庄東	7	第4層	棚穴	長さ(2.4)	幅(1.5)	厚さ(0.5)					一筋の自然石を 斜めに並べた 構成。	二筋の自然石を 斜めに並べた 構成。	二筋の自然石を 斜めに並べた 構成。	二筋の自然石を 斜めに並べた 構成。
405 50	西の庄東	8	第4層	石牆	長さ(2.3)	幅(1.6)	厚さ(0.3)					平筋式構成で、 中央に突出する サスカラト割	重ね式構成で、 中央に突出する サスカラト割	重ね式構成で、 中央に突出する サスカラト割	重ね式構成で、 中央に突出する サスカラト割

法則規範における（ ）付き数値は寸法・底材についてではなく元底材を、長さ・幅については実寸数を示している。

写 真 図 版

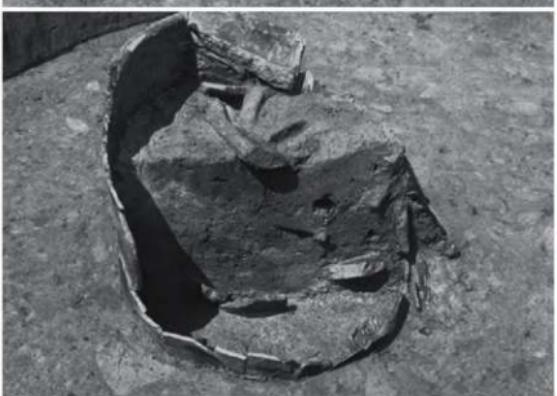
图版1 明和池遺跡1区



1. 第1面 全景
(東から)



2. 第1面 2井戸
(南から)



3. 第1面 2井戸
断面 (南から)

図版2 明和池遺跡1区



1. 第2面 全景
(北東から)



2. 第2面 16土坑
断面 (南から)



3. 第2面 16土坑
完掘状況 (南西から)

图版3 明和池遺跡1区



1. 第2面 19井戸 全景（南西から）



2. 第2面 19井戸 断面（南西から）



3. 第2面 19井戸 断面（北から）



4. 第2面 19井戸 井戸枠（北東から）



5. 第2面 19井戸 断面（北から）

図版4 明和池遺跡1区



1. 第4面 全景
(南東から)



2. 第4面 24 土器群
遺物出土状況 (南から)



3. 第4面 25 土器群
遺物出土状況 (北西から)

図版5 明和池遺跡1区



1. 第5面 全景
(南東から)



2. 第4面 25土器群
下層遺物出土状況
(南東から)



3. 第6面 全景
(南東から)

図版6 明和池遺跡1区



1. 第6面 40流路
遺物出土状況（北から）



2. 第5・6面 40流路
断面（南東から）



3. 第5・6面 40流路
断面（南から）

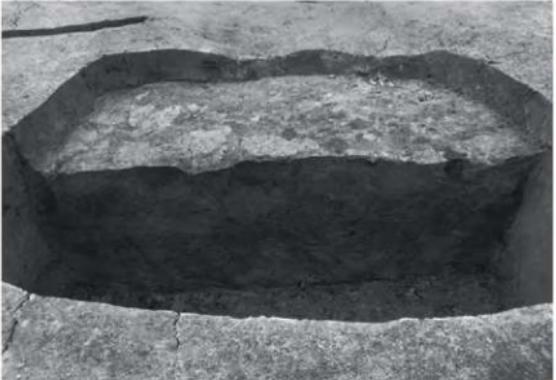
图版7 明和池遺跡1区



1. 第6面 全景
(南東から)



2. 第6面 38井戸
断面 (北西から)



3. 第6面 33土坑
断面 (北東から)

図版8 明和池遺跡1区



1. 東壁断面南半
(西から)



2. 東壁断面北半
(西から)

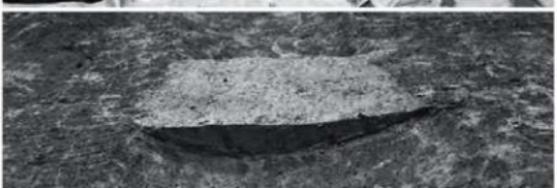


3. 南壁断面西半
(北西から)

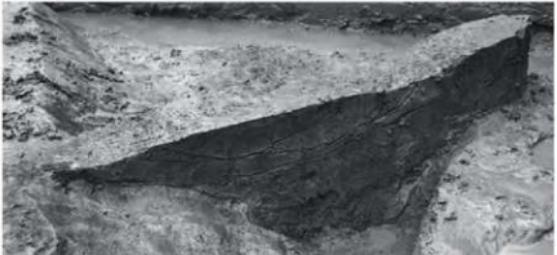
图版9 明和池遺跡2区



1. 第1面 全景
(北から)



2. 第1面 2溝
断面 (南東から)



3. 第1面 4溝
断面 (南東から)



4. 第1面 5溝
断面 (南東から)

図版 10 明和池遺跡 2 区



1. 第2面 全景
(北から)



2. 第2面 8落込み
全景 (西から)



3. 第2面 8落込み
南北断面 (西から)



4. 第2面 8落込み
東西断面 (南から)

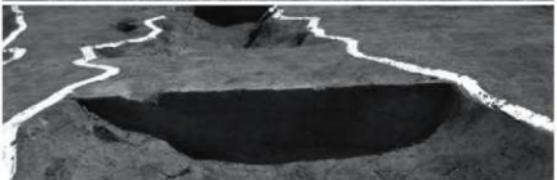
図版 11 明和池遺跡 2 区



1. 第2面 9土坑
断面（西から）



2. 第2面 9土坑
遺物出土状況（西から）



3. 第2面 7溝
断面（西から）



4. 西壁断面南半
(南東から)

図版 12 明和池遺跡 3 区



1. 第1面 全景
(南から)

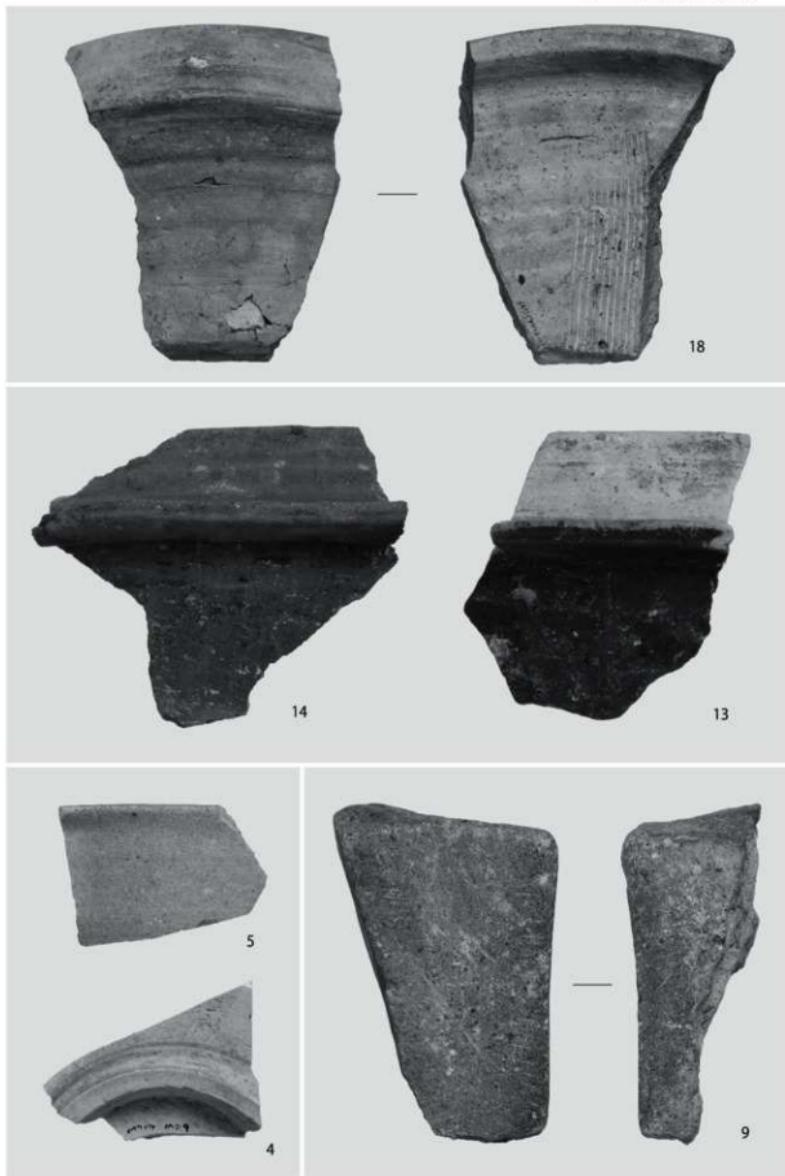


2. 第1面 柱穴
断面 (南から)

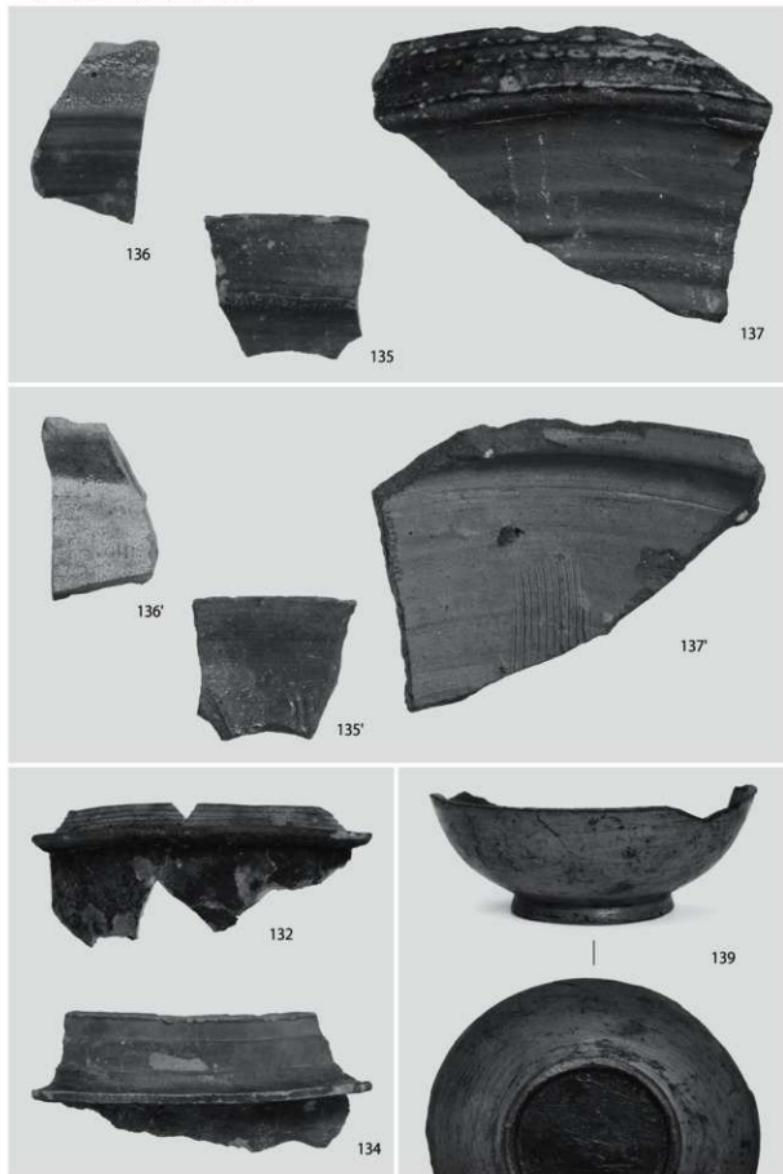


3. 北壁断面
(南から)

図版 13 明和池遺跡 1 区
第 1 面遺構出土遺物



図版 14 明和池遺跡 1 区
第 6 面遺構出土遺物（1）



図版 15 明和池遺跡 1 区
第 1・6 面遺構出土遺物 (2)



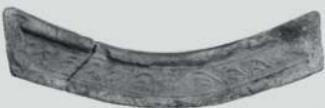
27



140



28



33



142

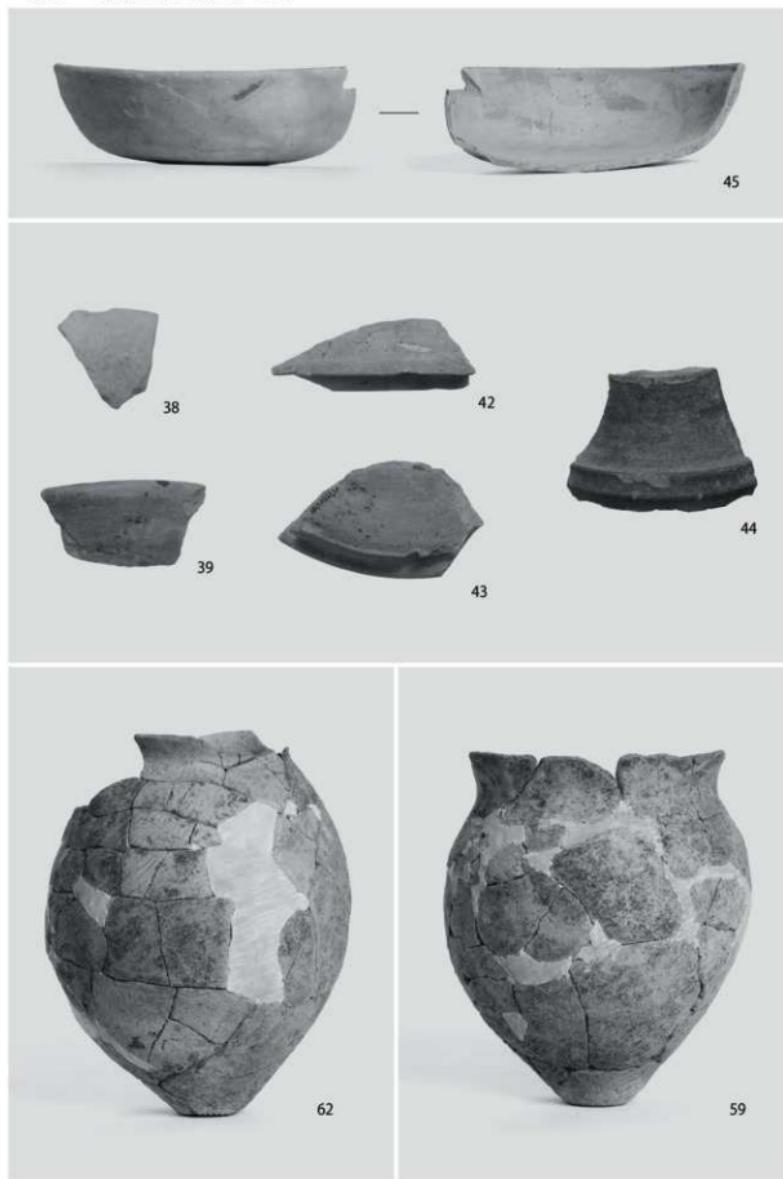


36

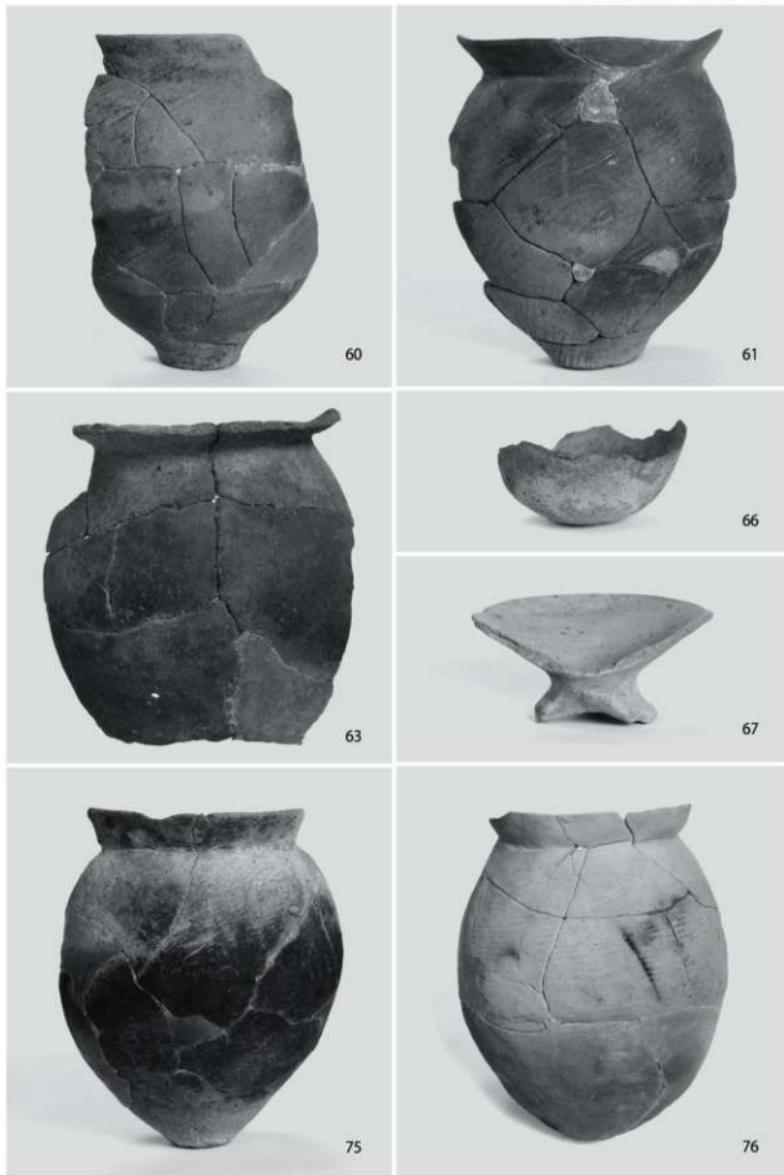


1

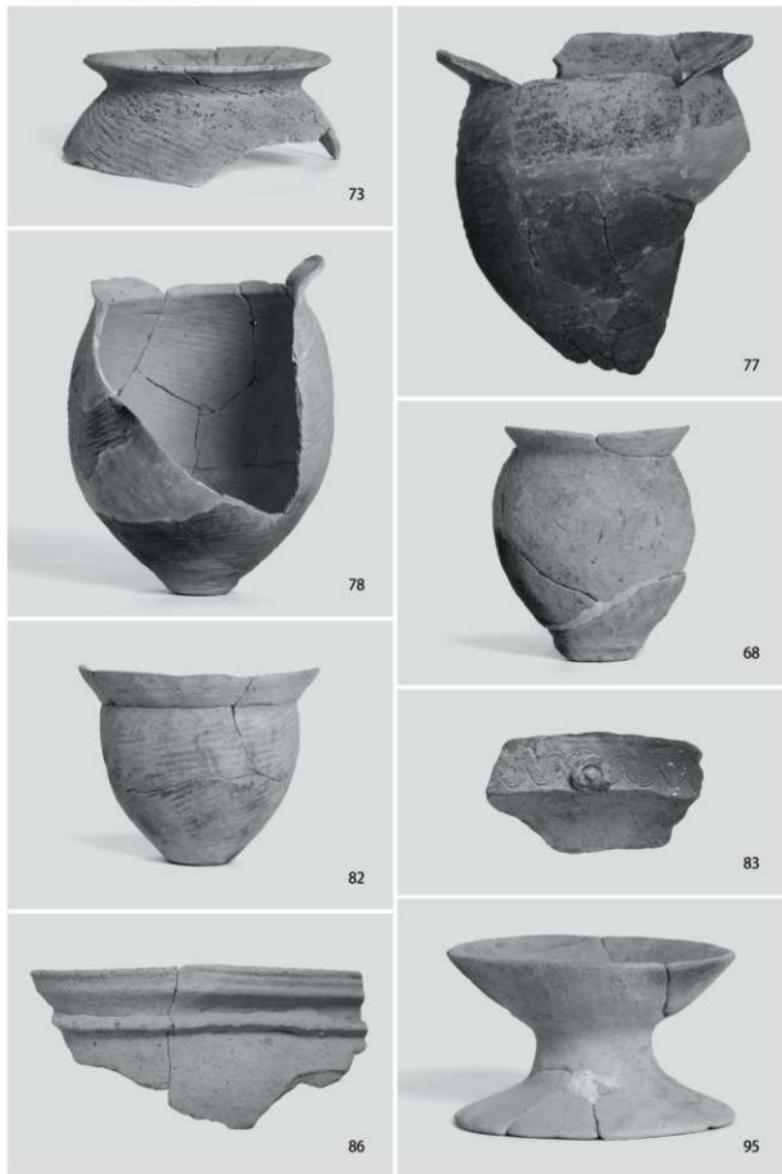
図版 16 明和池遺跡 1 区
第 2・4 面遺構出土遺物 (1)



図版 17 明和池遺跡 1 区
第 4 面遺構出土遺物 (2)



図版 18 明和池遺跡 1 区
第 4 面遺構出土遺物（3）



图版 19 明和池遺跡 1 区

第4面遺構出土遺物(4)・第5~6面遺構出土遺物(1)



91



89



92



93



117

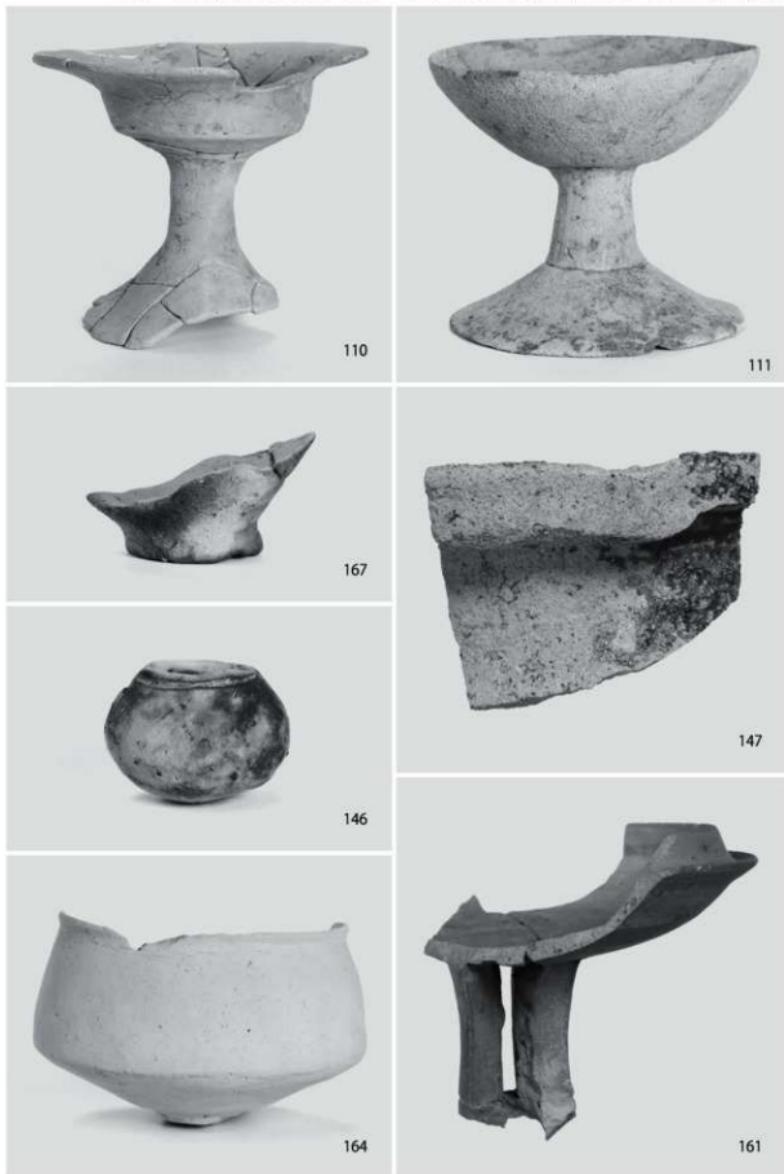


119

図版 20 明和池遺跡 1 区
第 5 ~ 6 面遺構出土遺物 (2)



図版21 明和池遺跡1区
第5～6面遺構出土遺物(3)・2区 第2面遺構出土遺物・包含層出土遺物



図版 22 吹田操車場遺跡 1・6 区



1. 1区 第1面 北西部分
(北から)



2. 1区 第2面 全景
(西から)



3. 6区 第1面 南西部分
(西から)

図版 23 吹田操車場遺跡 1・6・2 区



1. 1区 第2面 12・16土坑
断面（北から）



2. 6区 第1面 1土坑
断面（南西から）



3. 2区 第1面 全景
(北から)

図版 24 吹田操車場遺跡3区



1. 第1面 全景
(西から)



2. 第1面 2土坑
断面 (南から)



3. 第1面 5土坑
断面 (南西から)

図版 25 吹田操車場遺跡 4 区

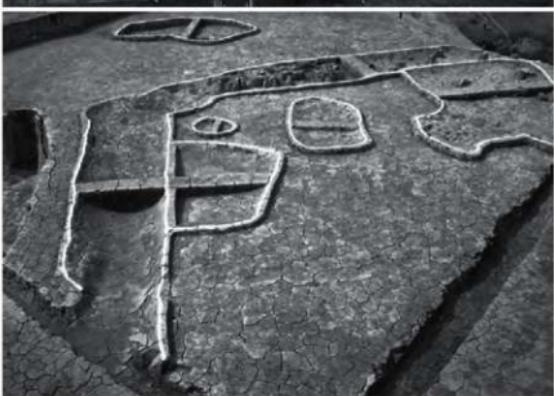
1. 第2面 南西部分 全景
(南から)



2. 第2面 全景
(東から)



3. 第2面 13溝
全景 (南東から)



図版 26 吹田操車場遺跡 4 区



1. 第2面 13溝
遺物出土状況（南西から）

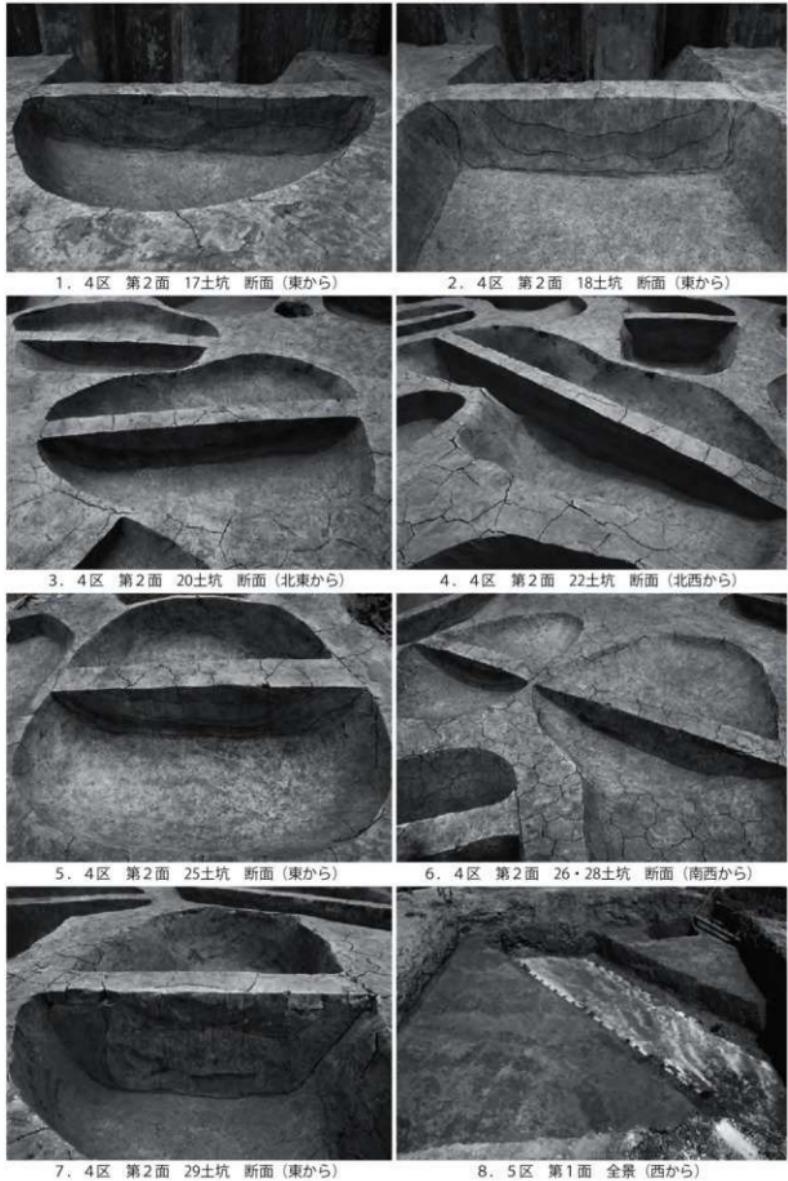


2. 第2面 13溝
断面（南東から）



3. 第2面 5土坑
遺物出土状況（南西から）

図版 27 吹田操車場遺跡 4・5区



図版 28 吹田操車場遺跡 1~6 区



图版 29 吹田操車場遺跡 1～4 区
遺構出土遺物



174



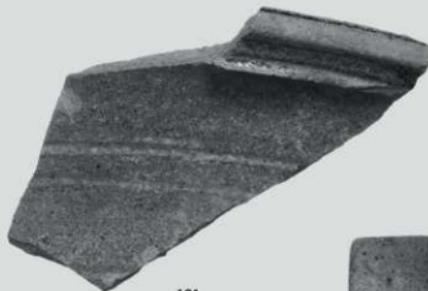
188



182



190



181



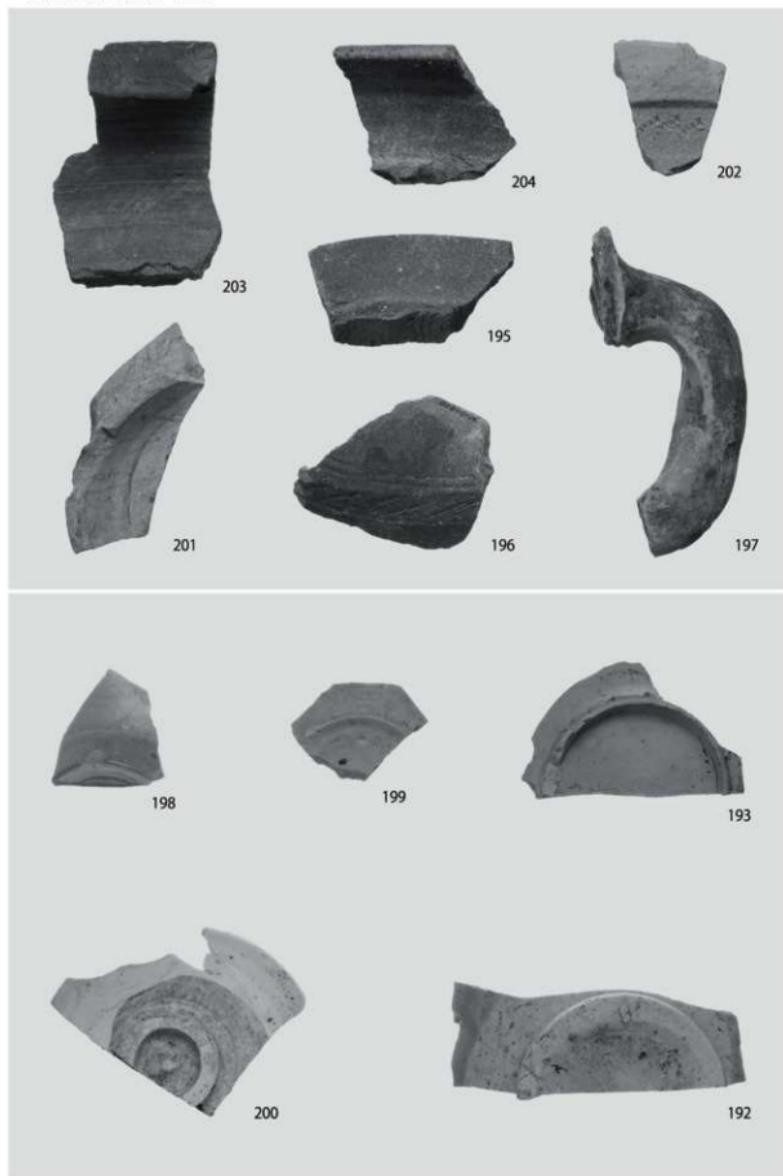
184



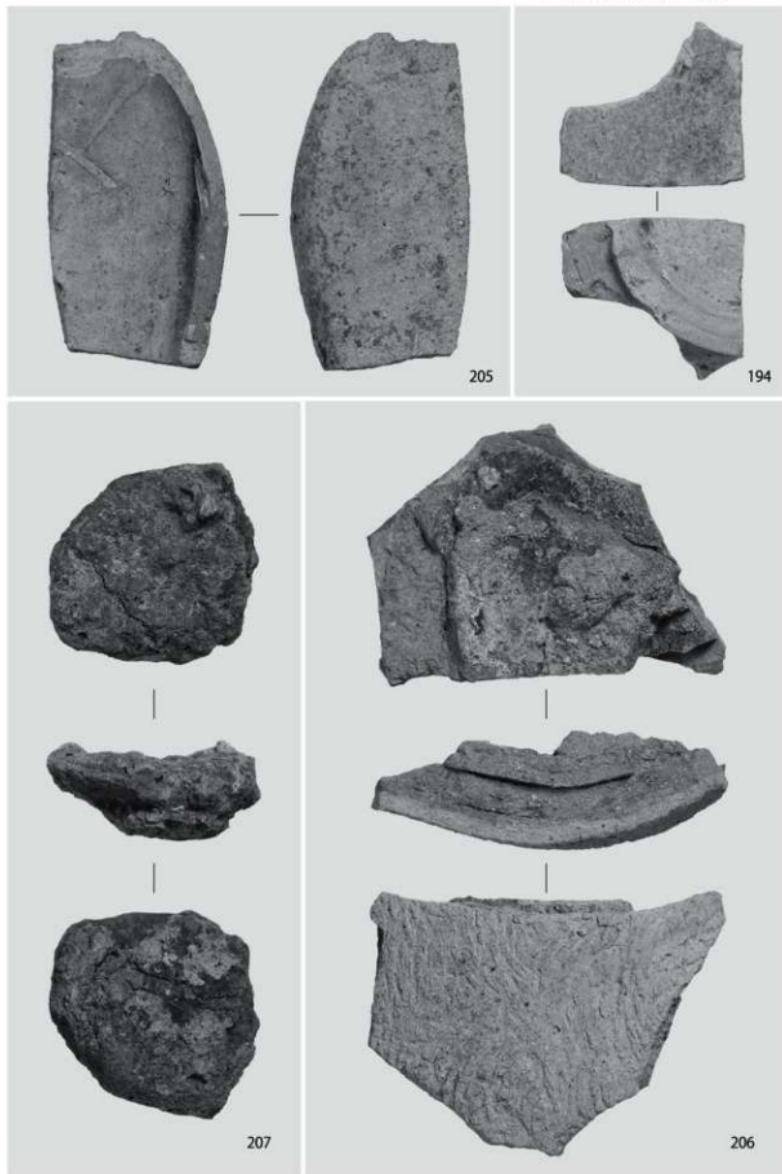
186

図版 30 吹田操車場遺跡 4 区

包含層出土遺物（1）



図版 31 吹田操車場遺跡 4 区
包含層出土遺物（2）



図版 32 西の庄東遺跡 1・2区



1. 1B区 第1面 全景 (北東から)



2. 1A区 第1面 全景 (北東から)
3. 1A区 第1面 115溝 (北東から)



4. 1B区 南壁 断面 (北東から)



5. 1A区 南壁 断面 (北東から)



6. 2B区 第1面 (南西から)



7. 2A区 第1面 (南西から)

図版 33 西の庄東遺跡 3・4 区



1. 3A区 第1面 全景（南西から）
2. 3A区 南壁 断面（北東から）



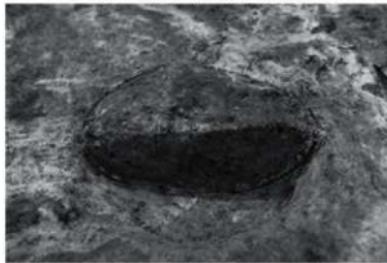
3. 3B区 第1面 全景（北東から）



4. 4B区 第1面 北端部分（北西から）



5. 4B区 第1面 30土坑 断面（北西から）



6. 4B区 第1面 32小穴 断面（東から）



7. 4B区 第1面 35小穴 断面（東から）

図版 34 西の庄東遺跡 4・9 区



1. 4A区 第1面 全景（北東から）

2. 4A区 第1面 21土坑ほか 近景（北東から）

3. 9区 第1面 21土坑 土坑検出状況（東から）



4. 9区 第1面 21土坑 完掘状況（東から）

図版 35 西の庄東遺跡 4・9区

1. 4A区 第1面 21土坑
断面（東から）



2. 9区 第1面 21土坑
断面（東から）



3. 9区 第1面 21土坑 断面（西から）



4. 9区 第1面 21土坑 遺物出土状況（東から）



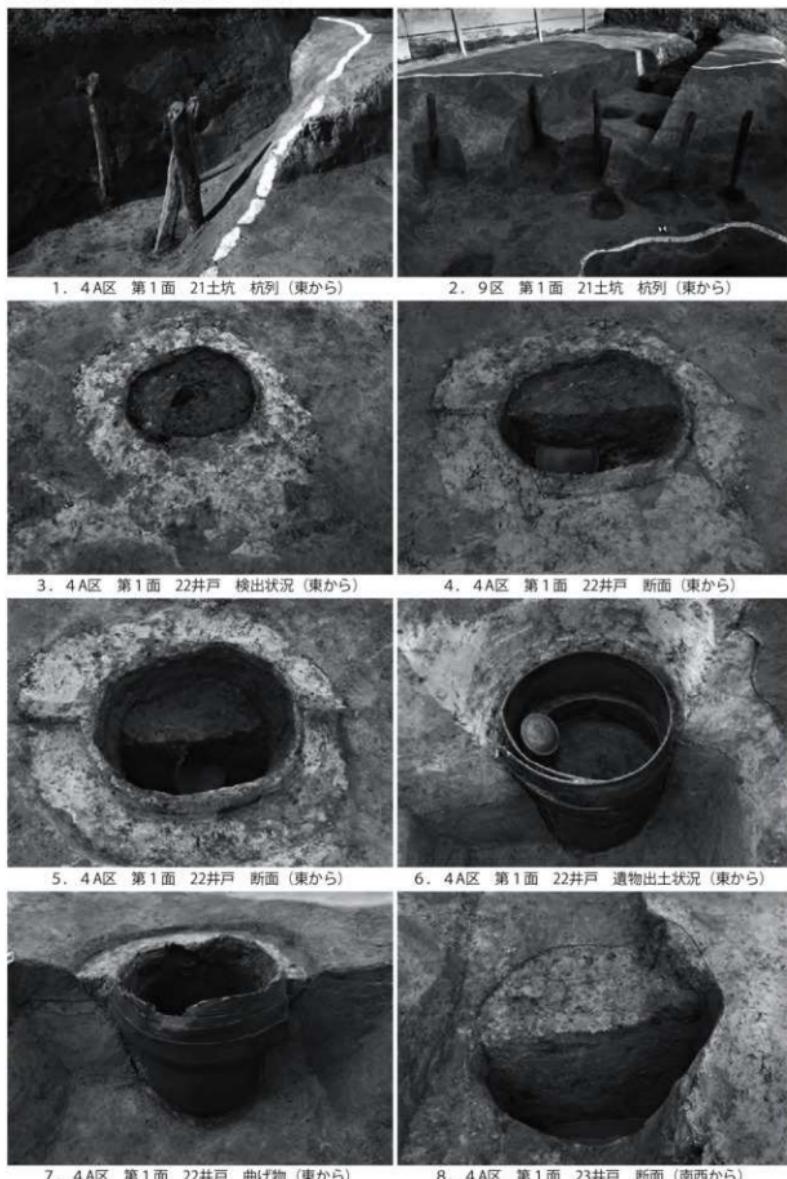
5. 9区 第1面 21土坑 遺物出土状況（東から）



6. 9区 第1面 21土坑 遺物出土状況（東から）



図版 36 西の庄東遺跡 4・9区



図版 37 西の庄東遺跡 5区



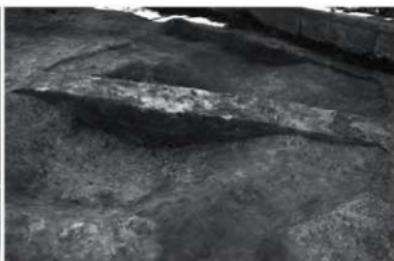
1. 5A区 第1面 全景 (南西から)



2. 5B区 第1面 全景 (南西から)



3. 5A区 第1面 遺構近景 (北東から)



4. 5B区 第1面 7土坑 断面 (西から)



5. 5A区 第1面 14土坑 断面 (南東から)



6. 5A区 第1面 20小穴 断面 (北東から)

図版 38 西の庄東遺跡 5区



1. 5B区 第1面 4溝
断面 (西から)



2. 5A区 第1面 4溝
断面 (東から)



3. 5B区 第1面 4溝 完掘状況 (西から)



4. 5A区 第1面 4溝 完掘状況 (東から)



5. 5B区 第1面 5落込み 断面 (西から)

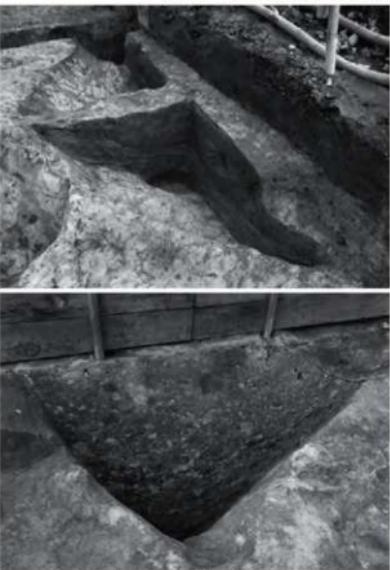


6. 5A区 第1面 15土坑 断面 (東から)

図版 39 西の庄東遺跡 6区



1. 6区 第1面 全景（南西から）



2. 6区 第1面 79土坑 断面（西から）

3. 6区 第1面 75土坑 断面（南東から）



4. 6区 第1面 71井戸 断面（北東から）



5. 6区 第1面 70土坑 断面（西から）

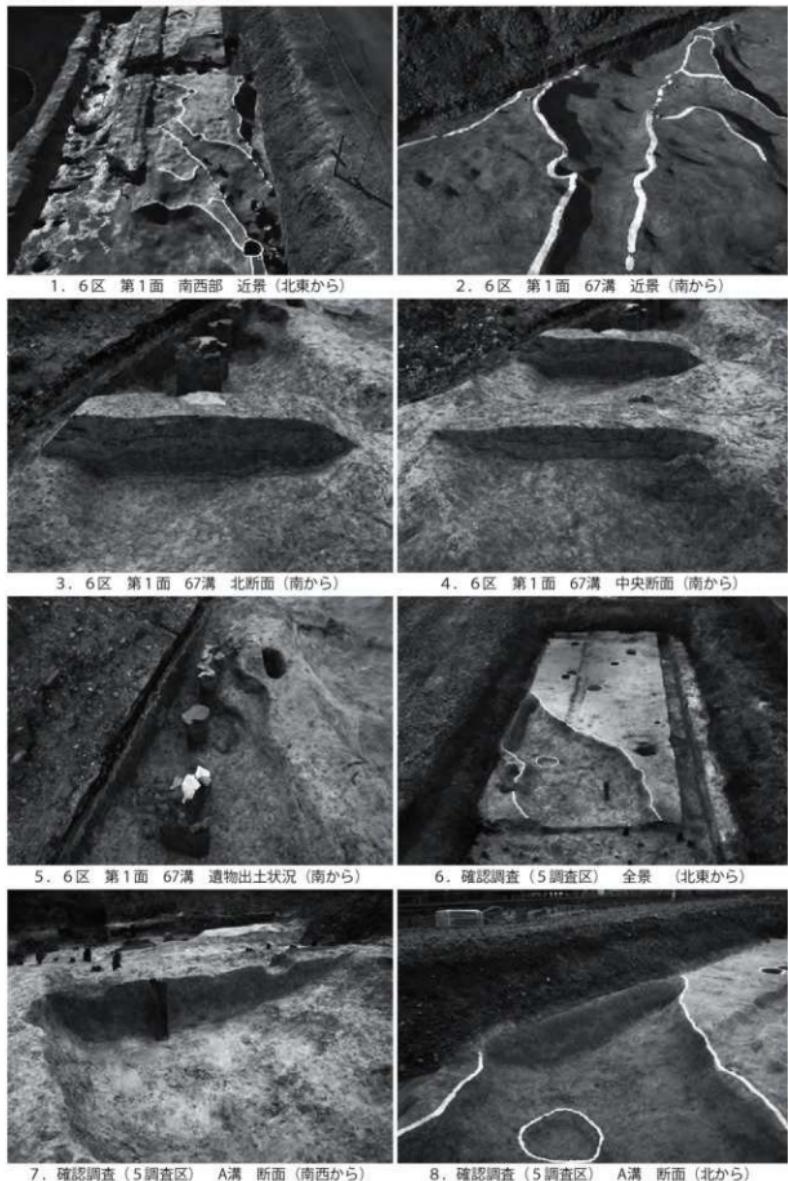


6. 6区 第1面 69溝 近景（北から）



7. 6区 第1面 69溝 断面（南から）

図版 40 西の庄東遺跡 6 区



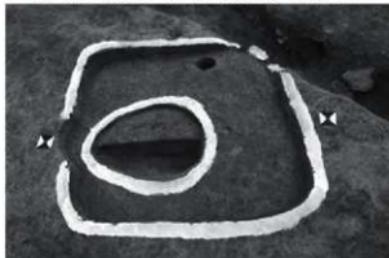
図版 41 西の庄東遺跡 6・7区



1. 6区 第1面 68土坑 完掘状況（北東から）



2. 6区 第1面 68土坑 断面（南西から）



3. 6区 第1面 92ピット 棲出状況（西から）



4. 6区 第1面 92ピット 断面（西から）



5. 6区 第1面 85小穴 断面（東から）

6. 7区 北壁断面（南西から）



7. 7区 第2面 全景（北東から）

図版 42 西の庄東遺跡 8区



1. 8区 第2面 近景（南西から）
2. 8区 第3面 近景（北東から）



3. 8区 第4面 全景（北東から）



4. 8区 第4面 102土坑 断面（北西から）



5. 8区 第4面 100溝 近景（北西から）



6. 8区 第4面 100溝 断面（南東から）



7. 8区 第4面 100溝 断面（北西から）

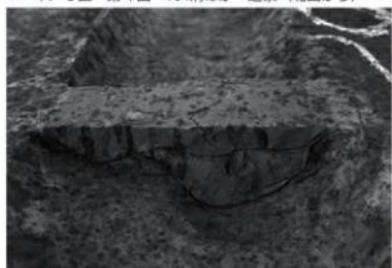
図版 43 西の庄東遺跡 8区



1. 8区 第4面 104溝ほか 近景（北西から）



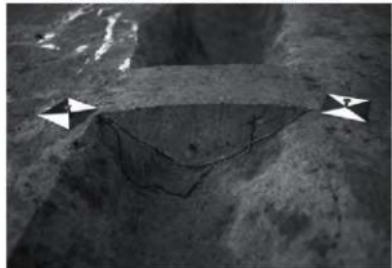
2. 8区 第4面 103溝 断面（北西から）



3. 8区 第4面 104溝 断面（北西から）



4. 8区 第4面 105溝 近景（北西から）



5. 8区 第4面 105溝 断面（北西から）



6. 8区 第4面 101土坑 検出状況（東から）



7. 8区 第4面 101土坑 断面（西から）



8. 8区 北壁断面（南西から）

図版 44 西の庄東遺跡 4・9 区

21 土坑出土遺物（1）



283



276



277



267



228



223



222



245



図版 45 西の庄東遺跡 4・9 区
21 土坑出土遺物 (2)



244



246



247



258



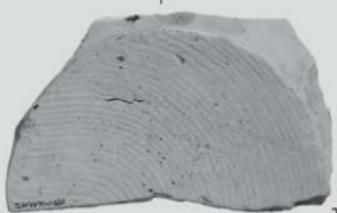
234



257



288



289



図版 46 西の庄東遺跡 4・9 区

21 土坑出土遺物（3）



292



290



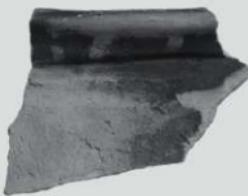
293



295



297



299



301



300



304

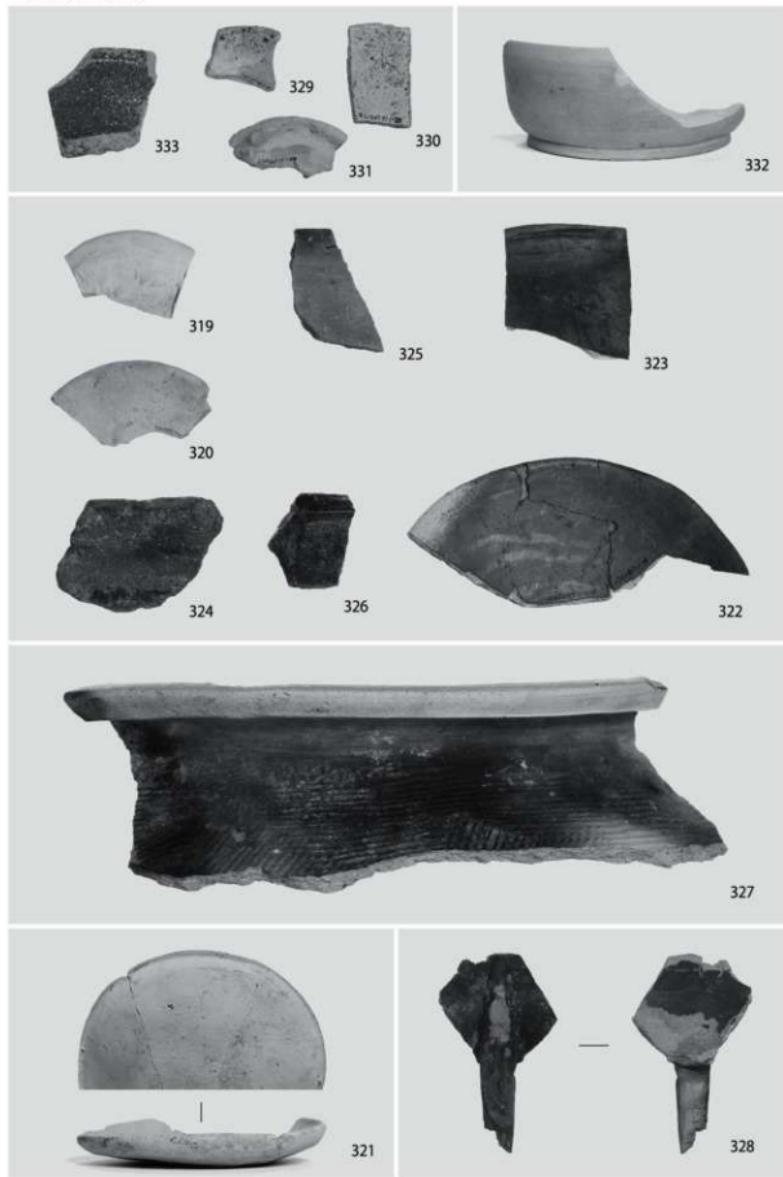


302

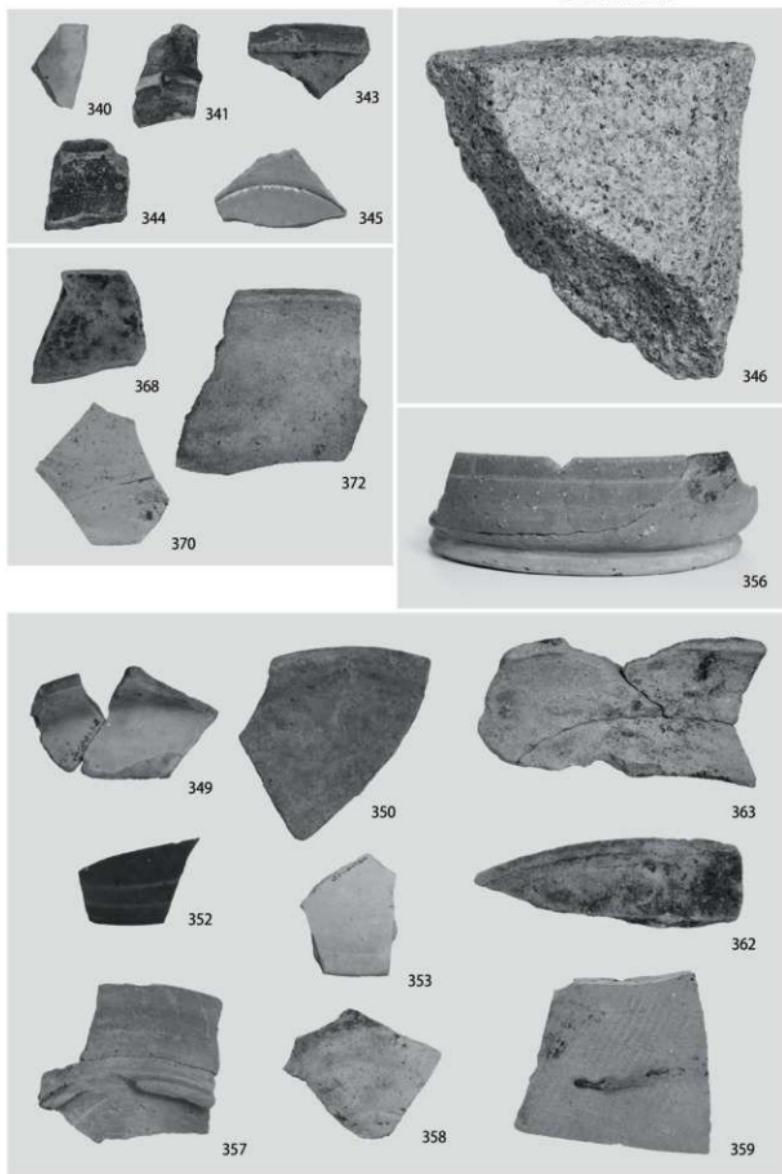
図版 47 西の庄東遺跡 4・9 区
22 井戸出土遺物



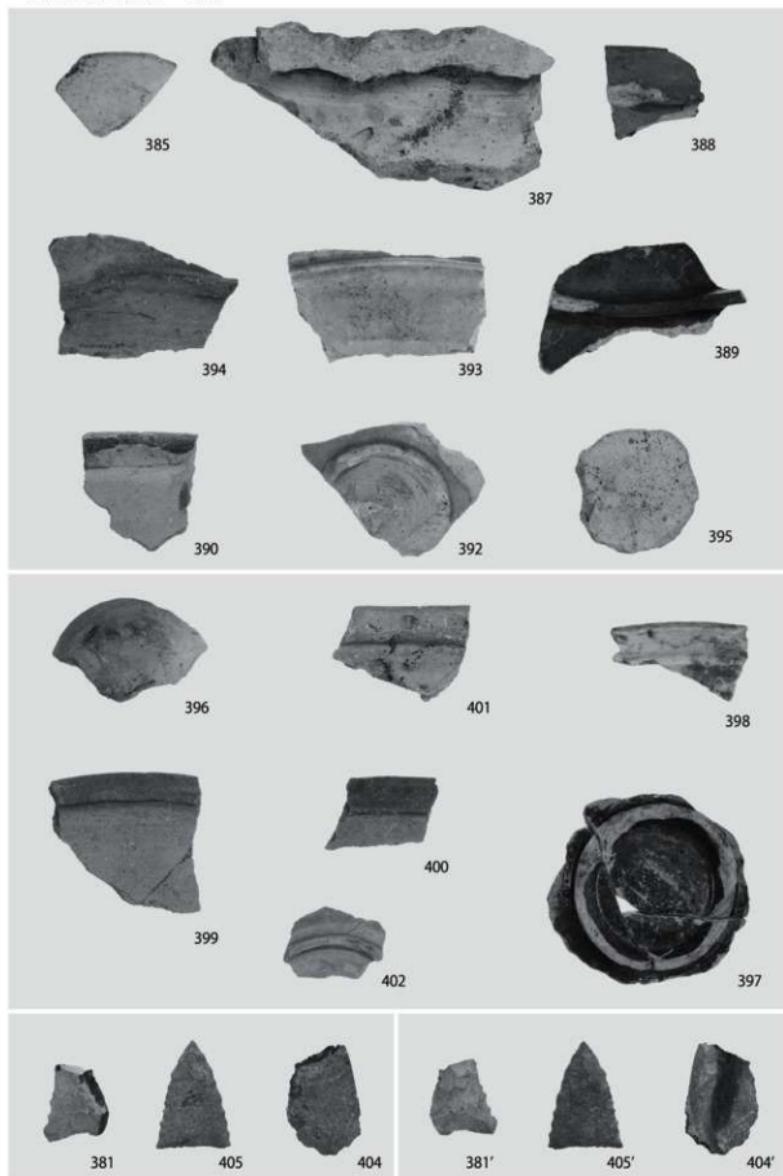
図版 48 西の庄東遺跡 5 区
遺構出土遺物



図版 49 西の庄東遺跡 6 区
遺構出土遺物



図版 50 西の庄東遺跡
包含層出土遺物・石器



報 告 書 抄 錄

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第232集

明和池遺跡 1

吹田操車場遺跡 8

西の庄東遺跡

吹田（信）基盤整備工事（貨物専用道路）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 2012年12月25日

編集・発行 公益財団法人 大阪府文化財センター
〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所
〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号